

いろんなところの整備士さん

ターボ-001

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿作品です。

各高校の整備士さんと女の子の日常を書けたらなあと思います。
基本的に1話完結型が多いです。

pixivにもマルチ投稿しています。

※同一主人公の場合多々あり。

目次

設定

オリ主 設定集 | 1

大洗女子学園

プロローグ | 5

あっちこっちでボコ | 10

継続高校

ミカさんの嫉妬話 | 18

風の日 | 30

秋だけどヒロインはミカ | 37

いい肉の日だった。 | 57

Baby You Can | 67

プラウダ高校

ロシアの挨拶 | 74

日本の涼みかた | 86

正反対の告白 | 100

吸血鬼と妖精 | 111

至れり尽くせり | 120

サンタクロースが死んだ朝 | 130

ノンナ日記（一部抜粋） | 138

4倍返し | 148

いい夫婦の一步手前 | 155

黒森峰

隊長とリーダー | 159

隊長とリーダーと西住家 | 175

新隊長と新リーダー

189

大学選抜

色々と貸出し中

199

のんべえ3人とジューサーと運転手と策士

207

あんこう鍋とコタツ

220

ダメウーマンズとDirty Work

233

聖グロリアーナ

本音はお茶会の後に

251

ヨコハマ買い出しホニヤララ

261

Apple LadyはKiller Tuneを詠う

268

サンダース大学付属高校

ダウンナー系

278

アンツイオ高校

いくつかのパターン

292

ドゥーチエの休日

303

知波単学園

知波単魂を胸に

313

BC自由学園

パンもケーキもなければ

325

番外編

男整備士2人と昔話

333

ポリッツの日その1

348

ポリッツの日その2

353

男たちの宴

359

超SS FINAL COUNTDOWN

393

【リクエストSS】 日本とロシアより愛を込めて

【リクエストSS】 僕たちの名は

設定

オリエ主 設定集

タクマ（プラウダ高校）

- ・ 高校3年生
- ・ プラウダ整備班班長
- ・ 身長は180cm前後（とりあえずノンナよりはでかい）
- ・ プラウダにはスカウトされて入学。
- ・ 大洗女子自動車部ホシノと聖グロの整備士ハルキとは同じ中学校。
- ・ 妹と弟がいる。
- ・ カチューシャ日記を偶然見つけてしまったことによりノンナとの会話が始まり、現在の関係に至る。

リーダー（黒森峰）

- ・ 高校3年生
- ・ 黒森峰整備班班長
- ・ 身長は175cm前後
- ・ 黒森峰には一般入試で入学。
- ・ 兄がいる
- ・ 普段は温和人だが筋の通らないことは嫌い。心が熱い方。

ツヴァイ（黒森峰）

- ・高校2年生
- ・リーダーが引退後の黒森峰整備班新班長
- ・身長は175cm前後（リーダーよりは少し低い。）
- ・黒森峰には一般入試で入学。
- ・一人っ子
- ・リーダーとは違い、ちよっとおちやらけてる感じ。でも仕事はちゃんとやる。

ヒロアキ（大学選抜）

- ・とりあえず酒は飲める年齢
- ・大学選抜整備班班長
- ・身長は178cm前後
- ・妹がいる。
- ・愛里寿については今のところ妹に似た感情で可愛がっている。

ハルキ（聖グロリアーナ）

- ・高校3年生
- ・聖グロリアーナ整備班班長
- ・身長は180cm前後（タクマと同じくらい）
- ・聖グロにはスカウトで入学。
- ・姉と妹がいる。
- ・大洗女子自動車部ホシノとプラウダの整備士タクマとは同じ中学校。
- ・スカウトなので一般家庭の出身。紳士口調で振る舞うのは基本的に聖グロの生徒がいるときだけ。いなければ等身大の高校生。

ダウンナー（サンダース大学付属高校）

- ・ 高校2年生
- ・ 身長は168cm前後
- ・ サンダースには一般入試で入学
- ・ 弟がいる。

・ 基本的に猫背。友達は少ない方だが、あくまでマンモス校のサンダースとして。他校と比べたら普通。

ディアブロ（アンツイオ高校）

- ・ 本名 阿久 真（あく まこと）
- ・ 高校3年生
- ・ アンツイオ整備班班長
- ・ 身長は180cm前後（一番大きい）
- ・ アンツイオにはスカウトで入学。
- ・ 弟が2人いる。
- ・ 料理ができない。中学までは基本的にコンビニ飯でどうにかしていた。

金田アキラ（知波単学園）

- ・ 高校1年生
- ・ 身長は170cm前後
- ・ 知波単には一般入試で入学。
- ・ 一人っ子。
- ・ 一人称が基本的に「自分」。真面目だが割と現実主義者。

タクマ（継続高校）

- ・ 高校3年生
- ・ 身長は170cm前後
- ・ 継続には一般入試で入学。
- ・ 兄と姉がいる。
- ・ ボーつとするのと自由が好き。そしたら上には上の自由人がいた。

・ 筆者の都合で2人となったタクマ。当初の予定は全高校「タクマ」で行く予定でしたが整備士同士の絡みも作りたいなあと思っただので急遽変更!!でも継続とプラウダは作っちゃったからこのまま行くね的なノリです。

ハンス（BC自由学園）

- ・ 何年生か決めてない（今後の情報次第）
- ・ 身長170cm前後
- ・ 一般入試で入学
- ・ 兄がいる。
- ・ 実家は老舗の和菓子屋

大洗女子学園 プロローグ

「やあやあ皆さん、今日はわざわざ集まってくれてありがとうございます。」

軽快な口調で話しかけるのは大洗女子学園会長、角谷杏。干し芋を啜えながら回転式の椅子に腰かけクルクルと回っている。いつもの事なのか、行儀の悪さに左右にいる副会長の小山柚子と広報の河嶋桃も特にツツコむ様子もない。

「……んで用件は何ですか？ 急にホシノから俺とハルキに連絡来たと思ったら各校の整備士集めてくれって。しかも名指しで。」

一番最初に口を開いたのはプラウダの整備士、タクマであった。彼は聖グロの整備士ハルキ、そして此処、大洗女子学園の自動車部のホシノと同じ中学出身である。彼女からタクマとハルキ経由で各校の整備士に連絡が行き、突如休日に大洗女子学園、生徒会室へ集められた。集まったのは

- ・プラウダからタクマ
- ・聖グロからハルキ
- ・黒森峰からリーダー、ツヴァイ
- ・サンダースからダウナー
- ・大学選抜からヒロアキ
- ・アンツイオからディアブロ
- ・知波単からアキラ

以上の整備士である。

「いや、実はね、ウチって戦車の整備士がいなくてさ、代わりに自動車部にやってもらってるんだけどさ4人中3人が3年生で卒業しちゃうんだよね。そうすると来年が不安でね。まあ早い話、みんなの整備技術を自動車部残りの1人とか1、2年生の戦車道履修者に教えてもらおうって話!!」

タクマの問いに答える杏だが、その答えに整備士たちはポカン顔。しかしそんなことは気にせず杏は言葉を続ける。

「後これは自動車部からのお願いでもあるんだよね。『本業の整備士の技術が見たい!!』っていう。それに3年生たちに教えておけばOBとして顔を出して手伝ってくれるかもしれないし!」

「いや、彼女たちはもう戦車整備士の腕前ですよ。本業は本当に自動車整備ですか？ 知識に貪欲なのは素晴らしいことですが。」

聖グロ生らしく背筋を伸ばして丁寧に応対するハルキ

「俺はあんまり気乗りしませんね。ライバルに技術を教えるってのは。あとここまでヘリ飛ばしてくるのも少し面倒です。」

対照的に少し悪態をついたのはツヴァイ。決勝戦で敗けた黒森峰の整備士としては少し複雑な思いなのだろう。軽く杏を睨むが

「おや、そんなこと言っているのかな。黒森峰の整備士新班長、ツヴァイクくん。」

「あ?」

で彼らがステージで演奏している動画だった。そう、はじめから彼女たちはこれを見せて脅すために彼らを呼んだのだ。

「未成年の飲酒、まずいよね。同席してた大学生。これもまずいよね。!!」

大洗女子女子学園の地に足を踏み入れた時点で彼らに拒否権などなかった。用意周到な彼女たちの事だ。恐らく彼らが口をつけた空き缶すら証拠として持っていきそう。そのことを先程までと変わらない杏の笑顔が悪魔の笑みに見えるまでになったことで悟る整備士たちであった。

「まっ、でも脅しばかりじゃかわいそうだからね。小山く例の物、みんなに見せてあげて。」

そう言うとき今度は柚子が手に持っていたものを扇形にひらいた。

「各校の生徒さんたちがウチの制服着た写真、引き受けてくれたらあげるよ。激レアだよ。」

「!!!!!!」
「!!!!!!」
「!!!!!!」

「いや、男子は素直でいいね。実は戦車道履修者全員、グラウンドに呼んでいるから今日は全員で教えてあげてね。次回以降は月1回のペースくらいで1人誰か来てくれればいいから。ローテーションはそっちにお任せするよ。」

こうして各校の整備士たちによる大洗女子学園での整備講座が始まるのであった。

あつちこつちでボコ

(はあくともんでもないことになつちやつたな。まあ、でも女子の写真もらえるのはいいよな・・・あの会長に頼めば西住のもくれるのかな?・・・はっ?何考えてんだ俺!! しっかりしろ!!元はと言えば俺のせいで他の皆さんに迷惑かけたんじゃないか!!)

大洗女子学園の廊下を歩きながら一考していたツヴァイは首を振り我に返る。両頬を叩き気合を入れ直してグラウンドに向かおうとした時、

「あつ、西住。」

エントランスまでさしかかった時、先程まで妄想をした相手、西住みほがグラウンドを歩いているのが見えた。

(どうする? 声をかけるか? いやでも・・・ええい!どうせ後で会うんだから今声をかけちまえ。)

「にし・・・」

「やあ、みほちゃん。」

「えっ? ヒロアキさん!? どうしてここに?」

一足早くグラウンドに出ていたヒロアキがみほに声をかけた。驚くみほに対してヒロアキは自分がここにいる経緯を説明するそして・・・
「そうだったんですか。」

「そうそう。あつ、あとコレお土産、ウチの地域限定のボコ人形。」

「えっ? いいんですか!? ありがとうございます!!」

(あいつあんなにテンション高い時あるんだな。)

みほとヒロアキのやり取りを少し遠くから見ているツヴァイ。自分もそこへ近づこうと歩みを進めると・・・

「ヒロアキ・・・突然大洗女子に行くと思ったならみほさんと会ってる。」

「うわっつ!!!」

声のする方へ目を向けると校庭の垣根に隠れている少女を発見しその姿に驚くツヴァイ。

「あー、えーっと確か島田愛里寿ちゃんだよね？ どうしたのこんなところで。」

しかしそこは黒森峰の生徒。すぐに落ち着きを取り戻し事情を聴くことにする。どうやら彼女はヒロアキが突然大洗に行くことを前日に告げたので不審に思い、こっそりついてきたそうだ。彼の名誉の為、ツヴァイは理由を教えることにした。

「なるほど。理由はわかった。ありがとう。」

そう事務的に言うとすぐにボコ談義をしているヒロアキとみほの方へ向いて二人を見つめる愛里寿。ツヴァイも何となく仲良く話す二人を見つめ、

「しかしあのクマ何なんだ?」

と独り言のようにつぶやくと

「あれはボコられグマのボコ。私とヒロアキとみほさんが好きなキャラクター。」

「へえ〜」

「ほう。それはいいことを聞いた。」

「ってリーダー!! いつの間に後ろに!?!」

「お願い愛里寿ちゃん! ボコについて教えてくれないかな?」

「何頼んでんですかリーダー!!」

「バカ野郎!! いずれ義妹になるんだ! 好みは把握しときたいだろ!! ツヴァイ、お前も知っておけば今後みほちゃんに話しかけやすくなるんだぞ!!」

「・・・お願いします。島田愛里寿さん、いやボコ師匠。俺達にボコのなんたるかを教えてください。」

「・・・ボコ師匠・・・なにか良い響き。わかった、教える。」

「「おお〜。」」

愛里寿にボコについて教わるリーダーとツヴァイ。しかしその二人を見つめる影が二つ。

「リーダー、大洗女子に行くと言うからてっきりみほに会ってるのかと思ったら何故島田流の子と会っている。」

「た、隊長!! しっかりしてください。足元がふらついてますよ!!」

愛里寿と同じ理由でついてきたエリカとまほだが大洗女子の地で

ライバル流派の島田愛里寿と話している彼氏を見て西住流の跡取りとしては信じられないものを目にして足がおぼつかなくなる。

状況を整理すると現在、以下のような状態である。

ボコ談義をするみほ&ヒロアキ ↑ それを見つめボコ講座を始める愛里寿&ツヴァイ&リーダー ↑ さらにそれを見つめるまほ&エリカ

「ふうー。」

ボコ談義に一段落ついたようで一息つく愛里寿。

「あつ、ごめんね。俺飲み物買ってくるわ。ジュースでいいかな？」

「うん。ありがとう。」

メモ片手に熱心に聞いていたリーダーだが愛里寿を気遣って校舎へ飲み物を買に行ったリーダー。

「リーダーが離れたな。直接問いただしてくる。エリカ、ここは頼んだぞ！」

「えっ？ 隊長？ 隊長ー！！」

リーダーの後を追って校舎へ消えるまほ。取り残されたエリカはしかたないので愛里寿とツヴァイを見つめる。

「ボコミュージアムってのもあってそこでボコショーがあるの。」

「そうなのか。それはどんな感じでやってるんだ？」

「じゃあ私がボコの役をやるから……」

愛里寿指導によるボコショーの再現が始まった。しかし遠くにいるエリカにはその会話は聞こえない。故に悲劇は起きた。

「なっ!? 何やってんのよアイツ!!」

突然ツヴァイが愛里寿を蹴りはじめた。正確には愛里寿指導によるフリなのだが。

「オラッ、弱いくせに生意気だなー(棒読み)」

「うわっ、やめろー!!」

愛里寿を蹴るフリをしながら罵倒し続けるツヴァイ。しかしそれに気づいたみほとヒロアキが駆けつける。

「あっ、良かった。二人が助けに入ったわ……って全員蹴られてるー!?」

すぐにボコショーごっこをやっていると気づいた二人は愛里寿やツヴァイがここにいる理由なんかそっちのけで「一緒にやりたい」と言い始め、三人がボコ役をやりたいと言ったためツヴァイ一人が蹴る役に。

「オラッオラッ!!!どこに目をつけてやがる。」

「ぐわー。何をするー。」

「みんなーオイラに力をー。」

「おまえなんかこのパンチで……うわーダメだー。」

ツヴァイの蹴り(フリ)によって全員地に倒れ、微動だにしない。これで一通り終わりらしい。

「ふうー。喉乾いたー。俺も飲み物買ってこようかな?」

一種の満足感を覚え、汗を拭いながら校舎へ向かっていく。するとエントランス付近で後ろから声をかけられた。

「ちよつと!!!」

「ん?えっ?なんでおまえここに・・・」

「あんな小さい子にまで暴力振るってどういうことよこのへっぽこ整
備士野郎!!!」

「ゴパツツツ!!!」

ボクササイズで鍛えたエリカの右ストレートがツヴァイのみぞおちにヒット。ツヴァイは倒れた。ツヴァイはめのまえがまっくらになった。そこへ

「「やっぺやるやっぺやる♪」」

「えっ?」

先程までグラウンドに沈んでいた三人が陽気にボコのテーマを仲良く歌っている。さらに

「そうかみほの為に島田愛里寿と話をしていたのか。」

「そうだよまほさん。みほちゃんが好きなボコを学ぶためにね。」
「うむ。みほの為ならしかたないな。」

数分前まで死にそうな顔でふらついていたまほがリーダーとラブ
ラブでボコの話をしている。

歌う三人、ラブラブな二人、倒れる整備士をそれぞれ見てエリカは
こぼした。

「・・・何これ？」

大洗女子学園はあっちこっちボコ（ボコ）だった。

おまけ

「はあ、いって〜。アイツおもいつきり腹に入れやがって。」

「あはは、ごめんね。まさかエリカさんが勘違いしちゃうとは。」

「もう二度とやんねえ。」

「えっ?・・・やってくれないの?」

「・・・今度来たときこっそりな。」

「うん!!」

継続高校

ミカさんの嫉妬話

季節は夏。けたたましく蝉が鳴く継続高校。

とあるクラスでは体育の授業中らしく学校のプールから喧噪が聞こえてくる。

どうやら授業も終わりが近く、今は自由時間のようだ。

各々ベンチで休んだり、プールの中で涼んだりと好きなように時間をつぶしている。

その中で一人の青年はプールであおむけで浮かんでおり連なっている雲を一点見つめていた。

(平和だ。今日はもうずっとこのまま何もしたくない。水の中の静寂に居たい。)

「おい！タクマ!!」

(はい、さっそく俺の願い 叶いませんでした。)

同級生かつ友人に自分の名前を呼ばれたので状態を渋々とあおむけからプールの底に足をつける形に変える。

「何?」

「あれ、見てみろよ!!」

やや不機嫌気味に答える俺を気にせず友人は興奮した様子で親指をあげながら後ろを指した。

視線を移すと同級生のアキ、ミカ、ミツコの3人が青を基調とした、うちの高校指定の競泳水着姿でベンチで休んでいた。

まあプールの授業だから水着姿なのは当たり前か。

ちなみにスクール水着じゃないのはうちの高校の予算の関係だそうだ。

いや、どういう理由だよ!!って聞きたくなるが俺も詳しくは知らない。

話がそれたな。

3人は普通に談笑してるだけのようだが・・・

「・・・で？」

「で？っておまえ、あの体を見て何も感じないわけ!? よく見ろよ!!」

友人に両手で頭をガシツツと掴まれ強制的に目線を移され足を組んでいるミカが映る。

さすがにいつものチューリップハットはしておらず、心地よさそうに弾いてるカンテレもない。

だが表情はいつも通りの余裕があるような感じでアキ、ミツコの問いかけに対して答えている。

まあ、控えめに言っても美人の部類であり、授業で濡れた長い髪がそれを助長させる。

そしてなにより・・・

「あの顔であのプロポーションだぞ。胸とかもう・・・グフフ」

俺の真後ろでグフフと言うな気持ち悪い。吐息が当たってるのが余計に。

「ああ、そうか。整備士様はいつでもあの体を拝めるからもう見慣れてるってか？」

はあく、良いですね。俺も整備士になろうかな？」

一人で勝手な見解をはじめめる友人を無視して俺はミカたちがいる方とは反対側へ泳ぎはじめた。

先ほどの友人の発言の通り、俺は継続高校の戦車道の整備士をしている。

担当はBT-42 ミカたちが乗る戦車だ。当然ミカたちとはよく話す。

なんならカンテレで俺の好きな邦楽を演奏してくれるくらい仲がいい。

まあ1年の頃にはあの独特の受け答えに多少イラついたりしたが3年生になるころには

もう俺が受け入れる形に自然となつてしまった。慣れつて恐ろしいね。

しかし慣れないこともある。先ほどの友人の発言をもう一度見てほしい。

そう、ミカあのプロポーションだ。全然、見慣れねえ!!

あの体を見て何も感じない？ バリバリ感じるわ!!

さつきも見たけど何？あの胸？ なにか果物入れてませんか？

それで足も組んで・・・色々と食い込んでますけど？

失礼、取り乱した。

ミカを見た時間は約2秒弱だが、健全な男子を悶々とさせるには充分すぎる女体を

持つているというのがおわかり頂ければ幸いである。

さらに戦車道で整備士をやっているとそんな機会が多々ある。

ミカは特にその辺も無頓着で、今の季節なんか・・・その・・・汗で透けてたりや

スカートの中の空気の入れ替えなのか、バツサバツサとスカートをつまんで揺らす。

眼福と言えば眼福なのだが他の女子たちの目線が痛い。戦車道はほぼ女子しかいないからな。

まあそんな理由で眼福な場面に出くわしてもガン見したりはしないし、

興味がないふりをする。・・・ムツツリとか言うなよ？

そうこうしてるうちにプールの端まで泳いでしまった。心地よいダルさが体に伝わってくる。

(・・・そろそろあがるか)

両手を地面につけ、体を水の中から引き上げると同時に女子数名からキヤーという悲鳴が聞こえた。

(えっ?何?俺?まさか海パンが脱げ・・・いや脱げてないな。じゃあなんだ?)

どこかに異常があるのかと思いキョロキョロと自分の体を見てみると

同級生の女子数名が俺に近づいてきた。

「あの・・・タクマくん・・・」

思いつめたような顔でこちらを見てくる。

(何?何?死の宣告でもされんのかな、俺。)

「お腹触らせてもらってもいい?」

「・・・えっ?」

思考停止5秒。そして再起動。予想外の事態に脳内シャットダウンが行われました。

ああー、俺の腹筋見て触りたいと、そうゆうことですか、まあ嬉しいですけど。

ずいぶんと大胆ですね。

「・・・どうぞぞ」

しばらく黙っていたので不安な顔になっていた女子たちが俺の了解を得たことで

途端に明るくなり。

「じゃあ失礼しまーす。」

そう言っつて小さな手がペタペタと腹を触り始める。手は濡れているがじんわりと温かさが伝わってくる。

「すごい!!固い!!」

字面だけ見ると非常に怪しいが触っているのは腹である。元々何かスポーツをしてたわけではなく自転車で通学してて自然と鍛えられたのだ。

つまりそれほどまでに家が遠い。

他の女子2名も、どれどれと俺の腹を触り始めたころ

(あつ、これ他の男子に嫉妬されるパターンじゃね?)

と思つて周りの男子たちを見まわしたがほぼ全員、ベンチで休憩中のミカに釘付けのようだ。

よかつたーと思つた矢先にとつともない殺気を本能的に感じた。油切れをおこした機械のようにゆっくりとその方向へ向くと・・・ミカがいた。

いつもよりほんのわずかだが目を細めてこちらを見ていらつしやる。

そして目に光がない。機嫌が悪い時のミカだ!

付き合いが長いからわかる。あれは怒つてらつしやる。

原因はおそらく俺が今女子たちに腹を触らせていることだろう。

でも理由は?皆目見当もつきません!!

ああヤバイ、ミカの目線に本当に鳥肌が立ってきた。

「あつ、すごい鳥肌が立ってる。ごめんねちよつと触りすぎたね。」

そう言つて女子たちが手を放すと同時に体育教師の授業終了の声が聞こえた。

ごろごろと各更衣室に戻る同級生たち。ミカは早歩きで姿を消してしまった。

首筋に嫌な汗をかきながらやや遅れて俺は更衣室へ歩きだした。

↳放課後↳

戦車道の練習が終わり、倉庫に戦車が戻ってくる。

ここから整備士としての仕事が始まる。

戦車からミカたちが降りてくるのが見えたので一応声をかけてみる。

「ミカ、メンテナンスはいつも通りでいいよ君の好きにすればいいんじゃないかな？」

言葉を遮ってきた。怒ってらっしゃる。いつもなら「ああ、頼むよ」と言ってくれるのに。

そのままミカはどこかへ行ってしまった。

ミカの行動にガツクリしているとアキが話しかけてくれた。

「タクマ、ミカが怒っている原因わかる？」

聞き方のニュアンスからしてアキは原因をわかっているらしい。

「・・・プールのあれ？」

「へえ、そこはわかってるんだ。」

上の方から声が聞こえたので見上げると車体に乗ったミツコがいた。

まるで感心するような言い方だ。

まったく失礼な、俺はそこまで鈍感じゃあない。

よつ、と言つて戦車からジャンプし着地するとそのままミッコは言葉が続けた。

「じゃあミカが怒っている理由はわかる？」

「……皆目見当もつきません。」

そう言うと二人は顔を見合わせて大きくため息をついた。

何か無性に腹立つな。

「もうこの際だからハッキリ言うけどミカはあんたのことがす「何してるんだい？」

今度はミッコの声を遮るミカ。声色は先ほどよりも強く、いつものやわらかなものではない。

「練習はもう終わったんだ。さっさと帰るよ。整備はその人に任せればいい。」

だいぶご立腹のようでアキもミッコももう何も言えなくなってしまう。

今日は大人しく帰ったほうがよさそうと悟ったのだろう。ミカの方へゆつくりと歩きだし、ミカと一緒に倉庫を後にした。

かくいう俺はミカが怖くて直視できず、戦車の整備に取り掛かることで逃げた。

情けない話である。

1時間くらい作業をしていると汗が滝のように流れてくる。さすがにツナギのままだと

暑すぎるのでツナギの上半分を脱いでタンクトップで作業をしている状態だ。

(あと少しで休憩にしようかな?)

首に巻いたタオルで汗を拭きながら考えているとポロローンという聞きなれた音が倉庫に響いた。

まさかと思って振り返るとミカがいた。椅子に座って目を瞑ってカンテレを弾いてる。

(えっ?なんで?怒って帰ったじゃん!激おこぶんぶんだったじゃん!!)

突然のミカの出現でだいぶパニックになった俺だが、さわらぬ神にたたりなし

と思い下手に声をかけるのはやめておいた。

10分程カンテレと作業の音が響くだけの状態となり、このまま整備が終わるまで

続くのかなと思っていたら突然カンテレの音が止まった。

気になったので再度振り返ろうとしたとき、背中に何かやわらかいものが押し付けられ細く小さな腕が俺の腰を交差し強く引き寄せられた。

ミカが抱きしめてきたのだ。

「本当に固いんだな、君のお腹は」

そう言うのと片手で俺のタンクトップを捲り、もう片方で直に俺の腹

を触ってきた。

「あのー、ミカさん？いったい何を？」

突然の行動、そしてミカのやわらかい双丘を押し付けられていることで声が裏返る。

「君が他の女子にさせていた事をしているまでだよ」

拗ねたような声でそう答えてくる。しかし段々とまさぐっている手が胸の方へあがってくる。

(いや、他の女子にはそこまでさせてませんけど!?)

「君がいけないんだ。ずっと近くで君を見ていたのは私なのに。君は全然私を見てくれないし。君に触れたいと思っても我慢してきたのに。あんなに簡単に他の女に触らせるなんて。我慢してた私がバカみたいじゃないか。」

抱きしめる力がさら強くなる。

「フフツ、胸板は厚いんだね。」

・・・この言動、そしてミツコが俺に言いかけた言葉。

前言撤回、俺は超鈍感男だ。本当に情けない。女の子にここまで言わせてしまうなんて。

ここで俺がとるべき行動はひとつ。

俺はミカの手を外し、ミカの正面に向いた。

「ミカ」

名前を呼び、しばらく目を見つめ、思いつきりミカを抱きしめた。

「フフツ、少し苦しいかな。でも君のにおいがする。いいにおいだ。」

俺が汗臭いだろ？と言うとそんなことはないよ、とかえってきた。

その返答に愛おしくなりチューリップハットを外し、髪をなでてや

る。

サラサラとした髪が俺の指と指の間をすり抜ける。

「んっ・・・はぁ」

2〜3回なでただろうか。どうやらくすぐったいらしい。なでる度にミカの甘い吐息が漏れてくる。

その吐息に俺はもう我慢できなくなった。

ミカの頬に手をそえる。

「ミカ」

名前を呼ぶと、とろんとした目がこちらを見つめてきた。

その目を見つめながらゆっくりと唇を重ね、目を閉じた。触れ合うだけのキス。

「好きだよ。」

「じゃあもう一回してくれるかな？」

いたずらっぽく笑うミカの唇と自分の唇を重ねようとしたら

ミカが俺の頭をおさえて自分からキスをしてきた。

今度は舌を入れて長く長く。何度互いに舌を転がしただろうか。

キスの感覚がなくなるまで求めた続けた二人。

最後には名残惜しく二人の唇の間を銀の糸が結んでいた。

整備を終え、帰宅途中。

俺は自転車の後ろにミカを乗せて漕いでいた。

この付近なら警察もあまりいないだろう。

「ごめんな俺、鈍感だよ」

「君の鈍感っぷりは今に始まったことじゃないさ。薄着で過ごしてみたり、スカートをつまんであげてみたりしたけど全然効果がなかったことなんか気にしていないよ。」

「……ごめんなさい」

(あれ、アプローチだったんだ。)

「フフツ」

笑いながら俺の背中に頭を預けてくる。

「？」

「でもそんな君だからこそ私は惹かれてしまったんだろうね。」

顔が熱くなるのをいやでも感じる。たぶん後ろではミカがすまし顔でいるのだろう。

なんか悔しい。

「こんな美人に嫉妬されて好かれるなんて俺は幸せ者だなあー」

「……バカ／＼」

チューリップハットを深くかぶり俺の腰に回しているミカの手が強くなった。

してやったりだ。

自転車を漕いでいると緩やかな下り坂にさしかかった。

夜とはいえ夏なのでまだまだ暑いこんな日にはちようど良い風の通り道だ。

徐々にスピードを上げると横切っていく風が気持ちいい。

「タクマ」

ミカがこの日はじめて名前で呼んでくれた。

「んー？」

俺は振り向かないで答える。

「ずっとわたしの整備士でいてくれるかな？」

その問いの答えはもうすでに決まっている。

俺は横切つてく風に負けないくらいの大きな声で答えた。

なんて答えたかだつて？

それは風が知っているんじゃないか？

なんてな。

風の日

どれくらいの間、1枚の紙を見ていただろう。黒の文字と線が均等に並んでおり、ところどころ線の上から赤いマジックで重ね塗りされている。自分の高校の名前を指先で隠し、黒と赤の2色を追っている。すぐに別の方向から来た線とぶつかり2つの線が1つになり上に伸びていく、他の場所もその繰り返し。だが自分の高校からはじまった線は途中で黒の1色になってしまった。他の高校は2色のままのところもある。これらの意味すること・・・負けたのだ。

トーナメント表から指先を離し、後ろを振り返る。コンクリートむき出しの観客席、その先に試合が行われていた会場があり、地面に履帯の跡や砲撃で出来た穴がいくつも見受けられた。少し視線をずらすと薄い青ジャージを着た生徒が戦車の回収を手伝っている。泣いている者、それを励ます者、脱力しきった者、と様々な表情が伺える。その中に良く見知った顔と戦車。黒煙と白旗を上げているBT-42の上に乗る、いつも通りの表情でカンテレを弾いているミカが見えた。そう、いつも通りの表情で。

第63回戦車道全国高校生大会第2回戦、継続高校 黒森峰に敗退。

1つの高校の夏が終わった。だが俺にはまだ最後の仕事がある。あの白旗を上げているBT-42の修理という仕事だ。

他の生徒たちも帰った中、俺は倉庫に運ばれた傷だらけのBT-42に触れていた。どうしても感傷に浸ってしまう。この修理作業も最後になってしまうのかというのもあったし、よくこんなヘツポコ高校生整備士の整備で今まで無事に動いてくれたなという思いがどん

どん湧き上がって胸が熱くなってしまふ。気持ちを落ち着かせるため深く深呼吸をし、お疲れ様。とBT—42に声をかけ整備をはじめようとした。

「ずいぶんとロマンチストじゃないか。」

ポロロンという音と同時に声がした方に目を配る。ミカがいた。いつものジャージは少し汚れている。今日の試合の激戦ぶりを物語っている。

「・・・最後なんだ。これくらいいいだろ？早く帰って休めよ。」

「じゃあ私も。最後なんだ。これくらいいいだろう？」

口角を上げ、ニヤリといった感じで微笑む。俺は特に返答もせず整備をはじめること肯定した。意図を読んだようでもミカも座ってカントレを弾き始めた。

しばらく整備を続けて気づいたことがある。カントレの演奏がぎこちない。いつもの心地よく弾いた弦の音は少なく、途中で一瞬音がやむ。そしてミカがいつも通りの表情を装っている。長い間、近くでミカを見てきたのだ。それくらいはわかる。彼女はいま、ひどく落ち込んでいる。だが隊長という立場、いつもの飄々とした態度もあつてそれを表には出せないでいるのだろう。

(励ましてやりたい。)

じゃあ一体なんて声をかけよう。黒森峰相手によくやった？優勝がすべてじゃない？ そんな綺麗ごとやありきたりな言葉はあまり使いたくない。かと言ってこのまま何もしないのも嫌だが何も言葉

が思いつかない。ぎこちないカンテレの音だけが響く……ああ、そうだ。

「♪」

整備中にミカが来るとたまに俺は鼻歌を歌い、ミカがそれに合わせて弾きはじめる。そんなことをしてたのを思い出した俺は歌いだした。お世辞にも歌唱力は良いとは言えない。でもお気に入りの歌。歌詞の内容は、いつもへらへら笑えるわけじゃない。泣いたついで、それが当たり前なんだ。 そんな感じの歌。

「……………」

いつもだったら俺の下手な鼻歌に対して綺麗な音を奏でてくれるのだがそれが聞こえてこない。代わりに聞こえてきたのはカツカツという足音だった。ゆっくり刻まれた音は俺とBT-42の間に入った。おれの背中に腕を回し抱きついてくるミカ。作業用の手袋を外し、チューリップハットの上からゆっくりと頭を撫でてやると声をあげて泣き出した。ずっと俺は大きな声で歌いながらミカの頭をなでてやった。ミカの泣き声が外に漏れないように。俺たち以外に残っている人はいない。それはわかっていたが、なんとなくそうしてあげたかった。

「ほら。」

場所をグラウンド近くのベンチに移した。自販機で買った缶コーヒーを座っているミカに渡す。

「……………」

声はおさまったものの涙はまだ止まらないままのようで、無言のまま受け取る。隣に座るとすぐに俺の肩に頭を預けてきた。俺はまた彼女の頭を撫でてやる。すると今度は俺の膝の上に頭を置いてきた。その拍子にチューリップハットが外れ、長く綺麗な髪が泳いだ。これにはさすがに驚き、しばらく固まっていると俺の右手を掴み、自身の頭の上に移動させた。

「……………まだ撫でていて欲しい。」

涙声だった。鼻をすする音が聞こえ、声を震わせているのがよくわかる。再び頭を撫でてやるとぽつりぽつりと話しはじめてくれた。

「勝ちたかった。不安だった。逃げたかった。頑張ったんだよ?」

「知ってる。」

色々な言葉が省かれているが必死に伝えようとしてくれるのがわかる。

「でも私は隊長だし、いつもの私じゃないと他の子も不安になってしまふ。だから必死に隠してた。」

「ああ。」

「だけど……………どうしても我慢できなくなって君の所に来てしまった。」

「そうか。」

短く言葉を返す。肯定も否定も励ましの言葉も彼女は望んでいないだろう。ただただ胸の内に溜まってしまった話を聞いてほしいだけだ。

「まったく、あの歌はずるいなあ。」

そう言ってまた涙をこぼす。

「おれの好きな歌だからな。今度CD持ってくるか？」

「お願いしようかな？カントレで弾いてみるのもいいかもしれない。」

「それはいい。是非、聞きたいな。」

「君も歌うんだよ？」

「えっ？……二人だけの時な。」

「フフツ。」

やっと笑ってくれたようで俺も微笑むと目と目が合った。すると預けていた頭を起こし、目を細くし瞼に涙をいっぱい溜めて

「ありがとう。」

そう言うと本日何回目かの涙がこぼれる。それを指で掬ってやる。俺の行動に少し驚きつつ、真剣な表情になり、赤く腫れた目を閉じるミカ。

唇を重ねる。触れるだけのキス。

「もつと。」

涙目で懇願してくる。もう一度触れ合う。

「もつと長く。」

先程より長く触れ合い、離れるともつともつと要求される。俺はただただ彼女の要求に応え続けた。だが彼女の息があがりはじめても、もつとと言おうとしてくるのでミカを抱き寄せて制止した。

「今日は一緒にいてやるから安心しろ。」

「……ヤダ。」

俺の肩を掴みながら言う。

「今日も明日も次の日もこの先ずっと一緒にいてほしい。」

「そんなの当たり前だろ？」

そう言って背中をトントンと軽く叩いてやると落ち着いたのか、うん うん とうなずいてすべての体重を俺に預け、寝てしまった。きつと明日にはいつものミカに戻っているだろう。今日はとことん落ち込む日だった。それだけの話。誰にでもある話だ。

少し風が吹き、彼女の髪がなびく。微かな石鹸の香りが俺の鼻腔のみならず脳内まで浸食してくる。さらに月明かりに照らされた彼女の体の全てが幻想的に見えた。欲望に負けて彼女を起こさないように必死に耐えていたのを知っているのは演出をした風と月くらいだ

ろうか？

後日、優勝校の大洗の廃校の件を聞き、何だかんだで助けに行つたミカ達。後々、助けに行つた理由をアキから聞いたのだが「ミカが言うには助けに行つたんじゃなくて、『風と一緒に流れてきたのさ』だつて。いつも通りよくわかんないよね。」とのこと。思わず笑つてしまった。確かにわからないだろうなあ。

笑っている俺を怪訝な目で見ているアキの後ろからいつもの、本当にいつものカントレの音が響いてきた。俺が教えたあの曲と心地よい風と共に。

秋だけどヒロインはミカ

『スポーツ』

長い夏の延長戦が終わり、少し肌寒くなってきた今日この頃。

俺は次の授業の体育に向かうべくジャージに着替え、グラウンドへ向かうため教室を出た。

少し廊下を歩いていると別室で着替えを終えたであろうミカとすれ違った。

「・・・ミカ、いつものジャージは？」

見ると戦車道で見慣れている学校指定のジャージを着ておらず、白い体操服と紺のパンツと言った姿だった。

「ジャージ、それは体育にとって必要なことかな？」

「必要でしょう。特に今日みたいに少し寒い日には。」

素直に忘れたと言えないのだろうか、この捻くれ娘は。確か女子は体育館で授業だったはず。ウチの体育館は空調設備なんてものはないから秋でも結構冷える。それにミカは体育の授業とはいえ極力動かないだろう。激しく体を動かすミカの姿が想像できない。

「ほら、貸すから着とけ。」

ジャージを脱いでミカに渡す。

「ではありがたく君の厚意に甘えるでしょうかな。」

「はいはい、そうしてください。」

ミカが俺のジャージを着たが袖口から手が出ずに力なくうなだれている。そのせいでおぼけみtainな状態になっている。

「やっぱり大きいね。」

「そりゃあ、体格の違いとか男女の差があるからな。」

「でも丈はちょうどいいみたいだ。」

「……」

(それは多分、その立派な胸のおかげだと思う。)

「……どこを見ているのかな？」

「!! わ、悪い。」

すぐに視線を逸らす顔が少し赤くなったのは隠せなかったようでミカは悪戯っぽく笑う。そして……

「!! ころら! ジャージのにおいを嗅ぐんじゃない!!」

余った袖部分に鼻をつけてスンスンとにおいを嗅ぎはじめた。

「大丈夫、臭くないさ。ただ、鉄とオイルの香りがするだけさ。」

「……やっぱり返せ。」

「それには賛同できないな。」

そう言ってスタスタと体育館へ向かってしまった。ミカに遊ばれた俺は深くため息をつきながらグラウンドへ向かうのだった。

授業が終わり、教室へと戻るべく廊下を歩いていた。今日の授業はサッカーだったおかげで汗だくになった。ミカにジャージを貸してちよūdよかったと思っていた頃、ミカと会った。

「おう、ミカ。やっぱりジャージあつてよかっただろ？」

「さあ、どうだろうね。」

相変わらずのミカ節は無視して続ける。

「じゃあ、ジャージ返してくれ。」

「……今日はそのまま戦車道で使うから「今日は戦車道の練習ないだろ。」

何故かジャージを返すのを拒んでくるミカ。言葉で言っても無駄だとわかっているので実力行使に出る。

「いいから返しなさい。」

そう言って片手でミカの肩を掴み、もう一方の手でジャージのジツパーを下げる。

「……………」

下げたジツパーをもう一度上げた。両手で顔を隠しながら俺はミカに言う。

「……何で下に何も着ていないんだよ。」

そう、下に何も着ていなかった。体操服もブラも。おかげで立派な胸を思いつきり見てしまった。胸を見られたにも関わらず涼しげな顔でミカは言う。

「体育の授業で汗をかいたからね。脱いだけさ。」

嘘だ。コイツが汗をかくほど動くわけがない。サボってカンテレ弾いているに決まっている。だいたい何でブラと体操服は脱いでジャージは着てるんだよ！

「もういい。今日は貸す、それ。」

「フフツ。」

げんなりしている俺を見てミカは笑うのだった。

翌日、ミカからジャージを返してもらい体育の授業前に着て廊下を歩いているとアキとすれ違い様に言われる。

「なんかタクマ、ミカと同じにおいがする。」

その問いに俺は無言のままグラウンドへと逃げ去るのだった。

『読書』

優しい日差し、そして優しい風が金木犀の香りを運んでくる。今日は整備の仕事もない。こんな日にはずっと外にいたいと思う。だが体を動かしたい気分でもない。なので俺は学校のベンチに座って小説を読むことにした。中身はとある西口公園付近で起きる事件などをまとめたもの。

しばらく読んでいると声が降ってきた。

「タクマくん、何読んでるの?」

視線を本から正面に変えようとクラスの女子が立っていた。

「好きな作家のシリーズものの本読んでるんだ。」

「へえー。」

聞いてきた割には興味なさそうな返事である。

「つて言うかメガネ姿はじめて見た〜。」

そう、俺はいま黒縁のメガネをかけている。視力は悪くないのだが本を読んだり、テスト勉強など集中したいときには結構メガネをかけていたりする。そのことを女子に伝える。

「そうなんだ。結構カッコいいよ。」

お世辞でも言われるとかなり嬉しいものである。男って単純なんだよ。

「そうだ。今日みんな食べてたクッキー、余ったからあげる。」

そう言って鞆からビニールの包みに入ったクッキーをくれる。

「ありがとう。後で食べるね。」

思わず笑顔になってしまった。現金だな俺。

「う、うん。じゃあまたね。」

そう言ってそそくさと帰ってしまった。何だろう、顔が赤かったから風邪でもひいていたのかな？ お大事に。

貰ったクッキーをポケットにしまい、再び本の世界に飛ぶ。

物語が佳境に入ったところ、聞き覚えのあるカンテレの音が聞こえてきた。

たぶんミカが近くにいるのだろう、そう思いつつ視線は本から外さずにいた。

カンテレをBGM代わりに小説の中の時間を進めていく。静寂も集中できるが何か音楽が鳴っているのもいいものだ、優雅な気分になれる。かなり良い集中力を保ったまま本を読み終えた。本をパタンと閉じると同時に声が聞こえてくる。

「ずいぶんと集中していたようだね。」

顔をあげるともう少しで顔と顔が触れるくらいの至近距離でミカが俺のことを覗き込んでいた。

「うわ!!ミカ!？」

驚く俺を余所にミカは隣に座る。

「今日はずいぶんと珍しい姿じゃないか。」

メガネのことか。

「ああ、これは・・・集中したいときにかけているんだろう?」

・・・何故知ってる?

「良かったね『結構カッコいい』タクマくん。」

そう言って俺のポケットに手を入れクッキーを取り出し、ビニールを開け、ムシヤムシヤと食べ始める。

「それ俺が貰ったクツ 「女の子からカツコいって言われて胸はいっぱいだろう?」」

俺の言葉を遮り、クツキーを急いで食べるミカ。よくわからんが怒っている。

クツキーを全部食べ終わると少し満足げになりカンテレを弾きはじめる。

「・・・あつ、頬にクツキーついてるぞ。」

ミカの頬についていたクツキーの欠片を取り、口の中に入れる。わずかではあるが甘みが広がる。うん、おいしい。

すると突然カンテレが止んだ。

ミカの方を見ると視線がぶつかる。そして顔が赤くなりワナワナと震えだし超速弾きでカンテレを弾き始めた。

突然のことで言葉も出ず、ただミカを見ているしかできなかつた俺。しばらくすると落ち着いたのか演奏を止め、俺のことを睨み、メガネを奪われた。

「痛っ!! 何?」

奪われた際にアーム部分が鼻に当たった。鼻を押さえながらミカを見ると俺のメガネをかけていた。

「君がどういった世界を見ているのか気になってね。」

誇らしげにメガネをクイツつとあげて答える。意味が分からないがこちらもやられてばかりではいられない。素早く腕を伸ばし、ミカのチューリップハットを外して自分の頭に被せる。

「っ・・・何をするんだい？」

「ミカが何を考えているのか気になってね。」

腕を組んで得意げに答えるとクスクスとミカが笑い出した。

「君について真剣に考えるのがなんかバカらしくなってしまったよ。」

だいぶ貶された気がするがミカの機嫌は直ったようである。気づくとさつきよりも距離を詰めて座ってきていた。

「俺の見てる世界、わかった？」

「全然。そっちこそ私の考えてること、わかったのかい？」

「いや、まったくわからん。」

そう言うとお互いに笑っていた。チューリップハットをミカに返しながら言う。

「これからゆっくり理解していくよ。」

「そうかい。」

ポロローンとカンテレを弾くミカ。そして

「あつ、そういえばメガネ姿。結構じゃなくて、かなりカツコよかったよタクマ君。」

そう答えるミカに対して、何で機嫌が悪かったのかわかって今、ミカのことを少し理解できた。

『食欲』

「日替わり1つ。」

継続高校の食堂にて覇気無く言う俺に対して食堂のおばちゃんの

真逆の威勢のいい答えが返ってきた。

「はい！日替わりね！……ってタクマちゃんじゃない。少しやつれてるけど大丈夫？」

「絶賛2徹目っす。」

指を2本あげてVサインを作る。Vサインとは程遠い心境だな。

「まあ！じゃあ、しつかり食べなきゃだめよ。コロッケ1個おまけし
とっておげるから。」

「あざっす。」

以前食堂の調理器具を直した関係でおばちゃんとは仲がいい。体調を心配してくれたり、こうやってたまにおかずをおまけしてくれる。ありがたい。

今日の日替わり定食、コロッケ定食を受け取って席につき、食べ始めているとよく聞き覚えの入る声が入る。

「日替わり定食、大盛りで。」

「あらくミカちゃん。今日も可愛いわね。」

「ふふっ。ありがとう。」

ミカが食堂に来了。そういえば理由はわからないがミカもおばちゃんと仲がいいらしい。会うたびに可愛い可愛いと賛辞を送っている。それに対してミカがいつもの涼しい顔で答えるのがお決まりみたいになっている。だが今日は少し違った。

「あれ？　でもミカちゃん少し太った？　ダメよ、食欲の秋だからって食べ過ぎちゃ。」

おばちゃんは良く言えば表裏のない人、悪く言えば正直すぎる人なので平気でこういうことを言う。表裏のない言葉なのでその一言は非常に重い。

少しビクつき目を閉じたまま動かなくなったミカを気にせずおばちゃんは続ける。

「あつ、聞いて聞いて。逆にタクマちゃんったら少しやつれてたのよ。思わずコロツケおまけしちやっただわ。」

「へえ〜。」

目を細くしながら俺を見てくるミカ。気づかないふりをして白飯を掻き込む。

おばちゃんの「はい。日替わり定食大盛りお待たせ。」の声と同時にコロツケ定食が出されるが今となっては皮肉にしか聞こえない。ミカはおばちゃんにありがとうと言いつつ、受け取ると俺の方へカツカツと歩いてくる。そしてガシヤンと強くおぼんをテーブルに置き、俺の横に座った。

「……………」

(き、気まずい。そもそも何故、俺の隣に来たんだミカよ。用があるなら喋れ。ご飯の味がだんだんわからなくなるから!!)

とにかく早く食べてしまおうと、咀嚼しながらもう一口白飯を頬張ろうとしたところで異変に気付いた。白飯が減っていない。むしろ増えた気がする。見るとミカが箸を使つて自身の茶碗から俺の茶碗へ白飯を移していた。

「……何してんの？」

「なに、やつれた整備士君へお腹いっぱい食べさせてあげようとしているだけさ。」

「この行為に意味があるとは思えない。そもそも自分が食いたいから大盛りにしたんだろ？」

ミカ風に返してみる。

「違う、風と一緒に流れてきたのさ。」

「大盛りの日替わり定食は自分で頼まないと流れてこない。自分で全部食えよ。」

「やだ。」

こんなやり取りが数回続いたが結局ミカは俺の茶碗へ移した分を

食べなかったので全部俺が食うことになった。

放課後になり、今日は整備も早く終わったので久しぶりに家に帰れるとウキウキしながら自転車を校門へ向かって押していると、ハンドルを握っている手に柔らかな温度が重なる。見るとミカが俺の手を握っている。

「・・・何してんの？」

本日2回目の言葉を言う。

「なに、やつれた整備士君を運んであげようとしているだけさ。」

そう言うとサドルに座ってハンドルを握り、荷台をパンパンと叩く。・・・後ろに乗れっか。

荷台部分に座るとミカが漕ぎ始めたがフラフラして非常に危ない。さすがに女の子が男1人を荷台に乗せて漕ぐのは厳しいようだ。しかし代われと言ってもミカの奴は意地になっているから聞かないだろう。おばちゃんの一言はとても怖いなあ。

「痩せればいいってもんじゃないんじゃないかな。というか今も見た目細かいじゃんミカ。」

ある程度漕いだところで声をかける。表情は涼しい顔を保っているように見えるがミカは汗だくだ。息を切らしながら俺の問いに答える。

「ハアハア、痩せているように見えても……意外にも人間の体には……脂肪が詰まってる……でも多くの人が……それに気付かないんだ。」

「ふーん。」

気の抜ける返事をしながらミカの腰に両腕を回し抱き寄せる。

「ッ!! 何をしてるんだい?」

「いや、どれくらい脂肪ついてるのかなあと思っただけ。」

短く声を漏らすミカを余所に服を少し捲り、お腹の肉をプニプニと指でつまんでみる。

「ンッ!!……脂肪って言うなら……こっちの方が……あるんじゃないかな?」

「!! おい!! ミカ!!」

やけくそ状態になったのか、ミカは俺の腕を取り自分の胸へ押し当ててきた。その豊満な胸に沈み込む指の感覚に俺はパニック状態になり、思わず強く胸を握ってしまった。

「アッ!!……ンンッ!!」

予想外の俺の行動に先程よりも大きな声を漏らし、足が止まってしまったミカ。原動力を失った自転車は少しずつタイヤの回転が遅くなり、やがて道の真ん中で完全に停止した。

「ミカ!大丈夫か?」

荷台から降りてミカに声をかける。見ると顔も耳も真っ赤にして息を切らしていた。

背中をさすってやると、ゆっくりサドルから降りて俺の胸に顔を埋めてきた。

「疲れた。お腹すいた。」

なんとも気の抜ける答えである。てっきり泣き出すものかと思っていたからな。だがそんな彼女も可愛いと思ってしまうあたり、俺も随分と毒されてしまったものだ。

「あーはいはい。じゃあ近くのラーメン屋でも行くか？」

俺の問いに黙って頷き、荷台にちよこんと座るミカ。

「一朝一夕で痩せるもんじゃないからな。ゆっくりな。明日からゆっくり運動していけばいいと思うぞ。だから今日は食うぞ?。」

また黙って頷いたのを確認し、俺はペダルに力を入れ自転車を漕ぎはじめた。

ちなみに彼女はラーメン屋でチャーハン餃子付きラーメンセットを頼んだ。大盛りで。

『芸術』

「……こうか？」

「そうそう。そして次はこっちを弾く。」

ポロンポロンと短い音が響く。俺は今、ミカにカントレの弾き方を教わっている。

普段からミカが弾いていて興味はあり、その姿を見ていたら「弾いてみるかい？」と声をかけられた。

「えつと……次は……？」

「次はこっちだよ。」

だがどうも俺には音楽の才能は皆無のようである。すぐに次に弾く場所を忘れてしまう。なので後ろにいるミカに手を重ねてもらって誘導してもらって弾いている状態だ。……うん、俺には無理!!

あとさつきから気になっていることがある。後ろにいるミカから……その……立派な双丘が背中や腕に当たっているのである。このおかげでさつきからなかなか集中できない。

「ふむ。もしかしたらやり方を変えた方がいいのかもしれないね。」

そう言ってカンテレを取り上げられる。愛想を尽かされてしまったのだろうか。

すこし落ち込んでいると

「よいしょと。」

掛け声と一緒に胡坐をかいていた俺の上にミカが座ってきた。ミカの髪の毛の香りが突如、俺を襲う。

「あの・・・ミカさん？　これは？」

「ん？　この方が教えやすいかなと思ってね。」

そう言ってミカの膝の上にあるカンテレまで手を強制的に運ばれる。色々と刺激がヤバいのですが・・・。

「やっぱり君の手は大きいね。」

運ばれた俺の手のひらとミカの手を重なっているようだった。俺とは違う柔らかな感触が手のひら全体をなぞっていく。

「・・・・・・・・・・。」

俺の手をなぞっていたミカの手が途中で止まり、急に黙りだしたミカ。

「どうした？　ミカ。」

「・・・君の手、随分と傷が多いんだな。」

整備士をやっていると手袋をしているとはいえ、どうしてもこごった傷はつくものだ。古傷の上に新しい傷を重ねるというのも珍しくない。整備士の運命なのだ。

「あまり見ている面白くないじゃないだろうか？」

手を引つ込めようとするとミカの手が俺の手を握る。いわゆる恋人繋ぎと呼ばれる握り方で。

「そんなことはないさ。これは君が私たちを守ってきてくれた証だ。誇るべきものだよ。」

そう言つてミカは俺の右の手の甲にキスを落とす。柔らかな温度と感触が伝わってくる。

ミカの行為に俺はたまらなくなりミカの首にキスをする。

「アツ・・・ソツ・・・はぁ。」

我慢できずに声を漏らすミカ。キスをやめると俺の方を向き、お互いに見つめ合う。

そして今度は目を閉じて唇同士を重ね合う。

脳内がとろけ落ちそんな感覚になりながら俺は誓う。

この両手がどれだけ醜くならうとも構わない。ミカのことを守れるのであればそれでいい。

一生、ミカの整備士で在り続けよう。

いい肉の日だった。

「3等大当たり〜。」

威勢のいい、はっぴを着たオツチャンが鐘を鳴らしながら叫ぶ。

俺の見つめる先には黄色の小さい玉。

俺は休日を利用して商店街に買物いに来ていた。何やらキャンペーン中ということで一定金額以上買い物をすると抽選が出来るらしい。そこで何の気なしに回した結果、3等を当ててしまった。当たるとも思っていなかったので特に賞品がどんなものなのか見ていなかった。さて何が手渡されるのかなと思っていると当たった時は嬉しそだったオツチャンの顔が渋い顔になっていった。

「実は兄ちゃん、ちよつと悪いんだけどよ……。」

オツチャンの説明はこうだ。3等の商品は焼き肉店の食い放題無料券らしいのだがその券の有効期限が本日までと言う。何やら商店街の手続きのミスでこうなったらしい。当時は早く誰かに当たれば有効期限もその分あるだろうと楽観的だったのだが、抽選キャンペーンの最終日の今日まで当たりが出なかつたらしいのだ。

「すまねえー」と両手を合わせるオツチャン。まあ、今日まで使えるのであれば俺は気にしない。

「大丈夫つすよ。今日行ってくるんで。」

オツチャンが俺の両手を取り、「ありがとう、ありがとう」とオーバリアクションしてくるので周りから変な目で見られた。賞品を受け取りながらオツチャンに店の場所を教えてもらいその場を離れ、歩きながら今後の事を考える。もうすぐ夕飯。メニューは焼き肉と決まった。しかし一人で焼き肉店に行くのは気が引ける。といつても急に誰かに連絡したところでなかなか来れないだろう。しかたない、ただの紙切れにするよりはマシだ。そう思い込んで焼き肉店へ足を運ぶ。

(あそこの信号を曲がれば店が見えてくるはず。)

迷うことなく足を進め、信号を曲がると牛が描いてあるベタなお店の看板と広いスペースの駐車場が見えてきたのだが……。何か見覚えのある戦車が駐車場に止まっているのが見えた。いや、戦車が止まっているのはおかしいことじゃない。戦車道とかあるし、戦車専用の駐車場だってあるからね。問題はすぐく見覚えのあるという点。……いや考えすぎか。たまたま同じBT-42なだけ……

「もー!!ミッコしっかりして!!お肉見ていたってお腹は膨れないよ!!ミカも手伝って!!」

凄く聞き覚えのある声が聞こえてきた。その後に弦楽器を弾く音も。

「何やってんの?」

もう無視するわけにはいかなかった。

「えっ？タクマ何でここに？ いやそれよりも聞いて！ミッコがお腹空きすぎて運転放棄してずつとこんな状態なの!!」

アキが指差した方を見るとガラスにへばりついて店内を虚ろな目で眺めているミッコの姿が・・・おい、よだれ出てるぞ。

「ミカもいつもの感じでカンテレ弾いてるし・・・もうう!!」

頭に手をやって髪をわしやわしやと搔きだしたアキ。これは相当キテるな。

「タクマ〜おごつて〜。」

こちらを見ずに力ない声でミッコが言ってくる。

「彼に頼ることに意味があるとは思えない。」

ポロロンという音が俺を煽ってくる。言ってくれますねミカさん。俺におごる財力は無いと言いたいのだろう。確かに事実ではあるがしかし、今日の俺は違う。俺のターン!!

「じゃあ意味のあるものに変えてやるよ。」

ドロー!!焼き肉食い放題無料券!!このカードの効果は本日まで限り、4名様まで焼き肉食い放題が無料になる!!行けー、トゥータ・サルミアツキアターツク!!!

券を見せた瞬間、アキとミッコが飛びついてきて券を見ながらウオオオーとキヤアアのハーモニを奏でている。ふふ、字だけにする

とまるで断末魔のようだ。2人撃破！残るはミカ1人。だがコイツは手ごわい。しかし要点を掴めば簡単だ。

「行くぞ、アキ、ミッコ。」

「はく〜い。」

ニコニコしながら俺の後をついてくる2人。店の入り口まで行き、扉を開けながら

「すいませーん、3名で・・・」

ガシツ!!

言い終わる前にミカが俺の腕を掴んだ。

「せつかく4名まで使えるのに3名分しか使わないのは少しもったいないんじゃないかな?」

「俺に頼ることに意味があるとは思えないんじゃないかな?」

「状況はいつでも変わるも」3名でー「君の判断を信じよう。」

・・・まあこのひねくれ娘から涙目でここまで言わせれば勝ちでいいか。腕に込められてくる力がだんだん強くなってるし、怒ってるなあこれ。これ以上の意地の張り合いに意味があるとは思えない。終戦の言葉を言おう。

「店員さん4名です。」

店に入り店員さんに券を見せてテーブル席に着く。俺の隣にミカ、前の2席にミツコ、アキ。店員さんの説明だところこの食い放題は逐一注文するタイプではなくビュッフェのように好きな肉を好きなだけ取っていくタイプのようだ。ふむ、合理的でいいな。店員さんの説明が終わるや否や、3人はまず白飯のコーナーに行ってご飯をよそうと、肉は取らずに席に戻り、一齐に白米をかき込んだ。その姿を見た俺は涙を堪えながら適当に様々な部位の肉を4人分取ってテーブルに持ち帰った。トングを使って肉を網の上に乗せ、あのたまらない焼ける音を出すとご飯を食べていた3人の箸が止まり、視線が肉に集中する。・・・捕食される動物の気持ちは今ならわかる気がする。ミツコがもう1個のトングを持ち、カチカチと鳴らしながらまだ焼いてから10秒も経っていない肉に手を付けようとする。

「ミツコ、まだだぞ。」

「うう〜。」

あつ、コレ犬の待てだ。

食い放題開始から数十分経って少し3人が落ち着いてきた。焼いても焼いてもすぐに食うからその間、俺はただ肉を焼くだけのマシーンになりさがっていた・・・まあ、少しは食えてるはいるが。幸せそうな顔で口をモグモグと動かす3人を見ていると全員お茶碗が空っぽになっているのに気がついた。

「ご飯食うならよそつてくるが食うやついるか?」

無言で3つの茶碗が俺の前に差し出された。わかってたけどね。

茶碗を持って白飯のコーナーに行き、ついでに適当に肉もいくつか取って席に戻る。

「すごいーい!!片手でお茶碗3つ持ってる!!タクマ、手大きいんだね！」

「そうか?」

各自に茶碗を配って、手を広げて眺めているとアキが手を合わせてきた。

「ほら!!大きい!!」

アキと手を合わせた瞬間、ミカの箸が止まったのを俺は見逃さなかった。

「どれどれ?おおく本当だ。」

続いてミツコが合わせてくる。ミカの動きがピクツ、ピクツと面白いことになってるが絶対言わない方がいいだろう。

「ミカも合わせてみれば?」

ほら、優しいアキちゃんが助け舟を出してくれたぞ!

「その行為に意味があるとは思えない。」

出たー!ー!ミカ節。素直になればいいのに。そう思うと少し意地悪を試してみたくなるのが男子の性である。俺はちょうど焼き具合のいい肉を取り、

「ほれ、ミッコ。あ〜ん。」

ミッコに差し出した。一瞬キョトン顔になったミッコだがすぐに俺の意図を察してくれたようでニヤリと笑うと口を開けて顔を差し出してきた。

「あ〜〜」

肉が揺れながら運ばれる。ミッコのお口まであと数センチ・・・

ガシツ!!

本日2度目のミカの腕掴み。

「何をしているのかな？」

「いやなに、運転で疲れたミッコを労っているだけさ。」

「その行為にも意味があるとは思えない。」

「こういうのは気持ちが一番大事じゃないかな？」

「その考えには賛同できなっ!!」

もううるさいから片手でミカの顎を持って口を開かせ肉を放り込んだ。熱かったのだろうか、必死に平静な顔を作っているが顔の筋肉がピクついて涙目だ。さすがにこれは悪いことをしたと思う。数分間ミカの肩パンを喰らうことになるのだが俺は無視して肉を焼き続

けた。

「ご馳走様!!タクマ!!焼き肉なんて本当に久しぶり!!」

「にしし!ごちそうさん。」

「はい、どういたしまして。」

店の外に出て、焼き肉を堪能した2人からお礼を言われる。ミカは相変わらずふてくされた顔をしている。

「じゃあ気を付けて帰れよ。またな。」

3人に手を振って焼き肉店を後にする。

家路に着くべく、街灯の少ない薄暗い通りを歩いているとポロローン、ポロローンという音が聞こえてくる。怖いなー、怖いなーと思いながらゆっくりと振り向くと誰もいないんですね。前を向いて歩き出すとまたポロローンと音が聞こえるんです。今度は思い切ってパツと振り向いたんです!そしたらそこには!!

「隠れきれてないぞミカ!そもそもカンテレ鳴らしながら来たらバレルに決まってるだろ。」

電柱からいつも通りの涼しい顔のミカがカンテレをひとつまみ弾いて出てきた。

「アキとミッコは？」

「先にBTに乗って帰ったさ。」

「ああそう。・・・で、なんでミカは俺についてくるの？」

「風と呼ばれただけさ。」

はいはい、予想してましたよ、その答え。

「その風は俺の家に吹いてるんですかね？」

「さあ、どうだろうね？」

ミカに返答に軽くため息をついているとズンズンとミカが近づいてきて俺の手首を取る。華奢で柔らかい感触が肌に伝う。手首を俺の前まで持つてくると自身の手と俺の手を合わせてきた。

「本当に・・・大きいね。」

それだけ言うと今度は俺の手を握り、先に歩き始めた。突然のことでバランスを崩しかけたがどうにか立て直しミカを見る。顔はわからないが耳は赤かったのは辺りが暗くても見間違わなかった。さつきアキとミッコに手を合わせたのに嫉妬してくれての今の言動なんだな。そう考えると顔が綻んでしまう。

急にミカが振り返り、その様子を見つかってしまった。またもや彼

女の肩パンが飛んでくる。だが手は繋いだままだ。痛みが幸せで半減されたような気分だ・・・いや、やっぱりちよつと痛い。

「ミカ。」

名前を呼ぶ。繋いでいる手の力が少し強くなる。

「明日になったら君に渡したいものがある。」

そう、今日の買い物は全て明日の為。別に祝日でも行事があるわけでもない。でも彼女にとって、大事で特別な日。だから俺にとってもそれは同じだ。

風のような君に是非、俺が用意した火を吹き消してほしい。そう願いながら俺は彼女の手をもう一度強く握った。

Baby You Can

「えーーーーっ!!!」

冬の気温がリハーサルを終え、本番に差し掛かろうかという今日この頃。無限軌道杯も無事に終わり、あとは卒業を待つだけとなったいつもの継続女子3人と焚き火に当たりつつ俺が釣った焼き魚を食っているときアキが近所迷惑になるくらいの音量で叫ぶ。本当に近隣に民家がなくてよかったと思うくらい声がデカイ。

「タクマって卒業したら旅に出るのー!?」

先程と変わらない音量だったので耳を塞ぎながら無表情で焼き魚を咀嚼。だってお腹空いてるんだもん。すると俺の行動が気に入らなかつたようでアキが「ちよつと聞いているのー?」と胸ぐらを掴んできたので人差し指の耳栓を外して答えることにする。

「聞いているよ。そうだよ、旅に出ようと思ってる。」

事の発端はアキが「そういえばタクマって卒業したらどうするの? 進学?就職?」と目線を焼き魚から離さず、自分から質問したもののそれほど興味が無いのか普通のトーンで聞いてきたことだ。「旅に出るよー」と俺も普通に返したら「ふーん。」という言葉の数秒後に小さく「えっ?・・・」と続き、冒頭のシーンに戻る。

「何で言わないの!? そういう大事なこと!!」

「き、聞かれなかったから?」

揺らすのやめて、お魚が出ちゃう。口からキラキラ処理したものが出ちゃう。

「聞いてなくても普通言うでしょ? ほら、ミカを見てみなよ! 表情は変わらないけどカンテレ弾く手が止まって震えだしたよ!!これ

絶対ミカにも言つてなかったでしょ!!」

横目でチラリとミカを見る。あつ、本当だ。これは相当ショックを受けているな。まずいな、別に隠してたわけでもないけど後々面倒くさそうだから出来るだけ穏便にすませるように何か言い訳を・・・。「あたしは結構前から知ってたけどね。」

ちよつとミッコさーん!!! 空気読んで!!このタイミング出来るそんなこと言ったらさ。

「・・・へえ。」

ほらあ、怒つちやつたじゃない、ウチのカンテレ隊長。ハイライトのない目で近づいてこないで!!焚き火が近くにあるのにハイライトがないってどうなってるの!? ブホツ!!!

片手で俺の両頬を掴まれた。必然的にアヒル口になる。

「ミッコには伝えていて彼女である私には伝えていないのはどういう意味かな?」

あつ、俺の彼女っていう自覚あったんだ。いやあ嬉し・・・痛い痛い痛い痛い!!! 手に力こめないで!!

「ニヤける必要はないと思うんだが?」

ふふつと笑う彼女のバックに般若が見える!ヤバイヤバイ、この後「答えは風に聞いてみるといいさ」とかふざけようと思つてたがちゃんと答えないと鈍器カンテレでトウータサれそうだ!

「ミッコには随分前に聞かれてたから答えました。はい。」

背筋を伸ばし姿勢を正して丁寧に答えることで精一杯真面目さをアピールしてみるが俺の両頬の長期的な痛みは変わらない。たまらずアイコンタクトでミッコに「何か言ってくれ!!」と必死に訴えると「ニシシツ。」と歯を見せて笑い、仕方ないなあといった感じの咳払いをして話します。

「そうそう。あたしから聞いたんだよ。さっきのアキみたいになんとか聞いてみたら『旅に出る』って言うからちよつと驚いたね。」

「私ほだいぶ驚いたんだけど・・・っていうかミッコも知ってたんなら教えてくれればいいじゃん!何で黙ってるの?」

「・・・聞かれなかったから?」

「もー!!2人ともそんな答えばかり!!何で疑問系なの? えっ?これ私が聞くの? タクマが旅に出るの知らないのに突然『タクマ、卒業したら旅に出ようとしてるでしょ!』って言うんだ? それで当たるんだ!」

今度はアキがプンスカ怒りはじめて一人ツツコミをしだした。我が道を行くメンバーが多い継続連中で比較的良識人で振り回される(俺も振り回してるけど)からストレス溜まってるとだ、ごめんよ。

「落ち着いて、アキ。」

「そもそも!! 何で旅に出るの!?!」

なだめようとするがビシツと人差し指で俺を指しながら睨みながら旅の理由を聞いてきた。それに気圧されたのかミカがようやく俺の頬から手を離してくれた。ふうー、助かったぜ。でなんだっけ? ああ理由か。

「みんなとき、いろんな学園艦に忍びこん…観光して、物資を盗ん…調達したりして思ったことがあるんだ。」

「タクマ、隠せてないよ。」

うるせえ、共犯者が。黙って聞いてろ。

「学園艦って海外の国をモチーフにしていることが多いだろ? だから、じゃあ本物はどんな感じなんだろうって思ってたね。言ってしまうばただの好奇心。色々な国を周ろうと思ってる。」

言い終えると軽く火の爆ぜるパチンパチンという音だけが聞こえてきた。みんな真剣な表情で炎を見つめている。なんて答えていいかわからないのだろう。俺もなんて言ってる欲しいのかわからない。しばらくそのままの状態が続く。もう一度火が軽くパチンと音をたてた。それが合図だったかのようにアキが口を開いた。

「でも、やっぱりミカには言うべきだったんじゃない? 彼女なんだし。」

アキの言葉に勝ち誇ったように口角をあげて頷くミカ。アキの言ってることは正しい。が、ミカが何かムカつくなあ。よしっ!!

「いやアキ、よく考えてみる。事前に『ただの好奇心で旅に出ます。』つてミカに言ったら何て返ってくるか想像つくだろ?」

「ああー。」

「なんだい? 2人とも?」

アキとミツコがハモる。よしもういつちよう!!せーの!

「旅に出る。それは必要なことなのかな?…ハッハッハッ!!!」

なんの合図もなしに今度は俺も含め、3人がハモり大爆笑。腹を押さえながら転がる操縦手と装填手と整備士。しかし

ガシツ!!!

「旅に出る必要性は今わからないが…今、お仕置きの必要性はあるのはわかるようだ。」

「あだだだだ!!!」

今度はこめかみを掴まれた。彼女の顔は見えない。だがバック映る焚き火の炎が彼女の怒りを表しているように見える。だって何故か火の勢いが強くなったもん。いだだだ、シヤレにならない。アキ、ミツコ助けて!!

「あつ!! お、お魚なくなっちゃったから取ってくるねー、行こうミツコ!!」

「う、うん。そうだねー!!」

薄情者—————!!!

森の奥へと消えていく2人。ああ、俺の救いの希望はなくなった。旅に出る前に違う所へ旅立つのか俺。目を閉じてその時を静かに待とうとしたが

「…?」

俺を押さえつけていた力がいきなり0になった。と思ったら肩に

ポスンという音と共に少しの重みが・・・ミカだ。彼女が頭を預けてきた。いつものチューリップハットは外して手に持っている。だからだろうか、彼女の髪の毛の良い匂いが鼻孔を突く。横目でチラリとミカを見る。視線が合った。上目遣いの彼女は俺の腕を強く抱きつき、こう言う。

「いくら何でもいきなりすぎるんじゃないかな？」

「ごめん。でも何か、心に風穴を開けたくなったんだ。」

「風穴？」

「うん、みんなでこうやってバカ騒ぎするのも好きなんだけど、何か新しいこともしたくなって・・・多分全部説明してもわかってもらえないと思うけど。」

「心の全てを理解するのは不可能だ。でも理解しようとすることは大事だ。」

ポロローンとカンテレの音が響く。今日はじめていつもミカ節が聞けた気がする。

「ついてくるか？」

カンテレをつま弾くミカの姿を見て思わず聞いてしまった。答えなどわかっていないのに。

「風は・・・そっちには吹いていないかな。」

ほらね。

「・・・待っててくれるか？」

返ってきたのはカンテレの音だった。

「んっ。」

静かに佇む森の中、美しい名前をつけられた星たちが俺とミカのキスを見守っていた。

・
・
・
・
・

「じゃ、行ってくる。送ってありがとう、ミッコ。アキも元気だな。」
無事に継続高校を卒業した俺をBT-42で空港まで送ってくれたミッコとアキ。手を挙げると2人ともパチンと手を叩いてくれる。ミカは

「ミカどこに行っちゃったんだろうね。せつかくの見送りなのに。」

「まあいいさ、アイツにさよならの挨拶は似合わないし。」

「タクマ、今まで継続の整備お疲れ様。」

「おかげでいい走りをした楽しい戦車道だったよ！」

「・・・最後に泣かせにかかるなよ2人とも。・・・またな。」

「うん、またね！」

こぼれそうな涙を上を向きながら歩いて2人背を向けて歩き出した。振り返ることはしなかったがいつまでも2人は手を降ってくれていた気がする。

・・・
・・・
・・・

「あーやっと着いたかー。」

数時間座りっぱなしの地獄を耐え抜き、空港に着いた。時刻は夕暮れ時、ここから先は確か電車が出ていたな。おつ、時刻表があった。どれどれ・・・

「嘘だろ!!最終列車もうないじゃん!!」

国が違おうと今までの当たり前は通じないってことか。どうしよう。空港に泊まるか? いやもともとノープランの旅だし歩くか。

空港から少し歩くだけで周りに建物もない畑だけしか見えない田舎道になった。ヤバイな今日最悪野宿かもしれない。まあ慣れてるからいいか。んっ?

何やら後ろからカツカツと音が聞こえる?

振り向いてみると後ろがりアカーになっているタイプの馬車がきた。リアカーには藁がいっぱい積んである。思わず見ていると馬車を操っている老人と目が合う。首から下げた携帯用ラジカセで何か聞いてるようだ。その老人が親指をあげて後ろを指す。「乗ってきな坊主」って言われてる気がした。俺は何か嬉しくなつて荷台に乗り込んだ。

「ハハッ、まるで映画みたいだ。」

藁の上で大の字になつて寝る。気持ちいい。

ポロロ〜ン

「ハ?」

聞き覚えのありすぎる音。ゆっくりと音がする方へ振り向く。いた。チューリップハット被ったヤツが、俺の彼女が。

「ミカ!? どうして?」

「風向きが急に変わつてね。」

「お金はどうしたんだよ!? チケット代バカにならないだろ?」

「ココにあるさ。」

そう言うのとシャツをめくる。すると出てくる出てくるサイフの数々。・・・見覚えがあるぞ。ミツコとアキのサイフ!!!そして他の継続生徒達のものまで!!! やらかしやがった。

「はあ〜。」

「彼女に会つたのにため息とはひどいね。」

もう何も言う気になれない。今頃ミツコやアキ達怒ってるだろうなあ。

「これから何をするんだい?」

俺の心配を他所にミカが話しかけてくる。

「・・・そうだな。まだこの国で何もしてないから・・・」

「んっ!?!」

今度は青空の下でまずは彼女の唇を奪うことにした。

プラウダ高校
ロシアの挨拶

プラウダ高校 グラウンド付近

「そろそろ終わる頃かな」

俺は整備に必要な工具を持って戦車道の練習試合をしているグラウンドへ向かう。

本日のお相手はサンダース大学付属高校だ。

長崎県からわざわざウチに練習試合に来ると聞いたときは驚いたがスーパーギャラクシーが飛んできたのを見てさらに驚愕したのと同時に納得した。あれならロシアへも簡単に行けそうだ。

幾人かの「ありがとうございますー!!」という大きな声が数十メートル先の方から聞こえた。

どうやら試合は終わっているらしい。

グラウンドに着くと黒煙を上げる戦車の数々が目に入った。なかなかの激戦だったようだ。

(今日は整備が長くなりそうだな)

やや気が遠くなり遠方を見つめ黄昏ていると

「あー——!!タクマ!!遅いじゃない!」

下の方から響く大きな声で現実には引き戻される。声の主はウチの

高校の隊長 カチューシャだ。

「ノンナ!!」

カチューシャが叫ぶとサンダーズの副隊長で砲撃手のナオミさんと握手していたノンナはすぐにカチューシャの元へ駆け寄り、肩車をする。もう見慣れすぎて光景だ。俺よりも目線が高くなったカチューシャは言う。

「このカチューシャの活躍を見逃すってどういう見よ!!シベリア送り25ルーブルにされたいの?」

どうやら俺が試合を見ていなかったのが気に入らないらしい。口ぶりからすると試合には勝ったらしい。

「無茶言うな。後輩の指導もあるんだ。これでも早い方だと思ってくれ。」

そう。俺は後輩達への整備指導も一任されており、俺が卒業しても強豪校プラウダの名に支障が出ないようにしなくてはいけない義務がある。ちなみに後輩たちは今、整備指導で使っていた工具の後片付けをしている。

「ふん。まあいいわ、今日は試合に勝ったし、許してあげるわ。じゃあさっさと、整備をはじめなさい!!」

「同志タクマ、お願いしますね。」

「はいよ。」

こんなワガママなカチューシャとうまくやれているのはノンナのおかげだろう。俺とカチューシャのやり取りに

いつもフオローの一言をくれる。まあ、あと美人というのが大きい

かな。

戦車の整備に取り掛かり始めると後ろでのやり取りが聞こえてきた。

「なかなかエキサイティングした試合ができたわ。今度はうちの高校に来なさいよ。」

「そつちこそ、カチューシャをあそこまで追い詰めるなんてやるじゃない。褒めてあげるわ。」

サンダースの隊長、ケイさんとカチューシャの会話だ。お互いの健闘を讃えている。

カチューシャが他人を褒めるのは珍しい。それほどに実力を認めているのだろう。

「Hey!!みんな、戦車はギャラクシーに運んで帰る準備をするわよ。帰った後は反省会だからね。」

隊員たちに指示を送るとイエス、マム!!と言った声が各方面から返ってくる。

よく統率がとれていると感心しながら自分達の隊長はどうだろう?と思つたところで考えるのをやめた。

よそはよそ、うちはうちだ。まあウチの隊長もいいところはある。たぶん。たとえば・・・なんだろう?

うーん、と声をあげながら色々と思案していると片づけを終えた後輩たちが来たのでくだらない考えはやめて、どの戦車を整備するよう指示を出す。

戦車を整備して数十分経過した頃、一旦休憩を入れようかと思つて

いると整備している戦車に人影が映ったので振り返ってみると金髪碧眼で色白な少女が立っていた。

「同志タクマ。ちよつとイイですか。」

流暢な日本語でクララはそう言うので俺の手を取ると走りだした。急に手を掴まれたので（しかも美少女）混乱状態に陥る俺氏。

（えっ？なにになに？急に。・・・まさか告白的なあれ？いや、でも突然すぎませんか？クララさん）

若干、頬を染めていると校舎裏まで連れて行かれそこで手を離された。

あたりを見渡すとカチューシャ、ノンナ、サンダースの生徒たち、そしてどうしたって目立つギヤラクシーがあった。

（えっ、こんな大勢の前で公開告白？俺恥ずかしい！！やっぱり外国人は考えることが違うなあ。）

一人で勝手な妄想を広げているとクララはカチューシャを肩車しているノンナのところへ駆け寄った。

「同志ノンナ、同志タクマを連れてきました。」

「同志クララ、ありがとうございます。」

（んっ？）

俺の姿を確認するとノンナ+カチューシャ、そしてケイさんが近づいてきた。

「Sorry、ちょっと助けしてくれない？生憎今日は戦車の整備士しかいなくてさ。」

「同志タクマ、ギャラクシーがエンジン不良で飛べないようみたいなのでメンテナンスをお願いできますか？」

「タクマ、あんただったらなんでも直せるでしょ？」

なるほど俺が呼ばれた理由がわかった。さっきまでの一人妄想のせいで違った意味で、俺恥ずかしい!!超恥ずかしい!!

っていうか「なんでも直せるでしょ」って言ってハードルを上げるなカチューシャよ。

俺はハードルを低くして飛ぶタイプなんだ、こんな時ばかり持ち上げやがって。

まあ確かに昔から機械をイジるのが好きでそれが功を奏して戦車以外に学校のストروبや自販機とか直したことは何度かある。

でもだからといってすべての修理にそれらを応用できるとは限らない。直らなかつたらどうするんだよ、まったく。

そんなことを思いながらギャラクシーに近づいていく。

サンダーズの生徒たちの心配そうな目線が痛い。責任重大だなコレ。

数十分かけて翼下のエンジン部分をハシゴを使って確認していく。
・・・なるほど、わかった。

簡単にいうと、急に寒い気候のウチの高校にきたからエンジンちゃんがちよつと不機嫌になっただけだった。

俺はエンジンちゃんのご機嫌取りの処置を施し、カチューシャたちがいるところまで戻り、操縦席にいるナオミさんに叫ぶ。

「これでエンジンかけてもらえますか？」

「わかった。」

ナオミさんがエンジンをかける。緊張する一瞬だ。かからなかったらどうしよう、ということはどうしても頭をよぎってしまう。

だがそんな心配はエンジン部分から聞こえる轟音でかき消された。同時に無事にエンジンがまわったと確信できた。

歓喜に沸くサンダースの生徒たちを見て俺は安堵のため息を吐いていた。

すると急に目の前にケイさんが現れて抱きしめられた。

「thank you!!やるじゃないタクマ。最高にcoolだよ!!」

そう言って左頬にキスをされる。

(!?)

予想外の行動に目を見開いて驚いていると操縦席から降りてきたナオミさんがきた。

「あんた、やるじゃない」

「あ、ああ。ありがとう。一応、応急処置だから帰ったらそっちのちゃんとした整備士に見てもらってくれ。」

「ん。わかった。」

そう言って間髪入れずに今度は右頬にキスをされた。

(!?)

サンダーズの生徒たちはヒューヒューといったヤジをとばしてくる。

生徒たち全員、こんなノリなのだろうか。

事態についていけずにフリーズして固まっている俺に対してナオミさんは続ける。

「というかアンタもうウチの整備士にならない？」

「ナイス アイディーア。ナオミ!! どう? ウチこない?」

マジで言ってるのかジョークなのかわからないテンションに対して未だに固まっていると

ガシツッと右腕を掴まれた。見るといつの間にかカチューシャを降ろしたノンナだった。

「残念ながら同志タクマはまだ整備が残っていますのでこれで失礼します。」

(えっ?)

どことなく不機嫌な声を出すノンナ。いつもの鋭い目つきがさらに鋭い気がする。気のせいかな。

ノンナの発言後、左腕もガシツと掴まれたので確認するとクラーラが掴んでいた

「そうです。オシゴト残ってます。」

(えっ? えっ?)

「皆さんのお見送りはカチューシャ一人で出来ますね？」

「えっ？う、うん。」

ノンナの強い口調にたじろぐカチューシャ。

俺はそのまま両腕をホルルドされたまま、警察に連行される犯人のように人気のないところまで移動させられた。

先ほどから起こる予想外に頭から煙が出そうになっているのだがそんなことはお構いなしにクララが俺に質問をしてくる。

「同志タクマ、サンダースへ転校しちゃうんですか？」

心配そうな顔で上目遣いで聞いてくる。先ほどのナオミさんの発言を本気に捉えているようだ。

（そんな上目遣いで見てこないで!!反則だよ!!あと俺の腕を谷間に挟まないで!!何も考えられなくなるから!!）

「い、いや。転校しないよ!!向こうも冗談で言ったんでしょ?アメリカンジョークだよ!!」

必死に説明する俺。

「……でもタクマ、キスされてました。」

（キスは関係なくない!?　というか腕がもう幸せすぎてヤバイ!!）

腕に抱きつく力が強くなり、やわらかな感覚も同時に強くなる。

「ほ、ほら。アメリカの挨拶的な感じでやっただけで特に深い意味はないんじゃない?ねっ?ねっ?」

必死に説得する俺。

「そうですよ。同志クララ、同志タクマが私たちを裏切ることはありません。」

(さすがノンナ。頼りになるぜえ。・・・うん、でも君も谷間に腕を挟んでくるのね。)

「ですが、万が一という可能性も確かにあります。」

(何言ってるのおおお?万が一も億が一もないから!!信用して!!)

「なので今、この場で上書きをしましょう。」

ノンナがそう言うとき目を輝かせるクララ。

(上書き?なんのことだ?)「二人とも、上書きってな」

両頬に伝う柔らかな感触。右頬にノンナ、左頬にクララの唇が触れていた。

いよいよ俺の脳みそはキャパオーバーになり、そのまま俺は天を仰いで動かなく、いや動けなくなつた。

遠くでカチューシャがノンナとクララを呼ぶ声が聞こえた気がした。

「では同志タクマ カチューシャが呼んでいるので私たちは戻りま

す」

「整備ガンバってください。」

そう言つて走り去っていく二人。

その日、俺は後輩たちに発見されるまでずっと空を眺めたままだった。

翌日

昨日の出来事を頭の中でぐるぐると繰り返しては悶々とする、そんな状態で登校していると

「オハヨウゴザイマス、同志タクマ」

左手からクララーが姿を見せた。

「お、おはよう。」

昨日の今日なのできこちなくなる俺。

「今日も整備、オネガイしますね!!」

(ふむ。いつも通りのクララーだな。変に俺が自意識過剰だっただけか?なんにせよいつも通りに接してくれているのだから俺もいつも通りにならなくてはな!!)

「おう！任せとけ!!」

といつも通り元気よく答えてみせる。

「同志タクマ」

「んー？ なんだク・・・!!」

目の前を支配するクララーの顔、昨日と同じく伝わる柔らかな感触。ただし昨日と違ってそれは俺の唇に伝わっている。

「・・・フフツ。ロシアの挨拶です。」

ウインクを決めながらそう言うところそくさと校舎に入ってしまったクララー。

俺はまた飽きもせず空を見上げていた。すると後ろから声をかけられた。

「どうしましたか？同志タクマ」

(ノンナ!! 今の見られたか？ ヤバい!! いや別に見られてもまずくないのか？ いやまずいだろ色々)

「えー、うん。いや別になんでもな・・・!!!」

なんとなく気まぎれになり、うつむいていると細く白い両手が頬に当たられて唇を重ねられた。

「…………ロシアの挨拶です。」

(やっぱり見られてた!!)

そのまま校舎へ歩き出したノンナだったが、急に振り返りまた俺の元へ来る。

(なんだ、今度は何をされるんだ俺!!)

俺の肩に手を置き、身を乗り出し、俺の耳元でささやく。

「明日からは学校に来たら一番最初に私に会ってくださいね。」

それだけ言うと校舎へ駆けていくノンナ。

俺はもう空を見上げることもできず、ただただ耳まで赤くなった自分の顔を両手で隠すしかなかった。

日本の涼みかた

昼間の暑さが少しだけやわらぐ夕暮れどき

俺はいつもの戦車整備を終えて寮へ帰るべく、教室に自分のバツクを取りに来ていた。

机の横のフックに引つかかっているバツクを取り、廊下に出ると数メートル先に見慣れた3人が見えた。

向こうもこちらに気づいたようで軽く手を振ってくる。

「タクマ!! ちょうどいいところにいたわね!! どうせこの後暇でしょ? ちよつと付き合いなさいよ!」

いつも通りの高飛車なカチューシャの声が響く。今日はノンナに肩車されていないようだ。

「みんなと一緒にホラー映画でも見て涼もうかと思っていたところなんです、ほら」

そう言うのとレンタルビデオ店の青い袋からDVDケースを見せてくるノンナ。

タイトルを見ると、髪の毛長い女がテレビから出てくるあの有名ホラー映画だった。

「これが日本の涼みかただと聞きました。すごく楽しみです。」

「そうよ! このカチューシャが直々に日本の文化を教えてあげるわ!」

日本の文化と呼ぶ程のものだろうか。

あと、ワクワクしている様子で答えてくるクララを見てると少し不安になる。

この後、ホラー映画を見るということをわかっているのだろうか。

カチューシャの言うとおり、特にこの後の予定もなかったので俺は二つ返事で了承した。

映画は視聴覚室で見られるらしい。

まあ視聴覚室と言ってもカチューシャが私物化しており、ソファやテーブルさらには冷蔵庫まである。

いや、私物化しすぎだろ。いろいろと。

DVDプレーヤーをセットし、ディスクを入れてソファに腰を下ろす。

座っている順番は右からノンナ、カチューシャ、俺、クララだ。リモコンを持ち、再生ボタンを押すとプレーヤーからディスクの回る音が聞こえ、徐々にテレビに光が映り出した。

(・・・どうしてこんな状況になった。)

映画も終盤にさしかかりクライマックスを迎えようとしている頃俺は今、自分に置かれている状況が理解できていなかった。

当初はソファに4人で並んで座っていた。

だが今は違う。

それぞれの状況を説明しよう。

まずカチューシャだが俺の腹部に抱き着き、顔だけをテレビ画面に

向け、怖いシーンになると

小さな悲鳴を上げて俺の胸に顔をうずめてくる。・・・ホラー映画を見ている意味がないな。

続いてノンナ、映画には集中していて真剣な表情をテレビ画面に向けているが肩が震えている。

それをごまかす為なのか、俺の右手に自身の両手を重ねてたまに強く掴んでくる。

正直、結構痛い。

最後にクララ、こちらもノンナと変わらず画面に集中し俺の左手を強く掴んでいる。

あと、口が開いたままである。・・・日本の映画にハマってもらえて何よりだ。

とまあこんな感じでエンドロールが流れるまで身動きが取れぬままであった。

映画が終わりテレビ画面に光がなくなるとようやく俺の両手、腹部の3点が解放された。

「ま、まあ。なかなか面白かったんじゃないかしら？」

「迫力がありましたね。」

「日本のホラー映画、奥が深いです。」

3人が映画のコメントをしているなか、俺は解放された喜びから軽く伸びをし、ふと窓の外を見た。

もうグランドの様子がわからないほど真っ暗である。かなり遅い時刻のようだ。

「じゃあ、そろそろ帰ろうかなあつと。」

俺はそう言つてソファから立ち上がると

ガシッ

解放されたはずの3点に再び力が込められた。

腹部にカチューシャ、右手にノンナ、左手にクララ。

映画を見ていた時と変わらない状況が作り出された。

ただ唯一違うのはソファに座っているか座っていないかの差である。

(さつきから何なんだ？この状況)

無抵抗のまましていると腹に引っ付いてるカチューシャが声を震わせながら話しかけてきた。

「タ、タクマ。」

「何？」

「映画怖かったわよね？」

「あー。うん、そうだな。」

状況が状況なだけに正直、内容はあまり覚えていなかったのだが適当に答える。

「でしょー!!!もしかして怖くて夜も寝れないんじゃないかしら?しよ
うがないからこのカチューシャと一緒に寝てあげても「いや、それは
ないから大丈夫。」

言葉を遮って断ると先ほどまで見ていた映画の登場人物と同じ絶
望的な顔をするカチューシャ。

面白い。

「同志タクマ、オネガイです。怖いので今日は私の部屋で一緒に寝て
ください!!」

とんだ爆弾発言をかましてくるクララ。俺の左手を祈るような
形で握ってくる。しかも涙目で。

まあ正直でよろしい。そして俺もできることならそうしてあげた
い。

だが、

「女子寮に男が行くのは色々問題があると思うぞ。」

プラウダ高校は男子寮と女子寮で場所が違う。そして当然だが、女
子寮には男子、男子寮には女子の立ち入りが禁止である。仮にバレた
として女子なら厳重注意で済むかもしれないが男子だと退学もあり
える。それくらい厳しいのだ。

「同志タクマ、ではあなたの部屋に行きましょう。」

「!？」

クラーラよりも上の発言を投げつけてきたノンナ。嚴重注意くらい屁でもない?!

「ただけ怖がつてんだよ!! あつ、でも涙目で睨みつけてくるの可愛い。」

「ヤバい、何か目覚めそう。いやいや落ち着け俺。」

「俺の部屋でどうやって4人で寝るんだ? 部屋の広さは女子寮とそんなに変わらないだろう?」

現実的問題を指摘すると熟考しはじめるノンナ。そして何か思いついたようで顔を上げる。

「それでは本日は全員ここで寝ましょう。」

「いやいや、布団ないし。」

「布団ならこちらにあります。」

カチャ

そういつて視聴覚室の奥の扉を開けるノンナ。見ると確かに布団が数点、丁寧にたたまれていた。

「……なんであるの?」

「カチューシャがいつ、どこでもお昼寝が出来るよう全ての教室に常備してあります。」

「よくやったわ! ノンナ」

「さすがです! 同志ノンナ!」

「ありがとうございます。」

(忘れていた。ノンナがカチューシャ日記をつけるほどにカチューシャのことに関しては用意周到なのを。)

逃げ道を失った俺は大人しく提案に乗るしかなかった。

「はあー。」

ため息をつきながらソファに座ると目の前にノンナが来た。

「今日は暑いから汗をかいたと思います。こちらが着替えになります。」

そう言って体操服を差し出してきた。

(だからなんであるんだよ!!)

受け取りながら心のツツコミを声に出そうと思ったたらノンナはすぐ移動してしまった。

女子3人が布団があつた視聴覚室の奥の部屋の前に集まっていた。

「同志タクマ、私たちは今からこちらの部屋で着替えますので」

「フフツ、覗いちゃダメですよ。」

「覗いたら粛清よ!」

「覗かねーよ。」

カチューシヤの一言がなかったら「えー、いいじゃん。減るもんじゃないし。」

と言ったノリで返していただろうな。いや、その場合はノンナの視線が怖いな。

3人が着替えている間、DVDプレーヤーを片付けることにした。DVDを取り出し、ケースに入れ、プレーヤーとテレビを繋ぐ三色コードに手をかけたとき、

ガタツガタツ

カランコロン

外で大きな音が響いた。

恐らく外で強い風が吹いていて窓を叩いているのと、放置されていた空き缶が転がったのだろう。

(今日は風が騒がしいな。．．．なんてな。)

とある漫画のネタを思い出していると奥の部屋の扉が勢いよく開いた。

バンツ

「いやああああ!!タクマ!!アイツが!!アイツがくるわああ!!!」

「Страшные!!お願いします!助けてください!!」

「同志タクマ!!何故そんなにテレビに近いところにいるんですか!!あの女に引きずりこまれますよ!!ほら、離れて!!」

3人揃って奥の部屋から飛び出してきた。しかも下着姿で。

えっ?何でわかったって?だって映ってるんだもん。真つ暗なテレビ画面に反射された3人の姿が。

まず薄いピンクの下着を着たカチューシャが俺の背中に抱き着いてきた。

うん、たまにおんぶしてやる時と感触がまったく変わらないな!!

続いてクリーム色の下着のクララ。俺の左肩に手を置いてその上に自身の胸まで置いてきた。

すごい、胸ってあんなに形が変わるんだ!!

最後は純白の下着のノンナ。俺をテレビから引きはがそうとして右腕を引っ張ってくる。

あの人、大変ご立派な谷間に俺の腕が挟まっているんですけど。

大変おいしい状況で非常に名残惜しいのだが、このまま何もしないと冷静になった3人に

粛清されかねないので俺は言葉を発する。

「みんな・・・着替えは終わったんだよね?」

それは自分たちの状況を理解させるには充分すぎる一言だった。

3人はお互いの格好を見つめた後、顔を赤くさせそくさと奥の部屋に戻っていった。

俺は片づけを続けながら思った。テレビの反射の件がバレなくてよかったと。

着替えが終わり、体操服姿の3人が出てくると、どこことなく気まずい雰囲気が出る。

もうさっさと寝てしまおうという話になり布団を4つ敷いて全員横になる。

並び順は映画を見ていた時と同じで右からノンナ、カチューシャ、俺、クラーラだ。

ちなみに並び順はカチューシャの指定だ。俺がカチューシャとクラーラの間は無理やり割り込んだ訳じゃないぞ!!

さらにカチューシャの命令で、両手をお腹の上に置いているカチューシャに手が重なるようにノンナの左手、その上に俺の右手を置くこととなった。まったく、どんだけ怖がりだよ。

俺の左手を握ってくるクラーラは不問だ。だって正直で可愛いもの。

しかし不思議なものでこうして他の人と手を触れていると本当に心が温かくなる気がする。

そしてふと家族のことを思い出した。小さいころはこうやって手を繋いで川の字で寝たなあ。

「同志タクマ、どうしました？微笑んでいましたけど？」

「同志タクマ、すごく優しいカオ、してました。」

「ん？ いやあ、こうして寝てるとなんか家族みたいだなあつて。」

思わず思っていたことを口にしてしまった。

俺の発言で3人は固まっているようだが気にせず俺は続きを喋っ

てしまった。

「例えば・・・例えばだよ？俺が父親で・・・そうだなあ、ノンナが母親で

長女がクララ、次女がカチューシャだったらこんな感じなのかなあって」

そう発言して数秒沈黙が続いたがすぐに破られた。

「どうしてカチューシャが一番下なのよ!!お姉さんは私でしょ!!」

怒るところそこ!?

「私は子供なんですか?」

悲しそうに見つめてくるクララ。そんなに悲しむことかなあ？それよりも左手に凄い力を込められて痛いんですが。

助けを求めようとノンナを見ると顔を赤くしながら布団に潜ってしまった。

あれー?ノンナさーん、助けてよノンナさーん?

「でも黒髪の両親で子供が金髪なのはおかしいと思います。なので母親は私、

長女は同志ノンナ、次女はカチューシャ様が正しいです。」

クララのこの発言をうけて勢いよく布団から顔を出すノンナ

「いいえ、なにもおかしくありませんよ同志クララ。髪なんて染めればいいだけのことですから。」

「っていかどっちにしたってあたしが一番下じゃない!!」

3人ともわーわー きゃーきゃー自分の意見を言い出しはじめた。

(そういえば3人とももうホラー映画のことは忘れてるなあ。)

そんなことを思いながら俺はめんどくさいことを聞かれる前にこの日はもう寝たふりを決め込むことにした。重ねた手の体温を感じながら。

翌日 放課後

今日も今日とて暑い日が続く。

自販機で買ったスポーツドリンクの缶はすぐに飲み干してしまっ
た。

今は戦車道の練習が終わって整備の途中だ。

俺の後ろではカチューシャ、ノンナ、クララが地図を広げて次の
作戦で使う隊列について仲良く話し合っている。

昨日の夜に言い合いになっていたのが嘘のようだ。昨日見たホ
ラー映画のことも完全に忘れているのだろうか。

そんなことが頭の中をよぎり、あることを試しなくなってしまう
た。

これが間違いだった。

先ほど飲み干したスポーツドリンクの缶を目の前に置き、人差し指と親指で丸を作り、デコピンの要領ではじく。

一点に衝撃を受けた空き缶はわずかにへこみ、数十センチ飛んだあと地面に落ちる。

カランコロン

と音を立てて空き缶が転がると

ビクッ

と3人が寸分の狂いもなく同時に肩をあげた。

「ブフッ」

その様子を見た俺は噴出してしまった。

「空き缶の音の原因が俺だとわかると

俺の方を目を細くして無言で見つめ近づいてくる少女3人。

そんな目線には気づかず口元を手で押さえ、笑いをこらえる俺。

この後、ホラー映画よりもシベリア送り25ルーブルよりも恐ろしい粛清を3人から受けて

い。こんな真夏でも涼しい思いをすることになったのは言うまでもない。

正反対の告白

「風邪ひいて休みですって!？」

カチューシヤの声が戦車倉庫内に響く。

「え、ええ。今朝、具合が悪いから休むってメールが来まして。」

カチューシヤの威圧的な言い方に少し怯えながら整備班の1人が答える。

「まったく、タクマにも困ったものね。自分の体調管理もできないなんて。」

やれやれと言った感じで答えるカチューシヤ。だが

「そつたこと言ってたってカチューシヤ様が連日連戦で無理なスケジュールで練習試合組むから整備班の班長のタクマさんが毎晩徹夜するしかねぐなつたんじゃねだば。」

「そうだべえ。体調崩すのも無理はね。管理がちゃんとできてねのはどっちだか。」

アリーナ、ニーナから非難される。

「う、うるさいわね!! 悪かったとは少し思ってるわよ!! そ、それにあんた達整備班もいつまでもタクマに頼ってんじゃないわよ!!」

ちようどいい機会よ!! しばらくはタクマなしで整備しなさい。」

痛いところを突かれても何とか威厳を保とうとするカチユーシヤだが、そもそも誰も威厳があるとは思ってないので、いつものわがまま発言が出てきた、としか皆思っていない。

「・・・・・・・・」

カチユーシヤが騒ぐ後ろでノンナはただ黙って何かを深く考えている様子だった。

(やべえ、悪寒がやばすぎて布団から出れねえ。)

体の異変に気付いたのは朝だった。3徹くらいした深夜に倉庫で何も掛けずに寝てしまい、起きた時にはすでに体の震えが止まらずガタガタしながらどうにか学生寮の自分の部屋まで戻った。

整備班の後輩に休む旨をメールで伝え、布団に入ったがそれ以降、布団から出れないでいる。

そしてここからが大問題・・・腹が減った、のどが渴いた。だが動けん。

← 腹が減る。

← だが布団から出れないので料理もできない。

← 食べないから栄養が取れず治らない。

← この世からダスビダーニヤ。

早くも人生のフローチャートが見えてきた俺。

携帯で助けを呼ぼうにも布団から離れたテーブルに置いてしまった。大声も喉が痛くて出せない、詰んだ。

熱もあるせいか、短い人生だったなと早くも諦めモードに入ってしまった俺だが

コンコン と部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。

!!!
(!!!)

「同志タクマ、いますか？」

ノンナの声だった。

(ノンナ、来てくれたのか!!いるよ!!超いるよ!!)

「……ツ……」

声を出そうにも上手く出せない。喉が渴きすぎて何かへばりついているような感覚がする。

そもそも扉に鍵をかけてしまったので俺が布団を出ないと開けられない。詰んだ。

もう達観してしまつて無表情のまま天井を眺め、このまま迎えが来るのを待とうと思ひ目を閉じた。その瞬間

カチャリ、とサムターンが動き扉から光が差し込む。

「大丈夫ですか？同志タクマ。」

女神が降臨した。何か手にピッキング用の針金らしきものが見えたがそんなことはどうだっていい、彼女は紛うことなき俺の女神だ。

目線だけを彼女の方に向ける。するとノンナが近くに寄り、白く細い手が俺の額に置かれた。

「かなり熱いですね。」

彼女の手は冷たく、気持ちよかつた。あと女の子の手つて柔らかくてすべすべしてるのね。

「お水持つてきましたが飲みますか？」

ペットボトルを差し出してくるノンナだが、それを受け取ることが出来ない。寒すぎて布団から手すら出したくないのだ。

「・・・もしかして布団から出れないほど具合が悪いのですか？」

彼女の問いに対して返答が出来ないので、口を開けたまま待つことで肯定とした。

察してくれたノンナがペットボトルを開け、ゆっくりと水を口に注いでくれる。

渴ききつた体全体に水が浸透していくのを感じる。

「おかゆもつくってきましたよ。」

そう言っておかゆの入ったタツパーを見せて軽く笑うノンナ。

(聖母だ。ああ、もうマジでノンナ)

「結婚して欲しい。」

水分を取ったおかげだろうか。

声が出た。いや、出してしまった。

しまった!と思いつながらノンナの方を見た・・・が

「フフツ、はいはい。」

軽く受け流されてしまった。まるで心の声も聞こえていたかのよう。

安心半分、残念半分と複雑な気持ちでいると目の前に蓮華に乗ったおかゆが運ばれてきた。

「あーんしてください。」

素直に口を開けると少し熱くドロっとしたおかゆが入ってくる。すごく食べやすい。そしておいしい。

俺がおかゆを飲み込んだのを確認するとまた蓮華で運んできてくれるノンナ。5、6回これを繰り返した後だろうか、俺は涙を流してしまった。

「……何故、泣いているんですか。」

少し驚きつつも、いつもの声色で聞いてくるノンナ。

「嬉しくて……俺の為に……ご飯作ってくれて……食べさせてくれて……誰もこなくて……このまま……死ぬのかなって……思ってたから。」

泣きながらかすれた声で答える。

女の子の前で泣くのは情けないとは思ったが、どうしてもこぼれる液体は止められなかった。

目を閉じ隙間からいくつか雫がこぼれた頃、突然、唇に柔らかな感触が襲う。

見開くと眼前に広がる目を閉じたノンナの顔。

数秒、触れていただろうか。長い髪からシャンプーの香りを残しつつ、離れてノンナは言う。

「あなたが愛しすぎるのがいけないんです。……我慢できませんでした。」

(普通それは男のセリフじゃないだろうか。)

「……風邪、移るぞ。」

「ふふ。その時は責任、取ってくださいますか?」

「ああ。全力で取らして貰うよ。」

そう言いながらじーっとノンナ見つめていたら、顔を赤くしながら

そっぽを向いてしまった。…あなたも充分、愛おしすぎないでしょうか。

「そ、それにしても少し部屋が汚いですよ、同志タクマ。掃除しますね。」

何かごまかすように無理やり話題を変え、掃除をはじめたノンナ。床に散らばっている衣服や雑誌等を整理してくれる。

寮とはいえ男の一人暮らしとほぼ変わらないので部屋はどうしてもだらしなくなる。

「・・・同志タクマ。」

片づけをしているノンナの動きが急に止まり、名前を呼ばれる。声色も少し低い。

「このDVDはなんででしょうか?」

ノンナの手には様々なルートを駆使して手に入れたアダルトイローなDVDが数本。

(し、しまったー!!!むき出しで置いたままだった!!)

そう、男の一人暮らしとほぼ変わらない。故にこういうものはある。

そして誰も来ないだろうと思っていたからこそ隠していなかった。

「巨乳JKとピ————、清楚系お姉さんとピ————、黒髪ロングな子とピ————。…何故、このようなものを買ったんですか?」

(男にそういうこと聞いてくるう!?　　というかタイトル読まないで!!!)

目にハイライトが無いまま、近づいてくるノンナ。誰がどう見たって怒っているよ。

「正直に答えなさい。」

さつきまでの愛おしさはどこへやら。

風邪とはまったく違う意味の悪寒を感じながら、観念して答えることにした。

「その・・・ノンナに・・・似てるなって思って・・・買った。」

先程とは真逆の、なんて最低で遠回しな告白だろうと自分で思った。完全に嫌われた。

心配してわざわざご飯まで作ってくれた好きな女の子に対して何を言っているんだらう。ああ、情けない。

自分自身に腹が立っているとカチャーンと何かが落ちる音が聞こえた。

見ると先ほどのDVDが床に散らばっている。

「・・・・・・・・。」

顔を真っ赤にさせながら微動だにしないノンナがいる。真っ赤だが、怒っているという雰囲気は感じられない。そう思った直後、俺の耳元まで近づき囁く。

「言ってくだされば・・・私がお相手するのに。」

(・・・は？ 今、なんて言った？ 私が相手する・・・お相手するううう!?)

「ですから早く治してくださいね。あと、このDVDはもう不要ですよね？ 私が処分しておきます。いいですね？」

「・・・はい。」

「よろしい。では、ご飯も食べ終わったことですし寝ましょう。」

そう言ってノンナはいつもカチューシャに歌っている子守唄を歌ってくれた。俺の胸に手を置き、赤子をあやすように一定のリズムでトントンと叩いてくれるおまけつきで。

彼女の聖母のような笑みを見れなくなるのを惜しみつつ目を閉じ、五感を耳だけに集中させ、俺は意識を手放した。

数日後

「あっ。」

風邪の治った俺が登校している姿を見つけたカチューシャが声を

あげる。

「タ、タクマ。わ、悪かったわね、無茶なスケジュール組んだりして。」

珍しいこともあるものだ。あのカチューシャが謝ってきた。数日
いなかったのが堪えたか？

「あー、俺も悪かったよ。無理なら無理ってちゃんと言わなくてよ。
次からはきちんと意見するわ。」

「でしょー!!まったく、あんたのせいで私が悪者扱いされたんだから
!!」

そう言っつてプンスカと歩いて行ってしまった。まったく、調子に乗
るとすぐこれだ。

「同志タクマ。」

後ろから声をかけられる。

「ああ、ノンナか。おはよう。あの時は本当に助かった、ありがとう。」

礼を言い、頭を下げる。

「もう少し自身の体を大切にしてください。」

「善処するよ。・・・それでな、ノンナ。」

「はい。」

「その・・・今日、戦車道終わったら俺の部屋に来てもらえないかな、なんて。」

「わかりました。」

(即答かよ!!)

言い終わると俺の肩に手をかけて耳元で囁く。

「今夜はたっぷり可愛がってくださいね。」

その脳みそも溶けそうな甘い声にまた違った意味で震える俺だった。

吸血鬼と妖精

老若男女問わず、人、人の群れ。

そしてもう一つ、化け物、化け物、化け物の群れ。

本日プラウダ高校は文化祭であり、ハロウィンも近いとあって生徒全員が仮装して来校者を出迎えている。

もちろん俺も例に漏れず、安っぽい黒のマントと牙をつけて吸血鬼の仮装をして戦車道履修者達でやっている喫茶店の受付をしている。年代関係なく多くの人に来てもらって大盛況、受付作業をしながら横目で店の中を見るとスタッフ全員もせわしなく動いている。黒いバンドナを頭に巻きオレンジと黒の衣装を基調とした小悪魔風の衣装を着ているカチューシャがゆっくりとお茶を運ぼうとしているその後ろで、青っぽいロシアの民族衣装（何て言うんだろう？）を着たノンナがお茶をこぼしても大丈夫のようにスタンバっている。流石ノンナ、でもハロウィン関係あるのか？その格好。そんなことを頭の片隅に置きながら客を捌いていった。

「ふう〜。」

午前の営業が終わり、午後の営業が始まるまで各自休憩となったので椅子に座り伸びをしていた。生徒全員が仮装しているというのが結構受けたらしく予想以上の売り上げを午前中で叩き出したとのことだ。ただその反面、午後も残っているのに疲労を隠しきれないものが何名かいるようだ。両手を頭の後ろで組みながらそんな感想

を思っていると目の前でカチャンと音がした。

「お疲れ様です、同志タクマ。」

目の前に妖精が現れた。いや、疲れて頭がおかしくなってるのかそういうのではなく、金髪碧眼の見知った顔の青い羽根を背中につけた妖精が現れたのだ。しかしすぐに湯気がその顔を少し隠してしまった。下を見ると紅茶とジャムが用意されていた。

「ありがとう、クラーラ。……にしても今日の紅茶はいつもより赤くないか？」

いつも用意してくれる紅茶も濃いものなので結構赤いのだが今日のはカップの底が透けて見えない程に赤かった。

「同志タクマは今日は吸血鬼ですのでいつもより赤くしてみました。」

「ははっ。なるほど、血のイメージか。」

軽く笑い紅茶を少し飲み、ジャムのついたスプーンを口に含む。濃い紅茶であるがジャムの酸味がうまい具合に中和してくれる。この飲み方もすっかり癖になってしまった。最初は飲み方がわからずにジャムのついたスプーンをそのまま紅茶の中に入れ、かき混ぜてたらカチューシャの罵声が飛んできたっけ。

懐かしい記憶を思い出しながらリラックスしていると先ほど俺の目の前に座り、自分の分の紅茶も入れたクラーラがクスクスと笑いだした。

「? どうした? クラーラ。」

「同志タクマ、ほっぺにジャムがついてます。」

「えっ？嘘！？ 恥ずかしい!!」

どこについてるのか探るため、両頬に手を添えようとしたが

「Приятного аппетита。」

クララの突然発したロシア語に動きが止まってしまった。俺の頭の上の？マークが見えたようでクララは説明してくれる。

「日本語の『いただきます』の意味に近いロシア語です。」

「へえ〜そうなんだ。・・・でも何で今、その言葉を」

刹那、頬に伝わるぬめり。クララの長いまつ毛が眼前にある。舌を出したクララがそれを口に戻す瞬間、その上に微量の赤いジャムが見えた。

「Спасибо, было очень вкусно...これは日本語の『ごちそうさま』の意味に近いロシア語です。」

そう言って何事もなかったかのように紅茶を飲むクララ。そして俺の使ったスプーンでジャムをよそい、そのまま口に含んだ。優雅に紅茶を楽しむクララとは対照的に俺は紅茶の色よりも濃くなつた顔をテーブルに突っ伏して隠していた。休憩時間が終わるギリギリまで。

どうにか平常心を取り戻し午後の作業に励んで数時間経った頃、受付の接客中の俺に声が割って入る。

「同志タクマ。ご指名です。」

「はっ？」

日本語なのにノンナの言葉がわからず、素っ頓狂な声が出てしまった。

「行けばわかるわよ!!受付はこの偉大なるカチューシャ様が代わりにやってあげるから感謝しなさい。」

飲み物運ぶのに飽きてきただけだと思いが色々と面倒くさいことになるから言わない。

「はいはい。じゃあ2人とも受付頼んだぞ。」

そう言い残して喫茶店の中に入っていく。入るとすぐに女子スタッフの1人が俺を見るなり手招きをしたのでそちらに向かうと若い女性のお客さんが3名いた。

「すみません、一緒に写真を撮ってもらえませんか？」

話を聞くと吸血鬼の格好をした俺と記念写真を撮りたいらしい。それも首に噛みついていてというポーズの指定つきで。吸血鬼マニ

アなのだろうか？ お客さんである以上、無下には断れないので了承するしかなかった。

「じゃあここら辺の首筋に噛みついてる感じでしょうか。」

そう言ってお客さんが長い髪をまとめて首筋を指差す。突然見えなくなじに少しドキツとしたが平常心を保ち、口を大きく開け、顔を傾けてカメラに牙が映るようにして首筋ギリギリまで近づける。体勢と表情をキープさせながら写真を数枚撮り、無事に終わった。

「ありがとうございました!!」

お礼を言うお客さんを見送り、さあ受付に戻ろうとした時に後ろから声がかかる。

「すみませーん。私たちもいいですか？」

「あつ、私たちも!!」

「えっ？写真撮れるの？じゃあ私たちもお願いします。」

……嘘だろ？

結局、午後の残りの時間は全て写真撮影に費やされてしまった。吸血鬼ってこんなに人気なの？

人も化け物も少なくなった放課後。黄昏の陽で照らされるテーブルの上を拭いていると小さなウチの暴君が寝息を立てていることに気づいた。

「あーあ、気持ちよさそうに寝ちゃって。」

「無理もありません。慣れない環境と仕事で疲れたのでしよう。」

「いいぞ、ノンナ。あとの片づけやっておくからカチューシャをベッドに運んでこいよ。」

「すみません。同志タクマ、助かります。」

優しい笑みを浮かべながら静かにカチューシャを抱っこするノンナ。教室に入ってくるオレンジの陽も相まってすごく穏やかな気持ちになる。ノンナの背中を見送り、再びテーブルを拭き始めた。

数十分経ち、片づけも終わり日も落ちた頃、再び青い妖精がひよっこり顔を出した。ただし後ろの羽は外したようである。

「おお!! クララー。どうした? 片づけは終わったぞ。」

「へえくそうですか。」

何やら口を尖らせてアヒル口で答えてくる。機嫌が悪そうだ。

「どうしたんだよ? らしくないぞ。」

「同志タクマはずいぶんとモテるんですね。」

・・・記念撮影の件のことを言っているのか？

「あれはただ吸血鬼の仮装が人気だったただけだよ。」

「Нет。」

すぐ否定された。

どう言えば納得してくれるのだろうかと腕を組んでいるとクララーが椅子を指差した。

「同志タクマ、それは何でしょうか。」

椅子には俺が着ていた安物の黒いマントが掛けられていた。文化祭が終わったのでいつまでも着ている意味もないので外したのだ。

「俺の衣装だけだ。」

言い終わると同時にマントを手に取り、羽織ったクララーはこう言った。

「自覚がない人にはお仕置きです。 Приятного аппетита。」

数時間前に聞いた気がするロシア語。その後どうなったかを思い出した俺だが時すでに遅し。

カプツ。

「いっ!!」

首筋に伝わる若干の痛み。歯と歯で肉を挟まれているが噛まれてはいない。甘噛みというやつだ。クララーの唇が押し付けられてその柔らかさと温度が少しずつ首筋に伝わってくる。10秒ほどこの状態だったろうか。ゆつくりと歯を緩めて離れていくクララー。

「Спасибо, было очень вкусно。」

悪戯っぽく笑いマントを外すクララー。そして首筋を押さえ鼓動が早くなっている俺に羽織わせる。

「吸血鬼が金髪の若い女性を狙うのは定番ですよ？ 同志・・・いや吸血鬼タクマ。」

長い金髪をかき上げて首筋を見せてくるクララー。ここまで言われたら退けない。

「Приятного аппетита。」

そう言って俺はクララに少し近づくと。

満月の夜、吸血鬼は大きく口を開け、金髪の美女のその首筋に噛みついた。

至れり尽くせり

(やっちまった。)

青く綺麗な空気が漂ってそんな冬の早朝、俺は学校の机に突っ伏してその身を重力の奴隷としていた。木製の表面が全力疾走で駆け抜けて火照った体を冷ましてくれる。額を冷やしながら今朝の事を思い出す。まあよくある話だ、部屋にある時計を見て遅刻したと思っただけから電池が切れて止まっていただけだった。そしてそれに気づかず学校まで全力で来てしまった。教室に誰もいないことに違和感を覚え、ふと壁に設置してある時計を見たら時刻は8時前。惰眠を貪れなかつた後悔の深いため息をつきながら自分の席に座り、ブレザーを脱いで椅子に掛け、今に至る。もう一度ここで眠ればいいと思うかもしれないが一度ハッキリと起きてしまふとなかなか眠れない性分なのである。じゃあ勉強でもするかと思うほど優等生でもない。結局、足をブラブラと動かし時間が過ぎるのを待つだけしか出来ないのである。

無心に足を動かしてどれくらい経っただろうか。コツコツと足音が廊下に響いてきた。誰かが来たようだ。

「あれ？ 同志タクマ？」

教室の扉からひよつこりと金髪碧眼の美少女が現れた。突っ伏していた体を起こし、軽く手を挙げ返事をする。

「おはよう。クララー。」

「Доброе утро. 同志タクマ。ずいぶん早いですね。」

「ああ、それは……」

俺は今朝の失敗談をクララに話しはじめた。

「……と言うわけ。」

「なるほど……だから制服のボタンが掛け間違っているのですね。」

「えっ？」

すぐに自分の体を見て制服の赤いシャツを確認する。上から1つ1つボタンを数えていくと確かに途中で相方のいないボタン穴があった。恥ずかしいという思いがこみ上げてくるかと思ったが今朝からの失敗続きで、もうどうでもいいという思いの方が勝つたようだ。全体重を椅子の背もたれに預け、脱力して天井を見つめて今日は厄日だなと考えているとシャツの胸辺りが少し引っ張られた。見るとクララが俺のシャツのボタンを下から全部外して掛け間違った所からもう一度正しくボタンを掛けていた。

「しようがないですね〜同志タクマは。」

頬を緩ませながら俺に顔を近づけてボタンを丁寧に掛けてくれるクララ。長い前髪が揺れて俺の鼻を掠る度、恐らく彼女の使用しているシャンプーの香りが鼻腔を突き抜けてくる。朝、全力疾走した時と同じ鼓動の早さになりながらその白い顔を見つめるとスツと手が離れた。

「出来ました!」

「あ、ありがとう。助かったよ。」

「いえいえ。それより同志タクマ、髪の毛がだいぶはねていますが。」

なんたる失態!! そういえば今朝は鏡なんて見ずに飛び出したんだった。もういつそ今日は帰って出直そうかな。うん、そうしよう。

「同志タクマ。」

席から立ち上がろうとしたところをクララーに声を掛けられた。何やら自身の鞆に両手を入れてガサゴソとさせると櫛と霧吹きスプレー容器が出てきた。容器には寝癖直しウオーターとの文字が。櫛と容器を交互に見つめ、そしてクララーと目が合う。ムフーと鼻息を飛ばしながらドヤ顔に近い表情で綺麗な碧眼をさらにキラキラさせている。……皆まで言うな、もうわかったから。女子力高いね。あと女子の持ち物は万国共通なのかね。

「……お願いします。」

「Da!!」

元気よく返事をする俺の後ろに回り込んできた。流石にここまでしてもらうのは色々と恥ずかしいと思ったが、あんな目を見てしまったら断れない。もう彼女にすべてを任せよう。

「同志タクマ、頭をこっちに寄せてください。」

頭を掴まれてグイツと後ろに引っ張られる。するとプニユと非常に柔らかい感触が後頭部を伝う。これは……どう考えてもあの大きいお山2つのものだよな。一応確認しようと思いき首を動かそうとするが

「動いちゃだめです。」

柔らかい声が聞こえたがそれとは正反対に固くガツチリと頭を両手でホルルドされた。そのせいで確認は出来なかったが確証は得た。俺の後頭部に合わせて形を変えているコレはやっぱりアレだ。だがわかったところでどうすることも出来ない。

霧状になった水分が舞い、優しい手つきで髪が梳かされていく。後ろの方が整い、今度は前髪部分へ。すると必然的に密着率も高くなるわけで・・・座っているのだが別の部分がお座りしていられそうになるのでもうきつい。

「終わりました。」

耐えた。耐えたぞ俺は!!みんな褒めてくれ!!・・・思わず立ち上がってガッツポーズを決める俺。

「ありがとうクララー。助かったよ・・・色々。」

「どういたしまして。では同志タクマ、次は私の番ですね。」

「へっ?。」

櫛と霧吹きを手渡し、先程まで俺が座っていた椅子にちよこんと座るクララー。

「お願いしますね!。」

お願いされてしまった。目の前を流れる綺麗な金色の髪を見つめる。俺に触れと言うのか、あの良い香りが駆け抜けてきた髪を。無理だ、こんなにサラサラと櫛が通る髪に・・・って触ってたああああ

!!!

「フフツ、くすぐったいです。」

どう反応していいかわからず無言のまま震える手でひたすらクララの髪を梳かすが、これどこでやめたらいいんだ？ やめ時がわからない。いやそもそも俺の心臓が1分が限界と言ってきている。授業の終わりがなかなかこないような感覚で1分が過ぎ、俺は手を止めた。

「お、終わったぞ。」

「ありがとうございます。あの・・・同志タクマ？」

「ん？ どうした？」

「頭、なでなでしてもらっていいですか？」

「え？」

霧吹きと櫛を落としそうになった。せっかく整えた髪をグシヤグシヤにする行為をなぜ求める。

「その・・・髪を梳かしてもらっていたら撫でてでも欲しくなっちゃいました。」

ああそうなんだ。うん、でも君の綺麗な髪に俺の手が触れるというのがもう耐えられな・・・

「ダメですか？」

ぬおおおお。椅子に座りながらの上目遣いだとおおお？ それ

こそダメだろおお！ 反則もいいところだ。また断れないよ。

完全に逃げ道がなくなつた俺はクララーの頭に手を置き、ゆっくりと左右に動かす。

「フフフッ。」

どこかくすぐつたそうに目を細め、俺を見つめ微笑んでくる。まるで等身大の人形を愛でている錯覚に陥るのは彼女の顔立ちと肌の透明度のせいだろう。背徳感がヤバいのもう本当に勘弁してほしい。

「ありがとうございます。」

どうやら満足してくれたようでニコニコしながら自分の席に戻っていったクララー。ようやく心臓が平穏を取り戻し落ち着きはじめた。窓からグラランドを見ると人の姿がポツリポツリとある。学校が日常を開始したんだなと思いつつながら俺も自分の日常を開始すべく1限の準備を始めた。

クラスでの日常が終わり、整備士の日常が始まって数時間。今日の戦車道の練習はなかなかの激戦だったらしい。至る所の損傷が激しく、こちらもなかなかの激務に追われている。修理車両が残すところ1台となつたところで夜も遅いので他の奴らは全員帰らせて今は1人で作業中である。

「お疲れ様です。同志タクマ。」

「うおっ!？」

1人だと思っていたところに急に声を掛けられた。振り返るとノ

ンナが缶コーヒ―を持って微笑んでいた。あー尊い。

「お疲れ、ノンナ。」

胸元まで手を挙げ、軽く振って挨拶を交わす。すると彼女の表情が一変した。

「!! タクマ!! 手が・・・」

「え?」

いつもつける「同志」が無いことに違和感を覚えながら自分の手を見てみると白い手袋の人差し指部分の先端が、何回も赤色を重ね塗りしてドス黒くなったような色で滲んでいた。

「うわっ!!」

急いで手袋を外してみると指の先端からゆっくりと赤い小さな雫が出来てポツリと床に落ちた。恐らく整備中に切ったのだろう。だが冬の寒さもあつて手がかじかみ、ほぼ感覚が無い状態に近かったのが気がつかなかった。しかし出血は多いが傷は深くないようだ。

「あー、まあ大丈夫だ・・・うええええ!? ノ、ノンナ!？」

彼女を安心させようと大丈夫だよと言おうとしたがそれが出来なかった。何故なら彼女が俺の指を啜えたからだ。寒さで感覚を無くした手の一部分に突如加わる熱。チュ、チュという音と共に彼女の唾液が指先に絡みつく。

「ノンナ!! 血で汚いから離せ!! 汚いから!!」

俺の問いかけには一切答えず、指を離そうとはしない。やがて聞こえてきたのはゴクリという音。そして彼女の喉元が動くのが見えた。ようやく口を開けて離してくれた俺の指と彼女の舌には銀色の糸が細く結ばれていた。

彼女の行動に呆気にとられていると今度は反対の手を掴まれ、

「行きますよ。」

一言だけそう話すとズンズンと歩き出した。何も言えないまましばらく歩くと保健室に連れて行かれ、ベッドに座らせられた。

「手を出してください。」

消毒液や絆創膏を用意した彼女が優しく手当を始める。

「よくみるとあかぎれもひどいですね。」

自分の手を見ると赤い線がいくつか入っている。プラウダの学園艦の冬は寒く乾燥していることが多いのでどうしても整備士としてはパツクリ切れてしまうことが多い。まあ、この程度は慣れっこだ。

少し悲しげな表情で俺の手を見ていた彼女だが、自分の鞆からハンドクリームを取り出してこれまた優しい手つきで俺の手に練り込みはじめた。

「悪いな、ノンナの私物使わせちゃって。」

「いえ・・・同志タクマ、前に『もう少し自身の体を大切にしてください』と言ったのを覚えていますか?」

前に風邪ひいて看病してもらって治った時に言われた言葉だな。・・・今の俺のこの状態じゃあ彼女との約束を守っているとは到

底言えない。

「ああ。ごめんノンナ。また心配させちゃって。次こそは必ず。．．．
それでなノンナ。ノンナも自分の体を大切にしてほしい。」

「私ですか？」

「ああ。大学選抜との戦いで結構無茶しただろ？」

カチューシャを逃がすために敵部隊に突っ込んでいったノンナ。いくら戦車道が安全だとはいえモニター越しに見ていて心臓が止まるかと思った。

「私はいいんです。」

「．．．わがままだな。」

「そうです。わがままなんです。」

自分が傷つくのはいいけど他人はダメ。優しい彼女故のわがままだろう。だからこそ整備という影の部分で少し無茶しても支えたいという俺のわがままもあるのだが．．．難しいなあ。

「同志タクマ．．．今日の朝、クララーの髪を梳かしていましたよね？」

何故突然その話題に？　っていうか見られてたのか!!

「私はわがままですから．．．その姿を見て．．．その．．．私もあなたに触れて欲しいと思ってしまいました。」

俺の手を取り、自分の頬にくっつけてくるノンナ。彼女の柔肌が俺の手にピッタリと吸い付く。

「……………」

彼女の潤んだ目が俺を離さない。お互いに無言のまま、見つめ合っていた。しばらくしてノンナが動いた。

「唇も乾燥して切れていますね。」

そう言うと彼女の唾液交じりの舌が俺の唇に潤いを与え始めた。彼女のすべてを受け入れつつ、俺は彼女の髪へ手を伸ばし手櫛で黒く綺麗な髪を梳かしはじめた。んっ と声漏れたがお互いに行為をやめる様子はない。どれぐらい貪っていただろうか。互いに息が上がり始めてようやく唇が離れた。両手で彼女の頬を掴みながら俺は最後の確認をする。

「ノンナ…………俺…………もう。」

「いいですよ…………きて…………ください。」

俺は彼女をベッドに押し倒した。

サンタクロースが死んだ朝

スリープモードだった体が本能的に目を覚ます。目の前を泳ぐ白い物体は風に流され目視でわかるくらいに早く移動していた。寝ていた時より風が強くなり肌寒くなってきたようだ。身を起こそうとした時、腹部に重みがあるのがわかり目線を下に向けて確認すると金髪の小さな体躯の少女が手を組んで寝ている。今この時間、昼食後のお昼寝という偉大なシステムを生み出したカチューシャだ。彼女が起きるまで午後の授業は始まらない。おかげで下校の時間が遅くなりがちだが、お昼寝大好きな俺にとってはありがたすぎるシステムだった。カチューシャ様、ありがたやありがたや。．．．と拜んでいる場合じゃなかった。なんでカチューシャが俺の腹を枕代わりに？という疑問は少し考えればわかった。いつもノンナの膝枕か室内のベッドで寝ている彼女だ、今日は外で寝るつもりだったが恐らくノンナが何か用事で一緒に来れなかったのだろう。「後で行きます。」とかノンナに言われ一人で寝床を探しに来たところちようど枕代わりになる俺が寝ていた、そして現在に至ると。こんなところだろう。しかしそうだとするとノンナの姿が見えないのが気になる。

「カチューシャと二人きりでお昼寝とはいいいご身分ですね、同志タクマ。」

突如、カチャリという音と共に額に伝わる金属の冷たい感触。そこに焦点を合わせる。これは．．．マ・カ・ロ・フ？ マカロフだー！！！！

綺麗な目から光が消えたノンナが俺にマカロフを突き付けて立っていた。ノンナはカチューシャの事になると誰であろうと見境なく粛清する。たとえ俺が相手であろうとも。何か弁解をしようと思案

するが・・・その・・・ノンナは今立っている状態で俺は寝そべっている状態なのだ。彼女は制服でスカートだ・・・つまり・・・見えている。

「・・・白。」

なんでこんな事言ってしまったのか、俺自身わからない。ただこれは事実。

俺の発言を聞いたノンナはすぐにスカートを抑えた。ブリザードの両頬に赤が灯る。普段見れない彼女に表情に可愛いなあと思っていると涙目で睨まれ、再び額にマカロフが突き付けられ

「До свидания」

そして銃声が数発響いた。マカロフで撃たれたのに何故かデザートイーグル、ロケットランチャー、対戦車ライフル、IS―2で撃たれ、C4特攻されて降り際にグレネードと熱々のボルシチを投げつけられた気分になった。

・・・良い子の皆、例え本物でもモデルガンでも自己防衛以外で人に銃口を向けちゃいけないぜ。俺ちゃんとの約束だ。

「ヨシヨシ、同志タクマ。」

「ううっ・・・クララー優しい。」

今の俺の状況は銃声を聞きつけてやってきたクララーに膝枕されている状態だ。対してノンナは俺たちの隣でカチューシャを膝枕してそつと優しく頭を撫でている。それを見たクララーが俺の額をさすりはじめた。マジ女神、クララー。俺は思わず膝枕されている状態のまま彼女の背中に手を伸ばして抱きしめてしまった。

「フフツ、甘えん坊ですな同志タクマは。」

「とぼっちりを受けたんだ、甘えたくもなるさ。」

先程、ノンナには先に俺が寝ているところにカチューシャが来たことを説明した。彼女はばつが悪そうな顔をしながらも俺の言葉を無視している。・・・別にいいもん。クララーと仲良くするだけだもん。そう思っていると突然クララーに手首を掴まれどこかへ移動される。ポヨンと柔らかい感触と共に止まり

「大丈夫ですか？ 揉みますか？」

という質問が投げられた。・・・揉む？ 揉むってまさかこの幸せな感触は!!!

「・・・クララーこれは？」

「落ち込んでいる男性にはこれをするといいとSNSで見ました。」

色々と間違っているぞ、クララー!!!そしてSNSの野郎ども!!!ありがとう!!

しかしそう思ったのもつかの間、後ろからまたもやカチャリと音が

聞こえる。

「同志タクマ!!少しでもその手に力が入った時は撃ちます!!」

やっぱりSNSの野郎どものバカヤロオオオ!!!

「そういえば先ほど、貴方は寝言で『シャロン』と言っていましたね…誰ですか? シャロンって。」

「ええええっ!?!」

急に本人もびつくりな情報が入ってきた。「寝言に対してそんな追及されても答えようがない。」そう答えようとしたが幸せな感触の近くの手首に力が込められる。

「同志タクマ、答えてください。」

見上げるとたわわな果実が2つしか見えなかったが、顔を傾けてきて後ろに黒いオーラを漂わせて問いかけてくるクラーラの笑顔が見えた。あつ、コレはさっきの答えじゃ納得してくれないやつだ。となれば原因を探らなくてはいけない。俺が何故その寝言を言ったのかを。しかし俺には「シャロン」という人物の知り合いはいない。となれば人名ではなく、別の何か。シャロンシャロンシャロンシャロンシャロン。あつ!!

心の中で何回か叫んで謎が解けた。なんてことはない、寝る前に聞いていた曲名だ。プラウダのイメージカラー “赤” を意味するバンド名の名曲…残念ながらイタリア語でだけ。胸ポケットに入っている音楽再生機器がその曲で止まっているからそれを見せれば納得してもらえるかな?

「えつと・・・イタリア語で赤を意味す「イタリア!? まさかアンツイオの生徒ですか!?!」

話しを最後まで聞かないでクララーが俺の手首にさらに力を込める。

「イテテテテテツ!!」

痛みに耐えきれなくなり思わず

「あつ!・・・んっ・・・。」

揉んでしまった。クララーの喘ぎ声が響き数秒、時間が止まる。ハツとしてノンナを見るとトリガーに手をかけていた。

「うわああああ!!待って待ってノンナ!!」

もう片方の手を伸ばしてマカロフを取ろうとしたが・・・

むにゆり

「ひゃうっ!!」

咄嗟に出た手のスピードは勢いがつきすぎてマカロフの横を通り過ぎて彼女の胸を鷲掴みにしていた。普段の彼女からは考えられない声が出て、俺の両手は幸せな温かさで感触で包まれた。そして同時にこの先の展開はもう知っている。

(この世からダスビダーニヤ。)

心の中でそうつぶやくと銃声が聞こえ意識が飛んだ。撃たれた勢いで胸ポケットから音楽再生機器が飛び出し、地面に落ちると名曲が再生された。

「……そういうことですか。」

誤解は一応解けたようである。

「ふあくよく寝た。なんか銃声が聞こえた気がするけど。」

「おはようございます、カチューシャ様。」

「あれ？ ノンナ？ 確かタクマのところで寝てたと思うんだけど？」

「きつと夢ですよ。タクマはあそこで寝ています。」

「……なんでうつ伏せで死んだみたいな格好になってるの？」

「きつと寝相が悪いんですよ。カチューシャ様。」

「そうなの？……あっ!!コレ!!私が欲しかった音楽再生機器!!……まさかサンタが来たのかしら?」

「クリスマスはもう過ぎていますが?」

それよりもサンタを信じているのですか?と言おうとしたがそつと言葉をしまい、今日のカチューシャ日記に『カチューシャはサンタを信じている』と書こうと決めたノンナだった。

「きつと遅刻したのよ!! でも私のところだけ遅刻するなんて許せないわ! いつか粛清してやるわ。」

「それでしたらもう大丈夫かと。」

「?・・・まあいいわ。カチューシャが起きたから午後の授業を始めるわよ!! この様子だとタクマも遅刻ね。粛清対象だけど時間が惜しいから放つといて行くわよ、ノンナ、クララー!!」

「Da!!」

3つの足音が歩き出す音が聞こえ、遠くなっていく。・・・と思ったら急にまた近くなってきて俺の耳元で止まった。

「また今度、続きをしましょうね。」

クララーのさささやきが聞こえてきた。・・・えっ? 続き? 続きしていいの?」

反対側の耳からも聞こえる。

「揉むのなら2人だけの時にしてください。」

ノンナの声だ。・・・2人だけの時ならいいの? ねえ? ねえ?

そう聞き返したかったがうつ伏せになったまま動けず、再び遠ざかっていく足音を聞きながら起き上がることを諦め死んだように再び寝ることにした、クリスマスが過ぎたある冬の出来事である。

ノンナ日記（一部抜粋）

4月×日

本日、俺はプラウダ高校の整備科に入学した。親元を離れ、妹や弟の騒がしい声が聞こえない寮での生活の寂しさを紛らわす為にこの日記を書くことにする。日記と言っても毎日書くわけじゃない。気が向いた時だけ。

それでも三日坊主（と言っているのか）になりそうな気がするが、気楽に書いてみようと思う。

4月○日

今日は自分達が整備する戦車に乗っている戦車道履修者との顔合わせがあった。

そこで出会った印象深い2人に出会った。

俺と同じく1年生らしいのだが1人は金髪で身長があまりにも低すぎるし「あんたが私の戦車整備担当？　なんか冴えない男ね。整備の腕も冴えなかったらすぐに代えてもらうから!!」と高飛車な態度。

もう1人は黒髪ロングの俺より背の高い美少女で、よし！俺ツイてる！と思っただが「あなたが担当整備士ですか。殿方には特に興味ありませんので整備以外では特に話しかけないでください。．．あと、カチューシャには手を出さないように。」とのこと。

とりあえず苦笑いしながら自分の名を告げるとそれぞれ、カチューシャ、ノンナと名乗ってくれた。入学そうそう、この2人の整備士としてやっていけるのか不安になった。とりあえず今日は寝ることにする。

△月×日

あの2人と特に必要以上なことを喋ることもなく数ヶ月が過ぎようとしていた今日の夜、整備を終えて寮に戻る途中の道に分厚い本らしき物が落ちているのを俺は見つけてしまった。

しゃがみ込んでそれを手に取り、光量の少ない学校設備のライトを

頼りに表紙を見てみると「カチューシャ日記」という文字が。数ページめくってみるとどうやらあの小さい金髪少女の1日の行動について書いてあるようだった。

更にページをめくろうとすると「ガチャ」という音と共に頭部に冷たく重たい感触、そして同等の音が耳元で伝う。「今見た内容を忘れてすぐその本を渡しなさい。」そんなことを言われた気がする。

両手をハンズアップして本を後ろにやると勢いよく奪われ、急いでページをめくる音が聞こえる。ゆっくりと振り返るとノンナがいた。日記を凝視していた彼女だが俺と目が合うと片手に持っていたマカロフを向けられた。

どうやら先程は頭にあんな恐ろしいものを突き付けられていたらしい。必死にカチューシャ日記を抱えながら彼女は言う。「このことは他言無用です。もし破つたら・・・。」トリガーに力がこめられる。必死でコクコクと頷いたがその後、彼女に何度も念を押され、寮に戻ったのは深夜過ぎだった。

×月□日

本日は戦車道をやっている彼女たちを見ていた。練習が終わり各々が戦車倉庫に戦車を戻しているなか、俺の隣からカシヤカシヤという音が聞こえてくる。見るとノンナがキューポラから顔を出しているカチューシャをカメラで撮っていた。

その眼差しには愛情と殺気が入り混じってる気がした。時折微笑む彼女の姿を見て、思わず声をかけてしまった。一緒にいるところを撮ってやろうか、と。

しばらく俺とカメラを交互に見た後、「お願いします。」と無表情、いや少し照れた様子・・・だったと思う。ゆっくりとカメラを差し出された。

カメラを受け取り、カチューシャとノンナが2人で談笑しているところをいくつか写真を撮っていると途中でカチューシャに気づかれ「何撮ってるのよー」と言われたが、偉大なるカチューシャの日々を記

録している

そう言ったら「そ、そう。じゃ、じゃあ仕方ないわね。特別に許してあげる」とのこと。何となくこの二人の扱い方がわかってきた。

何枚か彼女たちを撮り、カメラをノンナに返そうとしたら「貸しますので明日以降も撮ってください。」と耳元で囁かれ、少し笑ったの彼女の顔を見た。その笑顔にやられ、おう と答えてしまった。単純だな俺。

4月×日

カチューシャとノンナを撮る日々が当たり前になり、彼女たちとの雑談も増えた今日この頃、いつの間にか2年生に進級し本日は身体測定だった。俺はここ1年でかなり背が伸び、俺よりも背が高かったノンナも少し見下ろすくらいになった。

ノンナもそれに気づいたらしく「ずいぶんと背が伸びましたね。」と微笑みんで俺の隣に立ち、頭をコツンと俺の肩に預けてきた。こういったスキンシップも最近多くなった気がする。

ノンナは身長は昨年と変わっていないが、その・・・もともと大きかった女性らしい部分がさらに大きくなった気がする。見下ろすことが出来るようになった分、どうしてもそちらに目がいつてしまう。情けない。

ちなみにカチューシャは去年と全く変わってなかった。

4月△日

本日から通常授業だが前日が整備で徹夜だったので午前中は学校をサボり、昼から登校していると金髪長身の外国人がキョロキョロとあたりを見回していた。

ウチの制服を着ている・・・ということはウチの生徒なんだろう。そういえば留学生が来るって噂になっていたかと思いつながら何か困っ

ていそうだったのでとりあえず近づいていった、が外国語わからんよ俺。

あ、あれかな？ちようどお昼だから食堂行きたいのかな？と思いつながら彼女の前でご飯を食べるジエスチャーを試してみた。すると彼女の表情が明るくなり、コクコクと頷いた。

安堵しながら彼女を食堂まで案内するとえらく懐かれ、俺の隣に引っ付きながらご飯を食べ始めた。俺も悪い気はしないなと思いつながらご飯を食べているとガシヤンとおぼんを置く音が・・・目の前にはノンナ。

いつの間にかつけられた2つ名『ブリザードのノンナ』まさにその表情でこちらを見ていた。さらに恐らくロシア語で何やら話し始めた。すると隣にいた彼女もロシア語で応戦。

聞きなれない言語のやり取りはヒートアップして食堂の注目を集める。そろそろ止めた方がいいかと思った頃、外国人の彼女が懐からある1枚の写真を出した。するとノンナの表情が固まった。

数秒後、熱い握手を交わす2人の姿が見えた。何の写真だろうと思つて覗こうとしたら外国人の彼女に人差し指で俺の唇を抑えられ「見ちゃダメです♪」と日本語で言われた。

その後、「クラーラです♪」と流暢な日本語で自己紹介をされた。日本語喋れたのかよ。

○月○日

やった。ついにやった!! あの黒森峰を破つて全国制覇を成し遂げた!! 整備士としてこれほど嬉しいことはない。学校側も大盛り上がりで、祝賀会は朝まで続いた。

興奮気味だったカチューシャも明け方にはノンアルコールウォツカの瓶を抱きながら寝てしまった。しかたないので抱きかかえてノンナと一緒に女子寮の近くまで運ぶ流れとなった。

そこでノンナが「フフツ、こうやって3人でいるとまるで親子みた

いですね。」と軽快に言ってきたのでアルコールウオツカがどっかに交じっていたんじゃないかと疑った。

4月□日

早いもので3年生に進級し、カチューシャは隊長、ノンナは副隊長、俺は整備班の班長となった。全国制覇2連覇を目指すべく毎日練習に余念がない。

ということは毎日戦車がボロボロになって帰ってくるというわけ
で整備士の俺の苦労も絶えない。今はノンナの特製ボルシチの差し
入れでどうにか体を動かしている。

この日記も続けるのも難しくなってくるかもしれない。

○月×日

3年生最後の大会が終わった。無名校大洗女子にフラッグ車を撃
破され敗退。敗因は：・厳しく、端的に言ってしまうえばカチューシャ
の慢心だ。

だがそれを責めるチームメイトは誰もいなかった。普段から高飛
車な彼女だが影で努力をしていることを皆知っていたからだろう。

俺もここまでの付き合いでよくわかった。・・・うん、すごくいい
チームだ。このチームの整備士をやれてよかったと思う。

試合後、ゆつくりと降り積もる雪を見ながら少し感傷に浸っている
と申し訳なきような顔をしたカチューシャがやってきた。後ろには
当然ノンナもいる。

何か言いたげだが言葉がなかなか出てこないらしい。何となく言

いたいことはわかるが俺は別にそれを聞きたくなかったのでカチューシャの頭をわしゃわしゃと撫でまわし一言、お疲れ様と言った。

すると案の定「子ども扱いしないでよ!!ノンナ!!」そう言っただけでノンナに肩車してもらい「まつ、あんたもよく頑張ったわね。褒めてあげるわ。」とのこと。そりやどうも。とだけ返して一緒に学園艦に向かって歩き出した。

やはりカチューシャはこうじゃなくっちゃな。そんな思いを込めてノンナにアイコンタクトを送ったら軽く微笑んで頷いてくれた。

8月○日

大学選抜チームに勝ち、大洗女子の廃校を阻止することが出来た。つい最近だが大洗女子に旧友がいることがわかったので俺も他人事ではなかった。

ホバークラフトを運転し、帰路につきながらこの後のことを考える。おそらくこれが高校生活で整備士としての最後の仕事になるだろう。

3月×日

入学した日の日記を読み返してみると少し弱気になっている自分に思わず微笑んでしまう。そして思わずエールを送ってしまう。大丈夫、君はとても素晴らしいチームで働けるよと。

本日、俺はプラウダ高校を卒業した。カチューシャとノンナは同じ大学へ進学、俺は家庭の事情で進学できないので整備士として就職と

いう道を選んだ。

卒業式後、俺は自分の胸の内をノンナに伝えようとしたがやめておいた。カチューシャを支える彼女の邪魔をしたくないと思ってしまったからだ。

「また会いましょう。」

彼女はそう言ってくれた。俺は笑いながら（上手く笑えていたかわからないが）頷いた。

・
・
・

△月○日

久しぶりにこの日記を開き、そして今書いている。社会人になってから仕事に追われ書く暇なんてなかったからな。

さて明日は高校の同窓会だ。卒業以来会っていないからみんなどうなっているか楽しみだなー。

△月×日

どうしてこうなった。い、いま落ち着くために日記を書いている。現状を整理しよう。

見覚えのない部屋。俺、裸。そして隣で寝ていたのは・・・ノンナ。待て待て、思い出せ思い出せ。同窓会に行った。周りの男子の注目を集めているノンナを発見。向こうもこちらに気づき駆け寄ってき

てくれた。

昔話に花が咲く。お酒もすすむ。・・・GO? いや嘘でしょ俺
。だが部屋に数々の証拠が散乱している。・・・腹を決めよう。

・
・
・

○月○日

今日は忘れられない1日になった。気分は今、最高だ。隣には純白
に身を包んだ愛しい人がいた。

2人で並んでゆっくりと階段を降りる。すると聞き覚えのある声
が、

「ちよつと2人とも、こつち向きなさいよ!」

声のする方を向くとクララに肩車されたカチューシャがカメラ
をこちらに向けていた。

その姿を見て思わずお互い顔を見合わせて笑ってしまった。そう、
すべては高校時代のカチューシャを撮ることがきつかけだったから。
妻もそれを思い出してしまったのだろう。

まさかカチューシャを撮っていた2人が今度はカチューシャに撮
られる側になろうとは予想だにしていなかったからだ。

俺と妻はカチューシャの方を向き、最高の笑顔でカメラを出迎え
た。教会の前で。

おまけ

◎月◎日

今日も妻と娘は可愛い。娘に関しては容姿も妻に似ていて本当に俺に似なくて良かったと思っ……

「パパー!! ママがご飯出来たって!!」

「そうか。今行くよ。」

「何書いてたのー?」

「んー? 内緒。」

「えー!!おーしーえてーおーしーえて。」

「しようがないなあ。じゃあママには内緒だよ。約束できる?」

「できる!!!」

「よし、いい子だ。これはね、ママが可愛いなあってことを書いた日記なんだ。」

「ずるーい!! 私のも書いてー!!」

「大丈夫、ちゃんと書いてるよ。」

「2人ともー、ご飯ですよ。」

「はーい。」

「じゃあ行くっか。」

「だっころ。」

「はいはい。」

(今日の日記はご飯を食べた後だな。)

4倍返し

2月13日バレンタインデー前日、俺は学校の調理室で湯煎で溶けたチョコをへらで混ぜていた。理由はノンナが「緊急事態です。同志タクマ、手伝ってください。詳細は調理室で話します！」と電話をかけてきたからだ。何かかと思い、整備の仕事を投げ出して調理室に來たら渡されたエプロンと三角巾。数秒固まった後、ゆっくりノンナと目線を合わせると「やれ。」と言いたそうなブリザードの瞳が調理台の上にあるボウルと業務用チョコの袋を指す。断れるわけもなく俺はチョコをかき混ぜるマシーンとなった。

「同志タクマ、進み具合はどうですか？」

「・・・まあ、ボチボチって感じ？ほら。」

彼女が見やすいように少しボウルを傾ける。

数時間前から続けている単調作業と溶けたチョコの香りが俺の胃に対してボディブローを打ってくるおかげで死んだ目をしたままノンナの問いかけに答えるが彼女はそんなことは気にとめない。最優先事項はカチューシャへのチョコレート作りが順調に行われているか、ということなのだ。

「わかりました。では引き続きお願いしますね。」

そしてノンナは俺の少し後に入室してきた同志クララと設計図のようなものを広げてロシア語で話しはじめた。恐らく準備に抜かりはないか熟考しているのだろう。カチューシャへの愛が凄い。そして重い。しかし2人にかかれれば目の前で溶かしているチョコは間違いなくカチューシャの姿になるのだろう。・・・プラウダバンザイ。

チョコを混ぜ続け、業務用のチョコの残量もようやく終わりが見え始めた。時刻はいつもならもう夕食を済ませた後くらいだ。しかしチョコの香りで胃は完全にノックアウトされ食欲は湧かない。

「同志タクマ、お腹空きませんか。」

クララが下から覗き込んで問いかけてきたので別世界に飛ばしていた魂を急いで現世に戻し焦点を合わせる。心配そうな表情で美しい碧眼にやつれた少し俺が映る。

「あの・・・そんなに見つめられると照れてしまいますわ。」

「あつ、ごめん。・・・お腹か、正直今はあんまり食欲は・・・」

「はい、あくん。」

「・・・・・・・・。」

俺の返答を聞かずに少し頬を染めた彼女の手からロシア風のクレープ、ブリヌイが差し出された。恐らくチョコづくりの合間に作ったのだろう。こうなったら食欲があるうがなからうが食うしかない。さらに言うとう湯煎の作業中なので両手は空いていない。

「・・・あー、んっ。」

ゆつくりと口を開け、ブリヌイに齧り付く。咀嚼して味を確かめると酸味の後に柔らかい甘さが押し寄せてくる。ふむ、中身はイチゴジャムかな？ あと生クリーム。口をモゴモゴと動かしながらブリヌイを満喫する。

「うん。おいしいよ。ありがとう。」

「それはよかったです。あつ！同志タクマ、クリームが口の周り

に。」

「えっ、本当？　じゃあ拭かない・・・っ!!!」

湯煎の作業を止めて、右手を口の近くに動かそうとしたところ彼女の細い手に阻まれ代わりに彼女の顔が近づいてきた。一瞬の出来事だったので反応できずに固まっていると生暖かい感触が口に伝わってきた。

「フフツ、舐めてしまいました。」

口を開けたまま静止していた俺だが数秒後、ウインクして微笑む彼女が俺にしたことを理解でき、一気に体温が上昇した。しかし

ザシユ、ザシユ

後ろから不快な音がするので恐る恐る首だけ動かして見る。そこには明日のカチューシャのお昼用のボルシチを作っているノンナがいた。・・・うん、それだけならよかったんだけど、これ見よがしにトマトを持って斬首するかのように切っているのは何故なんですかあああああ!!!　目のハイライト消えてるのも何故なんですかああああ!?

上昇した体温も一気にブリザードの中だ。

「も、もう十分チョコは溶かしたよな？　じゃ、俺は整備の仕事があるからこれで!!!」

彼女の無言の圧力に耐え切れず俺は調理室から逃げた。

翌日、バレンタインデー当日。

調理室から逃げた俺だが、整備の仕事が残っていたのも事実。それを片付けていたら徹夜してしまったのでこのまま学校へ登校することにした。寝不足なので若干フラフラと歩いていると後ろから聞きなれた声があった。

「ちよつと、タクマ!!」

「ん? 声ができるのに姿が見えない?」

気づいているが少し遊ぶことにする。辺りをわざとらしくキョロキョロと見渡す。すると「キーツ!!」と言った声が響き、背中に負荷がかかる。どうやら無理やり俺によじ登っているらしい。そしてどうにか肩車の状態になるとペシペシと俺の頭を叩く。

「どう? 少しは目が覚めたかしら。次やったらシベリア送り10万ルーブルよ!!」

「はいはい、悪かったよ。で、何か用かカチューシャ?」

「ふん! 本当ならあんなことしたアンタにはやるつもりは無いんだけどね。カチューシャの心は広いから許してあげる!! シベリア平原のようにね。ほらチョコよ! 受け取りなさい!!」

手を開いたまま上に持っていくと非常に軽いものが置かれた。手に戻して確認すると茶色い5円玉だった。チ○ルチョコ数個を予想

していたがそれよりひどいなおい。

「1カ月後のお返しは3倍返して許してあげるわ!!」

姿は見えないがおそらく俺の頭の上でふんぞり返っているのだろう。しかたない望み通り返してやるか。

「1カ月後と言わずに今返してやるよ。」

「えっ?」

カチキューシヤを頭から降ろし、バッグの中からあるものを取り出し渡してやる。

「ほれ。」

「ほれって……う○い棒2本じゃない!!ふざけてるの!!!」

「ふざけてねえよ、5円が20円相当になったんだから3倍返しどころか4倍返しだぞ!! じゃ、これでホワイトデーは無しな。」

そう言い残して俺は走って逃げる。後ろからカチキューシヤの「待ちなさいよー。」って声が聞こえたが無視。あくカチキューシヤをからかうの楽しいなく。心の中でそう歌いながらご機嫌なまま教室へ向かうため廊下の角を曲がろうとした刹那、何者かに口を塞がれ、背後を取られた。

「ん!? んー!!んー!!」

「あまり騒がないでください。気絶させなきやいけなくなります。」

(この声、ノンナ!?)

声の主がわかり、両手をあげると柔らかい指が口元から離れてゆく。そして今気づいたけど背中にも相当柔らかいものが当たってきた。堪能してる暇なんてなかったからな。つといかんいかん。今考えるべきことはそれじゃない。

彼女がなぜこんなことをしたのか。それはもう俺には分かっている。カチューシヤをからかったからだ。そしてその現場を目撃された。そんな愚か者の末路は「粛清」

だ!!

「同志タクマ、目を瞑ってください。」

来た。コレはビンタかな?しかたない、甘んじて受け入れよう。

言われた通り目を瞑り、手を後ろで組む。

「それでは・・・」

ノンナが声を発したのと同時に歯を食いしばる。

「むっ?」

しかし頬に衝撃は無く、代わりに歯に固いものが当たる。

「あの・・・もう少し口を開けて貰えますか。」

「・・・ふあい。」

状況を説明しよう!ノンナが俺の口にチョコを突っ込んでいた。説明終わり!!

「味はどうですか?」

もじもじしながらノンナが聞いてくる。

「スゴイ美味しいです。」

「それはよかったです。」

「つていうか俺の分もちゃんとあつたんだ。カチューシャのだけかと思つた。」

「むっ。ちゃんとアナタの事だつて考えてます。」

「プイツとそつぽ向くノンナ。彼女がこんな態度をとるとは珍しい。」

「ゴメン、ゴメン！」

急いで謝るとすぐにいつものクールな表情に戻る。そして

「同志タクマ、口のまわりにチョコレートが。」

「えっ？」

この流れつて……

そう思つた時にはもう彼女と唇が重なつていた。そして彼女の舌が俺の唇を伝う。

「ハアハア、同志タクマ。」

息が荒くなつた彼女が言葉を続ける。

「先程、カチューシャには4倍返ししてましたよね？」

俺の首に手をかけるノンナ。

「あゝ、じゃあ来月4倍返しで……」

「今すぐ返しなさい!!!」

「……じゃあ」

そう言つて俺は彼女に顔を近づけて早速、お返しをした。もちろん4倍返しで。

いい夫婦の一步手前

11月の上旬、プラウダ高校のとある空き教室にて俺とクララーはカチューシャに呼び出された。

長テーブルのように並べられた学習机のお誕生日席で肘をついて手の甲に顎を乗せて足をブラブラとさせながら彼女は口を開いた。

「来たわねタクマ、クララー。呼び出した理由は時期的にわかるわね？ 今年もノンナへのサプライズパーティーを成功させるのよ！」

来たる11月21日はプラウダの副隊長、ノンナの誕生日。それに向けての準備をしようというわけだ。普段は暴君ながらこういうことはキツチリやるからウチのチビッコ隊長は憎めない。

「そういえば一昨年も去年も大成功だったわよね。流石は私ね」

腕を組みながらウンウンと自画自賛するカチューシャ。しかし、残念なお知らせがあるぞ。そもそも一昨年も去年もサプライズは成功していない。なぜかって？ それは俺の胸ポケットに挿しているペン型の小型カメラで全部ノンナに筒抜けだからだ！ ……言っておくがノンナの命令でやってるだけだぞ。そこに俺の意思はない。そう、俺はただのカチューシャの記録係なのだ。

「じゃあクララー！ノンナが今欲しそうなものはわかるかしら」「ソウデスネ。物というよりは手作りケーキが食べたいってこの前言ってましたよ」

お察しの通りクララーもグルだ。ノンナの「カチューシャの手作りケーキを食べてみたい」という要望を叶える為の誘導をかましている。

「手作りケーキ？ そんなのでいいのかしら？ノンナも欲がないわね。まっ、いいわ。この私がササツと作ってあげる！」

こうして誘導は成功し、カチューシャが手作りケーキを作る事になったのだが、これはこれからはじまる悲劇の序章にすぎない。だって、あのカチューシャがノンナ無しで手作りケーキだぞ。俺達がどうにかサポートしなきゃ絶対無理だ。そのことをクララーもわかって

いたのか覚悟を決めた目でアイコンタクトを送ってきた。君、大学選抜戦でカチューシャを庇った時にそんな目してたのか？

そこから俺とクララのサポートがはじまった。カチューシャよ、卵の殻を入れないように割れ、ハンドミキサーを暴走させるな、味見で食いすぎるな、砂糖入れすぎたからって塩を入れるな、途中で寝るな、etc、etc…。

そんな紆余曲折があつてノンナ誕生日当日

「С Днём рождения！」

「ノンナ！驚いた？あとこれは私からよ。しっかり味わって食べなさいよ」

「ええ！ありがとうございます。シベリア並の寒さの冷凍庫で永久保存させていただきます」

「ちゃんと食べなさいよ!!」

そんなやり取りをカチューシャのサポートで撃破された俺とクララはおぼろげに聞いていた。そして誕生日会は無事に終わり…

「寝たか？」

「ええ、ぐっすりです」

ケーキ作りで疲れたカチューシャはノンナがどこから出したかわからない布団でノンナと添い寝をしていた。いや、俺の方が疲れているんだけどな。っと、忘れるところだった。

「ノンナ、これは俺から」

「ありがとうございます。…ひまわりの髪留めですか？」

「ああ、ひまわりが好きだろ？あと出会った頃と比べて髪がだいぶ長くなったからな」

「昔、誰かさんがロングヘアー好きって噂を聞きましたので」

「…ありがとうございます」

「ふふっ、どういたしまして。髪留め、大切にに使わせて貰いますね」
「おう」

よし、プレゼントも渡したし俺も帰って寝よう。そう思って出口に

向かおうとした時、ノンナに手を掴まれた。

「ノンナ？」

「その…ですね。せっかくの誕生日なのでもう少しワガママを聞いて欲しいと言いますか…私とカチューシャだけではこの布団は寒くてですね、あと一人分入れるスペースもありますし…えっと」

「お邪魔します」

こんなもん即決だろ。俺はすぐに布団に潜り込んだ。するとケーキ作りの疲れもあつてか、嘘みたいなスピードでウトウトとしているとノンナに優しく頭を撫でられ

「ノン…ナ、おやす…み」

「おやすみなさい。タクマ」

自分の額に柔らかい感触を感じながら意識を手放した。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ってことが高校時代にママとあつたんだ」

「何それ？ ママ、カチューシャさんのこと好きすぎじゃない？」

「そうなんだよ。ママ、『カチューシャ日記』ってカチューシャのことを観察した日記を…」

「…パ・パ？ 何を話しているの？」

「ヒッ!？」

「お話があります。すぐに寝室に来てください」

「…はい。じゃあパパはママに怒られてくるから今日はひとりで寝てね」

「はい」

私がそう言うとパパが部屋から出て行ってすぐにパパの断末魔が

聞こえた。ああいうことがなければパパとママ、いい夫婦だと思うんだけどな。そう思いながら私はママから貰ったひまわりの髪留めを外して布団に潜った。

黒森峰 隊長とリーダー

「リーダー、ちよつと見てもらっていいですか？」

「どれ？・・・うん大丈夫、この調子で整備を続けてくれ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

黒森峰の戦車倉庫内で声が響く。

リーダーと呼ばれている俺は黒森峰の整備班の班長をしている。
なんで班長と呼ばれていないのかと言うと

「班長って呼ぶの面倒くさいんでリーダーって呼んでもいいですか？」

とある後輩のこのいい加減な一言が原因だった。
たった5文字くらい面倒くさがるなよ。

以降リーダーと呼ばれるようになり、それが同級生にも広まり、
あだ名がリーダーになり拳句の果てはなんとウチの隊長の
西住まほまでがこの名で呼び始めた。

恐らく本人は「整備班のリーダー」なのだから何もおかしいことは
ない、といった

認識なのだろう。あだ名だなんてこれっぽっちも思っていない。
こういった理由で俺は隊長から唯一、あだ名で呼ばれる人物となつ

ていた。

グウ

昔のことを思い出していると腹が鳴った。

時刻は昼の12時を過ぎたころ

「全員、キリのいいところまでいったら飯にいけー。」

「ういゝ。」

「へーい。」

ところどころからの返事を聞きながら手袋を外して食堂へ向かう。

毎度のことながら黒森峰の食堂には行列ができる。

それは食堂の入り口をはみ出すほどに。

規律を重んじる校風のおかげか、我先に食堂へ飛び込む生徒はおらず

全員が食堂のカウンターに向かって1列に並んでいる。

最後尾に向かって歩いてしていると隊長が背筋を伸ばし凜としたいつ

もの表情で

一番後ろに並んでいた。特に振る話題もなかったので

話しかけることもなく無言のまま、隊長の後ろに並ぶ。

行列に並んでいるといっても立ち止まっていることは少なく常に歩いている。

食堂の人たちが学生をさばくのが上手いおかげだろう。

おかげで長い行列でもあまり待たされることなく昼飯にありつける。

ありがたい話だ。おつ、曲がり角が見えてきた。

あそこを曲がればすぐに食堂の入り口だ。

今日は何を食べようか、数々の候補を頭にめぐらせていた時、

誰かが俺の右足後ろを踏んだ。

前に出るはずの右足は自分のタイミングとは全く異なるタイミングで

地面を蹴り上げ、俺の上履きは宙を舞った。

普段の動きではない体に脳はついていけず

転びかけているということには気づかなかつた。

それでも体は危機を回避しようと動いてくれたようである。

ドンツ!!

ムニユ

その結果がこれだ。

・・・何が起こったのか第三者の目線から説明しよう。

リーダーが隊長に壁ドンして隊長の豊満な胸に顔を埋めている。

はい、アウトー!! リーダーアウト!! 俺アウト!! 3アウトチエ
ンジ!!

顔に当たる柔らかいものがなんなのか理解できずに上を見ると
いつもの隊長の凜とした表情があり、瞬時に事態を把握し身を起こ
した。

恐る恐る後ろを振り返ると他の生徒全員がこちらをほかーんと見
ていた。

中でもいつの間にか俺の真後ろにいたようである逸見エリカは鬼の形相で俺を睨んでいた。

(俺の上履きを踏んだのはコイツか。

隊長のことになると先輩後輩の見境ないな。恐ろしい子!!俺、先輩だぞ!

あと原因はおまえだろ!!

・・・ってこんなことを考えている場合じゃなくて!!)

まずはこの状況を皆に説明しなくてはと思ったものの上手く頭が回らない。

そんな中、冷静沈着に状況を把握したのは隊長だった。

俺と脱げた上履きを交互に見つめ、声を出した。

「エリカ、こういったところではもう少し距離を空けて歩け。」

「えっ?あ・・・は、はい!!」

大好きな隊長に注意された逸見エリカ。

睨んでくる鬼の形相に血の涙も追加されたようである。

鬼の目にも血の涙。

恐らく最後尾に並んでいる隊長を見つけてすぐ後ろにつこうとしたのだろう。

ところが俺が隊長の後ろに並んでしまいそれが叶わず。

俺を邪魔だと思いつつもどうすることもできず気持ちだけが焦ってしまい

それが俺の足の後ろを踏む結果となったようだ。

つまりわざとやったわけじゃない。

隊長の一言によって他の生徒たちも「ああ、そういうことか。」「羨ましいなー。」

などなど納得し、こちらへの注目をやめた。とりあえず俺のメンツは保たれた。

「隊長、すみません。大丈夫でしたか？」

「気にするなリーダー、怪我もない。大丈夫だ。」

そう言って行列に戻っていく隊長だったが、耳が真っ赤なのを見てしまった。

ああ、隊長も女の子なんだなあと思ってしまう自分がいた。

上履きを履き直し、俺も行列に戻ろうとするとエリカがちやんと隊長と自身の間に人1人以上のスペースを空けていた。だがそのスペースに入るのは気が引ける。

俺は隊長の後ろのスペースを手で指し逸見に言った。

「どうぞ。」

「……いえ。元々先輩が並んでいたのだから……大丈夫です。」

「さつきみたいなことはもうごめんだから前に行け。」

「……わかりました。」

逸見に前を譲った。プライドが高いから恐らく一回断るとは読んでいた。

なので無理やり先輩権力を使い、逸見を前に行かせた。プライドを傷つけられたが隊長の後ろに並べた嬉しさで

すごく複雑な表情をしている。

列に戻って落ち着いたところで俺はまだ今日の昼飯を決めていなかったことを思い出した。

今日の昼飯、焼き魚定食を受け取った俺は席を探していた。

普段だったら特に気にせず、近くの空いている席に座るのだが、さっきの出来事の後なので茶化されるのが嫌だったし、

目撃した奴らの目線も浴びたくなかった。

規律を重んじているのはあくまで表面上のお話。水面下はやはり高校生だ。

なので食堂一番奥の端っこの席を目指しておぼんを運びはじめた。

しばらく歩くと誰かにつけられている気がした。

後ろは振り返らず近くの窓の反射を利用して確認する。

・・・隊長だった。

たまたま向かっている方向が一緒なだけだろうと思い、さらに歩き続ける。

だが隊長が俺の後ろから離れることはなかった。

端っこの席に着き、おぼんを置くとすかさず正面に隊長もおぼんを置いた。

(なんだ?・・・まさかやっぱりさっきの件、怒っているのか?)

いや当然か。他の人の目もある中では怒りにくかったんだろうな。)

もう謝り続けるしかないなと思いながら隊長の言葉を待っていたがそれがこない。

それどころか席に着き手を合わせ、昼飯のカレーライスを食べ始めた。

あいかわらずお好きなようで。

事態をよく飲み込めないでいたが腹が減ったので俺も飯を食うことにした。

もう半分やけくそみたいなもんだった。

手を合わせて言う。

「いただきます。」

箸を持ち、魚の身をほぐして骨を一気に取り、皿の端に乗せる。

そして身を数口運び、ご飯を食らう。塩が効いていて抜群の旨みが口の中を広がる。

先程までの杞憂はどこへやら、思わず笑顔になる。

そんな俺の一挙一動を隊長は見ていたようだ。

「リーダー、君は綺麗にご飯を食べるなあ。」

「えっ?。」

「いや、最近では『いただきます』や『ご馳走様』をちゃんと知らない若者が

増えているというニュースを見てな。実際にここ数日、他の学生とかを

見ていたのだから確かに言わない学生を何人か見かけた。また、ちゃん

言っているも食べ方が汚かったりしたのだが・・・君の焼き魚の食べ方を見て感心した。」

「あ、ありがとうございます。」

「きつと親御さんの教育がいいのだろう。また、おいしそうにご飯を

食べる。

作り手側も作り甲斐があるものだな。」

そんなところまで見られていたのかと思っただけならすぐ恥ずかしくなってきた。

顔を赤くしている俺に気づかず隊長は続ける。

「きつとそういうことがしつかりできているからこそ

整備班のリーダーになれたんだろう。実際に君が整備し始めてから

戦車の調子がいいからな。」

眩しい笑顔を向けてくる隊長。

(やめてえええ!!それ以上誉めないで!!殺される!!)

西住まほに誉め殺されるううう!!)

両手で顔を隠しながら頭から煙を上げていると横から声が泳いできた。

「隊長、こんなところにいたんです……」

逸見エリカがなんであんだここにいるのよと言わんばかりに

鬼の形相(以下略)

つていうかずっとおぼん持ちながら隊長のことさがしていたのか。健気だねえ。

「エリカ、3年だけで話したいことがある。悪いが席を外してくれな
いか。」

そんな健気逸見を葬る隊長の一言。

口元をあわあわせながら白目を向いて180度回転し、去つていく逸見。

シヨックだろう、席にもまだついていないのに席を外してくれと言われたんだからな。

しかし3年だけで話したいことか。

ふむ、俺にはひとつ心当たりがあつた。

「ご馳走様でした」

食事が終わり、茶を飲んで一息ついた頃、俺は心当たりをぶつけてみることにした。

「隊長、さっきの話したいことって……もしかして俺たちの引退後についてですか？」

「……察しが良くて助かる。」

表情がやや険しくなる。

「もうすぐ私たち3年は引退だ。ちゃんと後任へ跡継ぎの義務がある。」

手前味噌になつてしまうが戦車道に関してはエリカがいる。

あいつは向上心の塊だ。私がいなくなつた後もチームを引っ張ってくれるだろう。」

先程の白目向いてた逸見に聞かせてやりたいな。失敗した。

レコーダーで録っておけばよかった。そんで逸見に3万くらいで売ればよかった。

いや、あいつなら10万でも出しそう。

「だが整備班の方はどうなのかと気になってしまっただけな。いくら戦車道がすぐくても」

土台の整備がダメでは意味がない。ましてや君が抜ける穴は大きいだろう。

そこを教えてもらいたい。」

・・・目を閉じて整備班の後輩たちを思い浮かべる。

「正直に申し上げますと、逸見ほどの向上心を持った奴は整備班にはいません。」

・・・ですが基礎の技術面と精神面、両方とも俺が全て叩き込みました。

あとは応用力だけです。そこは各々自分自身で考えて動くよう伝えていきます。

だから俺が抜けてあたふたすることもないでしょう。」

そうだ。大丈夫。後輩たちもそんなやわじやない。

「それに俺自身が一番楽しみなんですよ。俺が抜けた後、どうあいつらが

成長するのか。無責任な言い方ですけど班長の俺が

こんなことを思っている時点でもう大丈夫です。」

「フフツ。」

「？」

「いや、すまない。すごくいい笑顔で話していたもんだからな。」

いつの間にか熱く語っていたようで自分の表情にすら気が付かなかった。

うわー。結構恥ずかしい。

「今の笑顔を見て確信した。整備班の方も大丈夫なようだな。」

また出た!!西住まほの褒め殺し!!俺は今日、あと何回殺されるのだろうか。

「実はな・・・話はもう一つあるんだ。」

「?」

はて、そちらの方は心当たりがない。
しかも歯切れが悪そうだ。

「その・・・君達の世代にはあまり多く・・・優勝経験をさせてあげられなかったなと思ってな・・・。」

隊長が何が言いたいのか考えてみた。

俺たちが1年の時には優勝をすることができた。
だが2年の時はプラウダに負けて。

3年の時は大洗・・・ああ、そういうことか。

「もしかして妹さんのこと言おうとしています?」

「……君は本当にすごいなあ。」

どうやら当たったようである。

「2年の決勝、妹さんのせいでプラウダに負けたと思っているなら俺は違うと思っていますね。」

誰のせいって言うなら全員のせいです。」

「全員のせい？」

「そうです、全員のせいです。攻撃されて落ちた赤星が悪い、それを助けに行った妹さんも悪い。」

作戦指示を出した隊長も悪い。フラッグ車を攻撃した敵車両を先に撃破しなかった逸見も悪い。

チーム全員が悪いです。」

目を見開いて驚いてる隊長を気にせず俺は続ける。

「ただ『誰が悪い』ってなった時に一番目立つ場所にいたのが妹さんなんです。たったそれだけなんです。」

誰か一人に責任を押し付けるのが間違っている。……こんなことを思っていないながら当時、声を大にして

妹さんを擁護しなかった俺も同罪ですね。だから3年の時も勝てなかった。そして妹さんは俺達に勝って証明した。

あの時の敗因はチーム、いや黒森峰全体にあることを。すごいですよ妹さんは……これが俺の考えです。」

長々とした語りを終えて隊長を見たのだが

「……………」

隊長の目から涙がこぼれていた。顔をゆがめるわけでもなく、ただ俺を見つめたまま。

(えっ、ちょ、やばっ。あっ、さっき隊長のせいって言っちゃったから？どうしようどうしようどうしよう。)

「た、隊長。えーとですね、さっきのはその」

「ん？あ、ああ。すまない。違うんだ、嬉しくてな。」

自分でも泣いていたことに気づいていなかったようだ。

「まさかこんな近くにみほの味方がいてくれたと思ったら自然と出てきてしまったな。」

妹さんの件を根に持っている生徒は少なくともいるだろう。そして陰口を叩くやつも。

姉として隊長は今日までそれを全部受け止めてきたのだろう。誰にも相談することなく、いや相談できずに。

「少なくとも整備班の奴らは味方ですよ。」

「えっ？」

「言ったでしょう？ 精神面も叩き込んだって。くだらねえこと言つてたらブツ飛ばしてきましたからね。」

大丈夫ですよ。それに戦車道のチームにしたって大丈夫ですよ。なんとって隊長お墨付きの逸見がいる。

逸見が妹さんのこと守ってくれますよ。」

俺が笑顔で言うと隊長も笑顔だった。

零れ落ちる雫が止まらないので時折困った表情を見せていたが、すごくいい笑顔をしていた。

もうすぐ昼休みが終わる時刻、俺と隊長はおぼんを持って食器の返却口に向かっていた。

「今度の休みにみほが帰ってくる。よかったら家に遊びに来ないか、リーダー。」

「えっ? いいんですか?」

「もちろんだ。さっきのことを言ったらみほが喜ぶ。」

「それは恥ずかしいんで勘弁してください。」

「ははは。・・・あとお母様にも会ってほしいし。」

「え? 何か言いました?」

「い、いや なんでもない。」

で?どうなんだ予定は? まさかもう埋まっちゃってしまっているのか?・・・その・・・か、彼女とか」

隊長にしては珍しく結構突っ込んだ質問をしてくる。

「彼女とかいけませんよ。大丈夫です、空いてるんでお邪魔させていただけます。」

「本当か!？」

「え、ええ。何も予定入ってないですよ。(汗)」

「そつちではなくてだな!!・・・い、いや何でもない。」

なにやらさつきから隊長から必死さを感じる。どうしたんだろうか。

しかし西住家にお邪魔すると何となく緊張するなあ。

まあただ遊びに行くだけだし、なるようになるか。

「今度の休み、楽しみにしています。」

「ああ、歓迎する。」

後日、西住家に遊びに行った俺だか

母親のしほさんや妹のみほちゃんがいる前で

結婚を前提としたお付き合いを隊長から申し込まれるのは
また別のお話。

隊長とリーダーと西住家

「あー。」

戦車倉庫内でやる気のない声を出しながら手を動かす。今は放課後で整備の仕事もないから倉庫内には俺一人だけだ。じゃあ何故、手を動かしてるかって？ ちよつと色々整理したいことがあつてな。

先日の休み、隊長の家に遊びに行った際に告白された。それも母親のしほさんや妹のみほちゃんがいる前で。しかも結婚を前提としたお付き合い。

正座したまま頭を深々と下げて凜とした声で「お願いします。」と言われ、俺が口を開けたまま固まっているとしほさんが割って入ってきた。当然だな。

「まほ!! いきなり人の事を呼びつけたかと思えば・・・自分が何を言っているかわかっているの?」

「ええ、お母様。彼と結婚したいのです。」

「だとしてもいきなり過ぎます!!」

「ですからお付き合いから始めようかと。」

「そういうことを言っているではありません!!」

凜とした表情を崩さない隊長と厳しい口調のしほさんのヒートアップしたやり取りがしばらく続き、このままだと西住家のお家からシュポッと白旗が上がりそうな気がしたので俺とみほちゃんが「まあまあまあ」と仲裁に入り、その日はとりあえずこの件は保留という形で終わった。

色々な問題が山積みとなったままの週明け本日、授業にも身が入らず1日中頭を抱えていた。中でも1番気になっているのが隊長の『告白』に対して返事をしていないと言うこと。自分の中でほぼほぼ答えは出ているのだが、もつともつとちやんと考えて出さなくてはいけない気がしてならない。特にあの時のしほさんの顔を思い出すと適当なことは言えない。人生設計をしつかりしたうえで……まず大学、そして就職先、どちらも一流でないとダメな気がする。一応戦車の整備関係の就職が強い大学の入学を目指して勉強してきたが本当にそこでいいのだろうか。しかし今から大学を変えるのは……。

色々と整理するためにはじめた整備の手はいつの間にか止まってしまった。

「うん。」

「わんつ。」

「ん？」

視界をティージャーの装甲の1色から180度回転させると無機質のコンクリート上に見える4本足の訪問者。ハアハアと舌を出しながらモフモフしてそうな体を揺らしている。数歩歩いて俺に近づいてくるとまた、わんつと叫ぶ。手を差し出してみると駆け寄ってきたので頭を撫でてやる。気持ちよさそうに目を閉じて尻尾を振ってさらにすり寄ってきた。放課後じゃなくて授業中に校庭に現れれば英雄になれたろうに。そうすればこんな男よりも女子たちに可愛がってもらえたに違いない、タイミングの悪い犬だ。

しかし野良犬だろうか……いや違う、よく見るとリードがついている。飼いがウチの学園に迷い込むとは珍しいこともあるんだな。

モフモフの感触に癒され数分、当初の悩みはどこへやら。飽きもせ

ずに頭を撫で続けていると倉庫の入り口から声が響く。

「ここにいたのか!!」

聞きなれた声、しかしいつもの凛とした声とは少し違う。見ると息を切らした隊長が膝に手をつきながら立っていた。

「お疲れ様です、隊長。」

「ああ・・・リーダー・・・すまない・・・ウチの犬なんだ・・・。」
「落ち着いてからでいいですよ。」

「助かる・・・。。。。。。昼ごろお母様から電話があつてな、逃げ出したと。そしたら犬の目撃情報が食堂から聞こえてきてまさかと思つたら・・・。」

「なるほど。かなり探し回ってました?」

「ああ。おかげで今日のジョギングはやらなくてよさそうだ。・・・ほら帰るぞ。」

隊長がリードを引っ張るが何故か地蔵のように固まってそこから動く気配がない。

「おかしいな、いつもは素直なんだが・・・行くぞ!!」

力づくで帰らせるつもりのような。無理にリードを引っ張っているので犬の首の肉が顔の近くまで集まって面白い顔になっている。

「ははっ。可愛いわんちゃんですね。」

思わず笑い、工具箱を持って違う場所を整備しようと歩くと

「わんっ!!」

吠えて俺の後ろを尻尾を振りながらついてきた。

「……………」

試しにもう数歩進んでみる。結果はさつきと変わらず、俺の後をついてきた。犬を見つめた後、視線を隊長に移す。目が合い、苦笑いしながら頬を掻いている。

「……すまないがリーダー、ウチまで来てくれないか？」

その言葉を聞いて刹那的に忘れていた山積みの問題を一気に思い出した。

2回目の訪問となるこの大きな家。近づくにつれて冷や汗が背中を占めてインナーはビショリ。しかし緊張のせいなのか、常に弱い電流を流されて感覚がなくなってしまうたつと言った例えがいいだろうか。全く気にならなかった。それよりもツナギのまままで来てしまった。すごく失礼ではないだろうか、この格好。

門の前で犬のリードを持ったまま立ち止まっていると

「リーダー、入ってくれ。……その……前回のことならあまり気にしないでくれて構わない。」

「あつ、はい。」

少し顔を赤らめながら言い放つ隊長。前回のこと……当然、しほさんと揉めた件についてだろう。いや気にするな言われても無理な話です。俺、気になります。

「バウツ!!」

なかなか1歩踏み出せずにいると痺れを切らした犬が少し怒った

ような吠え方でそそくさと門をくぐる。リードを持っていた俺もつられて歩く。そしてしばらく歩いていると犬小屋にたどり着いた。自分の小さな家を確認するとスタスタと中に入って、その家の主が顔をひよこつと出して寝始めた。なんとも自分勝手だ。だが今の俺にとってには羨ましい限りだ。

犬を羨望の眼差しで見つめながらまた頭を撫でてやる。耳がピクピクと動くが閉じた目は開きそうにない。

「犬が好きなのか？ リーダー。」

「そうですね。実家では何も飼っていないからですからね。いいなあと思います。」

「そうか・・・良かった。」

「まほ？誰か来ているの？」

その声を聞いた瞬間、思わず肩が上がった。

縁側からしほさんが前回訪れた時と変わらぬ黒い服で現れた。恐らく仕事服なのだろう。

「……………」

俺を見つけると少し目を細めたしほさん。無礼があってはいけな
いと思い、すぐに立ち上がり、挨拶をする。

「こんにちは!!先日はお招きいただきましてありがとうございます
でした。」

頭を下げるとすぐに隊長が続いた。

「彼が連れてきてくれたのです、お母様。」

犬小屋を指しながらここにいる経緯を説明する隊長。

「……そう……ありがとう。」

頭を下げたままだから表情はわからないが声からして恐らく無表情のままお礼を言われているのだろう。しほさんとしては複雑な心情なのだろうか。確認するのが怖くて頭を上げられない。

庭の芝とにらめっこをしていると4本足の影が目に入った。その影は後ろ足の片方を上げた状態。おやおや、何か漫画とかでよく見たことがあるシルエットだな。そしてその影にもう一つ、放物線の細い影が追加された。

「……!!何やっているんだ!!」

隊長から今まで聞いたことないような怒号が聞こえた。しかし影の正体であり、怒られた犬は時に気にすることもなく犬小屋に戻っていく。……アイツいつの間にか起きたんだ？

何をされたのか端的に言うのと、犬に尿をかけられた。ツナギの下の左足後ろ部分が黒く濡れている。

「す、すまないリーダー。えーつとそうだな……。」

あたふたしている隊長が目の前にいる。すごく新鮮だ。

「大丈夫ですよ、隊長。今日はもうこのまま帰るんで。」

流石に犬の尿をつけたまま長居するわけにはいかない。それに当初の目的の犬を連れて帰るということは果たした。いい口実だ。そのまま帰ろうと出口に向かって踏み出そうとした時

「待ちなさい!!・・・上がっていきなさい。」

しほさんの声を通り、ビクつく俺。・・・ん？ 上がっていきなさい？

「えっ?・・・いや本当に大丈夫なん「お客様に恥をかかせたまま帰したとなれば西住家の名折れ。まほ、彼に上がっていつてもらいなさい。」

「!! わかりました。お母様。」

「菊代、いるかしら?」

「はい。なんでしよう?」

「彼のツナギを洗ってくれるかしら? そして彼をお風呂場へ案内してちょうだい。」

「わかりました。こちらへどうぞ。」

あれよあれよと物事が進んでいく。いきなり現れた着物の女性は菊代さんといって西住家の家政婦なのだと言隊長が耳打ちで教えてくれた。家政婦がいるって・・・西住家やはり恐ろしい。

ここまでくると遠慮すること自体が失礼にあたると思い、素直に風呂場まで案内される。

「この籠にツナギを入れてください。着替えは後でお嬢様が持ってきますので。」

「すみません、ありがとうございます。」

「ふふっ。」

「？ 何か？」

「あつ、ごめんなさい。背格好といい雰囲気といい、常夫さん・・・お嬢様のお父様に似ていたので、やっぱり親子なんだなあ」と。

「・・・はあ。」

正直どう反応していいのかわからず気の抜けた返事をしてしまった。隊長のお父さんに俺が似ている？ 確か整備士をしていると聞いたことがあるが・・・。自分の夫に似ているからといって許してくれるほど、しほさんは甘くないだろうしなあ。

「それではごゆっくり。」

色々と思案していると菊代さんが脱衣所から出て行ったので俺はツナギを脱ぎ、指定された籠に入れ、風呂場の扉を開けた。・・・嘘だろ、檜風呂だよ。恐る恐る湯船に近づき手だけを入れてみる。少し熱いがこれくらいがちょうどいい。桶で湯を掬い、かけ湯をしてから、湯船に浸かる。しかし冷静に考えると凄い状況だな。女の子の実家で風呂を借りているなんて。しかもあの西住家の風呂を。

檜の香りに少し緊張もほぐれてきた頃、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「リーダー、着替え置いておくぞ。」

「隊長。ありがとうございます。」

「お父様のだが気にしないで着てくれ。多分サイズも大丈夫だと思う。」

「そうですか。すみません色々。」

「いや謝るのはこちらの方だ・・・それで何だが・・・」

ガラツと音がして風呂場の扉が開き、隊長の顔が現れた。

「えっ?」

浴槽から顔を出している俺と正座している隊長の顔が向き合う。えっ?隊長の服?…もちろん着てるよ!!制服のままだよ!!…何も期待してないよ!!うん!!何にも!!

「……………」

しばらく見つめ合ったままだったが気まづくなり視線を下にそらす。すると隊長が手を後ろにやって何かを隠しているように見えた。あれは…ボデイタオルか?

「リ、リーダー!!」

「は、はい!!」

「その…せ、せな…せなか……………」

隊長の顔を見ながら次の言葉を待つ。

「…………湯加減はどうだ?」

「あつ…………はい…………ちょうどいいです。」

顔を真っ赤にしながらガクツと俯いた隊長。恐らく本当に言おうとしていたことは言えなかったのだろう。

「そうか…………ゆっくりして行ってくれ。失礼した。」

弱々しく声を発しながら扉を閉めていった隊長。今日は普段見れ

ない隊長の顔のオンパレードだな。

頭と体を洗い終え、風呂場から出ると用意された服があった。着替えると隊長の言った通り、サイズに問題はなかった。バスタオルで濡れた髪をよく拭き取り、洗面台の鏡を見ながら髪形を整える。いつもの髪形に戻ったのを3回くらい確認してから脱衣所を出て、菊代さんに案内されてきた道を思い出しながら歩いていく。しかしその途中で

「少しいいかしら。」

ある1部屋から出てきたしほさんに声をかけられた。部屋を見ると座布団がテーブルを挟んで2つ敷かれていた。・・・ついにこの時が来たか。

「はい、大丈夫です。」

「そう。じゃあそこに座ってくれるかしら。」

「はい。失礼します。」

座布団の上で正座し、しほさんと向かい合う。

「お洋服とお風呂を貸して頂きありがとうございます。そしてツナギの件も。」

「それはウチの犬のせいだから気にしないでちょうだい。・・・それよりも。」

頭を下げている俺が元の体勢に戻り、目線が合った瞬間、しほさんは言う。

「先日の件、まほはあのように言ったけどあなた自身はどう考えてい

るのかしら。」

来た。ここから慎重に言葉を選んでいかないといけない。だが怯むな俺。

「私もまほさんと同じ考えです。」

「・・・まほと結婚したいということ？」

やや声のトーンが下がり、しほさんの目つきがほんの少しだが厳しくなった。

「はい。」

「まほは西住家の跡継ぎ。つまり結婚相手には入り婿になってもらうのだけ。」

「承知の上です。」

「当然、姓が変わるわよ？」

「確かに一般的に結婚すれば男性側の姓、といったイメージはありますがあくまでそれは多数というだけです。女性側の姓になる人も珍しくはないと私は考えます。」

「・・・西住家という重圧が毎日のしかかってくるのよ？」

「黒森峰学園の整備班班長として整備において戦車道履修者の全員の命を預かっているという心づもりで今日までやってきました。西住家の重圧と比べるととても小さなものかもしれませんが。しかし私が全身全霊でやってきたことです！」

「・・・怯まないのね。」

『西住流に逃げるといふ道は無い』そうまほさんがおっしゃってました。なら!!西住の名を継ぎたいと考えている私がここで怯むわけに

はいきません!!」

少しテーブルから距離を取り、頭を下げ、額を畳につける。

「どうか認めては頂けないでしょうか?お願いいたします。」

カッコ悪いとか無様とか、どう言われようと構わない。俺は本気だ。隊長の……まほさんのあのいつでも凜とした姿に惚れていた。だが高嶺の花だと諦めていた。だから……告白されたときは嬉しかった。反面、女性から言わせてしまったという情けなさもあった。

だからこそ俺はここで退けない。それこそ『逃げるという道は無い』

「……………」

しほさんの反応がないまま数分過ぎた気がする。いや、本当はもしかしたら1分も過ぎてないのかもしれない。ただ俺はこの体勢を変えつつもりは一切ない。

「何をしているんだ!!リーダー!!」

俺がなかなか帰ってこないのを探しに来たのであろう隊長が部屋に入ってきた。俺に駆け寄って俺の身を起こそうとする。だが俺は起きる気はない。

「はぁ。」

しほさんのため息が聞こえた。呆れられたのだろうか。

テーブルに手を着き、立ち上がり、歩いていってしまう音が聞こえる。……ダメだったか。

「まほ、彼にまた来てもらいなさい。常夫さんに整備の指導をしてもらうわ。西住家の恥にならないようにね。それまでツナギは預かっておくわ。」

目を見開き、顔を上げ、しほさんの方を向く。しほさんは後ろを向いたまま振り返らずどこかへ行ってしまった。

「ありがとうございます!!!」

大きな声で言うと同時に俺はもう一度、額を畳につけた。

「す、すごい・・・あのお母様が認めてくれた・・・すごいなリーダー!!」

凄く興奮した様子で俺の肩を持ちグラグラと揺らしてくる隊長。俺自身も今すぐく興奮していて、心の中ではガッツポーズを決めているが目からは涙が出そうなくらいである。だが俺の仕事はまだ残っている。隊長の肩を掴む。

「隊長!!・・・いや、西住まほさん!!」

「は、はい!!」

突然肩を掴まれ、フルネームで呼ばれて顔を赤くし困惑するまほさん。

「結婚を前提に俺と付き合ってください!お願いします!!」

まほさんの目をまっすぐ見つめる。するとみるみるとその目に雫が溜まりだした。

「はい!!お願いします。」

首元に抱き着いてきたまほさんを受け止め抱きしめる。

「まほさん。」

「呼び捨てで呼んでくれないか。」

「ま・・・まほ。」

「はい。」

「好きだ。」

「私もだ。」

そう言ってリーダーとは言わずに俺の名前を呼び、俺を見つめる。

俺も見つめ返し、その距離を詰め、やがて影が1つになった。

その様子は誰も知らない。ただ1匹を除いては。

新隊長と新リーダー

「だから私の言った通りに整備しなさいよ!!」

「さつきから言ってるんだろ!!出来なくはねえけど時間かかるから合理的じゃねえって!!」

私とコイツの大きな声が戦車格納庫に響く。周りの生徒たちは「また今日も始まった。」そんな顔をしながらせつせと他の戦車の整備に勤しみ、こちらを見ようとはしない。

3年生が引退し新体制になった黒森峰。副隊長だった私、逸見エリカは新隊長に任命され、私と整備のことで口論してるコイツは整備班、新班長になった。

「また逸見さんとツヴァイさん言い合ってるよ。」

周りからヒソヒソと小さな声であるが聞こえてきてしまった。ああ、そうだった。コイツはそんなあだ名だった。確か前班長が『リーダー』ってあだ名で、そのまま受け継ぐ流れだったけど『リーダー』って聞くとどうしても前班長の顔が浮かんでしまうから「2代目」という意味でドイツ語の2を意味する『ツヴァイ』になったんだっただかしら。・・・どうでもいいことだわ。とにかく私の望む整備をしてもらうわ。

「あらそう。前班長ならきつとやってくれたけどね、時間がどうとか言い訳せずに。ああ、ごめんなさい。私があなたの力量を見誤っていたわ。」

「あ？ 上等だ!! やってやらあ!!」

眉をひそめて私に食って掛かってくる。のせやすい奴で助かるわ。

「ただしこの整備したら西住元隊長と同じ動きが出来ると捉えていいんだよな？ 新隊長さん。」

口角をあげてニヤリとして私を見下ろしてきた。前言撤回。コイツ、ちやつかりしてるわ。西住隊長と同じ動き？ そんなのすぐにはできるわけないじゃない。だけどあそこまで言ったのだから退くことはできないわ。

そう、退くことはできない。ここでできないと言ってしまったらあの隊長の背中に一生追いつけない気がする。例えこんな小さな1つの事でも。だから私は答える。

「い、いいわよ。新班長さん。やってあげる。」

たとえこの後イツの要求ができなくて笑われたとしてもやるしかない。進むしかない。進む先が崖だと言うのなら飛び降りて地まで落ちてそこから這い上がってやるわ。こんな事屁でもないわ……。あの子がこの学園に居て受けた傷に比べれば、これくらい……。

「よし!! じゃあ明日の朝までには仕上げる。そこでお前の力量も見せてもらうからな!!」

「整備が終わってなくてノーコンテストじゃないかしら?」

「……お前がハンバーグしか友達いないのがよくわかった。」

「意味が分からないわよ!!」

「あつ、でもそのお友達も食べてるから結局は1人か。うつつ。」

「うるさい!!」

手を目に当てて泣く真似をする。本当に憎たらしいわ。こんなわかりきった挑発なのに。何故かコイツの言動すべてが気に入らない。整備の腕は良いと言うのが余計にこの負の感情を燃やす。私は早いリズムで格納庫内に足音を響かせてその場を後にした。

「ハアアア。」

目を通していたファイルを閉じて思わずため息をつく。今日の戦車道の訓練はとくに終わったが新隊長になったばかりの私には隊長としての引き継ぎ業務がある。普段使っていない教室を一部屋借りて西住隊長が残してくれた資料に目を通していたが、その膨大な量に少し打ちのめされそうになっていた。だが逆を言えば隊長もこれだけの量の資料を私の為に作成し、残してくれたのだ。その労力を思えば、私もその期待に応えなくてはならない。いや、応えたい。

もう一度気合を入れ直そう。そう決意したものの、分厚いファイルの山に読み終えたファイルを積み重ねたところで目に疲れを感じた。少しリフレッシュをしよう。そう思って自販機の商品を頭に思い浮かべながら教室を出た。

足音がよく響く薄暗い廊下を歩く。残っている生徒は少ないが全くないというわけでもないように何人かの生徒とすれ違ったがいずれも顔見知りではない。戦車道の訓練は終わったから当然ね。気づけば自販機の場所の近くまで来ていた。さて何を飲もうかしら？
そう思っていた時、

「ウチの戦車道も落ちたよな。」

「天下の西住流が居て優勝一回だけでもんな。」

「でも今回の優勝校の大洗、西住流の妹いるところらしいよ。しかも元ウチの生徒。」

「は？ 何それ？ どういうこと？ ひどくね？」

突如聞こえてきた男子生徒の声に思わず身を隠し、顔を少しだけ覗かせる。見たところ整備班の男達ではないようだ。つまり戦車道について細かくは詳しくないものの、ビッグゲームだけは知っている。そんなところだろうか。名門と言われてる黒森峰にも、こういう生徒はいるものなのね。いや、恐らく誰にも聞かれていないと思ってるから話しているのだろう。多分、普段の外面はいいのね。

「えっ？ 妹に負けたの？ ダメじゃんお姉ちゃん。しっかりしてよ。」

「はっはっはっ。」

隊長の事が話題に上がった刹那、身体の全身が熱くなる。鼓動も早

い。先ほどまで正常だった脳の電気信号は異常のスイッチを押した
ように気がついたら握り拳を作っていた。だがここでスイッチはま
た元に戻り、彼らの前に出て拳を振ることはなかった。

悔しい。

あいつ等に何がわかるの？ 10連覇を逃して、周りから陰口を言
われ、妹とも疎遠になって、それでも腐ることなく黒森峰の隊長とし
て立派に務め上げたあの人の何がわかる!! 大声で叫んでやりたい。
でもここで問題を起こしたらそれこそあの人の顔に泥を塗ることに
なる。こんな時に妙に冷静で何もできない自分も憎らしい。自己
嫌悪に陥り、私はその場にしゃがみこんでしまった。その時、

「何くだらねえ事言ってるだよ、お前ら。」

新班長のアイツの声が響いてきた。でもその声はいつもと違う。
いつも私と言いかう時のボリュームのある声ではなく、静かに低く、
怒りに満ちた声。

嘲笑っていた男子生徒たちは一瞬で表情をなくす。直接心臓を掴
まれて握りつぶされる寸前といったところだろうか、彼らの冷や汗が
流れるのを遠くからでもわかった。

「お前ら、何かで1回でも優勝した経験あんのかよ?」

アイツの問いに対して男子生徒たちは答えない。所詮、陰口を叩く
暇のある奴らだ。何かに対して本気で打ち込んでいないのだろう。

これで話は終わるかと思ったのだが私の予想に反して男子生徒の
1人がアイツに近づいていった。

「うるせえよ!!この女の使いっぱしりが!!」

どうして男ってこんなにも煽り耐性がないのかしら? 女の使いっぱしり・・・戦車道は乙女の嗜み。故に整備をしている男性は一般人にはそう見えてしまうのだろうか?

男子生徒はわざとらしく大きく振りかぶってテレフォンパンチの姿勢を取る。あれは本当に殴る気はないわね。あくまで威嚇のための動作。簡単に避けられるようにスピードを落としたパンチを打つ気ね。まあアイツなら余裕で避けられるでしょう。

ゴスツ。

(えっ?)

目を酷使したせいで私の視力が本当におかしくなったのかと思っただ。だって鈍い音と共にアイツの唇に薄い赤色が伝っているから。

大振りのパンチは見事に頬に決まっていた。そのパンチを放った本人も避けなかったことに驚いている。・・・いや違う!アイツは腕を組んで表情変えずに仁王立ちしてる。避けなかったんじゃないかって避ける気がなかった。

「どうする? このまま先生に報告するか、黙ってお前らが去るか。どっちがいい?」

淡々と述べられた言葉に冷静になり、今さら恐怖心が襲ってきたのか、逃げるように男子生徒たちは去っていった。それに対してアイツ

は何事も無かったように自販機に向かい、小銭を入れはじめた。その態度に何故か腹が立った。

「ちよつとアンタ!!」

「ん？ なんだハンバーグ、お前も休憩か……って何で腕を引っ張るんだよ!!」

「うるさい!! 保健室行くわよ!!」

「見てたのか!!……どうせもう閉まつてるだろ、別にたいしたことないから大丈夫だよ!」

「でも!!」

「落ち着けよ、ホラ。」

自販機の取り出し口から缶を取り出して私に投げる。突然の事だったので手がもたついたが何とかキャッチできた。見ると白と茶色の液体が渦巻いているパッケージのホットココアだった。アイツに視線を移すとまた自販機に小銭を入れていた。ガコンと音がして出てきたのは缶ではなくペットボトルのミネラルウォーターだった。取り出してすぐさま開けて口に含むと頬を左右に動かして近くのシンクの流しに吐き捨てた。ほぼほぼ無色透明だがわずかに残った赤色が排水溝へ引き込まれていく。

「な、もう血もほとんど出てないから大丈夫だよ。あと120円よこせ。」

「……奢る甲斐性くらい見せなさいよ。」

保健室に連れて行くのは諦めた。こうなったら意地でも行かない奴なのよねコイツ。

ホットココアのプルタブを開けて口をつける。ドロツとした熱い液体が喉を通って糖分が体に行き渡っていくのがわかる。疲れたときは甘いものがいって言うが実感できた気がする。

しばらくお互い無言のまま隣に並んで水分を補給していた。そしてアイツのペットボトルの中身が半分くらいになったところで話しかけた。

「何で避けなかったのよ。」

しばらく間があった。何か考えてる様子はなく、ただ一点を見つめていた。

「避ける資格がないから。」

「はっ？」

「・・・黒森峰が10連覇逃しただろ？ あの時応援席に居てな・・・負けが確定した時思わず言っちゃったんだ。『フラッグ車を放っておいて味方を助けるとかバカなのか!!』って・・・そしたらさ、『くだらねえこと言っつてんじやねえぞ!!』って横から怒号と鉄拳が飛んできたんだよ。殴り飛ばされて、誰だ？って相手みたらリーダーだった。そこから俺とリーダーの殴り合いの喧嘩。当時の整備班の班長に止められるまでお互い本気で殴ってたな。」

「・・・初耳だわ。」

「まあ目撃者が整備班だけだったからどうにかもみ消したしな。ん

で、そこからしばらくリーダーとは口を聞かなくなった。・・・当時の俺はさ、『何故俺が殴られなきゃいけない！自分は間違っていない!!悪いのは副隊長だ！ 制裁を受けるなら副隊長のアイツだろ!』って考えだっただよ。そしてアイツは転校した。・・・そこで初めてわかったんだ。心が全然晴れなくてさ、自分が間違っていて自分がどんだけのクズだったかって事が。すぐにリーダーに土下座しに行つたね。そしたらリーダーが『謝るべき相手は俺じゃないだろ。いつか絶対・・・どんだけ時間がかかってもいい。ちゃんと謝れよ。』

それだけ。自分が殴られたことに関しては何とも思っていないだよなあくあの人。技術面でも凄いいし。勝てる気がしない。いや、絶対に追いついてやるけど!!」

長々と話を終わると喉が渴いたのだろう、一気に残り半分の水を飲み干してペットボトルを空にしてゴミ箱に入れた。そして結論を言う。

「まっ、そんなわけできつきのあいっらは昔の俺と一緒になんだよ。だから俺には避ける権利がない。それだけの話さ。」

そう言って少し自嘲気味に笑った。白い歯が見えて血がついてないことを確認できて少し安心する。

コイツの事が気に入らない理由がわかった。嫌というほど私に似ているんだ。あの子を嫌っていた時期があったこと。未だに謝れていないこと。自分のことがあまり好きではないところ。そして・・・追いつけそうもない背中を、「憧れ」を追いかけているところが。

「ねえ。」

「ん？」

「今度、ちゃんと大洗に行きなさいよ。」

「……おう。」

「来年、絶対に優勝するわよ。」

「当たり前だ。」

お互い、拳を軽くぶつける。

私たちは過去にケジメをつけて全力で前に進む。

進む先が崖だと言うのなら共に飛び降りて、共に地まで落ちて、そこから共に這い上がって、どちらかが倒れたのなら起こして支える。誰に笑われたとしても。

すべては「憧れ」に追いつく為……いや、「憧れ」を追い越す為に。

大学選抜 色々と貸出し中

「……んお?」

もうすぐ昼ごろかという時刻。戦車道の大学選抜チームが練習試合でよく使う会場で俺は最近自分の整備担当となったセンチュリオンの整備を終え、その車体の影を利用して惰眠を貪っていた。しかしそこに突如、腹部に謎の重みが加わった。それを確かめるべく目を開けるが眼前には漆黒の闇。一瞬おかしいなと思ったが自分がアイマスクをしたまま寝てたのを思い出し、右手を使わずらすとぼやける視界に少しずつ光が広がっていく。

「あつ。」

はつきりとした視界で俺の腹に馬乗りになっている1人の少女と目が合う。何故こんな小さな子がここに?と言う疑問はだんだん覚醒してきた頭が解決してくれた。そういえば飛び級で入った有名な流派の女の子がいるって噂になっていたなど。だがもう一つの疑問、何故俺の腹の上にいる?これは脳細胞をフルに活用しても解決してくれなかった。

「・・・・・・・・・・」

お互い見つめあったまま沈黙が続く。やがて少女は意を決したように頬を染めて口を開けた。

「そ、そのアイマスク!!ど、どこで手に入れたの?」

俺がつけていたのはボコられグマのボコのアイマスクだった。

センチユリオンの上に並んで座り会話をする。やはりこの少女、島田愛里寿は推測通りの飛び級で入った噂の子で、なんと大学選抜の隊長でさらにセンチユリオンの車長でもあるというから驚きだ。あとボコられグマのボコが相当好きらしく、俺の使用するボコのアイマスク見て気がついたら俺に馬乗りになり、アイマスクをじつと見ていたとのこと。このグッズは彼女が持っていないらしく、ボコ好きとしてはどうしても手に入れてたいとのこと。

「でも意外だった。ボコのこと知ってる人、少ないから。それも男の人で。」

当然の疑問だと思ったのでそもそもなんで俺がこのアイマスクを持つているのか彼女に説明した。10歳以上離れたボコ好きの妹がいること、その妹のくれた誕生日プレゼントであること。なので先ほどの彼女の質問『どこで手に入れたか。』が俺自身わからないこと。そして現在、妹にメールして確認中。その返信がくるまで雑談することにした・・・・・・・・主にボコ関係の話で。

「あのお話のボコはね・・・」

「ああ、確か右頬殴られて・・・」

「そうなの!!でね・・・」

目を輝かせながら話してくる愛里寿。

一応、妹と一緒にボコシリーズは全話見ていたので割と話は出来る。10歳以上離れているともう妹という感じではなく、親戚の小さい子の扱いに近い。つまり妹めっちゃかわいい。だから妹が『一緒に見よう。』と言ってくれたボコシリーズは必死に見た。もう飽きるほどに。そして何か勘違いした妹から誕生日プレゼントにボコグッズをもらう羽目になった。うん、でもお兄ちゃん超うれしい!! 最近では俺が一人暮らしはじめたせいで会っていないがよくメールをくれる。ああマジ天使。

ブーブー

センチユリオンの上に置いた携帯が振動する。天使の妹からの受信だ!! すぐさま画面を開く。すると愛里寿が首を傾け、俺と画面の間に入ってくる。とにかく早く情報を知りたい、そんな様子だ。愛里寿の頭しか見えてない俺も首を傾け画面に並ぶ文字を見る。

妹のメール内容はこんな感じだ。あのアイマスクは昔、家族で旅行に行ったときに、こつそり買ったもので地方限定のしかも期間限定商品らしくもう今は手に入らないとのこと。・・・結構レア商品だったらしい。そんなものを誕生日にくれるなんてやっぱり妹（以下略）

「・・・そっか。」

どこか達観したように言う愛里寿。だが表情は寂しさを感じ取れた。その姿にどこか妹を重ねてしまった。

「じゃあ貸そうか？」

「えっ？」

「あげることはできないけどしばらく貸してあげるよ。」

「本当に？いいの!？」

ボコの話をしていた時と同じくらいいきいきとした表情になり思わず立ち上がる愛里寿。そんな彼女をみて微笑ましくなり、つい頭を撫でてしまった。すると急に顔を赤らめ黙って座ってしまった。

(しまった!!つい妹にやる感じでやってしまった!!)

「……………」

またもや沈黙が続き、

「わ、私、お昼に行ってくる!!」

そう言って走り去ってしまった。まだアイマスクを渡していないのに。

「・・・俺も昼飯食おう。」

罪悪感を残しつつ俺もセンチオリオンから降り、食堂へ向かう。

食堂に着き、日替わり定食を頼んでテーブルへ運ぶ途中、愛里寿の姿が目に入る。何やら他の3人の学生と仲良く食べているようだ。あれは確か・・・なんだっけ、メ〇ース三姉妹みたいな異名を持つ3人だったような。とにかく歳が離れていても孤立してないのにはちよつと安心した。・・・あれ、完全にお兄ちゃん目線になってるな。一人暮らしのせいで妹ロスになってるのかもな。

おしゃべりの邪魔をしないように俺は愛里寿に声をかけることなく違う席について飯を食いはじめた。

「隊長。今日はなんだか機嫌が良いみたいですけど何かありました？」

「あつ、アズミ。私もそれ聞こうと思ってた!!」

「ルミ!!食べながらしゃべらないで!!こっちにご飯が飛ぶ。」

「ああ、ごめんメグミ。で、隊長なにかいいことでもあったんですか？」

「・・・うん。あのね、はじめてお友達ができたの・・・男の人の。」

そう言つて頬を赤らめる愛里寿。

「……………」

笑顔のまま固まる3人。

「ど、どうしたの？みんな？」

「ウッフ、何でもないですよ隊長。」

遠くでご飯を食べていた俺はこの会話を知る由もなかった。

次の日

朝、センチユリオンの前に行くとボコの人形を抱いた愛里寿が待っていた。

「あつ、おはよう。昨日はごめんなさい。連絡先知らなかったからここなら来るかなって。」

そう言われて連絡先を交換していなかったことに気づき、交換する。

「じゃあ改めて、はいどうぞ。」

昨日、家に帰って洗濯しファブったアイマスクを渡す。昨日渡さな
いで結果的に正解だった。俺の汗やら色んなものがついたものを渡
すところだったからな。

「わあ〜。」

小さな両手で受け取り、目を大きく開く。今、瞳にはボコのアイマスクしか映っていないだろう。ルンルンといった擬音が聞こえてきそうなくらい喜んでいようだ。

「じゃあ、俺は整備があるからこれでな。」

「あつ、・・・うん。」

急に寂しそうな顔をする。アイマスクは渡したはずなのだが・・・。

「・・・整備見てくか？つまんないかもしれないけど。」

「うん!!」

隊長様に整備を見てもらうことにした。実際のところ乗っている人の意見を聞けるのはありがたかったので万々歳だ。ただ後半は一緒にボコのテーマを歌いながら整備していた。これはこれで楽しいからアリにしよう。しかし、いくら楽しいといっても疲れてくるものである。

「おっしや、整備終わり〜。」

そう言つてセンチユリオンの影に寝転ぶ俺。

「ふふっ、お疲れ様。」

笑いながら俺の顔を覗き込む愛里寿。顔が少し近い。しかし本当に疲れた。俺は今日も惰眠を貪ろうと決めた。

「あく愛里寿。おれはこのまま寝るから・・・少し早いけど先に昼飯に

でも行け・・・」

トン

昨日と同じく腹から重みを感じる。だが昨日よりは軽い。見ると愛里寿が俺の腹を枕代わりにしてボコの人形を抱きながら寝ている。

「じゃあ私も寝る。」

「・・・うん。それはいいんだけど俺のお腹の上な」「じゃあアイマスクとお腹貸して!!」

それだけ言う俺の返答を聞かずにボコのアイマスクを装着し寝はじめた。疲れていて眠かった俺はもうめんどくさいからこのまま寝ることにした。今日はアイマスクが無く普段よりは眠りにくかったが、代わりに腹から感じるちようどよい重みと温かさですぐに夢の世界へと旅立つことができた。

数時間後、この姿を見た3姉妹から今度はツラを貸せと言われる俺であった。

のんべえ3人とジューサーと運転手と策士

「カンパイ!!!」

「.....」

周りから聞こえる人々の喧噪。そしてその一部となっているバミューダ3姉妹の声がグラス同士が当たる音と共に響く。

例の大洗の奇跡から数ヶ月後、俺たちは今、居酒屋に居る。

高校生に負けたとあって練習メニューが倍増した大学選抜のチーム。特に3姉妹の増加量はえげつなくストレスの溜まった3人は酒を飲むことでそれを解消するという、まあなんともオーソドックスな結論に至ったらしい。

頼んだ生ビールを一気に飲み干したところを見ると相当溜まっていることが伺える。

目の前で「カーツ!!!」と叫んでいる女子（と言っているのかコレ?）3人をグラスを持ちながら遠い目で見ていると横からピンク色のグラスが視界に入ってくる。

「ヒロアキ、カンパイ。」

愛里寿がおずおずと両手でグラスを差し出してきた。可愛い。

「カンパイ、愛里寿。」

軽くグラスをぶつける。キンツと小さく音を奏でて愛里寿が両手でコクコクとイチゴジュースを飲みはじめ、プハーと息をつく。超可愛い。

出会い初めの頃は人見知りが激しく、なかなか名前で呼んでももらえなかったが今では打ち解けて呼び捨てで呼んでくれるまでになった。そんなに昔ではないのに何故か懐かしく感じてしまう。

「・・・ヒロアキはお酒飲まないの?」

俺のグラスを見て3姉妹と同じビールではないことに疑問を抱き、素直にぶつけてくる愛里寿。

「あゝ隊長、彼は今日運転手なんで。」

「そうそう、無料タクシーの。」

「気にせずガンガン飲めるわゝ。」

「誰が無料タクシーだ。だいたいお前らどうせいつもガンガンに飲んでるだろ!!」

彼女たちと居酒屋に行くのはこれが初めてだがそんな気がする。いや、絶対そうだ。

しかしこのメンバーで居酒屋に行けるとは思わなかった。

何故なら3姉妹と知り合った当初は俺に対する態度がひどかった。

愛里寿に出来たはじめての異性の友達とあつて色々尋問され、愛里寿が俺に懐いていく度に面白くないといった顔をして整備に難癖つけられたりしたが、その姿を愛里寿に見られ「何やってるの？みんな。」・・・後はご想像の通り、この一言ですべて片が付いた。

しかし彼女たちの気持ちもわからなくはない。俺も10歳以上離れた妹がいきなり彼氏を連れてきた日には親父共々どうなるかわからないからだ。例えそいつが有名人だろうが世界を救った勇者様であろうがまずは否定から入るだろう。独占していたいという点では非常に3姉妹の気持ちはよくわかる。だから酒の場で運転手というめんどくさい仕事を引き受けたのだ。

「つて言うかさあ、あんた男紹介しなさいよ。」

空になった形の違うグラスがいくつもあるルミが話しかけてきた。

「そうよ紹介して、いるでしょ整備士繋がりで。」

「出会いがないの。」

メグミ、アズミと続く。そういえば大洗に負けたせいで島田師範が合コンを無しにしたんだっけ？ 島田師範、愛里寿の母親か。なんだかなだですれ違って会ったことないんだよなあ。どんな人なんだろう。

「ちよっと、聞いてるの？」

いつの間にか新しい酒が入ってるグラスをテーブルに叩きつけてルミが睨んでくる。

「・・・ああ、お前らに紹介したらそいつ等が可哀想だなあつて思つた。」

「何ですつて!!」

見事な合唱を聞いた。本当に3つ子なんじゃないか、こいつら。

「開始早々グラスをそんだけ空ける女子が好きつて男は少数だと思つぞ。」

各々、目の前のテーブルの惨状を見て歯を食いしばりながら一斉に俺を睨んでくる。何だ？ バミューダ光線でも目から出すのか？

「見た目は可愛いのに、お前ら。」

ため息交じりにそうつぶやく。怒号でも飛んでくるかと思つたがラリーが返つてこない。見ると3人とも俯いて顔が少し赤い。あれだけ飲めば酔うのが当然か。

「・・・何だよ。」

「別に。」

そう言うとは先ほどとは打つて変わつてちびちびと酒を飲みはじめる。よくわからないなあと思いつつ、相手をして疲れたので愛里寿を見て癒されようと思ひ頭を動かすと、店員さんを見ては口をパクパクさせている愛里寿が映つた。人見知り+13歳には居酒屋は少しハードルが高いようだ。

「何が飲みたいんだ？」

愛里寿にメニューを見せながら聞く。

「・・・いちごジュース。」

「わかった。すみませーん。」

店員さん呼び、いちごジュースとつまみをいくつか注文していると横から声が入る。

「あたしいくウオツカ〜。」

「バーボン〜。」

「赤ワイン〜。」

額をテーブルにつけながらヨレヨレのラリーを打ってきた酔っ払いども。相当出来上がっていると見える。これ以上の飲ませるのは危険だな。

「すみません、今の3つはキャンセルをお願いします。」

「何だよ!!」

「好きなもの飲ませなさいよ!!」

「あぁー、整備士がいじめるー。」

「代わりにこの店で一番良いお酒頼んでおくからそれで我慢しろ!!」

そう言つて俺は店員さんに小声で話す。

「お冷3つお願いします。」

苦笑しながらわかりましたと言つて店員さんが離れる。ブーブーと文句を垂れている酔っ払いどもの声を無視していると愛里寿が話しかけてきた。

「前もこんな感じだった。」

そう言えば前に3姉妹と飲んだことがあるつて言っていたな。前もこんな感じつて・・・これはもう直りそうにないな。

「愛里寿は酒が飲める歳になつてもこんな風になつちやダメだぞ。」

「・・・ヒロアキは酔っ払いが嫌いなのか？」

「嫌いじゃないけど少しめんどくさいかな。」

「わかった。じゃあならないようにする。」

「よし、良い子だ。」

頭を撫でると笑みを浮かべる愛里寿。最初は恥ずかしがっていたが今では当たり前前のような感じになつてしまった。

「お待たせしました。」

店員さんがさっきの注文の品を運んできた。まずいちごジュースを受け取り愛里寿に渡す。

「ありがとう。」

うむ。守りたいこの笑顔。続いてお冷をそれぞれ突っ伏してる酔っ払いどもの前に置き、つまみをテーブルの中心に置いた。

「ほら、酔っ払いども。うまい酒が来たぞ。」

俺の言葉にムクリと起き上がり、飲みはじめる3人。

「何これ!! すっきりした味わい!!」

水だからな。

「ゴクゴク飲めちゃうぞ。」

水だからな。

「お水みたい。」

水だからな。

三人の言葉に俺と愛里寿は顔を見合わせ、笑いを堪えながら俺が親指を立てると愛里寿も親指を立てた。俺たちの行動をほかーんとしていた3人だがそれでもお冷だと気づく様子は全くなかった。

「……そろそろ帰るぞ。」

居酒屋に入って数時間経ち、そろそろ頃合いだと思いをかける。

「嫌だ。もっと飲む!!」

「今日は電車気にしなくていいし。」

「閉店までいる〜。」

「愛里寿が帰る時間もあるんだよ。未成年を夜中まで付き合わせるんじゃない。・・・それともお前ら島田師範に怒りたいの？」

「二」すぐに帰ります!!」「」

背筋を伸ばして身支度を始めた3姉妹。島田師範がどういう人かわかった気がする。

しかし帰るとなつてからが大変だった。車を出して各々のアパート前まで送り届けても全員が熟睡状態だったので叩き起こし、肩を貸しながら泣いたり笑ったり喚いたりする酔っ払いを玄関先まで放り込む作業が繰り返された。運ぶ途中で柔らかい2つの実が腕に当たったりしたが労力を考えるとそれくらいじゃ全然見合わないと思う。

どうにか3姉妹を送り届け、残りは愛里寿だけとなった。時刻はもうすぐ日付が変わろうかというところ。愛里寿は助手席に座り、目を擦りながら外の景色を見ている。こんな時間まで起きていることはほとんどないのだろう。

それからハンドルを何回か切ると暗闇の遠くからでもよくわかる西洋風のお屋敷が見えてきた。

(で、でかい。さすが島田流戦車道家元のお家。)

どこに車を停めているのかわからずとりあえず門の近くに停める。

余談だがこの車は俺のものではなく大学選抜で使っているものだ。3姉妹が今日の為に隊長権限で借りてきたらしい。職権乱用もいところだなまったく。

「愛里寿、着いたぞ。」

声を送ってみたが返ってこない。見ると助手席で項垂れて寝ている。無理もない。

車を降り、助手席のドアを開け、シートベルトを外して愛里寿をお姫様抱っこする。

そのまま門を開け、進んでいくと玄関先に明かりがついており、扉にもたれかかっている若い女性が見えた。

(少し愛里寿に似ている気がする。お姉さんか?)

「夜分遅くにすみません。大学選抜で整備士をしています」「ヒロアキ君ね。」

お姉さんは口元を半分ほど扇子で隠してにっこりと笑う。美しい人だなと少し見惚れていたがすぐに言葉を返す。

「はい、そうです。妹さんを送り届けに来たんですが寝てしまったようで……」

「あらあら。フフツ。」

少し驚いたような顔を見せたがまたすぐに微笑むと言葉を続けた。

「愛里寿、狸寝入りはやめなさい。」

(えっ?)

両手から若干の揺れがあり、ゆっくりと目を開き申し訳なさそうに俺を見た後、お姉さんの方を向く愛里寿。

「はい、お母様。」

(はっ?お母様?・・・マザー?ええええええええっ!!!!!!)

「愛里寿の母の島田千代です。」

終始笑顔を崩さずに深々とお辞儀をするお姉さ・・・じやなかった島田師範。

破顔して動かなくなっている俺の服をついっと引つ張る愛里寿。そこでお姫様抱っこしたままだったことに気づき愛里寿を降ろす。

島田師範の元に駆け寄り、隣に並ぶ愛里寿。改めて親娘を見て思うことはどちらも美人顔だということと、島田師範の見た目が若すぎるということだ。

「あなたのことは愛里寿から聞いています。いつも娘がお世話になっています。そしてあの3人も。」

3姉妹のことだろう。そういえば大学戦車道連盟理事長も務めているんだっけ? もうなんだろうこの無敵感。そして終始の笑顔から感じる逆らってはいけないオーラ。あの3姉妹が怯える理由がわかった気がする。

「いいえ。自分も楽しく日々、娘さんの戦車の動きを間近で見れて整備の勉強になってますから。」

本心からの答えなのだがたどたどしくなってしまう。この人の前だと緊張を隠せない。

「じゃあ、夜分遅いのでこれで失礼します。またな、愛里寿。おやすみ。」

「あつ・・・おやすみヒロアキ。また。」

ほんの一瞬だけ悲しい顔をした愛里寿。それを島田師範は見逃さなかった、さすが母親というべきか。

「ちよっと待ってくれるかしら、ヒロアキ君。」

背を向けていた俺はもう一度島田師範と向き合う。

「長時間の運転で疲れたんじゃないかしら？　これ飲んでいきなさい。」

茶色の小瓶を差し出された。恐らく栄養ドリンクの類だろう。ありがたい。

「お気遣いありがとうございます。それじゃ早速・・・」

この時に気づくべきだった。何故瓶に商品ラベルがついていなかったのか、何故瓶の蓋が少し緩かったのか。

「ゴハッ!!! ゲホッゲホッ!!!」

予想していた味とは全く違う液体が流れ込んできてむせる俺。液体が通った場所全部が焼けるような感覚がする。

「あら、やだ。ごめんなさい。間違えてテキーラが入っていたみたい。これじゃあ今日はもう運転は出来ないわよね?」

「……………この近くにホテルってあります?」

口元を拭いながら島田師範に聞く。

「あなたの目の前に無料で泊まれるお家があるわよ。」

「……………マジかよ。」

しばらく黙っていると俺と島田師範のやり取りを見ていた愛里寿が目をキラキラさせながらとどめの一発を放つ。

「ヒロアキ、泊まっていつてくれるの!?!」

この期待に満ちた目を見たら最後、裏切れない。

「……………お邪魔します。」

「ウフフ。いらっしや〜い。」

「ヒロアキ!!こっちこっち!!見てほしいボコグッズがあるの!!」

愛里寿に手を引っ張られ、少しよろけながら島田家を案内され、一夜お世話になるのだが翌日、一緒に車で練習場まで向かい降りたところを3姉妹に目撃され、バミューダアタックから逃げることとなる俺であった。

あんこう鍋とコタツ

ピンポーン

時刻は街並みを朱色に染める頃、安アパートの安いベルの音が短く響く。銀のドアノブを回し、押し開ける。見知った顔が3人飛び出してくる。普段ならそのまま何事も無かったかのようにドアを閉めるだろうが今日は事前に約束していたのでそれはしない。

「来てやったぞー!!入れろー!」

ルミが意気揚々と日本酒の瓶を抱えて入ってくる。まさかもう酔っぱらっているんじゃないだろうか。

「お邪魔します。」

ルミに続いてアズミ、メグミがそれぞれビニール袋と発砲スチロールの箱を持って入る。3姉妹が入ったところでようやく姿が見えた小さな体躯の少女。

「いらっしやい、愛里寿。」

綺麗な髪を片手で撫でながらも片方の手の手首を動かし、入っておいでとジェスチャーする。

「お、お邪魔します。」

少し顔を紅潮させながら俺に見せるために持ってきたであろうボコのぬいぐるみをギュと抱きしめ、ゆっくりと入ってくる。

「ロリコン。」

「シスコン。」

「誰がロリコンじゃ、ボケェ!!」

「シスコンなのは認めてるのね。」

ルミ、メグミと続いた言葉に反論する俺にツッコむアズミ。

事の発端は愛里寿宛てに届いた発泡スチロールの箱。要冷蔵と書かれたシールの箱を開けると中から出てきたのはグロテスクな顔の写真。あんこうだった。そしてその下にはあんこうの切り身。依頼主を見ると愛里寿のライバルにして同性のボコ同志の西住みほさんだった。一緒に添えてあった手紙を見ると大洗で捕れたあんこうをおすそわけしてくれたようだった。

「そうか、大洗ってあんこう鍋が名物か。」

手紙を見ながら俺は何となくつぶやいた。

「こりゃあ、今日のはあんこう鍋しかないっしょ!!」

「いいわね。最近寒くなってきたし。」

「熱燗で一杯ね。」

鍋と酒の話で一気に盛り上がる3姉妹。この3姉妹の性格をよく知る俺は当然の疑問をぶつけてみる。

「……で誰が調理するんだ?」

「「えっ?」」

3 姉妹がキョトン顔をしながら一斉に俺を見てくる。

「『そんなの決まってるじゃない。』」

人差し指を各々俺に向ける。

「……場所は？」

指は動かず。

「マジかよ。」

訝しむ俺の顔を見てアズミが愛里寿に耳打ちする。

「私、ヒロアキのお家行ってみたい。」

「いいぞ。おいで。」

「『うわー』。即答。』」

そんなわけで愛里寿＋3姉妹が一人暮らしの俺の安アパートに来たのである。

「うひょー。コタツだー。」

言うや否やすぐにルミが入り込む。

「しかしあんまり物が無いわね。」

部屋の中をキョロキョロと見渡しながらコタツに向かっていくアズミ。実際に俺の部屋は中央にコタツ、そしてベッドと本棚ぐらいしか特色すべきところがない。

「あれ?でもベッドの上に熊の人形が置いてあるわね。男なのにこんなかわいい人形持つてるなん」「ボコだー!!」

メグミの声を遮つてもものすごい勢いで愛里寿が俺のベッドの上に乗る、置いてあったボコの人形を手取る。そして自身の持っていたボコの人形と並べてウンウンと満足げに頷いている。ああ可愛い。

「・・・で何だつて?」

「何でもないわ。」

俺と同じ気持ちなのだろう。恍惚の表情を浮かべてさっきの言葉はなかったことにしたメグミ。他の2人も同じ表情だ。

「じゃあそろそろ作るか。」

「「そう。じゃあよろしく。」」

「お前らなあ。」

コタツに入ったまま出てくる様子のない3姉妹。全部人任せですか、あーそうですか。ムカ着火ファイヤーぐらいの感情を心に燃やしつつビニール袋から食材を取り出していると

「ヒロアキ、私も何か手伝う。」

エンジェル愛里寿がご降臨なされた。俺の心のムカ着火ファイヤーはすぐに鎮火され、楽園への扉が開かれそうさ。しかし大事なエンジェルに包丁を使わせて万一の事があつてはいけない。ここは安全な仕事をさせなくては。

「じゃあこれを持っていてくれるか。」

愛里寿にタブレットを手渡す。

「これは？」

「そこに調理方法が書いてあるから俺に見せていて欲しいんだ。」

あんこう鍋を調理するのははじめてなので作り方がわからない。なので元々タブレットを見ながら調理する予定だったのだが何分一人暮らしのキッチンなので狭く、タブレットを置けるスペースが無いのだ。

「それをやってもらえるとすごく助かるんだが。」

「わかった!!」

エンジェルの笑顔が眩しい。先ほど鎮火した炎が違ったものになって燃え上がりそうさ。いかんいかん。頭を振り、雑念を消して包丁を握り食材を切っていく。

「よーし、エロ本でも探すか!!」

突然発せられたルミの言葉に危うく指を切りそうになった。振り向くとベッドの下を漁っている。俺と目が合うとニヤリと悪い笑顔をを見せてくる。ほほう、そんなに俺に対する愛里寿の好感度を下げたのか。

「おっ！これは？」

「えっ？ 何があったの？」

「早く見せて。」

他の2人もノリノリのようだ。同罪だな。

「じゃーん、こんなの見つけました!!」

そう言つてとびきりの笑顔で見せつけてきたのはタバコの箱。

「隊長。彼、タバコ吸ってますよ。タバコは体に悪いですし、クサイ。そして何よりタバコの副流煙は周りにいる人にも害がありますよ。」

つらつらとタバコの箱の側面にでも書いてありそうなことを言ってくるルミ。確かに俺は喫煙者だがヘビースモーカーではない。あと家にいる時しか吸わない。それも1週間に1、2本程度だ。たまに吸うと頭の中がリセットされるような気がして吸っている。だが別に無くなっても困らない。

「ヒロアキ、タバコやめた方がいいよ。」

俺の裾を引っ張り、潤んだ瞳で見上げてくるエンジェル愛里寿。そしてその様子を見てしてやったり顔の3姉妹デーモン。

愛里寿と同じ目線まで屈み、できるだけ優しい顔を作りながら俺は悪魔を退治することにした。

「そうだな。やめた方がいいよな。でもな愛里寿、タバコを吸うのは理由があるんだ。それはストレス発散なんだよ。で、そのストレスの原因はあの3人がいつも飲み過ぎていつも俺が介抱しなきゃいけないことなんだ。だからあの3人がもう少し、お酒を控えてくれたら俺もタバコをやめられるなあ。」

わざとらしく大きい声で言いチラリと3姉妹を見る。急に標的が自分たちになったことで飲み過ぎて吐きそうな時と同じ顔色をしている。

「3人とも。」

「「は、はい!!」「」」

戦車道をしている時と同じトーンの愛里寿の声が聞こえて背筋を伸ばす3姉妹。

「お酒飲むの控えて。」

「・・・はい。」

伸ばした背筋がポツキリ折れたようである。机に突っ伏してしまった。隊長に言われたらしかたない。これでしばらく大人しくなってくればいいがどうだろうな。

「ありがとう愛里寿。じゃあコレはいらないな。」

ルミの手からタバコの箱を取り、ゴミ箱へ投げる。そしてキッチンへ戻る。

愛里寿、画面スクロールして。そう言うと小さな手が一生懸命動く。愛らしい動作が数回され、できたあんこう鍋。コタツに鍋を持っていく。

「ほらできたぞ。顔をあげろ。」

先程の愛里寿の言葉がよほど効いたのか調理中もずっとコタツに突っ伏したままだった。はい、はい、とやる気のない声と共にのそのそと顔をあげはじめた。しようがない。

「ほら、熱燗も用意したぞ。」

「「さっすがあ!!」」

目を輝かせる3姉妹。鍋を中心に置き、熱燗を渡すとすぐさま飲みはじめた。くうくと目を閉じて味を噛みしめている。やれやれと見ているとひとつの問題に気づいた。コタツは正方形で出来たもので各所1人が座れるスペース。今はルミ、メグミ、アズミが座っており残る1つは愛里寿が座るとして・・・俺が座る場所が無いな。しかたないかと思いテーブルの少し離れたところに座り胡坐をかいていると

「んしょ。」

程よい重み加わる。エンジェルが聖域もとい胡坐の上に降臨なされた。わーお。

「愛里寿、これは「ヒロアキ!もつとコタツに近づいて!!」

「あつ、はい。」

言われた通りにコタツに近づく。3姉妹のジト目が痛い目を合

わせないようにしよう。

「じゃあ、みんないただきます。」

「いただきます。」

愛里寿の声によってジト目をやめて笑顔になった3姉妹。愛里寿、大きくなってもお前だけはこうなるなよ。

鍋も食べ終わり今日は珍しく酒もそこそこにして帰ることにした3姉妹。まあ愛里寿に言われたから当たり前か。最寄りの駅まで愛里寿と3姉妹を見送る。

「じゃあ気をつけて帰れよ。まあ今日は酒もほどほどだから大丈夫だと思うが・・・毎回こうだといいいんだがな。」

「うるさいわね。」

「私たちの唯一の楽しみが・・・」

「私たちが何したっていうのよ!!」

「日本に酔っ払い迷惑防止条例がないのが救いだな。」

クレームのオンパレードに遠い目をしながら愛里寿に視線を移す。

「またな愛里寿。遅いから気を付けて帰るんだぞ。」

「・・・うん。」

どこか元気がないがこればかりは仕方ない。それに明日またす

ぐ会えるのだ。

「じゃあな。」

手を挙げて別れの挨拶をし、来た道に戻る。

3姉妹も改札を通り、ホームへ向かっていく。しかし愛里寿はボコの人形を抱きしめたまま動かないでいた。

「あれ？隊長どうしたんですか？」

「はやくしないと電車来ちゃいますよー。」

「これ逃したら次ないですよ。」

ルミ、メグミ、アズミの言葉に急に顔をあげて愛里寿は答える。

「私、忘れ物したから戻る。先に帰ってて!!」

そうして反対方向へ走りだす愛里寿。

「ちよ、ちよつと隊長ー!」

ルミの声も届かず、闇に消えていく愛里寿。

ピンポーン

皿洗いをしていると急にベルが鳴り、ビクつく俺。扉を開けると息を切らして愛里寿が立っていた。

「ど、どうした？愛里寿。」

「えっと……その……わ、忘れ物!!」

「えっ？何忘れたの？」

「……ボ、ボコの人形。」

「いや、今手に持つてるよな？」

「……。。。」

しばらく沈黙が続き、顔を真っ赤にした愛里寿がもう一度口を開く。

「もう電車が無いから泊めて!!」

「ええええええ!!」

突然の発言に驚いたが

「あつ、いやちよつと待て。」

すかさず携帯を取り出しある番号へかける。

「どこにかけてるの？」

キョトン顔で聞いてくる愛里寿。

「千代さん。迎えにきてもらおう。」

俺の発言に目を大きく見開いてショックを受けているように見え

る愛里寿。何故だ？

まあいいとにかく千代さんと話そう。こういう時の為に前に電話番号を交換しといて良かった。数コール後、落ち着いた声のもしもし？が聞こえてきた。

「あつ、どうもヒロアキです。夜分遅くにすみません。」

俺は千代さんに今までの経緯を説明し迎えに来てほしい旨を伝えた。ちなみに俺も今日は酒を飲んだから車の運転は出来ない。

「あらそうなの・・・ちよつとまってね。」

なにやら電話越しでござと音が聞こえてきてその後プシュ!!ゴクゴクという音も聞こえてきた。

「ごめんなさいねヒロアキ君。私もお酒飲んでしまつて迎えに行けないわ。」

「いや明らかに今飲んだでしょ。」

「お酒を飲んでしまったという事実には変わらないわ。それにねヒロアキ君。一宿一飯の恩義って言葉知ってる？」

それをここで出してくるか。前回島田邸にお世話になった俺。一宿一飯の恩義がある事実も変わらない。

「愛里寿を泊めろと？」

「あなた恩を仇で返すような人間じゃないでしょう？」

俺もずいぶんと信用されたものだ。自分の娘を一人暮らしの男の

ところに泊めるなんて。

「愛里寿に代わってもらえるかしら？」

携帯を愛里寿に渡す。数回、うんと言った後　おやすみなさいお母様と言い電話を切った。

「泊まっていっていいって!!」

そんな満面の笑みをされたら答えは1つしかない。

「・・・どうぞ。」

愛里寿を家に招き入れた。

翌日、一緒に練習場まで来たところを3姉妹に目撃され、バミューダアタックから逃げることで以下略。

ダメウーマンズとDirty Work

「お願いします、付き合ってください!!!」

「はっ?」

いつもと変わらずセンチユリオンの整備をしていると突如、背後からの大声が聞こえた。体をビクつかせながら振り返るとそこには土下座をかますお馴染みの3姉妹。

ありえない光景を目にしてやや目を細めていると急にルミが顔をあげた。

「あつ、本気で言ってるんじゃないのよ。あくまで『形式上』付き合ってたって言ってるの。」

よく言ってる意味がわからないので詳しく話を聞こうとしたが

「やだ!! 勘違いさせちゃったかしら?」

「大丈夫よアズミ。こいつロリコンだから。」

続いたアズミ、メグミの言葉でその気が失せた。

「さくて、整備も終わったし帰るか。」

「すみませんでしたー!!! お願いだから帰らないで!!!」

「だー！！！わかったから足を離せ！！」

血眼になって作業着の裾を引つ張ってくる3姉妹の狂気から話を聞くことになってしまった。

場所を食堂に移し、席に座るなり各々捲し立てるように喋りだしたので頬杖を突きながら窓の外を見る。最初から真面目に聞く気なんてないしな。

落ち行く夕日を見ながら「最近はやがのびたなあ。」と初孫を見るおじいちゃんのような穏やかな顔をしてると机の上からドンツと衝撃と共にメグミの声が聞こえてきた。

「ちよつと！！聞いているの？」

「あー、聞いているよ。要約すると各々の高校時代の友達に彼氏が出来て、見栄を張って自分にも彼氏が出来たと言ってしまい、偶然にも各自今度の連休初日に会おうということになってしまつて俺に彼氏のフリをして欲しい。そういうことだろう？」

「い、意外と話聞いているのね。」

「まあそういうことなの、だから」

「二お願いします。」

「メンドクサイ。断る。」

席を立って出口に向かって数歩進むとバスケのデイフェンスのごとく横からフェードインし、俺と対峙する3姉妹。

「ちよつと待ちなさいよ!!美女3人がこんなにも頼んでいるのに即答で断るってどういうことよ!!」

声を荒げるルミ。そしてコクコクと頷くアズミとメグミ。

「別に俺じゃなくても他の男に頼めばいいだろ。美女さん達なら楽勝だろ?」

「「……………」」

「…………嘘だろ? おまえらまさか!!」

「やめて!!それ以上は言わないで!!」

「男の知り合い多かつたらとつくに彼氏が出来てるわよ!!」

「だいたい男との出会いがないのよ!!」

地雷を踏んでしまったようで取り乱す3姉妹。こんなにも男友達がいなかったとは。まあいい、この間に通り抜けよう。そろりと足を動かしてゆつくりと進む。しかし

ガシッ

そうは問屋がおろさなかった。女子とは思えぬ握力で腕を掴まれ、ゆつくりと振り返ると満面の笑みのバミューダトリオ。

「何もタダでお願いを聞けって言ってるんじゃないの。メグミ!! アズミ!!」

ルミがパチンと指を鳴らすとどこから持ってきたのか紙袋を取り出してきた2人。

まずアズミが紙袋から物を取り出す。

「これは大洗の期間限定のボコグッズ。ちなみにその期間はつい最近終わったわ。」

「なっ!!」

何てことだ。ここ最近整備が忙しかったせいかそんな最大重要事項の情報を見逃してしまうとは、不覚!! 大洗の期間限定・・・ボコミュージアムか!!! くそー遠いぜ!!

頭を抱えながら自己嫌悪に陥っているとさらにメグミが追い打ちをかける。

「こっちにも同じ商品が入っているわ。これをアンタから愛里寿隊長に渡せばどうなるかしら。」

俺から愛里寿に? ボコグッズを? しかも大洗の期間限定商品のやつを?・・・そんなの。

「大洗!!」

「期間限定!!」

「ボコグツズ!!」

「With A !! (愛里寿の分も)」

「集合時間と場所を教えろ、ダメウーマンズ!!」

こうして俺は3姉妹の彼氏のフリをすることになった。

当日の朝になり、指定された場所に向かう。最初はメグミからだ。5分前には着いたのだが気合の入った服装のメグミがもうそこには居た。おそらく残る2人も同じような感じなんだろうなあと早くも今日1日について憂鬱になっているとメグミがこちらに気づいたように寄ってくる。

「約束の5分前・・・その服装・・・まあいいわ。及第点をあげる。」

「そりやどうも。で、お友達は?」

「近くの喫茶店で落ち合うことになってるの。たぶん先に着いてると思うわ。行きましょう。」

言い終わると手を差し出された。一瞬の思考停止。しかしすぐに理解する。

「まだ早くねえか？ フリは喫茶店前ぐらいからでいいだろ？」

「何言ってるの!! 万が一喫茶店入る前から目撃されたら怪しまれるじゃない!!」

「さいですか。じゃあはい。」

差し出された軽く手を握って歩き出そうとするがメグミが少しビクつき足を進めようとしない。

「? どうした？」

「な、何でもないわ。(体格の割には手、かなり大きいのね。)」

立ち止まったメグミを少し不思議に思いつつもあまり気に留めることはせず、今度は俺の方から行くぞと声をかけ喫茶店に向かった。

喫茶店に着き、扉を開けると来客を知らせる小さなベルが鳴る。するとこちらを凝視するカップルが1組。女性の方が立ち上がりこちらに駆けてくるとメグミも駆けだした。

「キヤー!! 久しぶりメグミー!!」

「キヤー!! 本当、久しぶりー!!」

お互いに指を絡めて小刻みにジャンプをする。いつも思うが何なのコレ? 儀式なの? 再会するたびにキヤツキヤツしないと女子って死ぬの?

あつ、他のお客さんの視線が痛い。店内は結構空いていて人は少ないが、故に落ち着いた雰囲気をごちらがぶち壊してしまった。すみま

せんすぐに修正いたします。

俺は2人の肩を叩いて人差し指を立て、鼻の前に持ってきてジェスチャーをする。2人もすぐ気付いたようで赤面しながら席に向かう。俺も席に向かう途中で向こうの彼氏さんが苦笑していたのを見て何故か親近感が湧いた。

席に着き、まずは自己紹介からという流れになった。

「・・・で、こ、こっちがワタシノカレシノ」

「ヒロアキです。はじめまして。」

緊張してカタコトになってるメグミを遮って俺は話し始めた。あぶねえあぶねえ。

「ふーん。」

お友達が品定めをするような目で俺を見てくる。鑑定に出される骨董品ってこんな気持ちなのか？ オープンザプライス。

「ねえねえ彼のどういうところが好きになったの？」

いきなり直球のストレートを投げてきたお友達。隣にいるメグミの顔を見ると笑顔のまま冷や汗をかきながら固まっていた。おいおい返しは大丈夫なのか？

「そ、そうねえ・・・妹・・・!!・・・そう！家族思いなところかしら！

彼は年の離れた妹がいるのだけどその子の為にママに贈り物とかしてるから私も大事にしてくれるかなあ？つて」

「(普段から人のことロリコンって言うてる口がよく言うぜ。だいたいこんだけ口が回るなら大学にいる男どもをちよつと引つ掛ければなびきそうなものだが・・・いや、そういう時はよだれ垂らしてハアハア言ってるから男たちが逃げ)ゴフツ!!!」

俺の考えていることを読んだようでメグミからの肘打ちが脇腹に決まり、飲みかけていたコーヒートを少し吐く。

するとすぐに彼氏さんがおしぼりを差し出してくれた。あつ、この人絶対いい人だ。いい男を捕まえたな彼女さん。

俺と彼氏さんのやり取りなんて気にも留めず女子たちは笑顔で話を続ける。

「えー!!それってまるで結婚を前提に考えてるみたいじゃん!!激アツ!!」

「ゴバツツ!!!」

今度はメグミが飲みかけのカフェオレを吐き、咽ながら俺の方を睨んできた。何とかしろということか？　しかたない

「そういえばお二人の出会いとかも聞いてみたいんですけど・・・。」

そう言うとお友達は待ってましたと言わんばかりに目を輝かせて話し始めた。それはもう止まらないほどに。

そのまま上手く話題をそらしてこちらが聞き役になり解散までの時間を稼ぐことが出来た。

「じゃあねー、メグミー。また会おうねー。」

「うん、また今度。」

喫茶店前で別れて仲良く手を繋いで去っていく本物のカップルを見送る。そして見えなくなつた途端、脱力感が襲ってくる。

「はあー。」

「なんでこんなに疲れなきやいけないのかしら。」

「俺のセリフだ!!しかも俺は同じようなことが今日、あと2件も残つてゐるんだぞ!!」

「彼氏が出来てもこんなに疲れるのかしら?」

「聞いてねえし・・・そりゃあ偽物だからな。」

「偽物?」

「本物の彼氏だったら友人を騙してる罪悪感なんてないし、彼氏が一緒にいるだけで楽しいんだと思うぞ。お前の友達みたいに。」

「.....」

「(なんだ?また黙りやがった。つと、もうこんな時間か。やばい、急がないと次のアズミの時間に遅れる!!)」

俺はメグミを置いて次の場所を目指した。

「一緒にいるだけで楽しいねえ……。まあ少なくともコイツといるときにつまらないことはなかったか。」ねえ、あんた。実験的、あくまで実験的で一時的にだけどあたしと……。いないし。あーっ!!もう!!」

「はっ、はっ。」

道行く人々の間をすり抜けながら走る。メグミのところでは思いのほか時間を取られたせいで間に合わないかもしれない。いや間に合わせねば!! ボコグツズの為にも!! というわけで俺は今走っている。見えた!!あそこが集合場所だ!アズミもいる!!

「はあ、はあ。ま、待たせたな。」

「ちよつと遅……。どうしたの?汗だくじゃない!!」

「メグミのところが長引いてな。歩いてると間に合わないから走ってきた。友達は?」

「まだ来てないわよ。」

「そりゃ良かった。」

膝に手を突き、地面とにらめっこしながら話す。噴き出す汗が止まらない。すると首裏に冷たい感覚が襲う。

アズミがボディペーパーで拭いてくれているようだ。

「もう、彼氏が汗まみれなんて印象悪いじゃない。ほら、顔あげなさい。」

「すまない。助かる。」

ボディペーパーをもう2〜3枚取り出して俺の首筋を拭いてくれる。するとそこへ

「ひゅー。お熱いね、お二人さん。」

1人の女性が話しかけてきた。

「久しぶり、アズミ。」

「!!。久しぶり!!・・・あつ、いやこれは違うのよ。これは・・・」

「そんなに照れなくていいって!!こんにちはは、彼氏さん。」

視線をアズミから俺に移し、挨拶されたので俺も軽く返す。後ろの方を見ると彼氏と思われる男性が退屈そうにスマホをいじってた。俺と同じで無理やり連れてこられたのだろう。

対して女性陣は楽しく話を進め、ショッピングモールに行くことが決定したようだ。

「……………」

「……………」

店の売り場前に無表情の男が2人。対照的に中ではアズミ達が満足げな表情で絶賛買い物中。ちらりと彼氏さんを横目で見ると相変わらずスマホをいじって俺にしゃべりかけるなオーラを滲み出している。

まあ、正直俺もそれはありがたいことだった。深く突っ込まれた質問をされればボロが出るからな。こうして大人しく時間が過ぎるのを・・・

「ん?」

何気なく店内の方を見るとガラス越しにアズミの友達が手招きをしている。彼氏の方ではなく俺に。店に入れということだろうか。

店に入り彼女の近くまで来ると

「ねえねえ、どっちの服がアズミに似合うと思う?」

とそれぞれの手に服を持って問うてきた。

出た!!女子の儀式その2。これどっち選んでも正解ないんだよなあ。

「ちよつと、何聞ってるのよ!!」

「いいじゃん別にこれくらい。ねえ、ヒロアキさんはどっち?」

答えねばならぬか聖なる審判。

「こつち。」

「ほう? 理由は?」

「こつちの色がアズミが好きそうだからな。俺はファッションは詳しくないから本人が好きに着ればいいと思ってる派でね。」

「なるほど。」

ニヤニヤと俺とアズミを交互に見ながら頷くお友達。何なんだ？アズミも何か言えばいいのに・・・

「……………」

いや何で顔を赤くしてんだ!!何か言い返せ!!

そんなやり取りがありつつもどうにかバレずに時間まで押し通せた。

「バイバイ、アズミ。」

「またね。」

今度は手を振って見送ってもらおう側になった。笑顔を作りながら早歩きで移動し、急いで角を曲がって建物に身を隠す。

「はあく。」

やはりため息が重なった。

「どうにか上手く騙せたな。」

「……………」

「どうした？」

「何で私の好きな色知ってたの？」

「ん？ ああ。アクセサリーとかペンとかあの色が多かったら？
だからそうかなと。」

「(愛里寿隊長以外も見てるのね。本当に意外。)」

「(おっと、今度はルミの時間か。また汗だくになるのは嫌だから早めに行こう。)」

「じゃあ試しに私が好きな食べ物とか戦車を当ててみな……いない。
はっ!!私、今何を聞こうとした? いやー!!」

「おー、約束の10分前にいるとは感心感心。」

「同じこと1日で2件もやってれば嫌でも学習するわ。」

「はははっ。結構結構。」

指定された場所で待っていると軽快な口調でルミが現れた。改め
て思うが女子たちは本当に服装に気合が入ってるな。

お互いの彼氏見せ合うのってある意味、戦場に赴くのと同じなのか

？ 勝ち負けがあるのか？ だとしたら俺は一生足軽だわ。

「んで、どういう予定なの？」

「一緒に夕飯食べて終わり。だから長くならないと思うわ。あつ、ファミレスだから安心して。」

「それは良かった。んじゃ、はい。」

そう言っ手て手を差し出す。

「おーおー、本当に学習してる!!」

「・・・別に繋がなくてもいいんだぞ。」

「いやいや失礼。予防線は張っておきたいから。」

ケラケラと笑うルミに若干イラつきながら手を繋ぐ。そして友達が待っているという場所へ向かった。

無事に友人と再会し、ファミレスで注文を終えて楽しく談笑しているとまた例の質問が今度は俺にとんできた。

「ヒロアキさんはルミのどこを好きになったの？」

チラリとルミを見る。あつ、案の定、今朝のメグミと同じ顔をしている。とてもじゃないが助け舟は出してもらえそうにない。

しかたないどうにかひねり出すか。

「そうですねー。一見知的でクールに見えて実は熱く、周りが見えなくなる人が多いんですけど、でも後輩とかのフォローとかしつかり

しててそういうギャップにやられた・・・といったところですかね。」

「素敵〜!!ちゃんとルミのこと理解してくれてるじゃん!!」

「・・・え? あつ、ああ。そうなのよねー。あは、あははは。」

「じゃあルミはヒロアキさんのどこを「目玉焼きハンバーグのお客様」。」

「はい!!俺です!!」

ナイスタイミングううう!!!!店員さん!!! しかしこのままでは同じ質問をされて終わりだ。だが俺は今日1日で学習した。こういうときは

「そういえばお二人の出会いとかも聞きたいんですけど!!」

お友達の目の色が変わった。やはりこれは鉄板の質問のようだ。自分たちのことを喋りたくてしようがないのだろう。

楽しく話し出したお友達に安堵を覚え、ルミを見てみると何やら俯いてモジモジしていた。何だ?まだ不安要素でもあるのか。それはさすがに勘弁してくれよ。

少しの不安がありながらも無事に食事も終わり、お友達カップルを駅の改札まで見送った。

「じゃあねルミ〜。」

「じゃあねー。」

最後まで気を抜かず、ちゃんとホームまで上がり終えるところを確認する。そこで俺の仕事が終わったことを実感し、疲労が一気に四肢を駆け巡る。

「あー、本当に疲れた。3徹するのといい勝負だぜコレ。」

両腕を天に突き上げ、ポキポキと肩を鳴らす。さて仕事が終わったからとつとと帰るか。

「・・・あんたさ、あの時言った言葉ってもしかして本心で思ってること言ってくれた？ だとしたらあたしらもうちよつと仲良く・・・いない!!!ちよつとどこいったー?」

こうして俺のハードな1日が終わった。

これがきつかけで俺と3姉妹の関係が少し変わったのか、それとも変わらなかったのかはまだわかりそうにない。

おまけ

「えっ？ このボコグッズ全部持ってるの？」

「うん。だってボコミュージアムのスポンサー、ウチだから。」

「あっ。」

あの3姉妹、気づいててハメやがったなあああ
!!!!!!

聖グロリアーナ 本音はお茶会の後に

ふわりふわりと泳ぐ白いレースのカーテンを制止すべく窓を閉める。換気は十分にできた。ポットから湧き出る湯気も大人しくなり先程まで行っていた作業の続きを行う。丸テーブルに白いクロスを敷き、ケーキスタンドを真ん中に置く。下からサンドイッチ、ケーキ、クッキーの順番で並んでおり、クッキーの香ばしさが一気に気品を漂わせる。人数分のティーカップを用意し、紅茶を注ぎ始めるとポットだけだった湯気が複数になり部屋全体に茶葉の香りが行き渡る。全てのティーカップに紅茶を入れ終わると見計らったかのように扉が開かれた。

「準備はできたかしら？ハルキ。」

「はい、できていますよ。ダーズリン様。」

聖グロリアーナのお茶会のはじまりです。

ここ聖グロリアーナでは定期的にお茶会を開催する義務がある。英国の作法や格式に特化しており、紳士淑女の育成に力を入れていく。本来であればお嬢様、お坊ちゃんしか入学できないのだが、整備の腕を買われて一般家庭の俺も入学できてしまった。ただ整備科に入った俺も例外ではなく、格式や作法を学ぶ羽目になった。ちなみに校内で『俺』と言う一人称を使つてはいけない。自分のことは『私』^{わたくし}と言わなければならない。これが入学当初、なかなか出来ずに言葉を発するたびに先輩に注意されたものだ。3年生になった今では使い分けができるようになったが自分のことを『私』^{わたくし}と言つていて恥ずかし

い時が結構ある。そして今は戦車道の授業後のお茶会だ。

「ハルキさんの入れたお茶はいつ飲んでも美味しいですわね。」

「ありがとうございます。アッサムさん。」

「何か秘訣でもあるんですか？」

「いえ。ただ先輩たちに教えて頂いたことを守っているだけですよ、オレンジペコさん。」

2人の少女から賛辞を頂いた俺だが、この喋り方のせいで嬉しさよりも笑いの方がこみ上げてくる。なんて似合わない言葉で喋っているんだろうってね。

「ハルキ。」

ここで俺の名前を呼び捨てにするのはウチの隊長だけだ。無言で振り返りすぐにポットを持ち、空になったカップに紅茶を注いでいく。紅く透き通った波がカップいっぱいには広がっていき、それが落ちて着くと反射でダージリンの顔を映し出す。カップを持ち上げ、香りを楽しんだ後に目を閉じて音もなく飲み始める。これくらいは朝飯前に出来ないといけないらしい。大変だね、紳士淑女の皆様は。

「そういえば・・・また今日もローズヒップが暴走したようね。」

隊長から唐突に発せられた言葉を聞いて部屋にいる全員が遠い目をする。ああ、またかと。

「アッサム。」

「・・・お呼びしますわね。」

みなまで言わずともわかるアッサムさんは部屋に備え付けてある電話を取った。

「ローズヒップ、アッサムです。・・・ええ、そう・・・来てちょうだい。」

あまり気乗りしない表情で電話を切る。その様子に周りも静かになる。

「・・・もう一つ、椅子とカップをご用意しますね。」

沈黙に耐えられなかった俺はそう言って予備の椅子をテーブル近くまで運ぶ。すると廊下からドタドタと足音が聞こえ、勢いよく扉が開かれた。

「お呼びでございますの？アッサム様!!」

「廊下は走ってはいけないと何回言ったらわかるのかしら・・・。」

毎度のことなので面と向かって注意はせずに頭を抱えるアッサムさん。心中お察しします。

「今、紅茶をご用意しますね。」

予想以上に早い到着だったので紅茶をテーブルに用意できなかつ

た。さすが聖グロ一の俊足…自称な。椅子に座って待つようにジェスチャーで促したが

「あつ、お構いなくですわ!!先輩の手を煩わせるわけにはいきませんですの!!」

そう言つてポットの場所まで向かい自分で紅茶を入れはじめたが、ガチャガチャ ドボドボという大きな音が響く。素人でもあんなに大きな音出すのは難しいぞ。どうにか紅茶を入れ終えてカップを運びはじめたのだが、何故か走る。そして自分の足につまづいた。

「「「あつ。」」」

その様子を見た部屋にいた全員の心臓がキュとなる。だがあらかた予想できた事態なので体はすぐに動いてくれた。まず右腕でローズヒップを抱きとめ左手でカップを掴み、紅茶がこぼれぬよう慣性の法則にのっとり進行方向に沿ってゆっくりと減速させた。カップから紅茶の熱が手に伝わり熱くなってきたのでテーブルの上に置く。すると周りから安堵のため息が聞こえた。

「「「はあく。」」」

「ローズヒップさん、お気持ちは嬉しいのですがこれは私のお仕事です。ので気になさらずに何もしない、というのも礼儀のうちなのでですよ。」

「まあ、そうでしたの!!それは大変失礼いたしましたわ!!」

・・・これはまた繰り返すな。何回肝を冷やせばよいのだろう。

「あの、そんなに強く抱きしめられると痛いですわ。」

あまりにも必死だったから抱きかかえているのを忘れていた。知らないうちに力が入っていたらしい。

失礼いたしました、と言ってローズヒップを降ろすと何やら音が聞こえてきた。

カタカタカタ

カップとソーサーが当たる音。見るとダーズリンが眉をピクつかせながら震えている。完全に怒ってるね。俺がローズヒップを抱きかかえたから面白くないのだろう。しかしさっきのは不可抗力だ。なので気づかないふりをおこう。

「しかしハルキさんは優しく物事を教えてくれますわね。他の方々は呆れて教えてくれないことが多いのですよ!!」

((自覚はあるんだ。))

ローズヒップの問いに茶葉を交換しながら答える。

「ご存じかもしれませんが私は皆様と違っていわゆる一般家庭で育ちましたので入学するまで一切、お茶の作法やマナーがなっておりませんでした。それでも今こうして紅茶を皆様に振舞ってるのは先輩たちが根気よく丁寧に私に教えてくださったおかげなのです。ですから私もそれに倣っているにすぎませんよ。」

実際にそうだった。よく注意はされたものの厳しいものではなく優しく根気よく先輩たちは教えてくれた。だから俺も期待に応えようとした。ただそれだけの話。よくある話なのだ。

「フッフ。そうねえ、入学当時のハルキはそれはもうひどくて見ていられなかったわ。作法はなつてない、紅茶はこぼす、カップは何回割ったことかしらねえ。」

やけに棘のある言い方をしてくるダーズリン。よし、ここは

「ええ、ひどかったですね、あの頃は。そういえばダーズリン様も先代のダーズリン様にかなりしごかれて泣いていたように記憶しておりますが……」

「なっ!？」

「ブッフ。」

お返しをお見舞いしてやった。3年生で事情を知っている故に吹き出すアツサムさん。そんなアツサムさんを睨みつつもいつもの雰囲気を取り繕うダーズリン。

「こ、こんな格言を知っているかしら？ 失敗の「失敗の最たるものは、なにひとつそれを自覚しないことである。」

言葉を被せてやった。目を閉じたまま肩を震わせるダーズリン。

「イギリスの歴史家のトーマス・カーライルの言葉ですね。」

「さすがです。オレンジペコさん。」

さて、ここら辺で勝ち逃げさせてもらおうかな。

「おや、もうこんな時間ですか。私はそろそろ戦車の整備をしなくては いけませんのでそろそろこのへんで。」

そう、あくまでこれは副業。俺の本業は整備士なのだ。

わざとらしく時計を見て部屋を出るべくドアノブに手をかけると 後ろからカンツとカップを置く音が聞こえた。

「待ちなさいハルキ!!・・・整備が終わったら私の部屋に来なさい!!」

振り返ると涙目のダージリンが顔を赤くして睨んでいた。ああ、可愛いな。

「・・・かしこまりました。それでは皆様、ごきげんよう。」

そう言い残して扉を閉め、俺は整備場へ向かった。勝ち逃げは無理だったようだ。

整備を終え、言われた通りダージリンの部屋の前まで来た。ノックを数回する。

「入りなさい。」

いつもより少し低い声が響く。扉を開け部屋に入るとお茶会と同じく制服姿でベッドに座っているダーズリンがいた。

「そのソファに座りなさい。」

素直にベッドの近くに置かれた低いソファに座る。するとダーズリンの足が俺の頬に伸びてきた。ゴワゴワとしたタイトの感触が頬を襲う。

「どういうことかしら、ハルキ。隊長である私にあんな恥をかかせるなんて。」

足で頬をグリグリとされながら問われる。普通に痛い。

「どうもこうも、ただの戯れだろ？恋人同士の。」

そう、お察しの良い方はとつくに気づいているでしょうけど俺とダーズリンは恋仲だ。お互いにダメダメな1年生で知り合い、努力して上り詰めてたことを知っているからこそ惹かれあうのに時間はかからなかった。

「こ、恋人!?! で、でも他の生徒がいる前であんな「じゃあ、今ならいいんだな?」

そうやって足を引っ張る。いつまでもグリグリされて喜ぶ性癖は俺には無いんでな。

「キャ!？」

足を引つ張ったせいで黒タイツが少しずれてしまった。足の先端部分にあまったタイツ部分が力なくうなだれる。ダージリンは体勢を崩して両腕を使ってベッドにしがみついている状態だ。

「や、やめなさい」下着見えてるぞ。」

「えっ? いやっ!!」

俺の言葉にとっさにスカートを抑えたが、代わりにベッドにしがみつく術が無くなったのでそのまま頭が床に落ちそうになる。素早く俺の右腕を頭の部分に、左腕を膝裏に回し掬い上げる。いわゆるお姫様抱っこ状態だ。

「そんなに恥ずかしかったのか? ダージリン?」

2人だけのときは様づけで呼ばない。これは彼女が決めたルールだ。

「・・・あなたがローズヒップを抱くから。」

そっぽ向きながら答える。

やつと本音を漏らしたな。しかし言葉だけ聞くと俺がすごい浮気男に見える。

「不可抗力とはいえ、悪かったよ。」

素直に謝ってみるがこつちを向いてはくれない。

「ダージリン。」

「……なに……!!!」

少しだけこつちを向いてくれたので、すかさず唇を奪う。最初は抵抗して俺のシャツの襟を掴んで離そうとしてきたが、やがて力なく腕が落ち、すべて受け入れたようで大人しくなる。

「……卑怯よ。」

「All, s fair in love and war. イギリス人は恋と戦争では手段を選ばない、だろ？ 許してくれよ。」

「嫌よ。」

「じゃあ、どうすればいい?」

「……明日……明日の朝、私の為だけにモーニングティーを入れてちょうだい。」

「お安いご用です。紅茶は何がいい?」

そうやって俺は彼女の名前を呼ぶ。ダージリンではなく本当の彼女の名前を。

ヨコハマ買い出しホニヤララ

ハアと、息を吐くと白い霧が出るそんな季節になった。あと1カ月以上は先だというのに街並みはイエス・キリストの生誕祭の飾りつけで染まっている。イギリスではどんな風にクリスマスを過ごすのだろうか？昔習った気がしたが忘れた。帰ったら調べておこう。

例年通りの寒い気温の嫌気を体で表すように猫背になりながらコートのポケットに手を突っ込み、俺はある店を目指していた。学園艦が横浜へ帰港した本日、どうしても仕入れておきたいブツがある。細い路地をいくつか抜け、姿を現す木製の看板。擦れていて見にくい。がそこには紅茶専門店と書かれている。

少し立てつけの悪い木のドアを開けるとギイと重苦しい音が鳴る。中に入ると様々な茶葉の香りが鼻腔をついてくるが不思議なことにこんなに色々混ざっているのに嫌にならない。むしろ心地よい。

香りを数秒堪能し、カウンターに目を向けるとつまらなそうな顔をした初老のメガネの男性と目が合った。こここの店主だ。俺を見るなり先ほどの顔とは打って変わって、年の割には綺麗な歯を見せて笑ってきた。

「久しぶり。そうか、学園艦来るの今日だったか。」

「お久しぶりです。ええ、なのでいつもの貰いに来ました。」

「はいよ。いつものダージリンの茶葉多めのセットね。あと飲んでいきなよ。」

「ありがとうございます。いただきます。」

そう言い、俺がカウンターに座ると店主は慣れた手つきで棚に置いてある茶葉の入った銀色の缶を開けて持ち帰り用の小さな缶に移しはじめた。作業をしている店主に俺は学園艦であつた他愛もない話を始める。これが俺たちのいつものやりとり。店主はとにかく人の話を聞くのが好きな素敵な紳士なのだ。俺は愚痴も吐けるしギブ&テイク。ちなみにお互いに名前は知らない。今更聞くのも野暮ってものだ。

そして1時間ほど雑談と名も知らない店主の紅茶を愉しんだ俺は缶の入った紙袋を受け取り、会計を済ませる。

「ありがとうございます。また来ますね。」

「ああ、楽しみに待ってるよ。」

店主の笑顔を背に、立てつけの悪いドアを開けると今度は冬の空気の匂いがした。紅茶で体が温まったおかげで帰りの足がすごく重くなる。まだ16時過ぎだというのにあたりはもう暗闇が迫っていた。紙袋を片手に持ち、もう片方をコートのポケットに入れて来た道をトボトボと歩く。狭い路地から大通りに出ると早くもチラホラと街灯がつきはじめていた。少し眺めていると何となく感傷的になる。冬の空気のせいだろうか。不意についたため息で白い息が見えてしまつてさらにそれを助長させる。そして早く帰りたいという気持ちも強くなつた。

早く帰つて暖を取ろうと思い、早足でいくつもの街灯を過ぎ去つていると大きな本を持った金髪の女性が目に入った。何やら大きな本を広げて不安な眼差しであたりをキョロキョロと見渡している。恐らく外国人の観光客だろう。

「What's the matter? (どうしましたか?)」

「oh...I lost myself. (迷子になってしまいました。)」

「Where do you want to go? (どこへ行きたいんですか?)」

「Here.」

声を掛けていくつか質問してみるとガイドブックのあるページを指差した。見ると Yokohama Station と書かれていた。

「If you go straight down this road, you will see that station. (この道を真っ直ぐ行くとその駅が見えてきますよ。)」

「Wow! Thank you!!」

そう言うと急に抱きしめられた。ずいぶんと情熱的な人のようだ。なんだかサンダースの隊長さんを思い出すな。長い髪が揺れて鼻を突いてくる。体は寒いが顔だけは少し熱くなってしまった。

ブンブンと手を振ってくる彼女を見送り、再び街灯沿いを歩く。火照った顔を冷ます為にそくさと歩みを進める。すると気づいたことがある。・・・尾けられている。だが何となく人物は予想できた。それを確認するため、わざと路地に入りそこで息を潜めその人物を待つ。

カツカツと間を置かずに聞こえてくる音でその人物が急いでこっちに向かってきていることが伺える。そして路地に入るため曲がっ

たところで鉢合わせた。驚き、身を少し引きそうなところを突いてその身の身に着けていたニット帽とサングラスを外す。

「何してんだ？ダーズリン。」

そう、ダーズリンが俺を尾行していた。ご丁寧に尾行の3種の神器、帽子、サングラス、マスクをして。そのうちの2つは奪い、残った1つのマスクで彼女の口元は見えないが恐らく今は口をあわあわとさせているだろう。

顔が温度計のように下から上に赤くなっていき、顔を両手で隠し彼女は言う。

「……人違いじゃございませんこと？」

この淑女はどこまでも強情のようだ。しかたない、淑女に対しては紳士の対応でいかないとな。

「これは失礼いたしました。私の彼女に似ていたものでつい……その彼女っていうのがですね、事ある毎に格言を使ってきましてもう正直うんざり「何ですって!!ハル……」」

かかった。

「なんだい？ダーズリン。」

顔を覗き込んで聞くと耳まで真っ赤にしてポカポカと胸を叩いてきた。あー、いたいいたい。

「……バカ。」

普段は皆の前では上品に振舞っているのに虚を突かれるとすぐさま崩れてしまう。そのギャップがたまらなく愛おしい。こんな反応をされたらもう紳士の振る舞いは出来ない。俺は3種の神器の残りの1つと、それによつて隠されていたものを奪った。

「んっ!!!……………」

突然のことでダーズリンが声を発したがそれもコンマ数秒のこと。人気のない路地裏で良かったと頭で思いながらしばらく沈黙を続けた。

「ハアー……………機嫌直ったか?」

本日何度目かわからない白い息を吐きながら潤んだ瞳の彼女に聞いてみる。

「……………」

返事の代わりに俺の手を握ってきた。ポケットに突っ込んでいた方の手なので温かい。対照的に彼女の手はとても冷たかった。彼女の体が少し心配になりながらもいつまでもここにいるわけにもいかないと思い、手を握ったまま大通りの方へ戻る。

「……………で、何で尾行してたんだ?」

手を繋ぎながらしばらく歩いたところで一番の疑問を聞いてみる。

「……………あなたが横浜に帰港するなりすぐに出掛けたから気になったの

よ。」

「ここまでくるともう素直に答えてくれる。うむ、いいことだ。……ってことは最初から尾けてきてたのか!? そんなに気になることかね? ん? あっ、そういうことか。」

「もしかして浮気してると思った?」

繋いでいた手が僅かに強くなった。肯定と見ていいだろう。

「ははっ、信用ないなー俺。」

冗談っぽく言ってみる。

「……あなた今日、外国人に抱き着かれていたじゃない。」

ぐはっ!! わ、忘れていた!! 思わぬところでカウンターがきた。

「こ、困っている人を見たら助けるのが紳士の役目じゃないかなあ?」

「ふん。」

ジト目で見てくるのをやめて、お願い、やめて。

顔を合わせないまましていると軽いため息をつかれ、そして繋いでた手が離れた。

「ハルキ。」

真剣な彼女の声。その声の方を見ると彼女は俺の持っていた紙袋

を指差していた。

「そっちの手も繋ぎたいわ。」

「かしこまりました。ダーズリン様。」

紙袋を持つ手を変え、フリーになった手を見せてニヤリと笑う。すると彼女がその手の方へ回り込んでくる。そしてお互いにまた指を絡め合う。

「・・・冷たいわね。」

「お互いにな。・・・すぐに温かくなるさ。」

「帰ったら今日は私が紅茶を入れてあげるわ。」

「それは光栄だな。」

お互いに悴んだ手を握りながら学園艦へと歩く。彼女の入れてくれた紅茶が飲めると思うと嬉しくなっついで早足になり、彼女に怒られた。それも一興。

今日買った茶葉はどれを使うかなんて聞くのは俺達には野暮ってものだ。

Apple LadyはKiller Tuneを
詠う

「贅沢をする」と聞いてどんなことを思い浮かべる？ 高級なものを食べる、旅行へ行く、自分の欲しいものを沢山買うetc...人によってそれらは違うが大半のものが対価としてかなり散財してしまうことが多いというイメージがある。贅沢というのは言い換えれば普段とは違うことをするのではないだろうか。だから少し工夫をすれば贅沢なんてものはあまりお金をかけずに作れる。・・・と偉そう語ったがココ、聖グロリアーナでは定期的にお茶会などを開いて高級な紅茶とお茶菓子を嗜んで結構な贅沢ぶりを発揮している。しかしだからこそそれが日常化してしまい、最近では贅沢をしているという認識がなくなっている気がする。なので俺は贅沢なお悩みを持つお嬢様達にいつもとは少し変わったお茶会を開くことにした。今回はそんな話だ。

秋も深まってきて学校の木々が模様替えをはじめ、色合いが落ち着いて来たそんな季節、俺はいつものお茶会の部屋に1人佇んでいた。今日は戦車道の練習はないのだが今度の試合の作戦会議があるらしく、紅茶の名を持ったお嬢様方は今は別室にいる。練習がないのであれば整備もやることが少ない。故にやることをさっさと終わらせた俺は1人待ちぼうけ状態というわけだ。

椅子の背もたれに全体重を預け、そのままズリズリと下がっていき足を投げ出す。聖グロの生徒としてはあるまじき行為だが、他に誰もいないのならそれはそんな行為がなかったことと同じだ。

(部屋の天井を見るのも飽きたな。)

「よっと！」と勢いをつけて立ち上がり、視線を天井から窓の外の中庭へ移す。女心と秋の空とはいうが今日は快晴で風も少なくTVのアナウンサーも降水確率0%と伝えていた。えっ？本当は男心と秋の空？別にどっちでもいいよ。とにかくいい天気だつてことを伝えただけなだけだから。そういうツツコミは野暮つてもんだぜ。ウチの隊長だったら確実に格言で返してるな。恐らく「こんな格言を知ってる？4本足の馬でさえ躓く。」あたりかな？ いや違うか？… っつてこれもどっちでもいいよ!! 話を戻すぞ!

窓の外を見た俺は空の青から葉っぱの赤へと目線を変えた。

(そういうえばタクマからおすそ分けしてもらったりんごが余ってたよな。)

見慣れてしまった風景の色から旧友にもらった果物を連想した俺はある考えが浮かび、早速実行することにした。

・
・
・

「アッサムのデータもたまには役に立つのね。熱く語ったせいで長引いたけど。」

「たまにはとはなんですか！ まったく。」

「まあまあお二人共、ハルキさんが紅茶を入れて待ってるでしょうからそれを飲んで落ち着きましょう。」

「そうね。ハルキ、準備はできてい…居ないわね。」

「何やら置手紙がありますわ。『窓の外をご覧ください』?」

「!! ダージリン様、アツサム様! 見てください!!」

置き手紙に気づいたようだ。窓からオレンジペコちゃん（普段はちゃんと『オレンジペコさん』って呼んでるぜ。）が外でお茶会の用意をしている俺に軽く手を振ってくれる。うん、かわいいね。後に続いてアツサムさん、ダージリンの姿が見えて「あら?」といった表情を確認できた。

俺が何をしたかだつて? 特別なことはしてないさ。ただ、紅葉が彩る中庭の中央にお茶会の席を設けただけさ。おっと、お嬢様たちが来たようだ。お出迎えしなくては。

「『これは、これは、紅茶の名を持つお嬢様方、ようこそ、ようこそ。』」

「あら? 別に今日はかかとの高い靴は履いていませんわよ。」

「ふふふ。ハムレットですね。」

わざととぼけた顔をしてノツてくれるアツサムさんに、そんな俺達のやり取りを見てクスクスと笑うオレンジペコちゃん。ああ、頑張つて柄にもないシェイクスピアを読んで良かったと思える。

「『森の中に阿呆がおりますわね。』」

前言撤回だ。この紅茶のシャンパン女め、普通にシェイクスピアを

混ぜて必死に俺が用意した席をディスプレイスってきやがった。まあいいだろう、こんなことで腹を立てていては紳士の名折れ。それに彼女との付き合いも長い、これもちよつとしたお戯れにすぎないのさ。

『お気に召すまま。』

だから作品のタイトルを返す程度でやり取りを止め、勝ち誇った顔をする彼女の為に椅子を引く。さあ、楽しいお茶会をとつとはじめよう。

用意しておいたティーポットを傾け、カップにゆっくりと注いでいく。茶色い水面はお嬢様方の優雅な顔を映しその唇を潤す。

「!! 今日のお茶はダーズリンティーのようですけどどいつもとは違う気がしますね。」

「さすがです、オレンジペコさん。本日はせっかくですので秘蔵の……私の一生もののダーズリンを入れさせていただきました。」

この茶葉は俺の誕生日にダーズリンから貰ったものだ。結構高価なものらしく、恐れ多くて常用なんて出来なかったがずっと置いていて浪費するのも茶葉も本望じゃないだろう。だから今日の『贅沢』に使わせてもらった。

「♪」

目に見えてご機嫌になるダーズリン。勝ち誇った顔に拍車がかかる。単純だね。あつ！アッサムさん、ため息つくのやめてください!! なんか今更になって恥ずかしくなってくるから!!

恥ずかしさを抑え一息ついた頃、本日のお茶菓子をテーブル中央に差し出す。

「アップルパイを試作してみましたのでよかったですらどうぞ。」

「わあ、すごい!! ハルキさんがつくったんですか?」

「食堂の厨房でも借りたの? よく作れたわね。」

「ははは・・・いや、まあ、その、色々頑張りました。」

言えない。ホットケーキミックスを混ぜ林檎を入れて寮に隠してある炊飯器で炊き上げて作ったアップルパイだなんて言えない。とてもお嬢様には思いつかない一般家庭の知恵の味だ。さてお口に合・・・

「まるで庶民の味ね。」

いつの間にか食べていたダーズリンが口元を少し汚しながら言う。ダーズリン、おまえ全部見抜いてるな。貴方みたいな勘のいいお嬢様はお嫌いですわまったく。ってか結構食ってるじゃねえか!!

「これは失礼いたしました。すぐにお下げ「誰が食べないと言ったかしら?」

「いえいえ聖グロリアーナの隊長ともあろうお方が『庶民の味』のするアップルパイを食するなどいけません。」

皿を取り上げようとしたが両手で掴んできて離さない。優雅とはかけ離れた行動ではあるが器用に顔だけはそれを保っている。

「こ、こんな格言を知って「申し訳ございません。庶民の育ちなので自得しております。」」

「まだ何も言っていないわよ!!」

当然、力では俺に敵わないように余裕がなくなってきた。さてどうやってもっと余裕をなくしてやろうかと思っていたがアツサムさんの「やめなさい!!」の一言で強制的にケリがついてしまった。少しお戯れが過ぎたようだ。俺としては消化不良な部分もあつたがアツサムさん、オレンジペコちゃん食べて「おいしい」と言ってくれたのでよしとすることにした。

陽が紅葉とおそろいの色になりはじめた頃、少し風が吹き、続くように葉が校舎へ駆けていく。思わず目で追いかけてしまった。だってそれは

「ダーズリン様と初めて出会った時もこんな風でしたね。」

俺とダーズリンが出会いは1年生の時、ココの中庭だった。きつかけは彼女が風に飛ばしてしまったハンカチを拾ったこと。えっ? ちよつと出来過ぎてるって? そう、実は裏があるんだ。もうちよつと後で話すよ。

「そうね。あの時、舞っていたのは桜とハンカチだったけど・・・季節を使い捨てて生きてるのね、私達。」

「? どなたかの格言ですか?」

「ハルキに教えてもらった歌の一部よ。」

「私は旧友から教わったんですけどね。」

「貴方に教わったということに意味があるのよ。」

だいたい感傷に浸っているようだ。無理もないか、俺だって最初の出会いを思い出してしまったのだから。季節を使い捨てて生きてる…か。

ダーズリンと出会った春はもう味わうことは出来ない。彼女をはじめて視界に入れた時の胸の鼓動、空気の匂い、ハンカチを拾って手渡した時の感触、すべてが使い捨て。なんと贅沢な話だろうか。季節が巡ってまた春が来たとしてもそれは同じ春ではない。こんな言葉を知っているか？ 『今日という日は、残りの人生の最初の日である』……つと、俺もずいぶんと彼女に毒されたもんだ。

紅茶のおかわりを注ぎながらテーブルを回っているとオレンジペコちゃんが「素敵なお出でですね」と言ってくれた。だが現実はそのドラマティックに出来ていない。裏を話すとしよう。

「実は私も後からとある筋から聞いたのですが…その時ダーズリン様はわざとハンカチを落として私に拾わせたのですよ。」

「!!」

今日初めてダーズリンの表情が崩れた。目を見開いてこちらを見に来る。「何故そのことを!?!」という心の声がよくわかる。逆にその言葉以外に適切なセリフが入らない。そんな表情だ。

「…ふっ。」

肩を揺らして必死に笑いを堪えるアツサムさん。いや震えすぎですよ、教えてくれたのあなたじゃないですか。

カンッ
!!!!!!

突如、カップをソーサーに強く置く音が響く。

「失礼しますわ!!!!!!」

俺を睨みつけ、立ち上がって早足で去っていく。あーあ、拗ねてしまわれた。

「データによりますと恐らく・・・」

素早く、かじりかけの林檎がロゴマークのタブレットを取り出してダージリンの行き先を伝えようとしてくれるアツサムさんを突きだして制止する。

「そうね。あなたには必要なかったわね。じゃあ後の事はよろしく。」

「はい、おまかせください。」

一礼して俺は歩き出す。拗ねたお嬢様の元へ。

・
・
・

閑静な戦車倉庫内に入り、電気をつける。よく見慣れ一番整備したであろう戦車、チャールルに向かって迷うことなく歩を進め、登り、キューポラに近づく。

「ご一緒してもよろしいですか？ お嬢様。」

「・・・なんで場所がわかるのよ。妬ましいわ。」

「芳しい林檎の香りがしたものですから。」

「嘘よ。」

「本当ですよ。ほら、ここから。」

「んっ!!」

疑う彼女に証拠を突きつける為、唇を落とす。少しジタバタしたが、すぐに大人しくなって唇を離すと体を俺に預けてきた。そして今日の不満をぶつけてくる。

「わざとだと気づいていても皆の前で言うことないじゃない。」

『庶民』は口が軽いもので。」

「そう。じゃあ塞がなくちやいけないわね。」

首に手を回され、ゆっくりと近づいてくるそれを受け入れる。ああ、贅沢すぎる。

どう表現したらいいかわからない喜びの感情が溢れ出しそうにな

り、それを必死に体現しようとして思わず彼女を思いつきり抱きしめる。

「ん・はあ。少し痛いわ。もうちよつと丁重に扱ってくださいる？
だって・・・」

お互いの汗が、鼓動の音が、息づかいが漏れる車内で彼女は俺の耳元で囁き詠う。

「私は貴方の一生のもですもの。」

ああ、本当に贅沢すぎる。今この瞬間も、誰も保存しておくことが出来ない使い捨てだというのだから。

サンダース大学付属高校 ダウンナー系

無駄に広い格納庫の中で1台の戦車と向き合う。後ろを振り返れば同じ戦車が何台もあり、各台戦車を整備する人間がいる。俺もそのうちの1人。今日のノルマは終わった。

「班長、ノルマ分終わったんで帰りますね。」

「ああ、お疲れー……ってダウンナー、あんた大丈夫？　また、目の隈ひどいわよ。」

「ああ、いつものことなんで大丈夫です。じゃ、お先に。」

3年の女班長に挨拶して荷物をまとめて作業着のまま格納庫を出る。

ダウンナーってのは俺のあだ名だ。つけられた理由はいくつかある。まず班長が言った通り、俺は目の隈がひどい。隈ができやすく、1回できてしまうとなかなか取れないのだ。

このサンダース大学付属高校ではどこの科も生徒が多いので、徹夜で整備をするということは少ないのだが、珍しく数日前にあった。その隈がまだ取れないでいる。

次に生まれつき、目つきが悪い。常に睨んでいるように見えるそう。なので第一印象は最悪。おかげでマンモス校であるこの高校で、友人は少ない方だろう。

そして俺の性格がここの校風と合っていないのが最大の理由だ。

明るくフランクな

アメリカ気風の奴らが多い中、俺は感情をあまりおっぴらにしない・・・というか出来ない性格なのだ。学校生活が楽しくないわけではないのだが、どうも周りからはそのせいでテンションの低い奴と思われがちのようだ。

以上の理由からダウン系男子の称号を欲しいままにした俺は、何のひねりもなくダウンと呼ばれることになった。もう否定するのめんどくさいので好きなように呼ばせている。

そして2年生になった今ではもう皆ダウンでしか呼ばなくなつた。別にいいけど。

寄り道せずにまっすぐ帰るべく中庭を通って校門を目指していると男女の姿が目に入った。何やら軽く言い合っているようであるが・・・

「いいじゃん。付き合おうぜ。」

「NO!!何回も付き合わないって言ってるじゃない。しつこい男は嫌いよ。」

どうやら男が告白したようだが振られたらしい。しかしそれを認めず女の子に何度も迫っているようだ。生徒数が多いだけにこういう輩も少なからずいるようだ。

男女がしばらく言い合っていると女性の方と目が合い、俺の方に駆け寄ってきた。

「ハア—イ、ダーリン。遅いわよ。」

そう言って俺の腕に抱き着く。突然のことで固まる俺氏。

「私のボーイフレンドよ!!だからあなたとは付き合えない。諦めてちょうだい。」

ふと俺が男の方を見ると一瞬たじろいでそのまま背中を向けて帰って行った。恐らく睨んでいると思われたのだろう。この目つきで得をしたのは初めてだ。

「ふう〜。」

「はあ、モテモテっすね。ケイ隊長。」

「えっ?なんで名前・・・あつ、うちの整備班の作業着。」

よほど必死だったようで俺の格好に今気づいたようだ。

生徒数が多いとはいえさすがに整備班なので隊長の顔と名前くらいはわかる。

「あの・・・そろそろ腕いいっすか。」

先程から腕に隊長のニスバディを押し付けられて色々と沸騰しそうなのだ。

「oh, sorry. . . .あなた隈がすごいわよ!!大丈夫?」

両手で顔を掴まれ、隈がある部分に親指を当てられる。 . . .色々と大丈夫じゃない。特に顔が近くてウェーブのかかった髪が頬に当たっていい匂いがしてくるのが大丈夫じゃない。

理性が危うかったので近くにあつたベンチに座って話すことを提案した。そこで自己紹介も含めてこの隈の件も説明、あとダウンナーのあだ名についても。

「アハハ、だからダウンナーって言うの？面白いわね。」

「おかげで本名覚えてるやつほとんどいないっすけどね。」

「あっ!! ねえねえ、ダウンナー系。ダウンナーケイ。ダウンナーとケイ。なんちやてアハハハハハ。」

自分の放ったギャグで笑いながら俺の肩をバシバシ叩いてくる隊長。他の生徒だったら一緒にガハハと笑っていそうだが生憎、俺はそうじゃない。ケイ隊長、ただただ面白くないっす。

無言の俺に対して特に気にせず話を続ける隊長。

「そうだ。連絡先教えてよ。明日お礼をするわ。」

「いや、いいっすよ。特に俺何もしてないし。」

実際ただ突っ立っていただけだし。

「NO!!それじゃあアンフェアよ。何であれ私は助かったの。お礼をさせてちょうだい。」

「はあ、わかりました。」

隊長の押しに負けて携帯を取り出し連絡先を交換する。交換が終わると満足した顔でウンウンと頷く。大人の明るいお姉さんってイメージなのにたまに見せてくる子供っぽい表情がかわいい人だなと思う。

「OK。じゃあダウンナー、明日連絡をいれるわ。」

「ああ、はい。わかりまし「今日はありがとう。おやすみなさい。」

俺の返事を待たずして耳元で囁かれて頬にキスをされた。

「じゃあ。」

そうやって鞆を持って振り返らずに帰っていく。非常にサバサバしている。

だがそれがウチの校風なのだ。頬にキスされたことにあまり驚きはしなかったが、もうお礼はこれでいいんじゃないか?と思った。だってお釣りがくるよ。

思いつつも言葉には出せず、キスされた頬を押さえて去っていく隊長の背中を見つめていた。

次の日の昼、隊長からメールが入った。食堂の指定した席に来て!! とのこと。

向かうとテーブルにステーキ皿が2つ並んで油が踊り跳ねながらジュウジュウと音を奏でている。その皿の前に笑顔の隊長。俺を見つけると大げさに手招きをする。

「ダウンナー!!こっちこっち!!」

「・・・隊長、これは？」

「んー？昨日のお礼。」

「いや、コレ食堂で一番高いヤツつすよね？」

そう。ウチの高校の食堂も例に漏れずアメリカ気風でハンバーガー、ステーキ、バーベキューが主流ときたものだ。しかもどれもアメリカサイズ。そしていま俺の目の前にある肉だが普通に学生身分が昼に食っていいものではないものだ。たぶん数千円くらいはするだろう。お口に入れた途端溶けるヤツじゃなかろうか。そもそもなんでこんなものが学食にあるのだろうか。

「・・・払います。」

ポケットから財布を取り出そうとしたが素早く腕を掴まれた。

「NO!!ダメよ。お礼って言ったでしょ？」

「いや、これお礼の範疇超えていますよ。」

「そうだとしてもよ!!・・・よし、隊長命令よ。黙って食べなさい。」

ああ!!それはずるい!!そんな言われたら断れない!!

グヌヌと言った感じで黙っていたが諦めてハアとため息をついた。

「・・・イエス、ママ」

「よろしい!! じゃあ食べましょう。」

隊長と一緒にステーキを食べ始めた。口に入れた途端に溶けてなくなることはなかったが非常に柔らかかった。美味である。故に複雑であった。ただ突っ立ただけでこんなおいしいご飯をごちそうになっているのだから。

「ご馳走様でした、隊長。」

「どういたしまして!!」

隊長に手を合わせて頭を下げるとニコニコと返事をしてくる。食後の水を飲んでいると隊長が話しかけてくる。

「ダウンーってさ、どういう女の子好きになるの?」

「ブフツ!!・・・何ですか急に?」

「sorry。いやゝ実はね・・・」

困り顔で隊長はさっきの質問の意図を語ってくれた。

実は昨日、隊長に告った男（以下チャラ男先輩）にすぐ俺と隊長が付き合っていることが嘘だとバレて、また朝にしつこく言い寄られたらしい。そこで隊長が「あたしのどこがいいの?」と聞くと「顔と体」と返ってきたとのこと。いやダメだろチャラ男先輩、正直すぎるよ。もう完全に目的がハッキリしてるよ。なんでもオープンにすればいいってもんじゃないよ。

そんな返答が返ってきたものだから「男ってみんなそうなのかしら

？」と思った隊長は身近男子かつ聞きやすい後輩の俺に先ほどの質問を投げたのだろう。

いや、しかし困った。チャラ男先輩の回答も真理といえど真理であるからなあ。あと俺、恋愛経験あんまりないし。

「で？どうなの？ダウンナー？」

ニヤニヤしながら聞いてくる隊長。後輩からかつて楽しんでいるな。・・・正直に答えるか。

「まあ、顔と体が良いって回答もありなんじゃないですか？ 短い付き合いならば。ただ、俺は付き合い合うなら長く付き合いたいんで顔と体だけが全てじゃないですね。だってその2点は衰えていく一方ですし。」

隊長が真顔になる。変なこといったか？まあ、いいや続けよう。

「趣味が合うとか、一緒にいて安心するとか、何でもいいんですけど、何か1つ『ああ、この子のこういう部分、一生好きでいられますな』って思わしてくれたりしたらその子のこと好きになりますかね？・・・答えになってますかね？」

ちゃんと伝わったか不安になったので確認してみる。

「Great!! you're nice guy !!!」

全部英語で返ってきた。たぶんかなり喜んでもらったのだろう。サムズアップしてるし隊長。

「じゃあ次、隊長の番ですね？」

「えっ？私？」

「隊長はどういう男、好きになるんですか？俺だけ答えるのはフェアじゃないですよ？」

あんだけ恥ずかしいことを言ったのだ。隊長にも是非、答えてもらおう。

「え、えーと。わ、わたしはね〜。」

はじめてみる隊長の焦り顔。顔も徐々に赤くなってゆく。新鮮だ。じーっと隊長の顔を見ていた。すると

「あつ、授業始まるから私もう行くね!!」

逃げられた。気づくともう豆粒くらいの大きさになる距離にいた。速い。そしてずるい。

しかし肝心のチャラ男先輩の件が何一つ片付いてはいない。先輩故に俺が注意することも難しい。隊長は大丈夫だろうか？そんなことをぐるぐる頭の中で何回も考えても解決策は出ず、時間だけが過ぎて行った。

放課後、何かいい方法はないかと考えながらいつもの整備を行って

いると遠くから声が泳いでくる。

「ダウンナー、ちよつといいい?」

見ると班長が手招きして呼んでいる。

「なんですかー?」

そう返して近づいていく。すると周りを整備班の女子たちに囲まれた。

「ダウンナー。お昼ご飯、隊長と食べていたよね?…どういうこと?」

忘れていた。隊長は男子にモテモテなのだが女子にはもっとモテモテなのだ!!

食堂で2人きりで隊長と後輩男子整備士が仲良さそうにご飯食べている。

これは事情聴取案件だ!!と、目撃者たちは整備班ガールズにチクつたのだろう。

もう笑顔で聞いてくる班長の後ろに嫉妬の炎が見える。周りの女子たちも同様。

なんだよ、もう!! 俺は何も悪いことしていないのに!! 悪いのはあのチャラ男…あつ、そうか。

「実はですね……」

俺は昨日の出来事をすべて話した。そしてチャラ男先輩の特徴も。

「……なるほどね。そいつに心当たりのあるやついる?」

班長が言うのと数名が手を挙げる。きっと悪い意味で有名なのだろう。

「よし、じゃあ今からシメに行くよ!!」

「イエス、ママ!!!」

言い終わるとぞろぞろと格納庫を出て行こうとする。最後に出ていく班長に問われる。

「ダウンー、あんた」

「俺は何も聞いてません!!!」

「よし!!じゃあ、整備してなさい!!」

「イエス!!ママ!!」

そう、俺は何も聞いていない。女の恐ろしさなんて知らない。今日もいつも通り、ただ黙々と整備をしていたただけだ。

後日聞いた話だが、チャラ男先輩はしばらく学校を休んだ後に登校してきたらしい。ただ、丸坊主になっていたとのこと。何かやらかしたのかね?俺の知ったこつちゃないがね。

今日も今日とて整備の仕事はある。

「ダウンナー、あんたが最後よ。」

「班長。戸締りしとくんで先に帰っても大丈夫つすよ。」

「お願いねー。・・・あんた隈、良くなってきたわね。」

「ええ、ようやく直ってきましたよ。お疲れ様です。」

手を挙げて班長を見送る。俺の整備が終わったのはそれから1時間後くらいだった。

戸締りを終え、中庭を歩いていると後ろから声をかけられた。

「ダウンナー。」

「隊長。どうしたんですか？こんな遅くに。」

「あなたを待ってたのよ。また助けてもらったお礼を言ってなかったし。」

「俺は何もしてませんよ。お礼なら整備班の女子たちに。」

そう。何もしていない。1回目は突っ立ってただけ。2回目は目撃したことを女子たちに話しただけ。俺自身が自ら動いたことは何もないのだ。

「またそういうこと言う。」

近づいてくる隊長。

「そういえば言っていなかったアレ、今言うわね。」

「アレ？」

「私が好きになる男はね、年下ダウンナー系でね、助けてくれたことを全然認めなくて、でも女の子との付き合いは真剣に考えていて、付き合い合ったらずーっと、ずーっと幸せにしてくれそうな人よ。」

隊長が真剣な眼差しで俺を見つめてくる。いつもの柔らかい雰囲気はそこにはない。

目を逸らせずにいると隊長がさらに近づいてきた。両手を俺の首の後ろに回して抱きつき、唇を重ねる。

「……あなたのダウンナー系なところ一生好きでいられるわ。……私の一生好きでいられる部分、これから探してくれる？」

軽く首をかしげながら笑顔で聞いてくる彼女に対する返答は決まっている。

「イエス、ママ。」

言い終わると今度は俺の方から長いキスをした。

ようやく直ってきた俺の隅だが、またしばらくはひどいままのよう

である。

もしくははずつとこのままなのかもしれない。だって彼女が一生好きでいてくれる部分なのだから。

アンツイオ高校
いくつかのパターン

「きみらのパンツはダメパンツ」

「フニクリ・フニクラ」の曲に合わせた日本の童謡を歌いながら手を動かす。この歌詞にはいくつかのパターンがあるらしいが俺はこれが好きだ。歌詞を最後まで見てみると支離滅裂すぎて笑える。ノリと勢いで作ったのだろうか？ とにかくウチの高校には合ってる気がする。

ウチの保有戦車の半数を占めるCV33の整備をしながら気持ちよく歌っていると

「5分穿いたら」

1人で歌っていたのにハマった。横を見ると黒髪のショートヘアが目に入る。

「……どうしたペパロニ？」

歌うのをやめた俺に対してペパロニはノリノリでその場で手足を上下に動かして行進する様な動作で歌い続けていた。聞こえなかったのだろうか？ 少し質問を変えてもう一度聞いてみる。

「何か用か？ ペパロニ。」

「ああ！兄さん!! えつとですね・・・何でしたっけ？」

へへツと屈託のない笑顔で返された。そうだこの子は少しオツムの弱い子だった。恐らく誰かに何かを頼まれて俺のところに来たのだろうが俺と一緒に歌っているうちに忘れたのだろう。特に荷物も持っていないようだし何を頼まれたのか推測するのは困難だ。だが、俺はこの後の展開はだいたい予想できた。

「おいペパロニ!! デイアブロ呼んでくるのに何分かつてるんだ!!」

同級生の安齋の怒鳴り声が後ろから響いてきた。ちなみにデイアブロってのは此処、アンツイオ高校での俺のあだ名のようなものだ。何故か皆イタリア料理の名前を付けたがる。安齋の名前は「アンチョビ」ですぐ決まったが、俺の名前は「デイアブロ」にするか「ディアボラ」にするか「ディアボロ」にするかで生徒間で一悶着あった。正直どうでもよかったので適当に「ディアブロ」を選んで今に至る。後で帰って調べたら悪魔って意味を知った日には少し複雑だったが・・・まあ別にいいけど。

「おおーそうでした。お昼だから兄さん呼びに来たんでした!」

ペパロニの言葉に俺はポケットからスマホを取り出し、電源ボタンを軽く押す。画面には13:45と表示された。普通お昼と聞けば12時からと想像するかもしれないがアンツイオ高校では生徒が出店を出している関係で書き入れ時は店に立つことが多い。そして客足が少し落ち着いた頃、シフトで休憩してお昼を食べるのだ。えっ? 授業は?・・・まあ、そこは・・・聞くなよ。

「さあ、行きましよう兄さん！」

俺の手を掴んでズンズンと歩きはじめるペパロニ。掴んだ瞬間に安齋が「あっ!!」と声を発したのは聞こえなかったことにした。睨んでくる顔も見なかったことに。しかしこの状態のまま連行されるわけにもいかないだろう。

「ペパロニ、整備してオイルまみれだから手、離れた方がいいぞ。」

「ああ！じゃあ同じっすね。さっきまで出店やってたんで同じくオイルまみれなんで気にしなくていいっすよ。」

遠回しの断りも虚しく失敗に終わり、不本意ながら・・・非常に不本意ながらペパロニと手を繋いだ状態で歩く。いや女の子と手を繋げるのは嬉しいんだが後ろからついてくる安齋の視線が非常に痛い。

しばらく歩いて芝生のある広場に行くとレジャーシートが敷いてあり、その上で金髪ロングの女の子が座っているのが見えた。

「もう、遅いですよ。何してたんですかディアブロさ・・・」

俺の姿を確認すると笑顔で話しかけてきてくれたが俺とペパロニが手を繋いでいるのを見ると少女の笑顔は違う雰囲気を持ったものに変わった。

「・・・ずいぶんと仲がいいのね、ペパロニ。」

「遅れて悪かったっす、カルパッチョ。兄さんとはいつでも仲はいいっすよ?..」

多分ペパロニはあの笑顔の意図に気づいていないだろう。俺も理

由はよくわからんがとにかくカルパッチョが機嫌が悪いことはわかる。あれかな？お昼に遅れちゃったからかな？ごめんね、お腹すいたよね。そりゃあ不機嫌にもなるよね。

「あー！！！！お腹すいたからもう食べるぞ！お前たち！！」

後ろからも安斎の不機嫌な声が聞こえたのでペパロニに「座ってさつさと飯にするぞ。」と言うとようやく俺はペパロニの手から解放された。

靴を脱ぎ、料理を囲む様に各々四方に座る。俺の正面に安斎、左がペパロニ、右がカルパッチョ。胡坐をかいているとカルパッチョがウェットティッシュを差し出してくれた。俺のオイルまみれの手を見てのことだろう。気の利くいい後輩だ。

「どうぞ。」

「ありがとう、助かるよ。」

「いえいえ。」

「あつ、カルパッチョ！こっちも欲しいつす。」

「・・・はい。」

今日は俺の耳がおかしいのかな？明らかに先程とトーンが違う。あと俺にはティッシュを取り出して渡してくれたけどペパロニには袋ごと渡している。・・・気にしちゃダメか。視線を料理に移して忘れよう。

並べられた品々を見るとパスタ、ピザ、ラザニア、等々見事にイタリア料理が綺麗に並んでいる。

「美味そうだな。」

「どれがだ!？」

「どれがっすか!？」

「どれがですか!？」

俺の発言に三者三様の言葉が返ってくる。恐らく3人とも最低でも1品は作ったのだろう。

「……まあ全部。」

当たり障りのない発言しておく。するとつまらなそうな顔になる3人。あれ?この選択は間違っていないかと思ったと思うのだが……

「もういい、本当に食べるぞ。みんな」

安斎の言葉に全員手を合わせる。

「いただきます。」

「そのピザ取って、あんざ「ア・ン・チョ・ビ!!!」

いつものやり取りをしながら俺たちは遅い昼食を取りはじめた。

「「「ちぞうさまでした。」」」

「いやー全部美味かった。」

腹をさすりながら空になった皿を見る。我ながら綺麗に食べたものだ。美味しい物を食ったおかげで自然と笑顔になっていたのだろう。俺の顔を見て3人とも満足そうに笑っている。

「しかし悪いな、いつも呼んでもらって。」

「いえいえ、いつも整備してもらってますから。」

「ふん、下手に昼飯抜いて倒れられても困るだけだ。」

「姐さん素直じゃないっすね。」

「うるさい!!」

安齋とペパロニのやり取りを見ながら1年生だった頃に思いを馳せる。そういえば安齋と最初に会ったのもこの広場だったな。当初、俺は出店で何かを買うこともなく、近所のスーパーで買った菓子パンをモサモサと食べていたら安齋が現れ「アンツイオの生徒がそんな貧相なものを食べてるんじゃない!確かにウチの高校は貧乏かもしれないが食事だけは一流だ!」1年ながらそんなことを言ってきてマルゲリータを差し出してきたっけ。それからよく一緒に昼飯を食う仲になり、進級するとそこにペパロニ、カルパッチョが加わり、ほぼ毎日昼飯をごちそうになるようになった。アンツイオの生徒としては珍しく料理が出来ない俺にとってはありがたい話である。

意識を現在に戻し何となく空を見上げ、青に向かって手を突きだし

伸びをする。満腹時の今、このまま倒れて寝れたらどんなにいいだろうか。深く深呼吸をすると次は欠伸が出てきそうになったその時

「ディアブロさん、すみません。」

急に声をかけられた。3人の誰でもない声だ。

「ん？ おお、どうした？」

振り返ると後輩整備士の女子2人が立っていた。

「整備でわからないことが・・・」

申し訳なきような表情をしながら言葉が途中で止まる。俺がまだ飯の途中だと思ったのだろうか。だが3年の整備士は俺だけなので頼るあてが他にない。

「わかった。今行く。」

後輩たちに不要な気遣いはさせまい。俺が引退したときにアンツイオの整備を担う可愛い後輩だ。腰を上げて再度伸びをする。眠気は取れないが少しリフレッシュした。靴を履き、去り際に改めて3人に礼を言う。

「ありがとう。ごちそうさん。美味かったよ。」

そしてそのまま後輩と一緒に整備倉庫へ向かった。残された3人がまたつまらなそうな顔をしてたのを俺は知る由もなかった。

放課後

今日は整備が早く終わったので学校近くのスーパーに来ていた。俺は一人暮らしをしているので帰りに飯を買っていかないとは家には何もない。あと先ほども言った通り料理が出来ないからだいたい即席麺かレトルトで済ませることがほとんどだ。

「おっ、カップラーメンがいつもより安い。」

カップラーメンを手に取り、5個ほどカゴに入れてると肩に圧がかかった。

「そんなものばっかり食べてちやダメですよ。」

首だけ動かすと笑顔のカルパッチョが俺の肩を押さえている。カルパッチョさん、その笑顔怖いです。しかし違和感はそれだけでは終わらず、次は持っているカゴが軽くなりはじめた。

「まったく、どうしてこんな栄養価の低いものばかり取るんだ!!」

安齋がぶつくさ言いながら俺のカゴからカップラーメンを取り出

し、元あった棚に戻している。 えっ？ 何してんのおまえ？

「姐さん!!カート持ってきたっすよ!」

「よくやったペパロニ!!じゃあまず野菜コーナーから見ろぞ!!」

「ラジャーっす!!」

そう言う俺の手からカゴを奪い、カートに乗せて二人とも野菜コーナーへまっしぐら。次々と起こる展開についていけず傍観して立っていると腕を引っ張られた。

「さっ、私たちも行きましょう。」

カルパッチョが俺の腕を組んで歩き始めた。しかたないのでそのまま歩いてたら安齋がそれに気づいてまた俺にジト目を向けてきたが先ほど同様無視して俺は疑問を投げつける。

「なあ、食材買ってどうすんだよ。」

「何って……決まってるじゃないですか。兄さんの家行って作るんすよ。」

「……んんんっ?……はっ? なんで?」

「もちろん、ディアブロさんに食べてもらおう為ですよ。」

「いやそこまでしてもらわなくても……」

「何言ってるんだ。3年の整備士はお前しかいないんだぞ。お前がも

し栄養失調で倒れたらウチの高校の敗北は決まったようなものなんだぞ!!」

大げさな。恐らくスーパーに入った時にカップ麺ばかり取っていたのを見られたのがまずかったな。俺がそういうものばかり食しているとバレてしまった。故に「そんなことはない!」といった言葉が返せない。もうこれは仕方ない。

「……お願いします。」

頭を下げた3人に調理をお願いすることにした。

普段自分では買わないような魚、野菜、肉等の食材でいっぱいになったカゴを前にし、レジで精算を待つ。この食材が色取り取りの料理になるかと思うと料理をしない俺からすれば魔法に近い。そんな魔法使いが3人もいる。恐らく誰が何を作っても美味しいのだろう。

「あつ、ポイントカードあるつすよ。」

「レジ袋はいらないです。エコバック持参してるので。」

「今日まで有効の500円の割引券を持ってきたぞ!!恐れ入れ!!」

「さすががつす、姐さん!」

「さすがです、ドゥーチエ!」

さつきから聞こえてくる会話がもう主婦のそれに近い。普段、俺が考えてもいないような計算をスーパーで食材と値段を見ながらして

いるんだらうか。1人オツムの弱い子いるけど。それでもそういうことを考えているということに感心する。レジの精算を終え、食材をエコバックに詰めながらそんなことを思った。

「ん？ どうしたんすか？ 兄さん。」

少し3人を見つめすぎたか。いち早く視線に気づいたペパロニが聞いてくる。

「いや、お前らしい嫁さんになるなって思ってたな。」

「!!!!!!」

空気が固まった。そして一気にトマトのように真っ赤になっていく3人。どうしたんだ？

「ととと、とにかく!!早くお前の家に行くぞ!!ディアブロ!!」

そそくさとスーパーを出ていく3人。いや先に行くなよ、俺の家の場所知らないだろお前ら。

3人に追いつく為、走りながら今日の夕飯のイタリア料理は何が出るのか、いくつかのパターンを予想する俺だった。

ドゥーチエの休日

「お前のことが好きだ！」

辺りが薄暗い中、学校のグラウンドで学生服を着た男の声が響く。男の真剣な眼差しに映るのは同年齢くらいの女性。同じ色の学生服を着ている彼女は突然の青春の1ページ来襲にアワアワと周りを見渡す。周囲に人がいなかったことを確認すると安堵、そして自分を落ち着かせる為、2つの意味を込めた息を吐く。ゆっくりと赤くなつた顔をあげて唇を震わせながら男の告白に応える。

「わ、私も好きだー!!」

ヤケクソ!という感じで少し前のめりになり、目を瞑って両手で握り拳を作り、言葉で、表情で、体で、好意を伝える。

「.....」

数秒の静寂、それを破ったのは2人の間を泳ぐ風の音。その音が合図だったように砂を踏みつける音も聞こえてきた。男が近づいて来たのだ。

「あつ、あつ、あつ。」

男が近づいてくるのに比例して声をあげるアンチョビ。やがて女の距離がなくなり、影が重なる。ディアブロがアンチョビの口を塞いだ……手で。

「安齋、うるさいぞ。映画館では静かにしろ。」

まったく、せつかくの告白シーンが集中して見れないじゃないか！と周りの迷惑にならぬよう極力小声でアンチョビに注意を促し、視線をスクリーンに戻すディアブロ。対してアンチョビはいつもの「アンチョビだ！」と言った返しをしたかったが自分が無自覚で声を出していたこと、それにより周りの人に迷惑をかけたかもしれないことを考えると映画のヒロインとは違った感情での赤面をしながら黙るしかなかった。

・
・
・

本日は休日。俺たちは久しぶりの休みを映画館で過ごしていた。実は安齋と映画を見るのはこれがはじめてではない。

ある日、俺が図書室で戦車関連の本を読んでいると何故かいつものツインテールを解き、メガネをかけてコソコソとする安齋を見つけた。数冊本を手にとっては裏表紙のあらすじを確認しているので声を掛けると急に固まって手に持っていた本が落ちた。相変わらず固まっただけだったので代わりに本を取ってやる。中身は別になんてことない普通の恋愛小説だった。本を拾い上げて安齋の手に渡してやると「ハッ！」となり、ようやく彼女の時が動き出した……が、瞬

間に腕を掴まれ図書室から人気のない場所まで高速移動。お互いに息をあげながら「どうした？」と聞いてみると「今日見たことは黙つとけ!!」と涙目で睨まれた。理由を聞くと「恋愛小説が好きなんてドウーチェとして威厳が保てない」とのこと。気にすることか？と思つたが口に出すのはやめておいた。コンプレックスだとかそういう類は他人には理解出来ないところで本人が気にしていることが多いし、他人が気にしていないならいいか・・・とはならないだろう。例えば仲のいい女の子に隠していたAVを発見されて「私は別に気にしないから。」と言われて「じゃあいいか!」と隠さず他のパッケージと同じ棚に陳列する、なんてことしないだろ？

そんな思いから深くツツコまずに黙っていると約束した数ヶ月後、「相談がある。」と呼び出された。整備の事か？と思つていると「一緒に映画に行つてほしい」と。「・・・は？」と聞き返すと

「だ、だって恋愛小説をレジに持つていくだけでも結構勇気がいるんだぞ！ それなのに実写化した恋愛映画を一人で見に行くなんて色々とハードルが高すぎる！ でも映画は見たい！ 後生だディアブロ！ 一緒に来てくれー!」

というわけで不定期ながら俺と安齋の休日の映画鑑賞がはじまつて今に至る。

「結構ベタな展開だったな。」

「いやいや、確かにベタかもしれないがちゃんと原作を殺さず、気になつてたサブキャラにもスポットを当てたオリジナルストーリーを入れた脚本。そして役者の演技、セリフのトーン、頭の中で描いていた通りで私は・・・」

場所を広場のカフェに移し、少し遅めの昼食を取りつつお互いに映画の感想を述べる。と言ってもほとんど俺が聞き役に徹するのがお決まりである。余程興奮してるようでいつものツインテール、ではなく変装の為に後ろで1つに纏めたポニーテールが左右に揺れる揺れる。

プラスチック製のカップが大量の汗をかくくらいに駄弁っている
と次に見る映画の時間が迫ってきた。次の作品は先ほどの劇場では
公開していないので別の映画館まで歩かないといけない。

「おい、そろそろ。」

「んっ。」

俺が腕時計を指差すと短く返事をし、すぐに荷物をまとめはじめた。全てを言わずとも理解してくれるのはありがたいものだ。席を離れ、歩き出すと安斎は何故か並んで歩こうとはせずに俺の後ろに並んで周りをキョロキョロと見渡しながら隠れるように歩みを進める。

「……何してんだ。安斎?」

「アンチヨビだ!! 知り合いに会ったらどうする、ディアブロ!! そのためにもこうやって隠れて……」

「アンチヨビとディアブロ呼びの方がバレる確率が高いし、コソコソしてる方が怪しいだろ。」

「……ふぐぐうう……。……千代美で頼む、マコト。」

「そんなに安斎呼びは嫌いか!!! …… はあ、わかった。そっちで呼ぶ

よ。」

だからそんな涙目で見るなよ。

「きよ、今日だけだからな!!」

「じゃあ次回の映画鑑賞の時はいいのか？」

「うううう。」

俺の正論と少しの意地悪に観念したのか、顔を赤くして自信がなさそうに隣に並んで歩く安斎・・・じゃなかった、千代美。仮に今知り合いい見つかったとしても「服を買いに来た。」とか適当に誤魔化せばいいのだがそれが出来ないのが我が校の隊長である。まあ代わりに良いところはいっぱいあるのさ。試合後に相手を讃えたり、後輩の面倒見が良いところとか、・・・勝てること少ないけど。おっと、もう映画館に着いたか。

「この作品の学生2枚お願いします。」

「かしこまりました。あつ、お客様!!」

黒いスーツに身を包んだ受付スタッフのお姉さんにチケットを頼むと何か思い出したように机の下から1枚の紙を取り出してこちらに見せる。簡単なイラストと彩り溢れる文字が見えるが・・・

「ただいま対象の映画作品でカップル限定のキャンペーンをしています、なんと！今ココでハグをして頂くとチケット料金が半額になりますまゝす!!」

「なっ!?!」

「へえ〜。」

面白いキャンペーンをやっているもんだな。いかにもアンツイオらしい、お姉さんもノリノリで説明してくれている。ふむ、半額か。非常に魅力的な響きだ。

「いやいや!! 私たちはその・・・カ、カップルではないので普通の料金で・・・」

「これでいいんですか?」

「へっ!?!」

千代美の背中に手を回し少し力を入れ、俺の方へ寄せる。身長と体格差があるせいで俺の腕にすっぽりと納まり、彼女の頭は俺の胸板とくつつく。・・・ん?腕の中の千代美が震えだしたぞ? はっ!まさか!俺が臭うのか?! 普段から整備しているから錆やオイルの臭いが体に染みついているのか!?

「すまん!! あんざ・・・千代美!! クサかったか?」

急いで両腕を離しハンスアップ。刹那、

「idiot a!! scio cco!! stupid o!!」

「ふぐっ!!!」

千代美お手製、鉄拳ナポリタン（ナポリタン抜き）をダイレクトに腹に食らわされた。うづくまる俺を余所に涙目赤面の彼女は半額になった2人分の料金をさっさと支払い、先に劇場内へと消えてしまった。しかしいくらクサかったとはいえひどい仕打だ。普段から学校のおやつ時間をなくす等の節制をしているんだ。ならチケットが半額になるんだったら多少の臭いは勘弁してほしい。しばらく膝をついて腹を抑えていたが受付のお姉さんがやたらとニヤニヤと俺を見てくるので痛みは治まっていないうが俺も劇場へ歩を進めることにする。ちなみに千代美が先に払ったチケット代はちゃんと後で返

した。

・
・
・

映画を観終わり、夕日の赤い絨毯の上の帰り道を歩く。

「……………」

「……………」

お互いに無言。先ほどの事でギクシヤクしているわけではない。理由は……映画の内容だった。どこにでもいる普通の女性が恋をし、結婚をし、戦時中を生きたお話。当然、戦時中の描写として戦車も出てきた。多分、ここに千代美が引つかかっているのだろう。映画に出てきたものとは違うとはいえ、普段から戦車に乗っている千代美。頭の中でサンダースのケイさんがいつか戦車道について言っていた「これは戦争じゃない」という言葉が流れてくるものの、どうしても意識してしまうものはあるのだろう。無表情を装いながら時折ため息を吐いている。うまく表現できない感情がぐるぐると胸の中を回っては答えが出ない。たぶんこの先も100%正解の答えは無いんだろう。だから自分の中で決着をつけるしかない。だが助け舟ぐらいは出してもいいだろうか？

「あのさ、料理をするのに包丁を使うだろ？」

「……………」

沈黙破った俺の突拍子もない言葉に素っ頓狂な声をあげる千代美。
気にせず俺は続ける。

「だけど使い方を誤れば凶器にもなる。簡単に人を傷つけることだつて出来る。でも…戦車はさ、戦争の道具でしかなかったんだよ、戦車道が始まるまでは。」

「……。」

「だからさ、その…戦車道って……」

少し口を開けてこちらを見つめる千代美。普段あまり見ないような憂いを帯びたような表情。そんな顔から見られている緊張からなのかうまく言葉が繋げない。頭を掻きながら「あー。」と次の言葉を探している

「はーはっはっはっ!!」

先程の表情とは一変して千代美が空を見上げるほど笑い出した。

「私がさっきの映画を見て落ち込んでいると思ったか？ 私はそこまですぐ弱くない！ じゃなかった私は強い!! なんとってドゥーチエだからな!!」

両手を腰に当て、フンと鼻を鳴らす。嘘つけ、普段見せない顔してたじゃないか という言葉を言うのはやめておいた。また鉄拳ナポリタンは食らいたくないからな。もうお腹はいっぱいだ。

「それよりもディアブ……マコト!! 料理ができないくせによくも

まあ包丁を引き合いに出してきたなあ。アンツイオの生徒が料理が出来ないとは前々から由々しき問題だとは思っていた。よ、よって今からお前の家でこのドゥーチェが直々に料理をお、教えてやる!! 感謝しろ!!」

「え? 今から家来るの? まあいいけど。」

「よ、よし!! じゃあまずはスーパーに行くぞ。」

数分前のシヨンボリ感はどこへやら。嬉々と歩き出す千代美。それを見て思わず俺は

「戦車道って最高だな。」

と呟いた。すると

「ああ。まったくくだ!!」

最高の笑顔が返ってきた。

くおまけく

「お邪魔しまー・・・おい！部屋が汚いぞディアブロ!! 全く、これは料理の前に掃除だな。」

床に落ちている物をいくつか拾い上げる安齋。しかしその中には

「あっ!! ちょっと待て安齋!!」

アダルトティーなビデオがあった。

「・・・。」

数秒の沈黙

「わ、私は別に気にしないぞお。」

声が裏返っている安齋。

(じゃあいいか!・・・とはならねえよ!!!)

知波单学園

知波单魂を胸に

燃え盛るようなオレンジと黒のグラデーションが遠方の山を染め、だんだんと黒の割合が多くなる。グラウンドに備え付けられたベンチに座って水筒のお茶を一口含み、喉を鳴らす。どこにでもありがちな風景であるのに心を持っていかれる気がするから、夕方が「逢魔が時」と言われる所以だろうか。

思わず息を吐き、頬杖をつきながら景色を眺めていると突如、薄い灰色の煙が視界に割り込んできた。

「全車両突撃——!!」

勇ましい少女の咆哮、発砲音も割り込んでくる。今度はため息をつきながら「もう少し感傷に浸りたかった。」と心の中で言い、首を下げ、水筒をしまつてその場を後にする。この後、自分の仕事が待っている。

「お疲れ様であります!!金田殿!!」

戦車格納庫で戦車道履修者の帰りを待っていると同級生の福田の姿が見え、敬礼しながらこちらに向かってきた。

「お疲れ、福田。自分相手に敬語と敬礼はしなくていいだろ。同級生なんだから。」

「何を言っているのではありませんか!! 整備士の方々にはいつもお世話になっていきますのでこれくらいは当たり前であります!!」

「福田がそれでいいならいいけど……。にしても相変わらずボロボロだな、九七式中戦車。」

弾の擦れた装甲面をなぞるように触る。ザラザラした感触が伝わり、ずっと触っているとこちらの肌が傷つきそうだ。

「突撃は我が校の伝統でありますから!!」

小さい体で背筋を伸ばして堂々と答える福田。だが俺は前々からその伝統に疑問があった。

「伝統ねえ……考えなしに突っ込んでいっているようにしか見えないが。」

「なっ!? 伝統を愚弄する気ですか、金田殿!!」

「突撃自体が悪いと言っているんじゃない。猪突猛進、直情径行、蠅螂の斧。少しは状況を考えて、自分たちの実力に合った行動をしたらどうだと言っているんだ。」

「ですがこの突撃の知波単魂で我が校は上位までいったことが……」

「それずいぶん昔の話だよな? 最近はどうだよ?」

「……………」

福田は黙ってしまった。だが俺はお構いなしに言葉を続けた。続

けてしまった。

「伝統だったのもわかるが時代に合わせてそれも変化させなきゃ・・・」

「うう・・・我が校の伝統・・・我が校の伝統。」

福田が目頭いっぱい涙を溜めていた。

「うわー!!! 福田、自分が悪かった!! 泣くな!!頼む!!泣くな!!」

俯く福田に対してアワアワと両手を振るという意味のない行動をする自分。傍から見れば滑稽だが客観的に自分を見る余裕なんてなかった。とりあえず福田に落ち着いてもらおうと思ったが何をすればいいのかわからない。

「こんなところにいたのか!! 福田、アキラ!!」

何も良い案が浮かばず背中に嫌な汗が溜まっていたところ、後ろから自分の下の名を呼ばれた。振り返るとそこには黒髪長髪で美しい、日本人の多くが理想とするような女性が立っていた。

「お疲れ様です!! 西先輩!!」

福田はヘルメット、俺は作業帽に手を当てて寸分変わらず敬礼をする。知波単学園に通っていれば敬礼の動作を一致させることは容易い。

横目でチラリと福田を見る。どうやら西先輩の出現で福田の涙は引っ込んだようだ。助かった。女性を泣かせたとなれば日本男児失格。知波単学園での俺の扱いは虫けら同然になるであろう。

「なかなかアキラが現れないんでな。心配したぞ。」

「申し訳ありません!!西先輩。」

そう、俺は西先輩の戦車担当の整備士なのだ。本来であれば2年生の履修者には2年の整備士がつくのが普通なのであるが・・・

「で、何をしていたんだ?」

「ちよつと福田と雑談を・・・。」

「どんな話を?」

「戦車道についてですね。」

「具体的には?」

「我が校の伝統について・・・。」

聞きたびに目を少しずつ輝かせながら自分にズンズンと近づいてくる西先輩。

この西先輩の「私、気になります!!」と言わんばかりに事細かく聞いてくる性格が災いし、整備が終わる度に必要以上に聞かれるのが嫌になり、2年の先輩方が誰も担当をやりたがらず、1年の俺に押し付けられたのだ。

「伝統・・・ほう、興味深い!! で伝統のどんなことを話したんだ?」

「・・・。」

先輩に言えるわけがない。「むやみに突撃してますけどちゃんと考えてます?」なんて。先ほど福田には偉そうに言ったが、あれはあくまで同級生だからこそ言えた自分の個人的な意見である。ましてや一整備士である自分が戦車道履修者の先輩に進言するなんて・・・そこまで肝は据わってない。

「あ、あの!!そろそろ整備しなくてもよろしいんでしょうか?」

答えに困っていると横から福田の助けが入った。福田も空気を読んで先ほどの俺との会話は無かったことにしてくれたようだ。圧倒的感謝!!

「おお!! そうだった、そうだった。ではアキラ、今日も頼むぞ!!」

「はい!!」

短く返事をし、西隊長の戦車のある場所へと向かう。途中後ろを振り返り、声は出さず口だけを動かして福田に「ありがとう」と言った。

本日も無事に整備が終わり、水筒のお茶で一服しているとコツコツとブーツの足音が響いてくる。先ほど述べた理由からもう誰かおわかりだろう。

「いつもご苦労!! アキラ、整備はどうだ？」

「お疲れ様です。えっとですね・・・」

いつもの質問攻めが始まった。専門的な部分もあるので噛み砕いて説明などをすると「なるほど!!」とウンウンと頷く西先輩だが、恐らく話の半分以上わかってはいないだろう。そんな部分もあり、余計な時間も取られるので整備士の先輩方は嫌になってしまったに違いない。

「非常に為になった! ありがとうアキラ!」

「いえいえ。」

数十分して質問が終わり「ではこれで失礼する。」と手を挙げて格納庫を後にした西先輩。

「おまえ、よく耐えられるよなく。なんで？」

西先輩が過ぎ去ったのを見計らって戦車の影から整備士の先輩が出てきた。

「なんでと言われましても・・・自分は別に嫌ではないので。」

「嘘だろ!! 何十分も拘束された上に本人は理解をしてないんだぞ!!・・・もしかしておまえ、西の事が好きなのか?」

「えっ?」

「ほら、例えば玉田や細見に同じことをされたら想像してみろ。」

玉田先輩と細見先輩に? 顎に手を当てしばらく考え込む・・・嫌になるな。恐らく面と向かって言えないから学校に行かなくなる。じゃあ西先輩が好きという結論になるかと言われればそれは待つてほしい。

確かに西先輩には他の女性には無い何か特別な感情を抱いている気はするがこれが「好き」や「恋」といった感情なのか答えを出すには早すぎる。そう、思春期ゆえの勘違いかもしれない。そうだった場合、西先輩に対して凄く失礼だ。ここは慎重に見極めなくては。

「おーい、ちよつと来てー。」

突然、他の整備士の先輩の声が聞こえてきた。

「んー?ちよつと待つてろー。じゃあ呼ばれてるから行くなアキ

ラ。お前も終わったなら早く帰れよ。」

「えっ？ あっ、はい！ お疲れ様です。」

先輩も何気なく聞いたことだったのだろう。自分の返答を待つことなくさっさと呼ばれた方へ行ってしまった。残された自分は先輩の質問によって意識してしまった西先輩に対する感情の答え探しに追われることとなった。

「今日もご苦労、アキラ!!」

「お、お疲れ様です。」

「どうした？ なんだか元気がないな。」

「い、いえ。 そんなことは。」

(近い近い近い近い!!)

1つ質問するごとに近づいてくるのは西先輩の癖なのだろうか。真剣な眼差しで見つめてくるので視線を下に逸らすはそこには豊満な2つの膨らみが・・・いかんいかん!!

あの日以降、西先輩に対して前と同じような態度が取れなくなつた。「すぐに答えを出す必要はない。」と自分に言い聞かせても西先輩を前にするとどうしても意識してしまい不思議な焦燥に駆られる。

「ふむ・・・そういえば最近アキラは単車の免許を取ったらしいな。」

「? ええ。」

急に話題が変わったのと何故それを知っているのかで疑問符を浮かべる。・・・ああ、前に福田との雑談の中で話した気がするな。だから西先輩も知ってるのか。

「実は私も単車に乗るんだが、ウラヌスという単車でな・・・。」

そこから西先輩の愛車話が始まり、適度に相槌をうつっていると

「というわけでアキラ、今週末私と遠乗りしてみないか。」

「・・・え?」

「運転の慣らしも必要だろう? それにいい場所も知っている。どうだ?」

「あつ は、はい!!お供させていただきます!」

あれ? 思わず返事をしてしまったがこれは逢引きなのでは?。

戦車とは違った駆動音を鳴らしながら父から借りた単車に乗り、待ち合わせ場所まで来た。ちなみに言っておくが赤いビッグスクーターではないぞ。西先輩の姿は見えない。どうやらまだ来ていな

いようだ。しかしすぐに自分のとは違う駆動音が聞こえてきた。振り返ると緑色で目玉のようなライトの単車がこちらに近づいてくる。

「おはようございます、西先輩。単車カッコいいですね。」

「おはよう。フフツ、そうか。ありがとう。じゃあいくぞ!!」

「はい!!」

先に行く西先輩の案内で学園艦の様々なところに行き、おすすめの店、休憩場所、道筋等を教えてもらって気づけばもう夕刻だった。最後に紹介したい場所があると言うのでついていくとそこは海と夕日がよく見える場所だった。

「ありきたりだと思われるかもしれないが私はこういう場所が好きなんだ。」

恥ずかしそうに笑いながら答える西先輩。実にこの人らしいと思っただ。

「・・・で、アキラ。最近何か悩んでいることがあるんだろ?」

「!?!」

いきなり核心を突かれ体がビクつく。回りくどく言わないところもこの人らしい。

「気づいていましたか。」

隠しても仕方ないので素直に認めることとする。

「ここ最近よそよそしい態度だったからな。できれば話してくれないか?」

お互いに顔は見ず、残りの数十分を照らしてくれる赤色を見つめながら話す。

「そうですねえ。正直言うと自分でもよくわかっていないんですよ。自分の中でよくわからない感情が渦巻いていまして・・・これが何なのかよくわからなくてモヤモヤしてると言いますか。恐らくすぐに答えは出ないんだろうなとは思うものの焦燥感はあると言うか・・・ああっ!!言葉に上手く表せない!!」

「ははっ、落ち着け。」

「す、すみません。意味不明ですよね?」

「いや、わかるぞ。・・・実は昨日な、次期隊長に任命されたんだ。」

「はっ? えっ? おめでとうございます!!凄いじゃないですか!!」

「ありがとう。でもなアキラと一緒に今、よくわからない感情というものに心にあるんだ。」

そこで初めて西先輩の顔を見た。いつもの凜々しい眼差しが少し弱々しく見えた気がする。

「これは任命された嬉しさなのかもしれない。またはこれから先、隊長としてやっていけるのかの不安かもしれない。はたまたその両方が入り混じった感情なのかもしれない。」

ただ淡々と言葉を述べ、西先輩がこちらを見た。いつもより少し細

瞳が映る。

「すぐに答えが出ないとわかっているならとりあえず保留でいいんじゃないか？　まだ私達は若い。ただ、答えがわかった後で後悔しないようにやるだけの事、行動はする。つまり我が校の伝統の突撃の精神、知波単魂を持って日々を過ごす!!　これに限る!!」

(結局最後はそこに行きつくのかよ!!!)

「クツクツ・・・ハツハツハツ。」

心の中でツツコミをしながらも笑ってしまった。本当に。実に。実にこの人らしいと。

「む。ど、どこが可笑しいんだアキラ？　何か変だったか？」

「いや、悩んでる自分がバカらしくなりましたね。」

この感情が「好き」というものなのか、今はわからない。ただ今日わかったことがある。俺はこの人の生き方に魅せられたのだ。どこまでも真っ直ぐ突き抜けるその生き方に。

「アキラ。」

名前を呼ばれ、西先輩が右手を差し出す。

「これから先、隊長になってもよろしく頼むな。」

自分も手を差し出し、お互いに手を固く握む。

「もちろんです。西隊長。」

「まだ早い。」

軽く笑い合う声が響く。

笑いながら思った。正直、戦車道における伝統の突撃については色々と気に入らない部分はある。だがそれも自分の行動によって変えていくようにすればいいのだ。先輩方に伝統について意見をすることは気が引けるが仕方がない。自分だって知波単学園の生徒なのだ。だから

知波単魂を胸に突撃だ！

BC自由学園

パンもケーキもなければ

屋上で弁当を食べる。学生が憧れるシチュエーションだと思うがそれも毎日続くと飽きてしまう。人間って身勝手だな、と他人事のように自分の心をバツサリと斬りながらも歩を進める。もう高揚感があるのは屋上という場所ではなく弁当の中身になっているのが事実だからしかたない。うん、しかたない。さあ、ご飯ご飯。

無駄に装飾の多いドアを開け、屋上の中心に座り込み弁当箱を包んでいるバンドナを解く。そして手を合わせ

「いただきまー・・・」

「もつと定食を増やせー!!」

少し機械張った声がグラウンドから聞こえてきた。恐らく拡声器を使っているのだろう。

「エスカルゴ定食があるだろー!!」

すぐに反論が聞こえてきた。こちらは地声。声の主はわかるのでわざわざ見ない。この後の展開もわかりきっているので無視します。

「あんなもんで腹が満たされるか!! 唐揚げ定食とかもつと別のものを用意しろ!!」

「「そうだそうだ!!」

「ナイフとフォークをきちんと使えない低俗な貴様らの要望に応える義務などない!!」

「全くもつてその通り。」

「これだから外部生は。」

「あ? なんだと?」

「何だ? やるのか?」

.....
「うおおおおおおおおお!!!」

「いただきまーす。」

エスカレーター組と外部生組の喧嘩をBGMに飯を喰らう。これもほぼ毎日やっていることなのでもう興味がない。そんなことより弁当食う方が大事だ。うん、今日の玉子焼きの味付けはうまく出来た。いやー、学食のメニューが絶望的だったから自炊したら料理上手くなったな俺。食材？ 母親からの仕送りという名の密輸さ。え？ 自炊してるくらいなのになんで安藤達に加わらないのかって？ そりやあどちらかと言えば俺は安藤一派だけどき、話すと長いよ。あつ、ご飯食い終わったから話すのは食後のデザート後でいい？ まあデザートって言っても和菓子なんだけど。

弁当箱とは別に用意してある小さな長方形の包み紙、それを破る。中から出てきたのは

「あら〜美味しそうな羊羹ね〜。」

大きな口を開けてかぶりつこうとしたが突如、声が聞こえたので思わず振り返った。振り返ってしまった。ピンクのファーがついてる扇子で口元を隠しながら微笑を向けるロングの縦ロール女子が視界に入る。しかし微笑は俺にはなく羊羹に向けられている。

「.....やらん。我慢しろ。」

「どうして私が我慢をしなきゃいけないの〜?」

ゆる〜い口調で頭のゆる〜い答えが返ってきた。

「どうして俺の羊羹をあげなきゃいけないの〜? マリー?」

嫌味つたらしく同じ口調で返す。

「糖分が足りないの。少しくらいいいじゃないハンス。」

「嘘つけ、さっきまでケーキ食ってたろ！口にクリームついてんぞ!! 足りてないのはオツムの容量だろ!! あと俺の名前は半助だ!!」

羊羹を我が校の戦車道隊長にしてゆるふわケーキお嬢様、マリイの口に撃破されぬように立ち回りながら喋る。皆様、安藤一派の件、お話しするのはデザートの後と言いましたが羊羹の危機です。今すぐ急いで説明します!!

まあまずは自己紹介からだな。俺の名前は半助。BC自由学園で戦車道の整備班として活動している。結構古風な名前と言われるがその理由は俺の実家にある。ウチの実家は岡山にある老舗の和菓子屋なのだ。和菓子職人の親父と戦車道をしていた母親がお見合いの末、結婚。その次男坊として生まれたのが俺。THE職人気質な親父は兄貴の名前を「人の芯の部分を助けてやれる奴になってほしい。」という願いから『芯助』とし、「人の全部を手助けするんじゃないかと半分くらい手助けしてやる人物になってほしい。」という思いから俺が『半助』になった。結構な名前を子供につけるなあと思ったこともあったが家族関係にはかなり恵まれたと思う。俺が整備士を目指した理由は母親が戦車道の試合に連れていってくれた時に戦車というものにハマったからなのだが、子供ながらに実家の都合を考えるとなかなか「整備士になりたい!!」とは言えなかった。だがそれを察してくれた兄貴が「家は俺が継ぐからお前は好きな道に進め。」と後押ししてくれたので両親に思いきって言ってみると母親は大喜びしてくれた。親父は特に何も言わなかった。じゃあ学校どうしようかなと悩んでいたところにBC高校と自由学園の統合、さらに共学化のニュースが来た。母港が岡山なのでこれほどいい物件ないぜ!!と思っただけで入学。・・・入学したんですが、冒頭の通り中等部からそのまま来た「エスカレーター組」と高校から入った「受験組」の女子達の喧嘩が絶えない毎日。統合後の共学化だから男子の入学者も少なく、数少ない男達はビクつきながら喧嘩を見ていたが受験組筆頭、安藤が

「お前らも受験組だろ？ 参加してくれよ。」

と誘ってきた。確かに定食が増えてほしい等々は思っているがそれよりも我々男子の総意は

(女子同士の喧嘩に首なんて突っ込みたくない)

だった。なので参加せず。

そんなわけで男子は受験組女子から「ヘタレ」、今まで女子校で同世代の男子は未知の生き物なエスカレーター組からは「野蛮」「獣」の烙印を押されて学校での男子の地位は無いに等しくなった。肩身が狭い校内

、せめて食事くらいは癒しの時間を・・・ということで屋上でこっそりご飯を食べるようになった俺であるが

「甘い匂いがするわね。」

と本日と同様に和菓子を食べるところをマリーに見つかり、

「・・・・・・食う？」

とその時食っていたおはぎを与えてしまった。洋菓子しか食べていなかった彼女にとつて和菓子の味はとても新鮮だったようで、昼時とおやつ時になると毎日俺のところに来るようになったのだ。 ああ、今思えば選択を間違えたと思うよ。

とまあ安藤一派以外の件も入ってしまったが以上で説明は終わりで。・・・・ん？今は何してるかって？ 羊羹を天高く掲げてマリーに取られないようにしています。わはは、背が低いから取ることが出来まい。俺の前で「ん〜！」と唸りながら手を伸ばしてピョンピョン跳ねておるわ。 おっ？ なんだ？ しゃがんだぞ。

「えいっー」

「えっ？」

思いつきりしやがんだと思っただらそのベクトルを反対方向へすべて捧げるような大ジャンプ。そしてそのまま両腕を俺の首の後ろに回して抱きつき、落ちる重力は全部俺へ押しつけられた。突然のことで反応も重力に抗うことも出来ず、後ろへ倒れこむ。

ズザア、とアスファルトと服が擦れる音がしたが意外と痛みはない。それよりも

「・・・普通ここまでするかあ？」

「あま〜い。」

馬乗りになって俺の手にあつた羊羹を半分ほどかじったマリーは両頬をおさえながら恍惚の表情。対して俺は放心状態。遠く一面に広がる青を眺めている。お母さん、空ってこんなに青かったんだね。

「君達のくだらない主張のせいでマリー様を見失つたではないか！」

「マリー様のお世話は貴様らの仕事だろ!!何でも人のせいにするとはエスカレーター組は仕事が出来ないうえに責任転嫁するのか。」

「何だど？」

「なんだよ、やるか？」

屋上に声が近づいてくる。恐らくマリーの不在に気づいた押田と安藤が喧嘩を中断してマリーを探しに来たのだろう。いや、口喧嘩はしてるか。喧騒が聞こえながら屋上のドアが開き、すぐに静寂が訪れた。

「「……………」」

押田と安藤と軽く目があつた。ここで状況を整理しよう。放心顔の俺、俺の腹の上に馬乗りになって恍惚表情のマリー。色々とヤバイだろ？

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハンス貴様ー！！ マリー様に何をしている！！ 今すぐ離れる！！ まったくこれだから男は・・・」

「どう見ても何かされてるのは俺だろ。早くマリーを引き剥がしてくれ。」

「マリー様は甘党だと思っていたがまさか肉食だったとはな。」

「からかうな安藤。」

キーキーうるさい押田とニヤニヤする安藤。溜め息を吐きながら色々と疲れてしまった俺は糖分摂取のためにマリーのかじった羊羹の残り半分を口に放り込む。やっと甘いもんが食えたがどうにも幸福感が薄い。

「あー！！ハンス全部食いやがったな。私の方も残しとけよ！」

恐らくこのうるささのせいだろう。安藤までうるさくなった。

「文句ならマリーに言え。コイツが半分食った。」

いまだに俺の腹の上にいる涼しい顔をして扇子を軽くあおぐ奴を指差す。

「マリー様、さつきもケーキ食べていなかったですか？ 太りますよ。」

「おい！マリー様にむかってなんてこと言うんだ!!」

「別に太っても構わないわ。甘いものが食べられるのなら。」

「確かにお前ちよつと太った?」

一瞬にして空気が凍りついたのを感じた。だが原因がいまいちわからぬ。

「・・・帰るわ。」

「あつ！マリー様、待ってください！ハンス、貴様覚えておけよ！」

悪役みたいな台詞を吐いて去る押田とようやく俺の腹の上から退いたと思つたら早足で屋上から出ていった

マリー。表情は見えなかったがあれは・・・完全に怒ってる。と
うか拗ねてる。

「おい！なんてこと言うんだハンス！早く謝ってこい！」

「は？ 安藤が同じこと言った時はマリーは平気そうな顔してたじゃん。」

「馬鹿！ 同性が言うのと異性が言うのじゃ、言葉の重みが違ってくるだろ!!」

「えー？なにそれー。」

「いいから早く行くぞ!!」

寝転んでいた体を無理矢理起こされ安藤に引つ張られながらマリーのもとへ向かう。押田と安藤にギャーギャー言われながら謝ることに。お前らこういう時だけ意見が合うのな。

結局、大量の和菓子を渡すことを条件に許して貰えたが

「今日のおやつは何かしら?」

「お前さっきまたケーキ食ってなかった? 和菓子食わなくてもよくない?」

そう問うとウチの隊長、マリー様は
「パンもケーキも和菓子もあるんだから全部食べればいいじゃない
!!」

こう答えるのだった。

番外編

男整備士2人と昔話

太陽が海に飲まれつつある黄昏時。1人の青年は湯に浸かり、その様子を眺めていた。

プラウダ高校の整備士であるタクマはここ、大洗にある温泉施設にいた。

プラウダ高校の彼が大洗にいる理由は大洗・知波単連合と聖グロリアーナ・プラウダ連合のエキシビジョンマッチがこの場所で開催されたからである。

試合結果は聖グロリアーナ・プラウダ連合が勝利、そして今は互いの健闘を讃えあつて各校の生徒がこの温泉施設に激戦の疲れを取りに来ているというわけだ。

「いや、海が見える温泉ってのはいいな。・・・にしてもやっぱり男子は少ないな。」

彼があたりを見回しても人は疎らで、視界に映る人数を足しても10人いるかいないかぐらいである。戦車道は乙女の嗜みであるため、男がいるのは整備班としてぐらいである。その整備班も女性が多数を占めているため男性は本当に少ない。さらに本日は施設のご厚意によつて貸切にしてもらっているのも原因だろう。

(まあ、どこの高校も同じか。)

そんなことを思いながら手でお湯を掬い、顔を洗っていると横から声が入る。

「はあ、やっぱりバスタブじゃなくて風呂だよな。」

（バスタブ？ 聖グロの生徒なのかな？）

顔についた水滴を拭いながら、まるで魂が抜けるようなため息の声の主を見る。

その声の主も彼の視線に気づいたようでそちらを向く。

「あつ。」

互いの顔を見て固まる2人。しかしすぐに表情は緩くなった。

「タクマ？タクマじゃないか!!」

「ハルキ!!こんなところで会うとは!!」

ハルキと呼ばれた彼は聖グロリアーナの整備士であり、その隊長であるダージリンの戦車、チャーチルを主に担当している人物である。

「ここにいてってことは、まさか聖グロの整備士とか？」

「おお！よくわかったな！じゃあ、タクマは知波単かプラウダ？」

「プラウダ。」

「プラウダの整備士やってんだな！何で教えてくれないんだよ。」

「ごめん、ごめん。本当は入学してすぐ報告しようと思ったんだけど整備が忙しくて時間もずいぶん経っちゃったからいいかなって。そういうハルキも聖グロの整備士だって知らなかったぞ!!」

「いやー、ごめん。俺もお前と同じ理由だわ!」

ハルキが言い終わると2人とも大声で笑い、しばらく談笑するのだった。

「じゃあ、今日の再会と」

「勝利を祝して」

「カンパーイ!!」

風呂から出た2人は共用の休憩スペースで祝杯をあげていた。牛乳で。

すぐに互いに牛乳瓶を空にして一息ついた頃、ハルキが口を開ける。

「タクマ。・・・○○トーク!!」

「!! バインバインバインバインブー!!」

某バラエティ番組のオープニングをやり始める2人。どうやら彼ら2人のお決まりのノリであるようだ。

「久しぶりにやったけどちゃんと覚えてたな!」

「懐かしいな!ひたすら繰り返しやってたからなあ頃。」

「・・・相変わらずバカやってんのね。あんたら2人。」

「えっ?」

談笑しているところに突如後ろから声をかけられる2人。振り返ると褐色のショートヘアの女性が立っていた。

「ホ、ホシノ!!?」

「久しぶりね。中学卒業以来かしら。」

大洗女子学園、自動車部のホシノが2人に軽く挨拶をする。彼女は大洗女子学園の戦車の整備を行っており、言うなれば整備士兼戦車道履修者なのだ。

「えっ?・何でいるの?」

驚きがおさまらないままハルキが問う。

「何でって私、大洗女子学園だからよ。」

「いや、ウチとの練習試合の時いなかったじゃん。」

「ウチとの準決勝の時もいなかったな。」

「ああ、私は決勝戦から参加したから。」

「ええ〜。」

何ともいえない顔をする2人。しかしあることが気になったタクマがすぐに表情を変えホシノに聞く。

「じゃあ戦車、何乗ってるの？」

「ん？ ポルシェティーガー。」

「ポルシェ!!」

「ティーガー!!」

言葉を分割してまたもや驚く2人。だが

「お願い!!見せて!!」

「エキシビションの映像だけじゃなくて生で見たいんです!!見せて!!」

すぐ表情を変え、手を合わせながらホシノに迫る2人。彼らは重度の戦車整備士なのでポルシェティーガーのような珍しい戦車はどうしても見ておきたいのだ。

「い、いや私に頼まれても。」

「お願いちょっとだけでいいから見せて!!ちょっとだけでいいから。」

「生で!!生で!!お願いします!!」

「何がちょっとだけなのかしら? ハルキ。」

「何が生なのでしょうか? 同志タクマ。」

「はっ。」

彼らが振り向くと同時に乾いた音が数発、あたりに響いた。

少し場所を移して、休憩スペースにあるお座敷。座布団の上に男整備士2人が正座している。彼らの両頬には綺麗な紅葉が咲いていた。その対面には聖グロリアーナの隊長であるダージリンとプラウダの副隊長のノンナが座っている。そしてその中間、いわゆるお誕生日席にはホシノと、いつの間にか集まった大洗女子学園の自動車部メン

バー、ナカジマ、スズキ、ツチヤがいた。

「じゃあ2人はホシノと同じ中学校出身で、久しぶりに今日再会して、ホシノが乗ってるポルシェティーガーを見せてもらおうと頼んでいたところだったんだね？」

状況を整理して1から丁寧に説明してくれるスズキ。男整備士たちは両頬を押さえながら無言で頷く。

「こ、こんな場所で大声を出すなんて聖グロリアーナの生徒としてはしたくないと思ったから制裁を加えたのよ。ハルキ」

「そ、そうですよ。公共の場と言うことを考えてください。同志タクマ。」

ばつが悪そうに答えるダージリンとノンナ。

(……納得いかない。絶対何か勘違いしてただろ。)

そうは思いつつも2人が怖いので謝ることにする整備士2人。

「ごめん、ノンナ。次からは気をつける。」

「申し訳ありませんでした。ダージリン様」

「……様？ え？ ハルキ、何その喋り方？」

「聖グロだところなんだよ!! あと一人称『俺』も禁止なんだよ。」

「ブフツ。何それ？」

「笑うなよ。．．．というかお前もなんだよ、同志つて。」

「いやプラウダだところで．．．変に拒むとシベリア送り25ルーブルだから。」

「．．．何それ？」

「日の当たらない教室で25日間の補習授業。」

「ブハッ。変なの。」

「いやいやそつちほどでは。」

「いやいやいや。」

「．．．．．ハッハッハッハッ!!!」

突然笑い出す2人に目を丸くして驚くダージリンとノンナ。

「こんなハルキの姿、はじめて見ましたわ。」

「私もです。同志タクマがあんな風に笑うとは。」

「そう？ 中学の時からあんな感じでバカだったわよ、2人とも。」

ホシノが呆れ気味に言う。

「普通にひどいなホシノ。」

「相変わらず容赦ないね、ホシノは。」

「イヤイヤ、だってあんたら昔、用務員さんの芝刈り機の調子が悪いって聞きつけて、勝手にモーター部分パワーアップさせすぎて暴走殺人マシーン生んだことあったじゃない。」

「あゝ、あったあった。暴走させたらタクマが『キ〇〇マシンがあらわれた!!』って言った時には笑ったな。」

「懐かしいなあ。その後、ハルキが『ハルキたちは逃げ出した!しかしまわりをかこまれたああ!』って言ってキ〇〇マシンから2人で必死に逃げたなあ。」

「そんで2人とも先生にこっぴどく叱られて今みたいに正座させられてたわよね。ほら、今と変わらないじゃない。」

「いやゝ、アツハツハツハ。」

手を頭の後ろに当て、笑う二人に対してため息をつくホシノ。

そこで先程まで黙って話を聞いていたナカジマが口を開く。

「ねえねえ、中学時代のホシノはどんな感じだったの?」

「あつ、気になるゝ。」

「聞きたい聞きたいゝ。」

「ちよ!!」

加勢するスズキ、ツチヤに焦るホシノ。

「そうだな、昔っから女っ気が無かったかな。」

「「あゝ。」」

ハルキの答えに、いつものホシノのツナギとタンクトップ姿を想像する自動車部3人。

「あゝって何よ、みんな!!」

「でもその割には結構告白されてたよね？」

「なっ!? 何で知ってるのよ!! タクマ!!」

「いや、皆だいたい校舎裏で告白すんじゃない? 俺とハルキ、そこらへんで機械イジリすること多かったから自然と耳に入っちゃって。」

『「わたし今、自動車にしか興味ないから」ってバツサリ。トボトボ帰っていく同級生を何人見たことか。中にはイケメンもいたのに。」

「うるさい!! 黙りなさいハルキ!!」

もう顔が真っ赤になってしまっているホシノ。それを興味深そうに聞いている自動車部の面々。

「しかしもったいないな。1人くらいOKしとけば良かったのに。」

「・・・あんたら2人以外に言われても興味ないわよ。」

「……………(あんな顔、今まで見たことなかった。)」

目を伏せ、テーブルだけを見つめる二人。自分たちは彼らの何を知っているのだろうかと考え込んでしまった。

「あつ、もうこんな時間か。ダージリン様、そろそろ帰りましょう。」

「え？ ええ、そうね。」

「どうしました？ ああ、今日はお疲れなんですね。無理もありません。激戦でしたからね。良ければ部屋まで紅茶をお持ちいたしますよ。」

「!! ええ!!お願いするわ! それでは皆様、ごきげんよう。」

「皆様、ごきげんよう。」

「ブフツ。 じゃあな、ハルキ! ちゃんと連絡よこせよ。」

上機嫌で去っていくダージリン。そして「笑うんじゃない、おまえもな!」と手を挙げて出ていくハルキ。

「じゃあ俺達もそろそろ帰るかノンナ。」

ハルキを見送ったタクマがノンナに言う。

「……………ええ、そうですね。今日は良かったですね。同志タクマ。」

「そうだな!!試合に勝ったし、旧友には会えたし・・・あつ、そうだ、ノンナ!!帰ったらボルシチ作ってくれない?」

「? 何故ですか?」

「いやだつてこんなに良い日だから、あとはノンナの作ったボルシチがあれば俺にとって最高の日になるよ。お願い!!・・・ダメかな?」

「!! いいですよ!!同志タクマ。では早く帰りましょう。」

「おわつ!! じゃあなーホシノ。」

上機嫌のノンナに手をひかれてバランスを崩しながら帰っていくタクマ。

ホシノはただ2人を無言で手を振って見送った。残されたのは自動車部だけとなった。

「「まだチャンスあるつて!!」」

「? みんな何のこと言ってるの?」

「「何でもなーい。」」

ケラケラと笑う3人に対して?マークを浮かべるホシノであった。

日付が変わろうかという刻。1台のスマホの真っ暗な画面が突然明るくなり震えだす。

持ち主は慣れた手つきで受話器のアイコンを押しスライドさせ、機器を耳に当てる。

「もしもし?」

「ハルキか?俺だ。」

「タクマか。」

「大洗の件、聞いたか?」

「廃校らしいな。」

「まったく、せつかく俺たちが再会できた日になってことしてくれんだよ文部科学省は。」

「やり方が横暴すぎる。今、ウチのG I 6が色々と情報を集めている最中だ。いずれそっちにも通信文を送る。」

「さすが。」

「それに・・・ホシノや大洗の連中が倒れたままでいるわけないからな。」

「それはウチの高校も聖グロも同じことが言えるんじゃないか？」

「ああ、だからやれることはすべてやるつもりだ。」

「・・・ハルキ、おまえ今、戦車の前にいるだろ？」

「タクマ、おまえだってそうなんだろう？」

「男の整備士がやれることって言ったらいっただけじゃねえか。」

「だからこそ全身全霊かけてやるんだろ？」

「違うない。」

「ああ、じゃあ」

「健闘を祈る、友よ。」

月明かりの下、各々の戦車に向かう男整備士の背中をただ星だけが見ていた。

ポリッツの日その1

プラウダ編

「んー。」

「えっと・・・クララー？」

「んー。」

放課後の人気が少ない体育館裏、授業が終わるなり俺はクララーに呼び出された。特に何の疑問も持たずについていくと突然、俺の横に手を伸ばし壁ドン。そしてそのたわわに実った2つの果実を押し付けながらポリッツを口に啣えて目を閉じながら俺に差し出してきた。

ちなみにポリッツっていうのは細い棒状のお菓子で8割ほどがチョコでコーティングされており、そこに塩味が少し効いていて甘塩っぱい人気のお菓子だ。

「聞いてクララー、これは一体何？」

しつこく聞く俺に拗ねた顔をしながらクララーは答えてくれた。

「今日はポリッツの日といって普段お世話になっている異性にこのようにしてポリッツを渡す日本の文化的な日だと聞きました。」

誰だクララーにこんな情報を吹き込んだ奴は!!! いや待て、クララーもこんな情報を鵜呑みにするほどバカな子ではなかったはず。・・・わかったうえでやってる?・・・いやいやそれは俺の自惚れか。

「さあ、同志タクマ。早くしないとチョコの部分が溶けてしまいま

す。」

より一層密着してくるクララにたじたじになっていると

「何をしているんですか？」

ノンナの冷たい声が聞こえてきた。

「えつとですね・・・ノンナさん。これはクララが色々勘違いしております。」

声だけではなく眼光も冷たいノンナに思わず両手を挙げながらさん付けで話してしまう俺。対照的にクララは一切気にすることなく俺に密着してポリッツを啜えたままだ。

「あつ、同志ノンナも一緒にいかがでしょうか？」

「はっ!？」

「ええ、そうさせてもらいます。」

「えっ!？」

クララとノンナの発言に驚きながら顔を左右に動かしていると懐からポリッツの袋を取り出し1本引き抜きを口に啜える。へくノンナさんも自分で用意してたんですか、へく。

押し付けられた果実が2つから4つに増えて完全に逃げ場がなくなった俺。そしてポリッツを啜えた2人の美少女。

「えーと・・・2人と・・・!!!!」

口の両端にポリッツを差し込まれ強制的に言葉を遮られる。近づいてくる美少女2人の眼前。

甘塩っぱい後に刺激的な味が襲ってきたのは言うまでもない。

聖グロ編

「ハルキ。」

「はいよ。」

戦車道の練習が終わり、いつものお茶会が始まる。ただ、今はこの部屋には俺とダージリンしかない。だから敬語は使わない。後輩達は恐らく後片付けをしているのだろう。・・・サボったなダージリン。

「今日の紅茶は一層おいしいわね。」

俺に突っ込まれないように布石を打ってくる。

「・・・急に寒くなったからな。」

突っ込むのは諦めた。そういう仕事はローズヒップの仕事だしな。違う意味だけど。

「ところでハルキ、スプーンが見当たらないのだけど。」

砂糖を少し追加しようとしたダージリンがジェスチャーを交えて伝えてくる。

「あれ？おかしいな。あるはずだ……。」

予備のスプーンがあるところを見渡すが綺麗に一本も無い。……綺麗になさすぎる。まるで図ったかのように。

「……ダージリン？」

少しドスを効かした声で聞いてみるが相変わらずの涼しい顔で紅茶を飲んでいらつしやる。

「こんな格言を知っているかしら？ スプーンが無ければポリッツを使えばいいじゃない」

どこから出したのかポリッツを一本だして紅茶に入れ、かき混ぜはじめた。

「そんな格言はない!!」

俺の言葉を見無視し、かき混ぜている手を止めてポリッツを紅茶から取り出し口に啜えるダージリン。紅茶の熱で溶けたチョコが口周りを汚す。

「あら、汚れてしまいましたわ。」

「淑女が聞いて呆れるな。」

「ここを綺麗にするのもあなたの仕事だと思うのだけれど。」

溶けたポリッツを啜えながら器用に話してくる。

「仰せのままに。」

顔を近づけポリッツの姿をなくし、ダージリンの口周りを綺麗にした2人だけのお茶会だった。

ポリッツの日その2

継続編

「ポロローン・・・ポリポリポリ・・・ポロローン・・・ポリポリポリ。」

「・・・なあ、さつきからその音気になるんだけど。」

「おや？ おかしいね。いつも君の後ろで弾いていたと思うんだけど。」

「いやカンテレじゃなくて食う音。」

放課後、今日は戦車道の練習が無いのでいつも通りBT-42の整備に取り掛かっているとこれまたいつも通りミカが俺の後方でカンテレを弾き始めた。そう、ポリッツを食べながら以外はいつも通りだ。

「ポリポリポリ」

もうカンテレの音は完全に聞こえなくなった。食うのに専念しているようだ。振り返り、怪訝な顔で見ているとポリッツを1本取り出し軽く左右に振ってくる。

「そんなに欲情的に見つめてくると私も1本ぐらい君にあげなくては
いや、いや、いや。」

お菓子が嫌いなわけじゃないが今は特に欲しい気分でもない。あとミカに乗せられるのが癪だった。

お得意の涼しい顔は変わらず左右に振っていた手が止まった。いつも人のことをおちよくつてくるくせにカウンターには弱いんだよな。しかしだからこそ、その時の反応が面白い。さてどう返してくるかな。

内心ワクワクしながらミカに向けていた視線を戦車に戻し整備を続ける。しかしいくら待っても反応が無い。そしてポリッツを食べる音も聞こえてこない。

ぷにっ。

不意に右頬の1ヶ所に力が集められる。少し下を見るとミカが眉をしかめながらポリッツで俺の頬を刺している。

「食べ物で遊ぶんじゃない。」

「君が素直に人の厚意を受け取らないからだろう。」

「へー、ミカから『素直』なんて言葉が出るとは思わなかった。」

「どういう意味だい。」

「アキも言ってたように捻くれて・・・むっ!!!」

途中でポリッツを口の中に突っ込まれた。

「人に食べ物を恵んでもらった時は何て言うんだい？」

目が笑っていないミカが睨んでいる。少し言い過ぎたか。このままでは俺のお口がトゥータされてしまいそうだ。

「・・・ありがとう。悪かったよ。」

謝罪し、ポリポリとポリッツを食べ始めた。唾液が先端のチョコを

溶かし、甘塩っぱい味が広がってくる。

「うん、……まあ美味しいn……!!」

ポリッツが全て俺の口の中に消えようかとした時、ミカが首に抱き着き勢いよく跳んだ。俺の口からわずかに飛び出していたポリッツをミカの口が飲み込み、俺とミカの唇の距離は0になった。

「んっ……はあ。……彼女にキスしてもらった時は何て言うんだい？」

頬を紅潮させながらしてやったりと言った顔をする。ここでさつきと同じようにカウンターをかましたら今度は口を聞いてくれなくなりそうだ。悔しいが折れてやろう。

「愛してるよ、ミカ。」

俺はもう一度彼女との距離を詰めた。

黒森峰編

「西住流に逃げるとい道は無い。」

「……ええ、知ってますよ。」

「ならあまり待たせるな。」

「いや……それとこれとは意味が違うような……。」

「違くない。リーダーもいざれ西住家の一員となる。今のうちに西住流に慣れてもらわないとな。ほら、早く。」

何度目かの西住家の訪問。本日は初めてまほさんの部屋に入った。用意された座布団に何となく正座で座り、周りを少し見渡していると正面にまほさんも正座で座る。口にポリッツを咥えながら。・・・まほさん、それは何？ と聞くと冒頭の言葉が返ってきた。うん、よく意味が分からない。(棒読み)

だが眼前に目を瞑ってポリッツを咥えながら上下に動かしている西住まほを見て我慢できる男はあるだろうか。いや、いない。できるって言うやつは男じゃない。

ゆっくりとポリッツの端に近づき、歯と歯で押さえる。少しずつ、少しずつポリッツを噛み進め、まほさんの唇までもう少しというところ。

「まほ？ 誰か来ているの？」

しほさんが扉を開けた。

「バキッ!!」

神がかり的速さでポリッツを噛み砕き、元の位置に正座する。俺とまほさんはお互いに顔を赤くしながらも違う方向を向いていた。

「・・・何故あなたたちは正座して向き合っているのに顔だけは向き合っていないの？」

「・・・彼とあっちむいてホイをしています。」

「だとしても2人とも正面向いてないのはおかしいわよね？」

「彼がルールをよくわかっていないもので。」

「えっ!? あっ、はい!!そうです!!」

「・・・そう。来ているのが彼ならいいわ。」

言い終わると扉を閉めて去っていくしほさん。扉が閉まる音と同時に緊張の糸が切れて胡坐をかく。生きた心地がしない。

「はあー。びっくりしたね、まほさ・・・んっっ!!!」

ため息をつき、俯いていた顔を上げるとまほさんの唇が当たった。柔らかい感触と共にさつき砕いたポリツツの破片が俺の口に入ってくる。

「ん・・・では次はリーダーの番だな。」

間髪入れずに次の要求をしてくる。これが西住流なのか？ そうとなれば俺も動かなければいけない。撃てば必中の西住家、その一員になるのだから。

「・・・まほ。」

彼女の両肩を掴み、名前を呼ぶ。彼女もそれに応えゆっくりと目を閉じる。

西住流に逃げるといふ道は無い。だがこの唇から逃げる馬鹿はいないだろう。

俺は彼女の唇に自分の唇をそっと当てた。

男たちの宴

「それでは皆さん、大洗女子学園の廃校撤回を祝して」

「カンパニー!!!」

2学期が始まって最初の休日。大洗の奇跡を起こした 猛者たちが 廃校撤回の祝勝会でアンツイオ高校に集まっていた。

この祝勝会はアンチヨビ発案のもので、「こんなめでたいことを祭りにしないでどうする。祭りといえば アンツイオだ!!」とのこと。本来であれば試合に勝った当日に行いたかったが、さすがに全員疲れていたの で 後日開催ということになり現在に至る。

祭り好きなアンツイオの生徒がせわしなく動く屋台が何軒も並び、出来た品々を嬉々と来校者に運ぶ姿を見ていると廃校危機だったのはアンツイオでは? と錯覚するほどだ。運ばれた料理を見て黄色い女子の声があがる中、少し離れたところであるグループが形成されていた。

「じゃあもう一度、大洗女子学園の廃校撤回を祝して」

「カンパニー。」

グラスを強くぶつけ合っているこの集団、各高校の男整備士達である。実は大学選抜との試合で各校の垣根を超えて協力し合い、戦車を直し、その中で知り合ったのだ。別段珍しいことでもないようで、同じような男だけの整備士グループがチラホラと見える。

「ディアブロさん、何回言うんすか? それ?」

「こういうのは何回言ったっていいんだよ! ダウナー。」

ディアブロと呼ばれた青年に笑いながら肩を叩かれてグラスの飲み物をこぼしそうになるサンダース大学付属の整備士ダウナー。

彼の生まれつきの目の悪さから「つまらない」と感じていると勘違いしたディアブロがさつきから放っておけずに隣に座って話しかけている。彼も立派にアンツイオの生徒だったようだ。

対してダウナーは「目つきの悪さに触れないでくれるから、まあいい人なんだろう。」と「少しノリがケイ隊長に似てるな。」とアンツイオ生徒のノリの良さに自身の高校の隊長を思い浮かべていた。

「まあでもこの中に大洗女子学園の関係者1人もいないしな？ 女子高だから当たり前だけど。」

「強いて言えば俺達は中学の同級生がいるぐらいだよな？」

続いて言葉を発したのはプラウダ高校整備士のタクマと 聖グロの整備士ハルキ。彼らは 大洗女子自動車部メンバー、ホシノと同じ中学校の出身。ゆえに今回の件は部外者でありながらも他人事ではなかった。

「そういうことで言えばウチは元生徒が現大洗女子の隊長ですよ。」

「そうだな。(そして将来的に義妹になる予定の子でもあるんだよな。)」

タクマとハルキの会話に参加する黒森峰整備班班長ツヴァイと元整備班班長リーダー。彼らも同様に今回の事に関しては 他人事ではなかった。特にリーダーは将来の家族となる人の妹の危機だったので整備にかける思いは人一倍強かった。

「それにしても継続高校の整備士さんは来なかったんですね。」

知波単学園の整備士、アキラがこの場にはいない継続高校の整備士の欠席について疑問を投げかける。

「継続高校のやつらは途中で帰っちゃったからな。そもそも整備士が会場にいたのかも分からないし、一応手紙は出してみたが来なかつ

たか。」

「・・・(何故か知らないがややこしくなる気がするから来なくて良かったと思う。)」

「どうしたタクマ？　考え込んで。」

「ああ、何でもない。それよりもアキラ、皿運びしてないでお前も座って食ったらどうだ？」

「いえ、自分が一番年下なのでこれくらいは当然かと。」

先程からアンツイオの生徒達に混じってコチラのグループに料理を持ってくるアキラ。　普段から上下関係がはっきりしている校風のせいか自分が動いていることについて特に疑問を持っていないようだ。

「いやいやお前も座って食え。　お前も客人なんだから。」

ダウンナーの相手をしていたディアブロが立ち上がり、アキラの両肩を掴んで強制的に座らせる。「すみません」と申し訳なきそうにしながらようやくご飯を食べ始めるアキラ、その横でこのグループで唯一アルコール分が入った飲料を持つてるを男が複雑な面持ちで口を開いた。

「なあ？　やっぱり俺、場違いじゃねえか？」

大学選抜の整備士、ヒロアキである。そう、この祝勝会には大学選抜チームも招待されている。何故なら試合後には敵味方関係なく、お互いの健闘を讃えあつて労う。それがアンツイオ流だからだ。

「何言ってるんですか、ヒロアキさん!! 敵だったことなんて気にしなくていいですよ。」

「そうですよ、悪いのは文部省なんですから。」

「今頃あのメガネの役人、どうしてるかな〜。」

「そりゃあもう、こっつり絞られているだろ。」

「二」「・・・フツ、フハハハハハハハ!!」「二」

「はい!! それでは皆さんもう一度、大洗女子学園の廃校撤回を祝して〜」

「二」「カンパ〜イ!!! ハッハッハッハッ!!!」「二」

自虐するヒロアキに各校の整備士たちのフオローが入るがいつの間にか話は役人のことになり整備士たちの黒い笑いが周りを包み、祝勝会は続く。

・
・
・

「ふうー。・・・ん?」

喧騒だった祝勝会がやや静穏になりはじめた頃、席を一時離脱し手

洗い場所から出てきたリーダーはある人物達を目にする。

「あれは・・・みほちゃんとツヴァイか？」

宴会場から少し離れた静かな場所にみほとツヴァイがおり、何やら話し込んでいるが内容まではわからない。盗み聞きするのは気が引けたが興味という魔物に誘われて一步一步近づいていると

「何してるんですか？先輩。」

「うお!?!・・・逸見か。」

後ろから声をかけられて『シエー!』に近い謎ポーズをとりながら振り向くと同校の逸見エリカがおり、見知った顔に安堵の息をもらした。その態度に訝るエリカだがリーダーが無言で指さす方向へ視線を向けると思わず目を見開いた。

「なっ!?! なんてあの二人が?」

「さあ? 俺も今来たばかりだからわからん。もう少し近づかないと会話も聞こえないしな。」

そう言ってもう一步踏み出そうと足を上げたが

「何してるの? あなた達。」

今度は下の方から声が聞こえた。

「?」

その人物の声が大きかったのか、みほとツヴァイはリーダー達の方
向を向く。しかしそこには誰もいなかった。いや、正確にはいるのだ
が脱兎の勢いでしゃがみこみ、茂みに隠れたのだ。

「あなた、声が大きいわよ!!」

「いや逸見、お前も声がデカイ。」

エリカが声をかけてきた人物に注意をするが逆に声のボリューム
についてリーダーから指摘を受ける。エリカが頬を少し赤らめて「う
ぐぐ」と唸るが

「・・・本当に何をしてるの?」

もう一人の注意された人物、カチューシャは状況が飲み込めずに首
をかしげながら普通の声のトーンで話す。それに対して二人は人差
し指を立てて必死に「しーっ!しーっ!」とジェスチャーをするがこ
れが逆効果だった。

「? この茂みの向こうに何かあるの?」

そう言うと茂みの向こう側に歩を進める。ちなみに今隠れている
茂みはカチューシャより大きいので彼女はしゃがんでいない。

「ちよ、ちよ、ちよつと待って。お願いだからこの茂みから出ないで!!
肩車してあげるからここから見て!」

「きやつ!!いきなりやらないでちようだい!ビックリする……あれ
はミホーシヤ?」

リーダーの突然の肩車に文句を言っていたカチューシヤだがみほ
の姿を見かけると態度が変わり、やや興奮気味に話しかけてくる。

「ねえねえ!あの二人何を話してるのかしら? 何か思い当たること
ないの?」

「思い当たること? いや全然……あつ!!」

問われてすぐに否定しようとしたリーダーだったが何か心当たり
があるらしく、口を開けたまま動きが止まる。

「なにになに? やっぱり告白とかなの?」

「い、告白!?!」

目を輝かせながらリーダーに問い詰めるカチューシヤと『告白』と
いう予想外の単語が出てきて戸惑いを見せるエリカ。

「そうよねえ、優勝したし今回の件もあつたしカチューシヤの次く
らいに人気が出てても不思議じゃないわ。うんうん。」

「いや違「ごめん!!!」

自己完結するカチューシャにツツコミを入れようとするが突如として謝罪の声が遮った。見るとツヴァイがきれいに90度で頭を下げている。対面しているみほも突然のことで動転して両手をぶんぶんと振りながらどうしたらいいのかわからないというような顔をしている。

「・・・男の方が謝ったってことはまさか!! ミホーシャが告白して振られたってこと!?!」

(そんなわけないじゃない。あの子がそんな大胆な・・・いや、戦車に乗ってるときは大胆な行動を起こすわね。でもまさか・・・いやそんなこと・・・)

カチューシャの妄想が伝染したのかだんだんと自論に自信がなくなっていくエリカ。そこにリーダーの真剣な声が通る。

「アイツは今、自分の後悔にケリをつけてんのさ。」

その言葉に目を見開くエリカ。

(ああ。そうか、そうだった。嫌というほど私に似ているアイツがあなたの子に謝ること・・・そんなの決まっているじゃない。)

第62回戦車道高校生大会決勝で起きた事件。そこから起因して喫茶店で再会した時に口に出してしまった言葉。みほ本人はもう気にしていないだろうがエリカはずっと悔いていた。面と向かってみほに言葉を投げつけていないツヴァイが謝っている姿を見て、よりそれは強いものになり自己嫌悪に陥っていた。

「……もう離れましょう。」

「……そうだな。」

「えー!? これから面白そうなところじゃない!!」

三者三様の感情を頂きつつ、頭の上で暴れる文字通りの暴君を抑えつつこの場を離れようとしたその時

「何してんの? 3人で。」

本日3回目の問いに振り返る一行。そこにはタクマ、その後ろにはまほがいた。

「……珍しい組み合わせだな。」

「いやノンナがカチューシャがいなくなっただって俺のところに来たんで、探しに来たら近くで西住さんと会って……」

「まほでいい。西住だとみほと混同することもある。それに同学年だろう?」

「……えーっと、近くでまほさんと会って、カチューシャを探すの手伝ってもらってたら3人の姿を見かけた……というわけです。」

まほの訂正が入りつつリーダーの問いにタクマが答え終わると今度はまほが質問をする。

「私も1つ問いたいんだが・・・それはどういう状況だ。」

そう言つてリーダーに肩車されているカチューシャを睨む。

「ヒツ!? タ、タクマ〜!!」

「あく、はいはい。すみませんねリーダー、うちの隊長が。」

そう言いながら涙目で手を伸ばしてくるカチューシャを抱き上げ、リーダーから自分の頭へと移動させるタクマ。

「ああ、全然大丈夫。・・・まほさん、眉間に皺寄ってる。」

「っ!! す、すまない。」

(・・・まるで親子と新婚夫婦の会話みたいね。)

タクマとカチューシャ、リーダーと顔を赤くするまほを見て心の中で率直な感想をエリカは述べていた時

「あれ? どうしたのお姉ちゃん、こんなところで。」

話し合いを終えたみほとツヴァイがこちらに来てしまった。素振りを見る限り、幸いにも覗いてたことはバレていないようで一安心する3人。

「あっ!!」

ところがみほが急にリーダーの顔を見ると声をあげたので固まる3人。

「えつと・・・お・・・」

顔を赤らめながらもじもじするみほの言葉を待つリーダー。大量の汗が彼の身を包む。そして発せられた言葉は

「お、お義兄ちゃんも一緒だったんだね!!・・・な、なんちゃって・・・えへへ。」

「グフツ!!」

「三リ、リーダー!?!」

みほの言葉を聞いた瞬間、リーダーは吐血し膝から崩れ落ちた。

「しっかりしろ、リーダー!! ダメだ、安らかな顔をしてやがる。ツヴァイ!! 運ぶからおまえ足を持って!!」

「了解っす!!」

カチューシヤを肩車したままのタクマの呼びかけに走るツヴァイ。その時にエリカとすれ違う。

「俺はちゃんと謝ったぞ。」

彼女にだけわかる声で言うように笑い、タクマと一緒にリーダーを運ぶツヴァイ。ツヴァイの態度に完全に頭に来たエリカは

「ちよつといいかしら！ 元副隊長！」

「ひゃ、ひゃい!!」

リーダーの突然の卒倒にあたふたするみほ。さらにそこへエリカに強い口調で呼ばれ、声が裏返る。

「……………」

「……………」

勢いでみほのことを呼んだものの、いざ対面すると気まずく沈黙してしまう。だがツヴァイのあの勝ち誇った顔を浮かべると負けてはいられなかった。

「い、一度しか言わないからよく聞きなさい!!」

少女2人は話し合う。過去の事、今の事、そしてこれからのことを。

・
・
・

「・・・というわけでリーダーが倒れました。」

リーダーを無事に先ほどの宴会会場まで運んだタクマは他の整備士たちに一部始終を話していた。ちなみにリーダーは今、まほの膝枕で眠っている。

「みほちゃんに『お義兄ちゃん』って呼ばれたらそりゃあ倒れるわな。」

妹を持つヒロアキは「よくわかる!!」といった眼差しでリーダーを見ている。他の整備士たちもウンウンと頷く。

「・・・ヒロアキ。」

「ん？ おお！愛里寿、どうした？」

「私、そろそろ門限だから帰るね。3人に送ってもらってからヒロアキはまだ飲んで大丈夫。」

「そうか、悪いな送ってやれなくて。気を付けて帰れよ。」

「うん。じゃあまたね・・・お・・・お兄ちゃん。」

先程の会話を聞いていたのだろう。悪戯っぽく笑うと愛里寿はそのまま振り返らず去って行った。

「? ヒロアキさん? . . . し、死んでる!!」

「いや、気を失ってるだけですよディアブロさん。」

微動だにしないヒロアキを不審に思ったディアブロが肩を揺らし
てみるが反応がなく、顔を見ると「燃え尽きたぜ、真っ白にな」状態
だったので死亡判定を下すがダウンナーに冷静にツッコまれる。

「西住流、島田流、共に恐るべしだな。」

「なにタクマ、あんたも「お兄ちゃん」って呼ばれたいの? しょうが
ないわね、カチューシャが・・「あつ?」

「ヒツ!? ノ、ノンナ。」

先刻と同様に今度はタクマがカチューシャを睨みつけると先程合
流したノンナの方へ駆けて行きノンナの腰に抱きつくカチューシャ。
腰を落とし優しくカチューシャの背中を叩くノンナ。そして何やら
カチューシャに耳打ちをする。

「えっ? なんで私がそんなことを言わなくちゃならないのよ!!」

「このままやられっぱなしでもいいんですか?」

「ううう、言うわよ!!」

ノンナと何回かやり取りをし、不服そうな顔をしながらタクマに近
づくカチューシャ。そして

「パ・・・パパなんて大嫌い!!!」

「ドウフ!!!」

顔を真っ赤にしながら叫んだ言葉はタクマの胸を刺し、重力に逆らうことなく彼は前のめりに倒れた。

「タクマ!!おい、大丈夫か?」

「・・・ああ、大丈夫だハルキ。これぐらいでやられる俺じゃあ・・・」

ぶるぶると震えながら両手を地につけ上体を起こそうとした時、ノンナが近づいてきて彼の耳元で囁く。

「あんまりカチューシャをいじめちゃダメですよ、パ・パ。」

「ゴフツ!!!」

「タクマーー!!」

語尾にハートマークが付きそうなノンナのウイスパークボイスを喰らい、タクマは完全ノックアウトし地面と一体化した。倒れた親友を揺さぶるハルキだが

「騒がしいこと、何事かしら?ハルキ。」

ティーカップとソーサーを持ったダーズリンが現れる。その後ろにはオレンジペコの姿も見え、彼女たちがここに来た理由を彼は考え、答えをすぐに出した。そして立ち上がり聖グロリアーナの生徒としての顔を作る。

「これはこれはダーズリン様。お騒がせして申し訳ありません。友人たちの一興に気品を顧みず逸楽の時を過ごしてしまいました。」

「こんな格言を知っている？『喜怒哀楽の激しさは、その感情とともに実力までも滅ぼす。』」

「シェイクスピアですね。肝に銘じておきます。」

「ならいいわ。それよりも何か面白そうなお話が聞こえたのだけど、たしか・・・殿方が女性にどう呼ばれたいか、というものかしら。もし望みがあるなら、例えば「あ・な・た」と「いえ、結構です。」

察したハルキがダーズリンにみなまで言わせず断る。

「・・・遠慮してるなら「お気持ちだけで充分でございませす。」

片手を胸に置き、綺麗なお辞儀を笑顔で決めるハルキ。対してダーズリンは表情は優雅であるもの手に持っているティーカップとソーサーがカタカタと揺れ、心なしか手に怒りマークが浮き上がっている気がする。

「でもハルキさんがお兄様やお父様だったら素敵でしょうねー。『朝ですよ、お兄様』とか『起きてください、お父様』なんて言ってみたんですもの。ふふふ。」

「・・・グハッ!!!」

伏兵はダーズリンの後ろにいた。オレンジペコの特に計算していない言葉に意表を突かれたハルキは数秒耐えたもののその後、表情を崩さず笑顔のまま仰向けに倒れた。

「どういうことかしらハルキ？ 私とオレンジペコで随分と態度が違
うじゃない。」

先程の行動が不愉快だったダーズリンは倒れたハルキの顔をつま
先で踏みつけながら問う。

「ダーズリン様は恥じらいといいますがそういったものが足りなアツ
チイイイ!!!」

手に持っていたカップを逆さまにするダーズリン。中身の透き
通った茶色い液体はハルキの顔面にあますことなくかかり、彼を素の
状態にした。

「お紅茶がなくなってしまいましたから私はこれにて失礼させていた
だきますわ。行きますわよオレンジペコ！ それでは皆様ごきげん
よう。・・・ハルキのバカ。」

のたうちまわるハルキを見向きもせずにもその場を後にするダーズ
リン。

「何事ですか!!」

ハルキの悲鳴を聞きつけてどこからともなく西が輪の中へ呐喊し
てくる。

「あつー隊長、まあ色々ありまして。」

「色々とは？」

自身の高校の隊長が突然現れたので対応するアキラであるが今まで起こったことを西相手に説明するとなると非常にややこしい。「えーと」という声を出していると去り際のオレンジペコが助け舟を出してくれた。

「殿方は女性にどう呼ばれると喜ぶか、ということをお話していたんですよ。」

「なるほど!! つまり例えばこういうことでしょうか。」

アキラの肩を掴み、マッサージをし始める西。必然的に彼女の立派な胸の2つの山が彼の頭に当たり・・・

「お勤めご苦労様です! 旦那様!」

「……………」

頑張って耐えていた彼の意識が「旦那様」という単語で飛んだ。

「あ、あの西さん。それじゃあまるでメイドです。」

「めいど? 冥土!? まるで地獄のようだと? これは失礼しました!! 鍛錬しなおしてきます!!」

「い、いやそうじゃなくてまるで女中のようだと……あく走って行っちゃったよ。だいたい鍛錬って何の鍛錬だよ。アキラも座ったまま鼻と口から血出して固まったままだし。」

「ディアブロ! そろそろ料理がなくなった頃だろ? 追加の品を持って…………ってなんだこれは?」

「おっ！ 安齋！」

「ア・ン・チョ・ビ！ どうしてほとんどの奴らが倒れているんだ？」

「ああ、実はな……」

膝枕されている者、うつ伏せに倒れている者、のたうちまわっている者、座ったまま気を失っている者（2名）の各校の整備士たちを見て狼狽えるアンチョビ。そしてその経緯を淡々と説明するディアブロ。

「はあ、そんなことが。」

「ああ、だから今無事なのは俺とダウンーとツヴァイだな。」

「ち、ちなみにディアブロはなんて呼ばれたんだ。……参考!!あくまで参考までに聞いておきたい!」

「それは私も気になりますね。」

「ウチも気になるツス」

二。
アンチョビの両脇からヒョコツと顔を出すカルパッチョとペパロ

「お、おまえらいつの間!!」

すぐ後ろにいたのに全く気配に気づかなかったアンチョビは首を左右に振る。

「で？ 兄さんは何て呼ばれたんですか？」

「俺？ そうだな。やっぱり名前かな？」

「えく、いつも『ディアブロさん』って呼んでるじゃないですか。」

「いや、そっちじゃなくて。本当の名前。安齋だったら千代美みたいな。」

「ち・・・ちよ・・・ちよ・・・み!? きゅ、急に名前で呼ぶなー!!」

「うお!!? いきなり鞭を振り回してくるな!! 痛っ!!! やめろ安齋!!」

不意に名前を呼ばれたことで茹でダコのように赤くなつたアンチヨビは冷静さを欠き、がむしやらに鞭を振り回す。腕をクロスさせて鞭を防御するディアブロだが急に何者かに正面から両肩を抑え付けられる。

「ディアブロさくくん、それじゃあ私はひなちゃんって呼んでももらえますか。」

「・・・とりあえず肩を離して貰えるかなカルパツ「ひ・な・ちや・んです。」

(クツソ何て力だ。引き剥がせない。これが装填手の力なのか？ あと何故息が荒い!?)

「兄さーん!!ウチも名前で呼んでほしいっすく!!」

「お前はもうちよい空気読めー!!出来るわけねえだろこの状況で!!」

「うわー」

3人の女性に襲われてるディアブロを見てダウンナーは両手を合わせた。

(すみません、ディアブロさん。とてもじゃないですが自分はおそこに割って入っていく勇氣はありません。)

数秒目を閉じてディアブロの無事を祈り、再び目を開けるダウンナー。するとあることに気づく。

「あれ？ ツヴァイさんがいない。どこ行っただらう？」

急に姿を消したツヴァイを探すため屍ばかりの周りを見回すダウンナー。そこへ

「Hi!!ダーリン！ 楽しんでる？」

ケイが後ろから抱きついてきた。先程のアキラのように彼女の豊かな双丘が背中に当たり、形を変えている。

「ケイ隊長。お疲れ様です。楽しんでますよ。皆さんいい人ばかりなので。」

彼女の行動に顔を赤くするダウンナーではあるが受け答えはしっかり、そして冷静にこなす。

「Good!! それは何よりだわ。もつと一緒にいたいけど顔を出さなきゃいけないところが他にもあるのだから・・・」

ダウンナーの頬にキスをするケイ。

「また後で会いましょう。」

そう言い残し彼女は手を振りながら去って行った。ケイの姿が見えなくなるまで手を振るダウンナー。特に彼に異常は見られない。

「す、すげえなダウンナー。おまえ何ともないのか。」

ようやく紅茶の熱さが収まってきたハルキがダウンナーに異常がないか確認をする。

「ああ、きつきの隊長のアレですか。まあ恥ずかしくないっていったら嘘になりますけど耐性はつきましたね。毎回あんな感じなんで。」

((((ダウンナーすげえ。)))

この発言によりのちに男整備士の中で「ダウンナー最強説」が流れたという。

「みなさーん。」

他の整備士たちも少しずつ復活を果たした頃、先程まで姿を消していたツヴァイが肩に段ボール箱を抱えてこちらに向かってきた。

「よいしょつと。ウチのリーダーが原因で皆さんにはご迷惑をかけたと思うので黒森峰名物、ノンアルコールビール持ってきました!!」

「「「「おおーっーっー!!!」」」」」

「これが噂の」や「一度飲んで見たかった」などなど一同から歓声があり笑顔になるツヴァイ。「早速飲んでみてください」と各校の整備士たちに配る。乾杯の音頭はもちろんディアブロが仕切り。

「それでは皆さん、大洗女子（以下略）」

「「カンパニー!!!」」

「ん？」

乾杯の音頭でようやくまほの膝枕から目覚めるリーダー。

「起きたか？ リーダー。」

「えっ？ まほさん!? なんで？ この状況・・・えっ、えっ？」

「ふふ。落ち着くといい。みほに『お義兄ちゃん』と呼ばれて気絶したんだ。」

「ああ、思い出しました。お恥ずかしい。」

「あの子は結構大胆なところがあるからな。」

「そうなんです。意外です。」

「リーダー!!目が覚めたんですね。」

「おおツヴァイ、みんなは?」

「ウチのノンアルコールビール飲んでもらってます。」

「そうか……なあツヴァイ。」

「なんですか?」

「そこに見えるビールのパッケージなんですが、“ノンアルコール”の文字が無いんだが。」

「……えっ?」

黒森峰の名物のビールには普通のビールとノンアルコールのビール、2種類ある。普段ツヴァイたちが飲んでいるのはもちろんノンアルコールのビールである。ただこの2種類、外側のパッケージがほとんど同じで、ノンアルコールの文字が書かれているか書かれていないかの違いしかない。しかもその文字はお世辞にも大きいとは言えないサイズである。

少し沈黙が流れた後、まほ、リーダー、ツヴァイは同時に他の整備士たちの方を向く。缶を片手に顔を真っ赤にして倒れるアキラの姿が目に入った。

「うおおおおお!!アキラあああ!!!しっかりしろおお!!!しっかりしてく

れええ!!!」

パニックになったツヴァイはアキラの胸ぐらを掴み、前後に揺らす。しかしアキラが目覚める様子はなくグッタリとしたままだ。

「落ち着けツヴァイ!!それじゃあ逆効果だ。」

「まずは彼を壁にもたれかけさせろ。そして次に水の確保だ。」

「!! は、はい!!!」

リーダーがなだめ、まほが的確な指示を出す。少し落ち着いたツヴァイは水を探しに行き、リーダーは他の奴らの様子を見に行くが

「お前ら盛り上がってんのー?」

「二盛り上がってない!!!」

「じゃあどうするー? 俺たちで盛り上げるしかねえだろー!!!」

「二Yeahーーー!!!」

ディアブロを筆頭とした酔っぱらいの地獄絵図がそこにあった。唯一まともなヒロアキもこの異常事態に恐怖を感じたようで

「じゃあ俺はそろそろこの辺で。」

逃げようとしてみるが

れ」と無茶を言うが「いいよー」の一言で済んでしまう。さすがはノリと勢いのアンツイオといったところだろうか。ご丁寧にステージの準備やマイクテスト等々手伝ってくれた。

「じゃあ誰がどの楽器やる？　ちなみに俺はドラムしかできん。」

ディアブロがスティックをペン回しの要領で回しながら聞いてくる。

「俺、ギター。」

「俺はベース。」

「……ギターで。」

タクマ、ハルキ、ヒロアキの順で答え、楽器が手渡される。

「あれ？　ダウンナーがいねえ。」

「お待たせしました!!」

「おお？　ダウンナーどうしたその機材？」

「ウチのギャラクシーに積んであったんで持ってきちゃいました。へっへっ。」

ダウンナーが手にしていたのはパソコンとPCDJコントローラーであった。酔っているせいか終始笑顔である。

「いいじゃん!!　おい、コレもセットおねがい!!」

楽器の配置が終わり、ステージに上がる5人。

「ツエ〜ツエ〜 マイクテスト、ワンツー、ワンツー。」

センターに立ち、マイクテストをするハルキ。周囲の生徒たちは「何か始まるのか？」とチラリそちらを見るが

ドンツ!!

直後にディアブロがバスドラムを叩き、心臓に直接響いてくる音に大半の生徒がビクつく。その後も各々音を軽く鳴らしコンデイションを確認するが

「あっ!!!」

急にディアブロが大きい声を出し、手招きをする。メンバーが不思議に思いながら中央に集まり

「何の曲やるか決めてないじゃん!!」

全員「ああー。」と納得。その後、「この曲は?」「それ俺知らない。」等々のやり取りが何回か繰り返され、演奏する曲が決まり各自ポジションに戻る。

最初に音合わせをしたせいである程度ステージ前に人が集まっている。普通の学生なら緊張で震えるかもしれないが彼らは1名を除

き、今日は普通の状態ではない。故に何でもきやがれといった状態だ。それにここはアンツイオ高校。ノリと勢いが大切なのだ。だから演奏が上手かろうが下手だろうがそれさえ出来ていれば皆温かく迎えてくれる。彼らが大人数に緊張する理由が逆になかった。

「♪」

最初に動いたのはギターのタクマだ。1フレーズを弾くと「あつ、この曲か。」といった声が観客からちらほら聞こえ出す。そして3フレーズ目に入るとディアブロがスネアを叩いて参加してくる。さすがハルキが観客に手拍子を促し、ダウンナーが軽くスクラッチし炭酸が弾けるような効果音を出す。

手拍子がそろってきたころ、段々とドラムを強く叩き始めるのを合図にハルキがベースを弾き、ヒロアキもタクマの音にかぶせ始める。5つの音が融合して会場の空気を作り上げた瞬間、ほんの一瞬、全員音を消した。そして

「Baby!!!」

その叫び声と共に再び演奏をはじめ。叫び声の主はダウンナーだった。観客はセンターにいるハルキが歌うものだと思っていたので度肝を抜かれ、少しだけ放心状態になったが爆発的に音楽が鳴り始めたので全員ノリはじめた。さらに

「Hey Yo!」

ダウンナーによるラップが始まりすぐにそれは大きな歓声へと変わった。リズムに合わせながらタクマとハルキは左右に移動し、客を煽る。ラップ部分が終わるころハルキはセンターに戻り、マイクの前に立ち

「Get on Get on」

サビの部分を歌いだす。ここまできると観客の心は完全に掴めたようにハルキの歌に合わせて教えてもいないのに全員手を上げ下げする。

再びラップ部分が始まりダウンナーが歌う。ボルテージは上がる一方、そしてまたハルキのサビの部分が始まる。歌いながら彼はタクマにアイコンタクトを送る。それを見逃さなかったタクマはハルキに近づいてゆき、彼のマイクギリギリまで来て

「「渴きを癒す」」

2人の突然のデュオに会場は最高潮となった。気が付くと観客は超満員で遠くから双眼鏡で見てる者もいる。そして最後のサビの間奏部分に入るとディアブロが口を開いた。

「なあ集まってくれたみんな!! お前らの盛り上がりはそんなもんか?」

ディアブロの煽りに「Yeah!!」や「なんだとー!」「こんなも

んじゃねーぞ!!」といった声が響く。後半の大半は煽り耐性が低いアンツイオ生が多かったが。

「まだまだこんなもんじゃねーってなら見せてみるよ!!」

ドラムスティックを一本、宙に投げる。激しく動き、一つの円に見えるそれは高く狭いアーチを描いてディアブロのもとへ帰ってくる。そして彼は再びそのスティックを取った瞬間、叫ぶ。

「かかってこいや!!!」

限界まで高まった観客の理性を破壊するには充分な一言だった。直後にハルキが最後のサビ部分を歌い始めるとステージに登りはじめるもの、ダイブを決め込むもの、踊りだすもの、肩を組んでヘドバンするもの、とほとんどの客が狂乱状態に陥った。

奏者以外の人々がステージ上で踊っていて彼らは気にすることなくその後も最後まで曲をやり切り、音が途絶えるとすぐに歓呼の声が上がった。

やれやれようやく終わったとヒロアキが思い、ギターを置こうとした瞬間、

「もう一曲やってもいい?」

ディアブロによるまさに悪魔の一声がかかった。すぐに「Y e a

hーhー!」というレスポンスが返ってきてヒロアキはガツクリとしながら再びギターを手に取る。

そしてすぐに2曲目がはじまるのだった。

「……どうしましょうこの事態。」

「どうすることも出来ねえだろ。」

「Z Z Z Z」

ツヴァイ、リーダー、アキラを置いて男たちの宴はまだまだ続くのであった。

・
・
・

くおまけく

とある船の上

「なんで祝勝会参加しないんだよ。」

「いつもの『それは意味があることなのかい?』だって。」

「なんだよそれ、ごちそういっぱい出るかもしれないのに。タクマもミカを説得させてよ!!」

「夏の風く町に」

「♪」

「無駄だよ。タクマは鼻歌歌いながら釣りしてるし、ミカはそれに合わせてカンテレ弾いてるし。」

「あーもう!! 話聞いてよ!! お父さん!お母さん!」

「ブフツ。」

ヤケクソになったミツコが訳のわからない叫びをし、思わず笑うアキだが

「何?」

「何かな?」

「・・・アリなんだ。」

アリだった。

超SS FINAL COUNTDOWN

継続編

大晦日、戦車倉庫にて。

「こんな日にまで整備とは恐れ入ったね。」

「暇だからな。そつちこそ、こんな日に学校に残ってるとは恐れ入ったぜ。」

「実家には帰らないのかい？」

「帰るさ。でも混むのが嫌だから時期をずらして帰る。そつちは実家に帰らないのか？　つてかお前の実家ってどこだ？　ミカ。」

「その質問に意味があるとは思えない。」

「……ほぼ同じ質問を数秒前に俺にしたよな？」

特にやることがないので戦車整備をしていた俺の背後にいつもの如くカンテレを弾きながら現れたミカ。年末の予定を聞いてきたから返したらこれだ。やれやれ、そんなことされたらカウンターを見舞いたくなるじゃないか。

「意味はあるさ、ご両親に『娘さんをください』って挨拶に行く時に前もって情報があつたほうがいいじゃないか。」

さて、どう慌てふためくかな？

「……………」

振り返って見ると俺の期待に反してミカはずっと黙ったままだ。というかチューリップハットを深く被りすぎじゃないか？・・・あつ、コイツまさか!! 俺が食おうと持ってきたあの緑色のカツプ麺を見つけてハットの中に隠したんじゃない?!

「おい！ミカ！ その帽子外せ！」

「そ、その行為に意味があるとは思えない！」

「うるせえ！ もう聞き飽きたぞ、そのセリフ。」

抵抗するミカから無理矢理帽子を奪い取る。現れたのはたぬきではなく、きつねの方の色をしたミカの顔だった。

聖グロリアーナ編

「もう行くぞ。」

「ちよ、ちよつと待って。髪型を確認させてちょうだい。」

「もう何度目だよそれ。」

バックから手鏡を取り出し 自分の髪型を確認するために 色々な角度に 鏡を傾ける ダージリン。 何度目かわからない作業に思わずため息をつく。

本日は大晦日。俺とダーズリンは今、俺の実家の前に来ている。付き合い始めて 長いしそろそろ両親に紹介しとくか、と軽いノリでダーズリンを誘ってみたところ、急に目の色を変えて服や菓子折り

などを買出しに行きはじめてのが1ヶ月前のことだ。

「なあ、俺がお前の実家に行くっていうなら菓子折りとか正装するのはわかるんだが、お前が俺の実家に来るだけなら別にここまでしなくていいと思うぞ。ウチは一般家庭だし。家だってホラ、お前の家の大きさと多分違うだろ？」

「貴方が良くても私が嫌なのよ。それにいつも言ってるでしょう？『どんな相手にも全力を尽くす』って。」

「さいですか。」

寒空の下、こんなやり取りが数分は続いている。実家の前までは来たのだが、家に入ろうとするとダージリンが待ったをかけてくるのだ。

髪型が整ったのか、手鏡をバッグに戻しはじめた。やれやれ、やっと家に入れる。

「服にもホコリが着いていないか。見ておかないと・・・」

あつ、もう我慢出来ないや。

ガチャ

「ただいまー!!!」

「ちよつと!?!」

すぐに迎えてくれた親への挨拶はガチガチで顔が真っ赤だったダージリンである。

アンツイオ編

「おーおー、結構集まってるな。」

「テレビカメラもきてるぞ!!」

大晦日、アンツイオでは実家に帰らずココ、サン・マルコ広場をモチーフとした場所で年越しを行う者が少なくない。俺と安斎もその一人だ。近年ではテレビカメラの中継場所としても有名になってきた。その理由は

「おい、ディアブロ。おまえ投げる物は持ってきたのか。」

そう、年越しの瞬間に物を投げるのだ。ただ何でもいいってわけではなく、普段身に着けている物やその年にお世話になった物など投げるらしい。えっ?本場のヴェネツィアと違うって? おいおい、ここはアンツイオだぜ。ノリと勢いでルールぐらい変わるさ、ウチ仕様にな。とにかく全員で一斉に物を投げる瞬間は圧巻である。テレビ局もそこを撮りたいのだろう。

「投げる物・・・あー、忘れた。」

「わーはっはっ!!! 何をやっているんだ。ちなみに私に抜かりはないぞ。いつもの鞭を持ってきたからな!・・・っとカウントダウンが始まったな。」

安斎に笑われて少し面白くない俺。仕方ないから上着でも投げるかと思ってた時に悪魔の考えが浮かんだ。

「安齋、ちよつと借りるぞ。」

「へ？ きやつ!？」

安齋をお姫様抱っこし、振り子のように数回振ってカウントダウンとタイミングを合わせる。 3・2・1

「「Buonanno!!!」」

周りの人達のその言葉と同時にフルパワーで安齋を夜空へと投げた。新年最初の俺の仕事は涙目で降ってくる女の子を受け止めることだった。

ちなみに余談だが翌年からカウントダウン時に男の子が女の子を投げるとそのカップルは未永く結ばれるという謎のジンクスが出来た。まあココはアンツイオ、ノリと勢いでルールくらい変わるさ・・・なんてな。

プラウダ編

「ZZZ」

「やっぱり0時前に寝たじゃねえか。」

「ふふっ、そうですね。」

ノンナが優しく微笑むと自身の膝の上で寝るカチューシャの頭を軽く撫でる。

今日は大晦日、大半の生徒が実家に帰っており、俺も帰省する予定だったのだが

「は？ カチューシャが年越しの瞬間まで起きていられるわけないだろう？」

「起きてられるわよ!! じゃあ証明してあげるから見てなさいよ!!」

「いいぜ、見といてやるよ。お前の寝顔を。」

「キーーーーッ!!!」

と、ちよつとした雑談から上記のような展開になり、俺とカチューシャとノンナで学校で大晦日を過ごすハメとなった。

基本的にコタツでぬくぬくとしながら テレビを観ていたが夕飯を食べたあたりぐらいから カチューシャの動きが怪しくなってきた。目をこすりながら必死に耐えていたものの カウントダウン2時間前にはもう夢の中に旅立っていた。そして冒頭へ戻る。

「証拠の写真でも撮って明日見せてやるか。ほら、ノンナもこっち向いて。」

口を開けて寝るカチューシャを抱きながらこちらにピースをくれるノンナ。・・・よし、これ待受にしとこう。後でHDDにも保存だ!!!

「さてと、じゃあ年越し蕎麦でも作ろうかな。」

「じゃあ私も・・・」

「いいよいいよ、座ってな。カチューシャがいて動けないだろう？
いつも美味しいボルシチとか作ってもらってるしさ、たまにはな。」

「ありがとうございます。・・・ふふっ。」

「？ どうした？」

「今の会話、夫婦みたいだなあと思ってしまいました。」

「な、何言ってるんだよ！・・・蕎麦作ってくる!!」

「いってらっしゃい。」

手を振るノンナを背に、ごまかすように部屋から出て買い出しといた材料がある家庭科室に向かう。廊下は暖房が効いた部屋とは別世界の温度だったが熱い顔を冷ますにはちょうどよかった。

「はい、どーぞ。」

「ありがとうございます、いただきます。・・・美味しい。」

「そりゃあ良かった。」

俺の作った蕎麦を食べてほころぶ彼女を見て安心する。普段は料理作っても食うのは自分しかないので自信がなかったが問題無いように何よりだ。

しばらく蕎麦をすする音だけが響き、食べ終わった後も特に喋る事もしなかったが変な雰囲気にもならず、むしろ心地よい空気が流れている。お互いがそこにいるということが確認できている。それだけで充分だ。

テレビの中でカウントダウンがはじまった。 3・2・1

「あけましておめでとうございます。 本年もどうぞよろしくお願ひします。」

「こちらこそよろしくお願ひします。」

俺とノンナがコタツに入りながらお互いに頭を下げる。そして顔を上げると彼女が目を瞑って口を少しだけすぼめて待っていた。彼女はカチューシャが膝の上にいるので動けない。つまり俺が動くしかない。立ち上がり彼女の近くまで移動する。顔を近づけると女の子特有の甘い髪の香りにノックアウトされそうになるが目的地はそこじゃない。

彼女の両肩を掴む。少しノンナが強張る。ゆっくりと唇と唇の距離が詰まっていき、ついには0になった。しばらくこのままの状態が続けばいい。そう思っていた・・・ところが

「ふぎけるな!!ディアブロ!!」

「痛っ!!!悪かったって安齋!!」

「アンチヨビだ!!」

テレビの中から急に知った声が聞こえてきた。 見ると少女が顔を真っ赤にしながら 男を鞭で叩いている。

思わずノンナと顔を見合わせ、お互いの驚いた表情に笑ってしまった。そしてそのまま もう一度唇を重ねるのだった。

くおまけく

サンダース編

「サンダースカウントダウンフェスティバル!!! ニューイヤーへの時間も迫ってきたぜみんなー!!そんなニューイヤーへのカウントダウンを刻むのはコイツ!! アンツイオで行われた大洗女子祝勝会、そこで他校と一緒に会場を盛り上げた戦車整備士にしてなんと!! あのケイ隊長のボーイフレンド!! DJ!!ダウンナー!!!」

「「Y e a h ~ ~ ~ ! ! !」」

(もう帰りたい。)

12月31日、サンダース大学付属高校では「サンダースカウントダウンフェスティバル」という音楽祭が生徒間で行われている。実家

に帰って家でグータラしてる俺には関係ないものだと思っていたが、先ほどのMCが述べたようにアンツイオでDJをやったことがバレてしまい、さらにそこへケイ隊長の推薦が加わって現状この通りである。あゝ、今こそお酒欲しいな。

ステージに出ていくと皆が拍手で出迎えてくれる。そして最前列にはケイ隊長。

「ダウンナー!! Good luck!」

サムズアップした後に笑顔で何回も投げキスをくれる隊長。あの笑顔と隊長のメンツを壊す訳にはいかないよな……しかたない、キラじゃないけどやるか! PCDJコントローラーに近づき少し準備しながらマイクで話す。

「皆さーん、お腹すいてないですか?」

俺の問いに「すいたー!」「なんか食わせろー!」と言った声が返ってくる。

『HOT DOG』、召し上がれ!!!」

そして同名の曲をかける。ドラムの叩く音が響き渡った後にボーカーのシャウトが入り、会場は一気にダンスフロアになった。あー良かった。どうにか掴みは成功だ。

その後もどうにか曲を繋いでいき、ついにカウントダウン間近となった。

「皆さん、お付き合いましたありがとうございます。最後の曲

です。」

「えー!!」という隊長の大きい声とアヒル顔が返ってきた。可愛いです。でもそんな顔したって最後なのは最後です。

『FINAL COUNTDOWN』 よいお年を。そして来年もよろしくお願いします。」

【リクエストSS】日本とロシアより愛を込めて

戦車道の試合

それは公式戦やエキシビジョンマッチ、練習試合と様々である。その中でも練習試合には紅白戦と他校を招いて行うものに分けられる。練習試合とはいえ砲撃音などなかなかの迫力があるので観客は結構集まる。故に商売、つまり出店をするにはもってこいである為「戦車道の試合をする」と言えば例えそれが練習試合でも貸してくれる会場（町村）は多い。まあ、流石に壊しすぎたりすると怒られるが。

ここ、青森でもそれは例外ではなく本日はプラウダ学園艦の寄港日でありプラウダ高校の紅白戦が行われる。観客席までの通りには色々な屋台が並び、せつせと魅惑の香りを風に流している。近所の人からしたら「ああ、今日は戦車道の試合があるのか」といつも通りの光景……なのだがそこに見慣れない青年が1人、頭を掻いていた。

（まいったな。この道で合ってるのか不安になってきたな、そこら辺の人に聞かか）

ちようど青年の前に屋台でたこ焼きを買った若い男がいたので後ろから声を掛ける。

「あの、スミマセン」

「えっ？ わっ!!! ノーノー!!! アイムノットイングリッシュ!!!」

振り向き、青年の顔を見た瞬間に男は間違った英語を使いながら逃げるようにそそくさとその場を去っていった。残された青年はしばらく固まった後、思わず周りを見るが誰も目を合わせようとはしてくれない。

（英語を使われてもなあ……そもそも日本語で話しかけてるんだから日本語使ってくれればいいのに。まあロシア人と日本人のハーフでも俺の顔、完全にロシア人寄りだからな。周りの皆の反応も慣れたものですよ）

そう、青年はロシア人と日本人のハーフであった。イントネーションは完璧ではないにしろ日本語はほぼ話せる……のだが金髪碧眼、高

い鼻と身長、筋骨隆々、と見た目からして完全にTHE外国人である為、こういったことがよく起こる。しかしよく起こるが故にあまり気にせず、すぐに別の人に再チャレンジを試みる。

次に彼の目に映ったのは特徴的なヘルメットを被っただいぶ小柄な女の子だった。ヘルメットからは彼と同じ金色の髪がはみ出しており、両手いっぱいに出店で買ったであろう食べ物が入っているビニール袋を地面スレスレのところまで保って運んでいる。そんな姿を見て話しかける事を少し躊躇したが逆を言えば先程の様に咄嗟に逃げられることはないということだ。青年は屈み、視線を少女と同じくらいに合わせてから「すみません」と声を掛けた。

「ん? !!! な、何よ!? 日本語で喋りな……日本語ね」

気怠そうに少女は振り向くがすぐに目を大きくさせて先程の男と同様の反応を見せたが青年の読み通り、逃げられることはなく話を聞いてくれそうな雰囲気にはなった。こちらが物を尋ねる側なので、といった精神を持っている青年は幼く見える少女にも丁寧な口調で自分の目的を告げる。

「はい。私は日本語が喋れます。戦車道が行われる会場が何処か教えて欲しいのですが」

「そう言うと少女は少し黙り、青年の体を上から下へ眺め、確認する。
「いいわよ。でも条件があるわ」

「きやー!! たかーい! 見晴らしがいいわ! やるじゃない、あなた!」

「喜んでもらえて何よりです」

俺は道を訪ねた少女を肩車して歩いていた。彼女が俺に出した条

件、それは彼女が出店で買った物を代わりに持ち、さらには彼女自身を肩車することだった。俺にとっては彼女の体重も荷物も特に負担でもないので二つ返事でOKを出し、肩車をしてあげるとご覧の通り歓喜していた。

「ごつちよー!」「あつち!」と少し興奮気味の彼女から案内を受けて少し頬が緩む。視界に映る小さな指の指す方へ歩いていると

「おや、外国人のお客さんだ。日本の食べ物、楽しんでくれているかな? お子さんはパパに肩車されて興奮しとって可愛いねえ」

おそらく農家であろうほかむりをしたお婆さんに話しかけられた。

「いや、親子じゃな……!!」

否定しようしたが「あらまあ! 日本語上手だね。そうだ! 林檎いるかい?」と無理矢理手に持っていたビニール袋に林檎をつっこまれた。はっ! 聞いたことがあるぞ! コレが噂に聞くオオサカのオバチャンというやつなのか? だけどここはアオモリだよな?

「じゃあ私の畑でとれた野菜もあげるよ」

「私のもあげようかねえ」

(増えた!?! いつの間に背後に!?!)

気づいたら後ろに同じような格好をしたお婆さんが数人いて思わず後退り する。なんでお婆ちゃんって足音と気配がしないのだろう。

先程まで遠巻きに避けていたのに彼女を肩車した途端、家族に見えるのか急にお年寄りを中心に話しかけられるようになった。次々と勝手に話をしては自己完結してビニール袋に何か入れて帰っていく。

「なんか荷物増えてない?」

「確実に増えてますね」

先程までスタイリッシュだったビニール袋が農作物を無理やり突っ込まれたせいで歪な形に変わっている。それを見た彼女からの

問いかけではあったが「まあ、袋が破れていないならいいわ」と大して気にしていないようであり、次の質問に移った。

「そういえばあなた、名前は何ていうの？ 私はカチューシャ、プラウダ高校の戦車道の隊長なのよ!!」

なんと!! これから観戦する戦車道の隊長さんだったのか。「隊長さんなんですか。すごいですね」と言うと、「そうでしょ？ そうでしょ？」と腰に手を当てて満面の笑みを浮かべている……気がする。肩車してて表情とか仕草がわからないから想像でしかないけど。つと、そうだ俺も名乗らなくては

「私の名前は……っ!!」

名前を教えようとした刹那、背後から自分に向けられる殺気、真っ直ぐこちらに駆けてくる足音。

ただ事ではないと思い、振り返らずに足首に力を込めてそのまま横へ跳んだ。急な動きだったので「きゃっ!」と頭上のカチューシャさんが短い悲鳴をあげる。申し訳ないと思ったが自分のこの判断は間違つてなかったと確信する。何故なら……

さっきまで自分がいた場所にパンツァージャケットを着た黒髪ロングの女性が飛び蹴りをかましてるポーズが目に入ったからだ。

体勢を整えて持っていたビニール袋を地面に置き、両手を顔の前に出して臨戦態勢をとる。カチューシャさんを降ろす余裕はなさそう
だ。

『何するんだアンタ!!』

あつ、しまった。咄嗟のことで思わずロシア語で叫んでしまった。日本語で言い直さないと。

「何をす……」

『それはこちらのセリフです、誘拐犯。先程の蹴りを躲すとは……』

チツ』

舌打ち付きのロシア語が返ってきた。誘拐犯？ 意味がわからない。せつかくロシア語が通じてるのに話に通じていない。

『アンタ何を言っ……!!!』

問答無用と言わんばかりに間髪入れずに前傾姿勢になった。恐らく俺の腹に1発かますつもりだろう。仕方ない、彼女の拳を手のひらで受け止めてそのままホールドするしかない。いや他の解決方法も浮かんだが、女性を殴るのは気がひけるからな。

俺の読み通り、彼女が拳を後ろに振る動作が見えた。俺も握っていた拳を開き、衝撃を待っていたが。

『ドラゴ!!!』

衝撃は来なかった。いや違う。物理的衝撃は来なかった。代わりに……俺の名を呼ぶ、爛漫な女性の姿が目映った瞬間に衝撃を受けた。俺の幼馴染、クララに。

「大変失礼いたしました」

結論から言うとクララのおかげで誤解は解けた。どうやら彼女、ブラウダ高校副隊長のノンナさんは俺がカチューシャさんを屋台の食べ物で誘惑し、連れ去ろうとした誘拐犯に見えたらしい。……結構ショック。しかし綺麗な角度で深々と頭を下げている彼女を見たらそんな事も言えない。まあ実害なかったし、いいか。俺は大丈夫ですと言うと会話にカチューシャさんが入ってきた。

「全く、ノンナは早とちりなんだから」

「誰にも何も告げずに持ち場を離れ、勝手に買い食いしてたのは誰ですか?」

「ひっ!? そ、そういえばクララーとあなた、知り合いみたいだけどどういう関係?」

ノンナさんの眼光に気圧され、隠れるように俺の足元に抱き着きながら話題を変えようとしてきたカチューシャさん。ん? なんかノンナさんが俺に対してもプレッシャーを放ってきた気がする。怖い……よし、さっさと話題を変えよう。自己紹介もまだだったし。

「私の名前はドラゴ・シルバと言います。父がロシア人、母が日本人のハーフです。クララーとは幼馴染です」

「彼の父親と私の父親が軍の同じ部隊にいまして、その縁で小さい頃から一緒に遊んでいました」

クララーの補足の「軍」というワードに怪訝な顔をしているカチューシャさんをよそにノンナさんが質問をしてくる。

「なるほど……もしかしてシルバさんはお父様に武術か何か仕込まれてましたか? 先程の私の後ろからの蹴りを躲したことから只者ではないと思っていましたか」

「あっ、わかります? 実は幼少期から父とクララーのお父さんに鍛えられ……て……まし……『ううっ、頭が痛い』

『どうしました!?!』

『大丈夫です、同志ノンナ。ちよつとトラウマを思い出してるだけです。ふふっ、よく泣き叫びながら投げ倒されましたもんね』

『そつちはいいよな。母さんに優しく日本語を教えてもらいながらお茶してたんだから』

『同志クララーの流暢な日本語はシルバさんのお母様仕込みですか』

「ちよつと!! 日本語で喋りなさいよ!!」

いつの間にかロシア語での雑談になっていたところにカチューシャさんのストップがかかり、くすくす笑う幼馴染。改めてその大人びた横顔をじっくりと見ると色々思うことがある。最後に会ったのは中学生になる前くらいだったか。学校が同じだったわけではないので子供同士で頻繁に会っていたわけではなく、両親込みで何回か会っていた。会うたびに親父とクララのお父さん、二人がかりで無理矢理鍛えさせられた。ただでさえいつも親父に投げ飛ばされていくのにな!! ……ああ思い出したくない。いや、完全にそうでもないか。投げ飛ばされ、涙目で倒れている俺にいつもお菓子とお茶を持ってきて「頑張つて」と優しく微笑んでくれたクララ。今でもその思い出とそう変わらない笑顔がすぐ近くにある。

……だけど非常に女性らしく変わった部分もあるな、どことは言わないが。ちなみにノンナさんも女性らし……

『ドラゴ。どこを見てるんですか』

眼前に思い出の笑顔が現れた。ただし黒いオーラ付き。何も、と目を逸らしながら答えてみるがごまかせるはずもなく右頬を握力MA Xでつねられた。痛い。

「とりあえずクララの幼馴染だつてことはわかったわ。そういえば試合を観に来たって言ってたわね。仕方ないわね、特別にこのカチューシャが関係者席で観れるように計らってあげるわ」

両手を腰につけ、少し反り返るカチューシャさんが言う。あつ、肩車してた時に想像していた通りのリアクションだ。ちらりと横目で幼馴染を見るとアイコンタクトを送ってきた。「おだてろ」と。

「そんな権限があるんですか。凄いですね、さすがは隊長のカチューシャさん」

言うつとフンと鼻を鳴らして反り返りが強くなった。面白い。

『ただの練習試合ですから簡単に融通はきくんですよ』

耳元でノンナさんが小さな声で軽く微笑みながら教えてくれた。それが妖艶でちよつとドキドキしてしまつたたたたたたつ?! 痛い!! クララーなんて左頬を引っ張つてるの? 今回は俺、何もしていないだろ?

「知りません!! 行きましようノンナ様、カチューシャ様」

プイッと頬を膨らませて早歩きで会場に向かつてしまつた。俺も違う意味で頬が膨らんでいるよ、まつたく……いたたた。両頬を擦っているといつの間にかノンナさんに肩車されたカチューシャさんがいて「ついてきなさい!」と言われトボトボと歩き、案内された関係者席で彼女たちの勇姿を見ることとなつた。

試合は一言で言えば彼女達の蹂躪だつた。試合終了後にカチューシャさんが他の生徒に片付けを命じていたがほぼ全員目に光が宿つてなかつた気がする。そんな命令を出した彼女はというと

「やつぱりあなたの上は見晴らしがいいわね。でもちよつと肩が固すぎて座り心地がイマイチね。やつぱりノンナが一番ね」

またもや俺の頭上に顎を乗せて片付けをしている隊員を眺めている。ちなみにすぐ隣にノンナさんとクララーもいる。先程の発言があるまでプレッシャーを放っていたが今は大分落ち着いた……というか口元が若干緩んでいる。

「そういうえばあなた、どうして日本に来たの? 観光かしら?」

自身の顎を乗せるのをやめ、覗き込んで来るようにして目を合わせてくるカチューシャさんに対して上手くバランスを取りながら「そう

いえば言ってなかったな」と思い、質問に答えるとする。

「今度、日本に住むことになったんでその下見です」

『えええええっ!!』

隣からのロシア語の大声に驚き頭上でジタバタするカチューシャさんを手を伸ばして背中を支える。そしてその声の主に視線をやる。とハツとした表情になってはいるものの、未だに口に手を当てたまま動かないクララーがいた。

『ど、どういうことですか、ドラゴ』

『親父が軍を退役して、母さんの故郷の青森で農家でもやろうか。つて話になってそのまま実行された感じ』

『ええっ……フットワークが軽い』

『ちなみに親達は今日、こっちで住む家を見に行ってる』

「ノンナ!!」

「シルバさんのお父様が仕事を辞めて、青森で農家をはじめようとしてるそうです」

ロシア語で話していたら俺の頭をペチペチと叩きながらノンナさんの名を呼ぶカチューシャさん。それで察したノンナさんが俺たちの会話を翻訳する。

「ええ。そんなわけなので皆さんと会える機会が増えるかもしれませんね」

この何気なく言った一言で3人が少し固まった。そのことに疑問を抱いているとまたもやノンナさんが察して口を開いてくれた。

「シルバさん、実は私達3人は高校卒業後、ロシアに留学するんですよ。まあクララーは元に戻る形ですが」

なっ。てつきりクララーが日本にいるから大学も日本の学校に進学すると思っていたが……でもロシアの方が戦車道が盛んか。せつかく再会出来て、すぐに気軽に会えると思ったのに入れ違いでまた離

れるのか。

「ん？」

クイツと後ろから服を弱々しく引つ張られる。見ると明らかに落ち込んだようなクララが携帯を握りしめて目線を合わせず立っていた。

「あの……ドラゴ。連絡先、交換しましょう」

「……そうだな」

互いの携帯を向かい合わせる。なんとなく視線を携帯からクララに移すと今度はバツチリ目線が合い、笑顔を向けられた。しかしその瞳が潤んでいるように見えたのは気のせいだろうか。連絡先を交換し終わると「ちよつと用事が……」と言って駆け足でその場を去ってしまった。

「……カチューシャさん、ノンナさん。お願いがあるんですが聞いてもらえますか？」

8月の後半、日本では終始汗をかく環境でも此処、ロシアでは比較的過ごしやすい気温であることが多い。キャリーバックを一生懸命引いているカチューシャはこの気候に上機嫌であった。すぐ後ろを歩くノンナとクララもその姿を優しい笑顔で見守っている。ロシアの大学は9月入学。彼女たちは空港から大学の寮へ向かう途中である。次はバスに乗る予定なのだが生憎乗り継ぎの時間がうまく行かないようで空港で少し時間を潰さなくてはいけなくなった。

「ちよつと電話してくるわ。ノンナ!!」

「はい」

そう言つてカチューシャとノンナがクララから離れる。電話ならノンナはついていなくてよいのでは？ と思つたが深く考えずに時間つぶしのために携帯を見ることとするクララ。

『そこのお嬢さん、僕の話聞いてくれますか？』

聞き覚えのある声。心臓が早くなる。だつてその声の主はこの地にはいないはず。そう思つてすぐに顔をあげる。白い歯を見せて笑う彼がいた。

『やあ。元気だった？』

『ドラゴ!!! なぜここに？ 日本へは!?!』

いきなりのドラゴの登場に驚き、疑問を矢継ぎ早にぶつけるクララ。それに対して余裕の笑みを浮かべながら一つ一つ質問に答えるとするドラゴ。

『カチューシャさんたちに教えてもらつてね。日本には両親にだけ行つてもらつてロシアに一人で住むことにした。君と一緒に居たかったから』

そう言つて片膝をつき、後ろに隠し持っていた花をクララに差し出す。赤い菊の花と小さな向日葵が綺麗に包まれたものだ。

「僕は日本人と母と」

『ロシア人の父を持ち、二人の愛を存分に受けて育つたハーフです』

「だから日本語と」

『ロシア語で君に伝えたい事がある』

青年は紡ぐ。

『昔から、あなただけを見ていた』

向日葵と

「あなたを愛している」

赤い菊の花言葉を。

「僕と結婚を前提に」

『付き合っしてほしい』

数秒の静寂が流れたがクララの返事はない。代わりに大粒の涙をこぼしながら小さく縦に首を振った。それと同時に後ろから「ハラショー」という声が2人分聞こえてきた。

日本とロシアより愛を込めて、花束を

【リクエストSS】僕たちの名は

「じゃあねー」

ツチャのいつもの軽いトーンの別れの挨拶が夕暮れのカラスの鳴き声に交じる。「おう」「またねー」とホシノとナカジマが返し、スズキも漏れずに、また、と短く発して手を振り『大洗女子学園高等学校』と書かれた校門を後にする。

先日まで廃校予定だった大洗女子学園だが戦車道の全国大会で優勝し、その危機を免れたのは記憶に新しい。雑誌、地元新聞などでは『大洗の奇跡』と称され、町民たちの間ではちょっとしたヒーローであった。そんな学生としての日常を取り戻したヒーローたちも今は夏休みで不在。と思いきや、近々行われる予定のエキシビジョンマッチに向けた練習をするため、学校に来ていた。

本日はエキシビジョンマッチ開催前、最後の練習なので軽めのメニューをこなし、早めに切り上げることとなったのだが、選手兼整備士の自動車部4人は練習後に戦車の整備が待っていた。なかなかのハードスケジュールだがそれを嬉々としてやってのけ、疲れた様子もなく帰路に就く。それが大洗女子学園自動車部。健康的な褐色肌の少女、スズキもその1人だった。

整備士の証の汗と汚れの勲章付きのいつものオレンジの作業着は手提げの紙袋に入れ、白と緑を基調としたセーラー服、青の肩掛けバッグを少し揺らしながらいつもと変わらない道を歩いていた。

「うっ、うっ」

「泣かなくていいよ」

しかしいつもと道は変わらなくとも、いつもと違う光景はあった。スズキが少し首を傾げつつ、この光景の情報を取り入れようとする。半袖短パンに帽子を被った小学生低学年くらいの今にも泣き出しそうな少年に、ジーンズに黒いシャツとシンプルな服装だがシャツの色とは反対の白い肌が目立つ青年。青年の手は黒く汚れており、その奥にはチエーンの外れた子ども用自転車。スズキは「なるほど」と思う。「絶対に直してやるとは言えないけどさ、見捨てることはしないから。」

直らなかつたら一緒に運ぼう？　ねっ？」

「……うん」

青年はしゃがんで少年に目線を合わせ「いい返事だ」と言って笑い、自転車と向き合い、つぶやく。

「うくん、ちよつと厄介だな。レンチがあれば楽なんだけど……」

「レンチなら持つてるよ」

「えっ？」

これがスズキと青年、真鮎まがなとの出会いだった。

「ありがとう!!　お兄ちゃん、お姉ちゃん、バイバイ!!」

自身の移動手段が直った少年は先程の表情とは打って変わり、その笑顔を夕日と共に見せながら手を振り、小さくなっていった。真鮎の戦いを制した黒い手と軍手をしたスズキの白い手が少年を見送りながら左右に揺れる。「さつきまであんなに泣きそうだったのに」と軽く笑う真鮎、それから一呼吸置いてスズキの方を向く。

「工具貸して頂いてありがとうございます。あつ、自分は真鮎って言います」

「いやいやなんのなんの。珍しい名字だね。私はスズキ。THEよくある名字」

ハハツと軽く笑うスズキに対して自虐ネタなのか、そうではないのかで笑うことを悩む真鮎。頬をピクピクさせながらどっちつかずの表情でいるとスズキが軍手を外しながら「ふむ」と下を向く。

「手、真っ黒だね。ウチ、近くだから洗ってけば？」

「えっ!？」

思わぬ提案を受けて固まる真鮎。その黒い両手を左右に振ろうとするも、断る隙きもなく「ついて来て」とスタスタとスズキは歩き始めてしまった。これはついていかなかつたら失礼に当たる。そうい

う思いから真鮎は大人しくスズキの後ろを少し離れて歩くことにした。

程なくしてスズキの住む一軒家の前に着き、ドアを開け「ただいまー」と帰ってきた旨を伝えると「おかえりー」とやる気のない男性の声が返ってきた。見るとアイスキャンディーを口に加え、ランニングシャツを着た若い男性がテレビを観賞している。

「お、お邪魔します」

「はっ?」

スズキが帰ってきてても無関心だったのに真鮎の声を聞いた途端に玄関の方へ向き、数秒固まった後に視線を真鮎の足元から顔に移してまた固まる。そして

「母さ——ん!! 姉ちゃ——ん!! 妹が彼氏連れてきたぞおお!!」

スズキの兄はそう叫ぶと、2階へと続く階段をドタドタと駆け上がった。呆然と真鮎が立ち尽くしていると「あつ、洗面所はあっちね」とあの大声が聞こえてなかったのか特に気にした様子もなく隣のスズキが靴を脱ぎ始めたのでそれに倣う。

手を洗っていると先程の階段のドタドタ音が3倍になって帰ってきた。こちらを見つめる眼が6つ。手を動かしながらそちらに向かつて軽く会釈をするとスズキに似た顔の3人が真顔でこちらと全く同じ動きを返してくる。肝心のスズキは自分の部屋に行ってしまったようだ。とても気まずい。手も洗えたしこのまま帰ってしまった方がいいかと思い、そろりと玄関へ向かうが

「お茶入れたからどうぞ」

ミツシヨン失敗。スズキ母による足止めを断れるわけもなく、礼を言いながらリビングへと向かう真鮎であった。

「……」

「……」

「……」

「……」

カランと麦茶の入ったコップの水が響く音とテレビの天気情報がこの空間のBGMの仕事をしている。シーンは正座をして座る真鮎、

それを3方向から見つめるスズキ家であった。

3人はまず誰から質問をするのかで争っていた。女子校に通う色恋沙汰のない次女が突然、男を連れてきたのだ。興味がないわけがない。アイコンタクトで「お前が最初に質問しろ」を互いに送り合う冷戦状態が約3分程続く。ちなみにこの沈黙に対する真鮎の体感時間は約1時間程。しかしそれも終わりを迎えた。スズキ兄が諦めたようにゆっくりとため息を吐き、1歩2歩と真鮎に近づいた。母と姉は「う、動くか」と緊張の一瞬。そして兄が口を開く。

「君、妹とはどこまでヤツた……グホツツ!!!」

スズキ母の正拳突きとスズキ姉のボディブローが決まりスズキ兄が崩れ落ちる。TKOである。しかし姉の方はまだ拳で語り合いたいらしく、スズキ兄の首根つこを掴み、引きずり移動しながら真鮎に「ごめんなさいね」と言い、別部屋へ。第2試合開始の合図は「それが質問の第一声かああ!!」の声と共に聞こえた鈍いゴング音であった。「何か凄い音したけど、どうしたの?」

姉VS兄の試合開催を知らないスズキがリビングにやって来た。恐らく着替え途中だったのであろう、セーラー服の下に着ていた薄い白シャツ一枚と緑のスカートという中途半端な格好だ。それを見てしまった真鮎はすぐにスズキとは反対方向へ、そして即座に母が動く。

「何でもないから! そんな格好でいなくてもさっさとシャワー浴びて着替えてきなさい。汗臭いと嫌われちゃうわよ」

母に背中を押され、頭に疑問符を浮かべながらも素直に従うことにするスズキ。

姉の白星が2つになった頃、スズキも風呂からあがり、ようやく真鮎の紹介が始まった。

「こちら真鮎くん。さつき自転車のチェーンが外れてた男の子を助けてあげて、手が汚れたからウチで洗わさせてあげようと思って連れてきたんだ」

そうかあ、と優しい笑みで妹を見つめる姉。ちなみに兄の姿はリビングにはない。そして母は顎に手を当て、ブツブツと呟き、何かを

思い出そうとしている。

「真鮒……真鮒……ああっ！　もしかして郵便局の近くの真鮒さん？」

「えっ!?　伯父さんの家知ってるんですか？」

「知ってるわよ。私ね、奥さんと仲が良くてよくスーパーで話し込んでるのよ。旦那さんは中学校の教師をしているのよね？　そういえば夏休みに親戚の子が来るって言ってたわ。あなたの事だったのね」

自分の伯父夫婦と知り合ってたことに驚きを隠せない真鮒。その反応が気に入ったのか「それでこの前ね……」と、どんどん自分の話をはじめスズキ母。姉は「真面目に聞かなくても大丈夫よ」と小声で言い、隣で座ってるスズキが姉の言葉に従い、母を放っておいて真鮒に話しかける。

「そういえば真鮒くんって、いくつ？」

「高校3年生です」

「おっ、私も高3。じゃあ敬語はいいよ。伯父さんの家……ってことは学園艦の人じゃないんだ？」

「そうです……そうだね。家は北海道にあって学校もそっちの工業系に通ってる。夏休みは伯父さんの家に遊びに行って、大洗へ帰港した時にさんふらわあ号で北海道へ帰るのが通例かな。スズキさんはずっとこの学園艦？」

「いや、出身は静岡で数年前にこっちに来たんだ。……なるほど、北海道か。だから肌が白いのか。いいなあ、ウチは見てもらえたらわかる通り家族全員色黒なんだよね」

「健康的でいいと思うよ。あと北海道だからみんな白いってわけじゃないよ、雪焼けとかもあるし。俺は室内に籠もって車とかイジってたりすることが多いから白いってだけで……」

「車!!　例えばどんなの!？」

車という単語が出てスズキの話スピードとテンションがあがり、本人も気づかぬうちに真鮒の顔に近づいていた。真鮒が少しうろたえながら車種を答えると「おお。じゃあさ、じゃあさ……」とスズ

キの質問が始まった。最初は緊張気味に答えていた真鮎だが、何回かやり取りしていくうちに慣れきて段々とスズキのテンションに近くなり、互いに会話は弾んでいった。

それを見ていたスズキ母とスズキ姉は互いに目を合わせ不敵に笑いながら頷きあう。

「そうだ、真鮎くん。せっかくだから夕飯食べていったら？」

スズキと真鮎のヒートアップした会話を断ったのはスズキ母の声だった。

「いや、悪いですよ。それに帰りが遅いと伯父さん達が心配しますし」「大丈夫よ、伯父さんの家の電話番号知ってるから私から連絡してあげる。ゆっくりしていきなさい……それに今日はお父さん帰ってくるの遅いし」

最後の言葉は小声で言ったスズキ母。「でも……」と続けようとする真鮎の肩にスズキ姉が手を置き、左右に首を振る。「諦めなさい」と。

「ご、ご馳走になります」

その言葉を聞いた後に母と姉がこっそりサムズアップしていたのをようやく目覚めた兄だけが知っていた。

スズキ家のカレーを頬張る真鮎。その姿に満足する母と他愛もない話をする兄とスズキ。すると姉が「あっ」と小さい声を出した後、素早くテレビのリモコンを手に取り、チャンネルを変える。テレビには「去年のあのヒット映画が地上波初放送!! この後すぐ」という字幕が現れた。内容は高校生の男女の体が入れ替わってしまうアニメ映画であった。姉が誰に説明するわけでもなく「この映画見たかったんだ」と漏らし、なんとなく全員でその映画を見る空気になった。

映画もクライマックスに差し掛かり、リビングは静かだった。いや、静か過ぎた。いつの間にかテレビを見ているのは真鮎とスズキだけであった。しかし当人たちは気づいていない。そしてスタッフロールも流れ、映画は終わった。感傷に浸る間もなくCMが流れ始め、それを合図に互いに向き合う真鮎とスズキ。しばらくの沈黙。そ

して真鮎がゆつくりと口を開く。

「……デツキバンが……あつた」

「だよなー!!　そこに目が行くよね!!　あとスーパーカブ!」

「そうそう!!　実はウチの高校、バイク通学OKでだいたいみんなスーパーカブで来てるんだよね」

「なにそれ!!　いいなー」

映画の内容よりも映画に出てきた乗り物の話で盛り上がり、それについて語り合う二人。

「はあく〜」

その会話を聞いた瞬間にため息を吐きながらリビングに入ってくる母、姉、兄。「あれ?　みんなどこ行つてたの?」というスズキの言葉にさらに深い溜め息を吐く3人であった。

そろそろお暇しますと真鮎が言うのでスズキ母が車で送っていくこととなりスズキが玄関まで見送り、靴を履いてる真鮎に話しかける。

「真鮎くんって、今度の大洗の帰港の時に帰るんだよね?」

「そうだけど?」

「だったら時間があつたら戦車道のエキシビジョンマッチやるから見にきなよ。私も選手として出るし、戦車が近くで見れるよ」

「……マジ?　絶対行くわ!」

真鮎の目の色が変わりスズキは確信する。ああ、やっぱりこの人は私と同じ人種だと。自動車部の他のメンバーとも気が合いそうだ。エキシビジョンの後に会わせてあげようかな……ん?　何故かそれは気が進まない気がする。なんでだろう。

「じゃあまた、お邪魔しました」

「えっ?　あつ、うん。またね」

スズキが自分のモヤモヤした気持ちについて考えていると真鮎に別れの挨拶を言われ、慌てて返す。カチャリと玄関のドアが閉まった後も自身の気持ちについて考えようとしたがニヤニヤと笑顔を浮か

べる姉と兄の姿が見え、不思議と腹が立ち、忘れてしまった。

『聖グロリアーナ・プラウダの勝利!!』

アナウンスが響き、聖グロリアーナとプラウダの校章が「WIN」の文字とともに現れる。「あー」という無念の声を流す地元民。そこに混じって真鮎も視界をモニターから青空へ移して倒れ込んだ。しかしその表情は暗くはない。むしろ生き生きしている。初めて生で見た戦車道。轟音が響き、舞う土煙。戦車と戦車がぶつかり合い火花を散らす。そして数手先の読み合い、攻防。胸の高鳴りが抑えきれない。バクバクとビートを刻む音源に手を当て、ゆっくりと深呼吸をする。

(今のこの気持ち、スズキさんならわかってくれるんだろうなあ)

早く会って語りたい。そう思ってしまった。ならば即実行だ！
と言わんばかりに勢いよく立ち上がり、スズキのもとへ急ごうとする
が

「いや、場所知らねえし!!」

一人ツツコミがマリインタワー前の広場に響いた。

(落ち着け、俺。帰り際に話した時に何か言ってたよな……ライオンっぽいイラストが書いてある戦車に乗ってる……だったっけ?)

戦車道の試合を見ていた真鮎であったが、あくまでそれはモニター越しでの話。カメラの移り変わりは激しいし、何より真鮎が戦車に夢中になりすぎてイラストまで見ている余裕はなかった。頭を掻いているとちよūd大洗女子学園の戦車が次々と帰還し、まいわい市場の駐車場に停まる。そして後続に、撃破されて自力で動けない戦車がトラックの荷台に運ばれて来た。履帯が外れ、ひしゃげた車体は黒く汚れて戦車が俯いてるように見える。そこに茶と黄色のペイントで描かれた、ハッキリと何と言い難い生き物のイラストが戦車側面に描かれていた。

(あれは……何だ?)

体に三日月のような模様が刻まれていてちよūんと座り、何も感情が無さそうに見つめてくる生き物と目が合う真鮎。思わず一歩、二歩と後退りすると肩に軽く衝撃が走る。誰かとぶつかってしまったようだ。振り返り、すぐに頭を下げる。

「す、すみませ……えっ!？」

「やあ、真鮎くん」

パンツアージヤケットを着たスズキが手を挙げ、軽い口調で言う。突然のスズキの登場に固まる真鮎。それに対してスズキはマイペースそうだ。

「試合見てくれたんだね。ありがとう。まあ、残念な結果に終わっちゃったけど。あつ、あそこにあるのが私達が乗ってたポルシェティーガーって戦車なんだ」

真鮎の驚いた表情に満足そうな笑みを浮かべたまま、スズキは戦車の解説を始める。それに数テンポ遅れてついていき「あのイラスト、ライオンっぽいんだ……」と感想を心で述べる真鮎。このままスズキの解説が続くのかと思われたが

「おっ? なになににー? もしかしてスズキの彼氏?」

スズキの後ろからひよつこりと糸目の少女、ツチャが現れた。度々の人の登場とツチャのセリフにまたもや固まる真鮎。軽いパニック状態で答えようにも口が正常に動きそうもない。

「違うよー。昨日、知り合ったばっかりだし」

あっけらかんと言うスズキに助かったと思う真鮎。その反面、謎の寂しさを感じることはこのときあまり気にしなかった。それよりも突然会話に入ってきたツチヤとは初対面なのでそのことについて問おうとするが

「昨日の今日で試合に誘ったの?」

「白黒コンビでお魚コンビじゃん」

ホシノとナカジマも参戦してきた。自動車部の面々が揃い、ちよつとしたからかいが行われ「ちよつとみんなく!!」と全員を制しようとして真鮎について説明するが

「真鮎くんは工業系の高校行ってて、それで戦車に興味が……」

そこまで言って「しまった」と思ったときにはもう遅かった。「ほう……」と目の色を変えた3人が真鮎を囲んでの質問攻め。普段どういう授業を受けているのか、好きな車はあるのか等々。戸惑いながらも一答するごとに3人から「おおー」「なるほど」といった声があがり、段々と真鮎も慣れてきて逆に3人に質問をするようになってきた。その光景に謎のイライラ感を少し覚えるもその正体を理解することは出来ず、モヤモヤしたまま「自分も話に加わるか」と思うスズキであった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、真鮎が船に乗る時間となった。帰り際に互いに連絡先を交換し、「また大洗に来るときは連絡して」というありきたりな言葉を受けながら手を振って大洗を後にした。

この数時間後、大洗女子学園が再び廃校の危機となるのだが真鮎がそれに気づいたのは翌日の明朝の船の中で開いた携帯のニュースサイトであった。

自室にて真鮎は携帯の画面とにらめっこしていた。大洗女子学園

の廃校決定の知らせを報じたニュースサイトに暇さえあればアクセスし、更新がないか逐一チェック。今の最新情報をまとめると、大洗女子学園は戦車道の大学選抜と試合をし、勝利すれば廃校は撤回となる。そしてその決戦の地は此処、北海道。

画面を電話帳に切り替え、さ行の欄にある『スズキさん』と表示されたところまできて操作をやめて机に突っ伏す真鮎。

(なんて声をかけていいかわからん)

試合当日にはもちろん応援しに行くつもりだ。しかしそのことを告げようか、変なプレッシャーになってしまわないか、そもそも廃校がかかっている勝負に外野が何か言ったところで迷惑では……、と良くない考えばかり浮かんで電話を掛けられずにいた。だが悩んでも変わらない、と起き上がって姿勢を直し深呼吸をして発信ボタンを押して携帯を耳に当てる。静寂な空間にコール音だけが響いていた。

大洗女子学園自動車部は来る決戦の日に向けて、倉庫にて戦車のメンテナンスに明け暮れていた。端っこに寄せた学生靴。その上に置かれた携帯の画面が黒から光りを放つ白に変わり、小刻みに揺れる。

「スズキー。なんか電話来てるっぽいよ」

振動に気づいたナカジマが問いかけるが

「んー。代わりに出てー」

とナカジマの方を向くこともなく整備を続ける生返事のスズキ。この集中力だと電話があったこと覚えてないだろうなあと思いつつスズキの電話に出ることにする。

「もしもし、スズキの携帯です」

「あつ、ま、真鮎です……えっ？ スズキさん？ なんか声が」

「ああ!! 真鮎くんか! どうもナカジマです。スズキは今ちよつと

手が離せなくて代わりに私が出てるんだ」

「な、なるほど」

「で何かスズキに用だった？ なんなら代われると思うけど」

「いや、大丈夫です。それよりも……」

真鮎は現在ニユースで自分が知っている大洗女子学園の現状について相違がないか確認した。そして自分にも何か手伝える事はないかとナカジマに伝えた。

「……ありがとう。そう言ってもらえるのは本当に嬉しいよ。でも出来ることかあ。なかなか無い……あつ！」

突然ナカジマの声が大きくなり、思わず携帯を少し耳から遠ざける。そんな真鮎の行動はもちろん知らないナカジマは興奮した様子で話し続ける。

「ねえ、真鮎くんって工業系の高校だったよね？」

ナカジマはある提案をする。

「……なるほど。任せてください！」

真鮎との会話を終えてスズキの携帯を元の場所に戻し、その持ち主を見るナカジマ。相変わらず戦車の整備に夢中だ。そしてナカジマの読み通り、電話があったことは忘れていたようで特に何かを聞かれるようなことはなかった。そして決戦の日が訪れる。

決戦当日。

大洗女子学園8輜に対し大学選抜30輜。圧倒的に不利と思える状況であったが

「待ったー!!」

黒森峰の西住まほの言葉を皮切りにサンダース、プラウダ、聖グロ

リアーナ、アンツイオ、知波単、継続高校の面々が加わり、最終的に大洗女子学園も戦車が30輛になり絶望的戦力差から対等になったことで生徒達は興奮していた。そんな中で今度は戦車とは違った地鳴り音が試合会場に響いてきた。皆がそちらに注目するとスーパーカブに乗った男の集団がこちらに向かってくる。すると先頭の男が器用に片手でバイクを操縦しながらもう片方で拡声器を持って話し始めた。

「大洗女子学園の皆さん、こんにちは。北海道のとある工業高校の生徒です。戦車整備のボランティアに参りました」

聞き覚えのある声にすぐに振り向くスズキ。

「えっ？ 真鮎くん？ な、なんで」

「おっ、来てくれたね。おい、こっちこっち!! ナカジマちゃんから話は聞いてるよ」

こう答えるのは生徒会長の角谷杏。手招きしながらバイク集団を誘導している。

「ナカジマ!! どういうこと!?!」

「いや、実は真鮎くんからスズキの携帯に電話があってね。代わりに私が出て、『なんか手伝えることありませんか』って真鮎くんが言ってくれるものだから整備手伝ってもらおうと思っただけ。もともと私達も出場予定だから整備してくれる人他にいないし。藁にもすがる気持ちで」

頭に手をやって笑いながら「まあ結果的に他の高校の整備士さんたちが来てくれたんだけど」と言うナカジマに、開いた口が塞がらないスズキ。そうこうしているうちに男集団は綺麗にバイクを並べ、真鮎を筆頭に整列をしていた。

「えー最初に申しておきますが我々、戦車整備の知識については素人です。昨日、付け焼き刃程度で資料などは読みましたが皆様にはお呼びません。ですが重量があり、交換するのが大変なパーツや力仕事が必要な場面もあると思います。雑用も何でもやります。どうぞ遠慮なく我々を使つてください。よろしくお願いします!!」

「二」よろしくお願いします!!!」

真鮎が頭を下げると他の男子たちも一斉に頭を下げる。そして周りからは拍手が起きていた。しかしそれもすぐに鳴り止み、各自他校の整備班長らしき人と連携を取りはじめていた。その姿に思わずスズキは見惚れていたがすぐに真鮎と目線があった。真鮎が近づいてきて思わずドキドキしている自分に気づくスズキ。

「スズキさん」

「ひゃ、ひゃい!!」

「……もしかして緊張してる?」

「あ、うん。そうかも。あと、ありがとう来てくれて。クラスの人達にも声をかけてくれたんだ」

「女の子とお近づきになれるチャンスだよって言ったらみんな飛んできたよ」

「ブハッ」

「……あんま良い事言えないけど。頑張つて。来年また大洗学園艦で会おう」

「……うん! ちょっと飛ばしてくるよ」

「レースじゃないって」

ハハッと互いに笑い合つてると真鮎が他の男子に声をかけられる。

「おい、真鮎!! 彼女とイチャついていないでこつちを手伝え」

「彼女じゃないよ……まだね」

「えっ?」

「じゃあスズキさん。頑張ってね!!」

「ちよ、ちよつと真鮎くん!!」

駆けて行ってしまった真鮎の背中を見つめるスズキ。「来年また大洗学園艦で会おう」その言葉を胸の中で繰り返して自分の両頬を叩いて気合を入れた。私達は負けないと。

そして決着の時は来た。

巨大なスクリーンには黒煙をあげる大学選抜のセンチリオンと大洗女子学園のV号戦車D型改H型。「残像車両確認中」というアナウンスが入りそして、聞きたかったその言葉が告げられる。

「大洗女子学園の勝利」

その瞬間に会場が沸き、歓喜の声が試合会場を包んだ。そして

「真鮎くん!!」

スズキも例外ではなく喜びを爆発させ、真鮎に向かってジャンプして抱きついた。

「スズキさん!!」

真鮎もスズキを抱きとめ、その場でぐるぐると周った。数十秒後には男子からは嫉妬、女子からは羨望の眼差しで見られていることになり、そつと赤くなったスズキを赤くなった真鮎が降ろすという構図になったのは言うまでもない。ともかく、これで大洗女子学園の夏は終わった。そして来年に続いて行く。そう、大洗女子学園には来年の夏もあるのだ。

入道雲にバツクの青色が映える夏の日。『大洗女子学園高等学校』

と書かれた校門の前でおしゃべりをする少女が2人。1人は私服で1人は黄色のツナギの上をはだけて来ている。

「まさか自動車部に新入生が3人も入ってるとは、やるねツチャ部長」「えへへ。まあね。いやあ、でもスズキが様子見に来てくれるなんて嬉しいな。大学はどう?」

「うーん。相変わらず車イジってるかな」「やっぱし」

ケラケラと互いに笑い、他愛もない話を続ける2人。スズキがふと腕時計をみてツチャに言う。

「じゃあそろそろ帰るね」

「車で送っていいんか?」

「大丈夫。迎えが来るから」

そう言うとバイクのエンジン音が近づいてきた。

「おっ、もしかして彼氏?」

いたずらっぽく笑うツチャ、それに対して

「そうだよ」

満面の笑みで答えるスズキ。そして1台のスーパーカブが停まる。ヘルメットをしていて顔がよく見えないが夏なのに白い肌が特徴的な人物だった。スズキが慣れた様子で後ろに乗り、ツチャに手を振ってバイクは走り出す。スズキは運転手の腰をしっかりと抱き、夏の風の心地よさを楽しむ。やがてバイクはある家の前に停まり、名残惜しつつもスズキは降りて家へと入っていく。

「ただいま〜」

「お邪魔します」

「おかえり〜。おっ、真鮎くん久しぶり。元気だった?」

スズキの兄が寝転がりながらテレビを見つつ2人を出迎えた(?)

テレビからは今日の夜に学園艦は大洗に寄港するだとか、去年このテレビで見たアニメが今日もう一回放送するなどを伝えていた。

「あーこのアニメまた放送するんだ。なんか夏の定番みたいになってるな」

誰に言うわけでもなくスズキ兄がつぶやく。するとスズキ母やスズキ姉も現れ「真鮎くん、久しぶり!!」

「夕飯食べていくでしょ」という会話を交わし結果、去年と同じカレーを食べながら同じアニメを見ることとなった。そしてアニメの放送も終わり、そろそろ帰ろうとする真鮎に

「ねえ、磯前神社に連れてってよ」

スズキが突然言い出した。

「今から?」

「今から!! もう大洗には着いてるでしょ。映画のあのシーンやろうよ」

何がやりたいたかわかった真鮎は彼氏として彼女のワガママに付き合うことにする。

暗闇の中を慎重に運転し学園艦から大洗にこっそり降りて、磯前神社の階段前まで来た真鮎達。

「じゃあ私が上から降りて来るから、真鮎くんは下から上がって来て」

そう言ったスズキの背中を見送り、上まで登ったスズキがOKの合図を出したのを確認して真鮎は1歩ずつゆっくり階段を上がる。階段の真ん中あたりでスズキとすれ違ってから2, 3歩進み、互いに振り返る。

そして言う。アニメと同じセリフを。

「君の、名前は?」

数秒の沈黙、そして

「……ブツ」

ハハハハとお腹を抑えて笑い出す2人。こんな夜になんて馬鹿なことをしているんだろう。そんな気持ちになったのだろう。

「どうも、真鮎です」

「どうも、スズキです……ブハツ」

その後もひとしきりに笑い、落ち着いたところでスズキが口を開いた。

「いや〜でも冷静になってみると『君の名前は?』って聞かれて『スズキです』って答えても締まらないよね〜」

真鮎と出会った当初も言っていた自分の自虐名字のネタ。本人としては軽い気持ちで言っていてそんなに気にしていないのだろうが聞かされる方としては毎回反応に微妙に困る。だから真鮎は提案をした。

「じゃあ、名字お揃いにする?」

「……え?」

数年後、大洗磯前神社である1組の神社挙式が挙げられる。

その夫婦の名は